真・恋姫?無双～とある男のそれなりに不幸な人生～

世紀末敗者寸前

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫？無双～とある男のそれなりに不幸な人生～

【Ｎコード】
Ｎ０４６３Ｏ

【作者名】
世紀末敗者寸前

【あらすじ】
自称、どこにでもいる平凡（？）な日常を過ごしていた青年・草薙咲夜は２５歳で病によって死亡した
なのだが、何故かボンテージ服に背中に羽の生えた変態痴女が目の前に？！
しかも転生しろという急展開…

しかも何故かくじを引かされて三つの特典を得ることが出来た

だけど…

生まれてきた新しい世界は三国志の世界?!
しかも何か知っているのとかなり違うんですけど!?

加えて…

俺、劉封になってるんですけど!?!

ネットでは悲劇の将軍なんて言われている人になるなんて…

こうなったら…何が何でも生きてやるよ!!

処刑なんてされてたまるか!!

前世では出来なかったことを楽しんで、結婚して、奥さんとの間に
沢山子供作って老衰して死んでやんよ!!

この物語は、性を劉、名を封、真名を咲夜と名乗る一人の青年のそれなりに不幸な人生の奮闘記である.
☆現在、反董卓連合編です。

※オリジナルキャラは読者の皆様の意見を取り入れていく予定です。
現在の所、諸葛誕・夏候蘭・朱桓・馬謖・伊籍等が挙げられました。
うち、諸葛誕と夏候蘭は大体の詳細が希望された読者によって決まりました。

他に希望のある方がいらっしゃったら、ご連絡ください。

プロローグ

～プロローグ～

♂（おっす）、俺は草薙咲夜っていうごく平凡な一般人だったんだ。
まあいくつか平凡とはかけ離れたことあるけどさ。
例えば運動能力とか…知能とか…。
どうにもうちの家系は時折、俺みたいなやつが生まれてくるらしい。
実際に俺の爺ちゃんもこんな感じだったらしい。
例としてあげると、戦車を木刀のみで潰したとか…。
北海道から沖縄まで遠泳したことがあるとか…。
でもそれはそこまで酷くないよ？
精々、素手でダンプカーふっ飛ばした位。
まあ…俺はとある剣術道場の師範代をやってたんだけど、２２になってから不治の病にかかってそれから3年間、病院に通いながら後継者を育てて、雪の降るクリスマスの中、病が急に悪化してそのまま永眠した…そのはずだ。

だけど俺が次に目が覚めた時、目の前には変な格好した女の人がいた。
ボンテージに背中からはね生えてるんだよ？
変態痴女としか言いようがないよな。
これ…。

「…どちら様ですか？　それからここはどこですか？」

『ここは死んだ者の集う場所、私はここの管理者をしている山田と申します。』
「山田って…随分と普通な名前なんですね。」
『…言わないでください、気にしてるんですから。』
「あ、すいません。」
『コホン、貴方はこれよりあなたが先程まで生きていた世界とは異なる異世界に旅立った貰うことになりました。』
「……はい？」
『ああ、理由とかは聞かないでくださいね。私にも分からないんですから。』
「…いやそういうことじゃなくて…異なる世界ってどういうこと？」
『簡単に言うと転生ですよ。貴方は新たな生を受けることが出来るというわけでして。』
「……因みに聞くけどどんな世界なの？」
『存じません、ランダムで決まるそうなので。』
「…何か嫌な予感がするなぁ。」
『とりあえずこの箱に入っている紙を三枚引いてください。』
「……何、このコンビニにおいてある様なくじ箱は。」
『良いから引いてください。』

言われるがままに引いた紙。
そこに書かれているのは

【前世の能力引き継ぎ】、【死亡フラグ回避能力】、【お気に入りの武器プレゼント】

「……なんぞこれ。」
『（パフパフ～～♪）　おめでとうございま～～す！　それにしても貴方は運が良いですね、全部当たりの物を引くなんて。』
「え゛……因みに、外れの物ってどういうものがあるんですか？」
『そうですね…【上条資質】とか【ほぼ毎日死ぬ直前まで追いつめられるけどギリギリ死なない】とか【ドクドク料理人付き人】とか…他にも。』
「…もう良いです（ひ、引かなくて良かった…）。」
『（まあ他にも当たりは【夜天の書の主】とか【魔法使い放題】とか【最恐オリ主】とか【魔王になれる権利】とかもあったんですけどね。それらの中ではこの人が引いたのは有情なものですよ。）』
「…所でいつから俺は転生すればいいの？」
『今ですよ。』
「へ？（パカッ）……パカッ？　って足下が真っ黒に染まって！？
（ガシッ）　あ、危ない…もう少しで落ちるところだった…」
『あ～、何で落ちないんですか（ゲシゲシ）。』
「いてぇ！？　け、蹴るな！！　しかも何で指っ！？　痛い！！
特に小指はやめて！！　本気でいたいから！！」
『じゃあさっさと落ちてください。私は他に仕事があるんですから（ゲシッ）。』
「いてっ！！」←咄嗟に淵を掴んでいた指を放してしまった

「…あ」

「あ～～～～～～～っ！！！！！　こ、この…っ。貧乳平凡名前変態痴女めーーーーーーーー！！！！」

咲夜は先程まで思っていたことをすべてぶちまけて落ちていった

「……誰が……誰が貧乳ですか！！！　私はそれなりにありますよ！！！！！　胸なんて飾りなのですよ！！！！　庶民にはそれが分からないのですか！！！！　平凡な名前で悪かったですね！！！！　私は変態でもありませんよ！！！！！　仮に変態だとしても変態という名の淑女ですよ！！　って言うか痴女って何ですか～～～～～～！！！！」

それから暫くの間、管理所で暴れる変な格好の女性がいたとか居ないとか…

それから暫くして…
咲夜が目覚めた時

咲夜は赤ん坊になっていた
しかも周りは火の海

（・3・）あっれぇ～、何これ？

俺何で赤ん坊なのかは一応だけど何となく分かる
転生したてだからなのだろうな…

でもさ、気付いたら周りが火の海ってどうよ？
あ～、あちぃ
でも逃げらんねぇなぁ
何せこの体、生まれたばかりみたいだから上手く動かないし…

あ～、死んだなぁ俺

ガランっ…

「っ…ぶ、無事だったか」
「だぁ？（誰？）」
「よ、良かった…城が攻められているという知らせを聞いてまさかとは思ったが…」

そう言いながら俺はその声の主に抱きかかえられた
ふとその人の顔を見ると凄く綺麗な女性だった
大体２０歳位か？
それにしても気になる単語があった

城が攻められている？
ここって城なの？

「…兎に角、叔父のいる樊城に行くしかないか。あの人とも約束したしな」
そう言いながら女性は凄まじいスピードでその場から離脱して行った
俺はというと…

「ＺＺＺ…」

赤ん坊のため疲れて眠ってしまった

それからまた暫く経って目が覚めてから俺は劉泌と名乗っている人物の元に居た
その傍らには羅侯寇氏夫人を名乗る女性
この女性は俺を助けてくれた人だ

その二人の話からするに俺は元々羅侯寇氏と言う人の元で生まれたらしいが、その人が戦で亡くなり落城寸前に夫人に助けられ城を脱出し、叔父である劉泌のいる樊城に逃げ込んできたということらしい
そんなこともあってか寇の名を名乗るのは悪いということで、俺の名は劉封ということになった

…あれ？劉封って…三国志時代の人物名！？

しかも何かネットとかでは不幸将軍とか悲劇の将軍って言われてる人じゃん！？！

これって憑依&転生だよね！？

あの平凡な名前の変態痴女！！！
マジでふざけんなぁ！！！！

なんてことを思いながらも月日はどんどんと過ぎていく

そんな中、俺は決めたことがいくつかあった
どうやらあの変態痴女の言った通り、前世の運動能力は引き継いでるみたいだ
生まれた頃から力が強くてコントロールと言うか…制御が大変だった
5歳になってからはようやく制御が完璧になってそれから剣術を学び直して…
7歳になってからはそれもほぼ前世と同じ位に戻った
これからもっと精進して行けばまだまだ強くなれるだろう

この世界では男よりも女性の方が力が強いそうだ
どうやら俺の知っている三国志の知識とは異なるパラレルワールドだというのは良く分かった
だってさ、この前的盧を見つけたんだけどさ…

馬じゃなくて猫なんだよ！？
もうびっくりを通りこして心臓止まるかと思ったよ！！
しかも俺に懐いてきたから驚いた…
まあとりあえず叔父さんからも許可貰ったし、飼うことにしたんだけどね

的盧のままだと可哀想なので、渚って言う名前付けてあげたら凄く気に入ってくれたようだ

っと、話が逸れたな
それからあの変態（以下略）が言ってた気にいった武器進呈だったけど…

この前、叔父さんから言われて武器を作って貰えということで鍛冶屋にいって俺の考案した者を作ってもらった

前世でも使っていた脇差を二本
そして、ハルバードを一本
ただし、このハルバードはこの世界の通常の兵士が使うものよりも何倍も重く作られている

脇差の方もかなり頑丈な作りになっているため重さも尋常ではない

だが俺は軽々と持ち上げている

って言うかこれ位の重さでないと俺の腕力に耐えられないと思った

ため、これ位が丁度いいのである

叔父も担当した鍛冶屋の親父もびっくりしたたけどね

後でお金を払いに行こうとしたらもう既に一括で払われていると言われた

どうやらあの痴女が既に払ってしまったようだ

あ、それから文字の勉強と兵法もかなり学んだよ

まず武経七書と言われる孫子、呉子、尉繚子、六餡、三略、司馬法、李衛公問対

他にも兵法三十六計、兵法二十四編、心書、百戦奇略などなど

叔父に頼んでかなりの量の書を読み漁った

９歳になった頃にはもうそれらをすげて読み終えていた

やっぱり前世の能力引き継ぎは運が良かったみたいだ

元々昔から物覚えは良かったからな

加えて昔調べたことによると劉封もそれなりに頭もよかったし、武力もあったみたいだからそれが関係してるのかもしれないな

こうして１０歳になった頃には叔父曰く、どこに行かせても恥ずかしくない位に一人前の武将になれる器になれた

そして決めたことはというと…

1. 劉備玄徳に会わないこと
2. もしあったとしても絶対に仲間にならないこと
3. 武官よりも文官になる
4. 曹操や孫権にも仕えない
5. とりあえず旅には出よう

以上である

劉備玄徳に会いたくないのはこの劉封…まあつまり俺の持ってる知識だと……

劉備と関わって最後は処刑されるからである

この世界がそれと全く同じ展開になるとは思ってはいないのだが…流石に処刑なんて言う最期は御免であるから、可能性は潰していきたい

後、諸葛亮とか関羽、張飛にも会いたくないね

孟達なんて絶対にいや

故に…俺は劉備とはあまり関わりたくないのである

まあもし会ってしまったとしても…偶然会った仲の一人であるよう

にしようと思っている

次に文官になりたいわけだけど…
流石に前世では人を殺したことがないため、殺し殺されなんていうことは御免である
自分の命が危うくなれば別なのだろうが…それ以外の殺しはしたくなどない
だからこそ、今まで勉強してきたことが役に立つことがやりたいのである

曹操と孫権に仕えたくないのは…まあ何となくである
有名どころは何かと危うい感じがするので…

最後に旅に出ようというのは見聞を広めたいからである
今、俺は樊城に殆ど籠っているため、外の世界は密偵の人や町の人たちから聞いたことでしか知らない
前世では俺は旅が大好きだったので、そのせいか好奇心が疼くのである

だから旅に出たいと叔父に頼んでみた

すると叔父は

「今度、賊がいるという砦を攻める。その戦にお前が参加し、一人で外に出ても大丈夫だと言える実力があると皆が認めれば良いぞ」

その時思った

――――悪いね賊徒さん達、俺の夢の為に散ってくれ

後日、わずか2時間で3，０００の賊徒は討ち尽くされた
それも殆どが一人の子供によってやられて…

性を劉、名を封、真名は咲夜
転生者である彼の一人旅が始まった

因みに猫の的盧は城においてきた
流石に武者修行も並行しようと考えていたため、そんな旅に連れて
行きたくなかったのだ

旅の中色々な場所に行った
中国内だと長沙、零陵、幽州、益州、それから南蛮にも行ってきた
それが終わった後は日本は勿論のこと（当時は倭国だけどね）、海
を渡って様々な場所を渡り歩いた

因みに船は俺が造船技術者に最先端の造船術渡して作らせた
そこの人たち驚いてたけどね

それから幾年か経った後、俺は樊城に戻っていった
その頃には立派な青年となり、巷では【深紅の鎧を着た正義の使者】
なんて言われているようだ

う～ん…そんなに大したことはしてないんだけどなぁ
ただ単に俺に突っかかってきた賊徒か人攫いとかを潰して捕まって
た人助けたり、お金がなくて困ってた時に傭兵として働いたり、前
世の記憶使って最先端の技術提供したりしただけなんだけど……

あれ？

俺、やり過ぎ？

因みに…樊城に劉封舞戻るという知らせが周りに伝わると我先にと見物に来た人たちが沢山いた…

ちょっと気になったけど、別にちょっかい掛けられたわけではないし…まあいいか

そう思っていた

翌日、叔父さんに呼び出され何処かに仕える予定があるのかと聞かれた

俺は正直に…

「俺はそういうのは興味ありません。この樊城を守る、一人の将として置いてくれませんか？」

と頼んだ

叔父さんは喜んでくれたようだった

どうにもこの樊城は今、有能な武官も文官も不足しているそうだ
だが何故か俺は叔父さんに頼まれてこの樊城の新しい太守となることになり、新たな統治を始めることにした
どうにも叔父さんだと政務がいつも滞りがちで誰か代わりに太守になれる器を今まで探していたそうだ

朝廷にもその旨を伝え終えると俺は直ぐに行動を開始した

まず始めたのは農業改革と富国強兵、それから新たな産業の開発などなど
今後大いに役立つことを始めた
言いにくいことだが、この樊城はそこまで裕福な場所ではなく、そう言ったことには限りがあったのだが…

とりあえず俺の持ってる知識と立地条件を最大限に利用して…

結果…

無茶苦茶裕福な土地になっていた

何でさ

何か知らないけど、偶然良質に出来あがった肥料とか後は大概の土地でも成長する芋とかをメインに育てたり、二毛作を実施したり、お米や麦の値段をコントロールしつつ、特産物といえる品をどんどん作っていった
その中でも一番人気が出たのは…ビールでした

どうにもこの世界…お酒がかなり好まれて飲まれているようです
他にも日本酒とかの製造方法とかも知っていたので作ってみたら大評判でした

他の地域にもこの特産物を欲しいという人たちがいたので売ったらすべてが高額で売れたようで…
しかも作り方を教えて欲しいという人たちまでいた…

最初は断っていたけど、製造ラインが一定を越えた後に教えてあげるようにした

他にも軍のための保存食などの問題や衛生問題、街並みの問題も直ぐに解決することにした

保存食にベーコンやハム、他にも日持ちのする食べ物や新しい調理法を町の人たちに伝授したり…

あと一番変えたのはやっぱりラーメンだね♪

前世の頃はラーメン巡りとかしてて、結構ラーメンには五月蠅かったから…
俺が持てるだけの知識と新メニューなどをラーメン屋に教えたら、それから約半年後にはどこに出しても恥ずかしくない位に大きくなっていた

そこにはよく叔父さんと一緒に食べに行っている
その際に、いつも店主に感謝されているのだが…

「ここまでお店が大きくなったのは店長さんの努力の賜物ですよ。俺はただ知っていることと新しいラーメンの考えを提供しただけですよ」

と言うと、何故か店長が泣きだし、周りはどんちゃん騒ぎを始める

何でさ

一番大きく変えたのは軍部だね
俺は俺を慕って命を張ってくれる人たちを無駄に死なせたくない
そのために、軍部の訓練や城の装備、武器などには金も時間も惜しまないことにした

とりあえず城壁にはこの時代、まだ開発されていないであろう連弩を常備させ、兵たちには１ＶＳ１と１ＶＳ複数の訓練をさせている

俺も時間を開けては訓練に同伴し、彼等の状態を確認したりしている
それから軍部に医療班という組織を作り上げ、兵士さんたちの生存率を少しでも上げるようにした
後は隠密と密偵部隊
密偵の方は主に情報収集を
隠密はやっていることは密偵と同じなのだが、時には黒い仕事もやってもらうことにしている
敢えて言うのなら…暗殺

悔しいが、世の中には法や倫理で縛ることの出来ない輩もいる
そう言った輩に俺の守りたい人たちがいるため、そう言った時はやむを得ずにこういった姑息な手段も取れるように対策を取っている

それにこの戦国の世の中だと情報は命よりも大事な時が多い
そのため、情報は常に新しいものを仕入れられる様にしている

後…おまけで言うのなら樊城の周りにいくつかの武装化も出来る農村を作り上げ、その中の一つは孤児院のような役割も果たすようにした

これは俺の自己満足だけど、戦争を引き起こしてしまっている立場としては少しでも罪滅ぼしがしたい
そう思って俺は9割を慈悲で割を叔父さんから援助してもらって、人を雇って戦争で家族を失った人や家族にすてられていた子供達をここで育てている

勿論、そのためのお金は自分の給料だけでは足りなかったので何か自分で稼ぐ方法を探そうと思って思いついたのは…

そうだ、もっと娯楽を作ろうじゃないか！！！

そう考え、一番に作成したのは今まで俺が読んできた本をこの国の言葉に訳し、出版することであった
勿論、心の中では作者様御免なさいと謝ったけど

記念すべき第一作目が【相棒】だった
これは俺が前世でも大好きだった本でもあり、ドラマでもあったため直ぐに書き終え、一般公開した
すると俺自身の知名度もあってか、一日で直ぐに売り切れた
しかも内容がかなり面白いという評価も受けたため、第二、第三と

次々と新作を書いていった
流石に自分だけだと書ききれない為、５０人の文官の希望者を日当で雇い、手伝ってもらうことにした
しかし、ここで問題が…
何と、この樊城の文官の殆どが俺の小説を好きだと言ってくれたのだ
そのため、選別には時間がかかった…
その後、選ばれなかった人たちには次回作で手伝ってもらうことを約束して納得してもらった

第二作目は【君が望む永遠】の原作にちょっと手を加えたものである
この世界で学生だと言われても実感が湧かないので、文官と置き換えた
後、自動車の事故は戦争に巻き込まれてしまい、医療班によって救われたものの、直ぐには目が覚めず幾時かの時間が経ってから目覚めるという設定に変えた
最後は個人的理由で遥と結ばれるというエンドにしたけど…
この恋愛小説は女性の間でかなりの指示を得ることになった

第三作目は【水戸黄門】の私的改変小説である
正直言うとこれはかなり書きやすかった
この世界の設定と似たような点があるから変える必要のある個所は殆どなかったし

最新作は【仮面騎士】
仮面を被った正義の味方が立派な馬に乗って登場し、人々を苦しめる悪の組織を討ち滅ぼしていくのだが、その正体は元、その組織の幹部である
そのことを人々に知られてしまい、煙たがられるのだが自身のやりたいことを貫きとおし戦っていくという話である

そう、元ネタは仮面ライダーです
これもかなり人気が出ました
実際に絵が描ける人に書くのを手伝って貰い、公開したらかなりの行列が出来た位です

あれには驚きました
しかもその絵を買い取りたいという資産家の人たちが大勢押し掛けてきたりしたんですから…
流石にそれは出来ないので、全部お断りしましたけど

その後はやっぱり絵本を作りましたね
子供だけでも読める本って言うのはこの時代、あまり見掛けなかったものですから

子供のいる家にはかなりの好評を受けましたね

感謝の御手紙も貰いました

入ったお金は一定の金額に減るまで使って市場に流すようにしてます
お金は溜めるものではなく、使う物なのですよ

そのせいか更に樊城付近は裕福になっていった

もう何か色々と諦めがついたのでとりあえず目標を立ててみた

【目指せ！　天下の台所！！】
って感じです

第一話（前書き）

結構長くなりました
最近忙しいので更新がしにくい…

第一話

…どうしよう

そう自室で悩んでいる劉封こと咲夜である

何故彼がここまで悩んでいるのかというとそれは今日、彼の元に届いた幾通かの手紙が原因である

ただの手紙であるのなら彼とてこうも悩んだりしない

だがその送り主が問題だった

彼が持っている手紙は二通

送り主の名はそれぞれ…

曹操孟徳、そして孫堅文台であった

曹操の方は

――1度あなたと話してみたかったのよ

孫堅の方は

――お主の新たな酒お陰で楽しんでいる所だ。是非直接礼を言わせてくれ

「……曹操はまあ利が通っているというか…曹操らしいっていうのは良く分かるけど。孫堅はねぇ…これはねぇよ。何これ？　酒の礼で太守同士会いたいって…」

でもこれは断りにくいなぁ…

曹操のいる陳留も孫堅のいる長沙もこの樊城から結構近い位置だし…

ハァ…会うしかないか

出来れば何事もなく終わってくれると有難いんだけどさ

「あら、そんな顔をなさってどうかされたのですか、咲夜様」
「あ、紫苑」
「咲夜様、皆が心配なさってましたぞ」
「焔耶もいたのか」

この二人は黄忠と魏延
黄忠は元々長沙から、魏延は荊州から来た優将である
少し前にこの樊城に訪れて来て是非、こちらで使えたいという希望をした為こちらもそれを望み、今では重要な役割を二人には担って貰っている
真名も既に交換済みである

「それで理由を教えていただけますか？」
「ああ、実は…」

咲夜は二人に自分の悩みを話した

「…成程、ですがどうしてそのお二人とお会いになるだけなのにそこまで？」
「密偵からの情報によると曹孟徳はどうやら同性愛好者な上に有能な人材を欲しているらしい。悪いことにうちには紫苑や焔耶もそうだけど結構曹操の好きそうな女性も多いし、そのほとんどが有能でしょ？　だから下手に興味を持たれても困るんだよ」
「ふむ、良く分からないのだが？？？」

「まあつまり曹操がこの土地と人材を求めて攻め入ってくる可能性もあるってこと」
「なんだ、それならば望むところではないか！」
「……焔耶？　それ、本気で言ってるのか？」
「え…」

その刹那、咲夜から異常なほどの殺気が焔耶に向かって放たれた
それは武官であり、殺気を浴びることに慣れているであろう魏延文長を固めさせるほどに濃厚且つ、隣に居る紫苑には全く感じさせないほどの精密性を持っている殺気をだ

そのため、焔耶は動くことが出来ずにいた
目の前に居る劉封が放つ殺気によって動いたら殺されると本能的に悟ったからである

「前にも言ったけど、俺は無駄な血を流すことは好まないし、戦で俺の大切な民達を傷つけることもしたくない。もし、焔耶が今の言葉を本気で言っていたのなら…俺は正直、君を許さないよ？」
「う…も、申し訳ありません……」
「あらあら。咲夜様も焔耶ちゃんも少し落ち着いて下さい」
「…スマン、いい過ぎた」
「いや、私こそ…考え無しに物を言って…」
「いや、分かってくれたのならそれでいい」
「で、咲夜様。孫文台の方は？」
「…あちらは全く糸が掴めない。とりあえず会って何が目的か調べないことにはどうしようもないだろう。焔耶とシオン、悪いんだけど麻理と秋葉、それから杏を呼んできてもらえないかな？　このこ

とを皆にも意見を聞きたいからね」
「承知しました」
「分かりました」

二人が部屋を出ていくと、咲夜は一人溜息をついた
そして二人が戻ってくるまでの間に仕事を片付けてしまおうと思い、
次の竹簡に目を通すことにした

それから暫くして…

「ふぅ～～～、何とか終わったか」

咲夜は一息つき、鈴を鳴らして付き人を呼ぶとお茶の用意を頼み、
そのまま次の自身の仕事に取り掛かった
それは小説の下書きである
これまでに咲夜は約１０作品の小説と１５作品の絵本を作り上げた
どれもこれもが人気作品となり、朝廷や宦官は勿論のこと、それな
りに裕福な一般家庭にも絶賛されている位である
だがそれは樊城外の話であり、この樊城では一般家庭でも咲夜の小
説は最低一冊は家におかれるようになっている

樊城の一般の民の生活水準が他に比べて高いからである
この時代、紙と言うのは貴重であるが故に高いのだが、咲夜はその問題を完全に解決し、竹簡と紙の二つで書きあげていた
竹簡に書いたのは貧しい家庭にも自分の書いたものを読んでもらいたいが為である
紙と比べると読み難いのだが、コスト上の問題は解決されているため、今まで本が読めなかった物でも読めるようになっている

加えて言うのであれば、この時代は文字が読み書きできる者はほとんどいない
それは教養が全くと言って良いほどなかったためである
私塾やそれなりに分かりやすい解説本などもあるのだが…
大半の人はそれを全く必要としないのである

そのため、咲夜は一般の人たちに数字や文字の必要性を説き、暇があれば文字と数字を勉強するようにさせた
すると樊城の人たちは少しずつだが文字と数字を勉強することを日課にし始めた
これは咲夜が赴任して直ぐに行ったことでもあるため、今では大半の人が計算や読書が出来るようになっているのだ
そのためこの樊城で繁盛している店は鍛冶屋と料理亭に並んで本屋がかなりの額を稼いでいる

まあそんな咲夜の本は売上一位なため、度々本屋から催促が来たりするのだが…

「…ふぅ～～、とりあえず次の小説の下書きはこれでいいかな～？
それにしてもこれほど人気が出るなんて…この海のリハクの目を持ってしても（略）…でも本当にこれ続けてたら何時かネタに困るかもなぁ」

因みに今回の新作はけい○んの三国志風改変小説
ギターとかベースとかの代わりにこの時代の楽器を持って幼き少女たちが様々な事情を抱えながらもいつか大きな舞台で演奏することを夢見て中国全土を旅しながら曲を演奏してまわるというストーリーである

まあ人気が出るかどうかは分からないけど私的にはかなり気に入ったような顔をしている咲夜だった

「だけどこれで楽器が流行るとかそういう傾向が出てくるのは止めて欲しいかも…」

実は以前書いた【仮面騎士】
発売して暫くしてからこの小説の登場人物たちの真似をしてまわる輩が出ていたのである
それなりに教養のある連中は余り酷くないのだが、一部では過剰な

暴力や悪役のヒーローに憧れてしまい、それを真似する奴が出てきてしまったりして大変だったのだ

そのため、【仮面騎士】は咲夜の本で唯一樊城外では発行禁止となった
まあ一部では出回っているのだが

そのため、咲夜は弁償として騒ぎを起こした連中の被害をすべて自費で払って回ることとなってしまった

それから咲夜は決めた
こういった小説はもう書かないと

コンコン

「ん、どうぞ。鍵は掛かっていないよ」

ガチャッ

「失礼します。シオンさんからお呼びだと聞きましたので」
「大将、私今日は非番なんだけどさぁ」
「秋葉！！　貴方は主君に対して何という口を…！！」
「別にいいだろう、杏。大将は気にしないっていうんだしさ。それにちゃんと公私位は区別ついてるんだし」
「そういう問題じゃないでしょう！！」
「…あ～そろそろいいかな、三人とも」
「！！　も、申し訳ありません！！！」
「…気にしなくても良いからもう少し声を下げようね。ちょっと声でかいよ」
「…すいません」
「それから秋葉のことはもう俺自身が良いと許可したことなんだ。それに公の場ではしっかりとした対応を取っている。それで十分じゃないかな？」
「……そうですね、申し訳ありません」
「ふふ、気にしないで。杏は俺のことを思って言ってくれたんでしょ？　だったらむしろ感謝しないとね、ありがとう杏」
「い、いえ！！　咲夜様にお礼を言っていただけるなんて／／／

先程までの緩んだ顔を止め、真剣な武人として、国主としての顔をし出した咲夜
その為周りの五人も真剣な表情で咲夜の顔を見た

その中で一番に手を早く上げたのは軍師の一人、先程麻理と呼ばれた徐庶元直である

「私は今、お二人に会っておくべきだと思います。何故なら曹孟徳と孫文台。この二人はいずれ崩れゆく漢王朝の後、新たな風を作る人物の有力候補だからです」
「…麻理、あまりそのことを大声で言わない様にね」
「大丈夫ですよ、密偵さんたちはここには入って来れない様に手配してありますから」
「流石としか言いようがないな、麻理の用意周到性には」
「えへへ／／／／ あ、そ、それでですね。このお二人に会うことの利点は二つ、一つは咲夜様自身がこのお二人と直接出会うことで咲夜様の器を見せつけることが出来ること。二つ目はこの城の最低限の情勢を見せつけ、一筋縄ではいかないという無言の圧力を掛けておくということです。今後、この二人が力を付けた後は分かりませんが、今はかなり効果的だと思われます」
「器を見せるって…俺はそんな大層な人間じゃないと思うんだけど…」
「いいえ、私も麻理ちゃんの意見に賛成しますわ」
「紫苑…」
「咲夜様は今までに見たことのない国主様です。私がこの国に仕えたのは今までに見たことのない咲夜様が考えた私たちの労働条件、賃金、そして衛生面など言いだしたら切りがないほど他の城と比べると優遇されていたからでした」

「うん、それは璃々ちゃんのためだっていうのは分かってるよ」
「それを理解したうえで咲夜様は私が仕事に出ている間、侍女の方に璃々のお世話を担当するように手配して下さいました」
「当たり前でしょう、子供は国の宝だよ？　それを大切に出来ない者は国主である前に人としてどうかと思うよ？」
「だからこそです。だからこそ、私は…いえ、私達は咲夜様に仕えたいと思ったのです」
「そうですね、私も紫苑さんの考えに同感しますよ。咲夜様は私的に今までに見たことのない仁君です。もし、他の城の方々に我々の生活がいかに良いかを知れば恐らく大半の物が咲夜様にその土地を収めて欲しいと思うでしょうね」
「…杏」

軍師にも少し顔を出し、意見を出し合っている杏こと徐晃公明
どうやら杏も麻理と紫苑の意見に賛成派のようだ

「俺はそれに反対するかな」

そう言いだしたのは秋葉こと、太史慈子義である

「…どうしてか理由を教えてもらえますか？」
「俺は難しいことは良くわかんねぇけど、この樊城の繁栄振りは他の場所じゃ全くと言って良いほど見られねぇ。密偵の報告位なら細部まで見せることはねぇからさほど気を使うほどじゃねぇが、曹孟

徳や孫文台みたいな頭の良い連中を国に入れてみろ。直ぐにあっちにとって有益な情報を集めて回って利用されるぞ」
「私も難しいことは分からんが…とりあえず味方でもない奴をこの国に入れるのはあまりいい気持ちじゃない」

焔耶も秋葉の意見に賛同した
この二人は曹操と孫堅を招くことに反対のようだ

そこまでを聞き、咲夜は暫くの間悩んだ後、決意した顔をして自身の考えを話した

「皆、考えたが少し先の未来よりも遠い未来の方が大事だ。故に俺は曹操と孫堅との会談をすることにした。ただし、秋葉の言ったことにも一理ある。だから、皆には民に情報の漏洩があるから、必要最低限こちらだけが持つ技術などの会話を避けるように忠告してきてもらいたい。それから、当日は隠密部隊を普段の倍、回してもらうように手配しておく。麻理、特別手当の分を用意してもらっておいても良いかな？」
「は、はい！！　お任せくだちゃい！！」
「紫苑は重要書類をその日は後に回してもらうように文官の人たちに手配して」
「はい」
「秋葉と焔耶は武官の人たちと兵士の人たちに当日はこちらの訓練内容がばれない様に他の場所でもやっている訓練に変更してもらう

ようにして」
「御意」
「分かった」
「杏は警備隊の人たちと協力してさっき言ったことを」
「御意です！！」
「俺はこれから場内での案内予定とか食堂で作ってもらい料理の予定とかを作成しておくから」

こうして慌しくなりながらも咲夜達は自分たちの仕事をこなしながら曹操と孫堅を迎える準備をすることとなった

曹操と孫堅の二人には返礼の手紙を書き、様々なやり取りをした後、
曹操は付き人に２人と５００の兵を
孫堅は付き人を４人と兵３００を引き連れることになった

まず最初に樊城に来たのは曹操

共に来たのは夏候惇と夏候淵と名乗っていた

…マジですか？

「貴方がこの樊城の太守、劉封ね。私が先日手紙をそちらに送った

曹孟徳よ」
「これはどうもご丁寧に。どうぞ、長旅でお疲れでしょうし貴女方用のお部屋にご案内しましょう」
「その必要はないわ、私は直ぐにでも話をしたいのよ」
「…そうですか、分かりました。ではあなたが連れてきた部下の方々は魏文長と徐公明に任せることになります。よろしいですか？」
「ええ、構わないわ」
「ではそのように。魏延、徐晃」
「「ハッ！！」」
「二人には曹操殿の護衛の方々の世話を任せる！　決して失礼のない様に！！」
「「御意！！」」

二人に曹兵５００のことを任せ、咲夜は共として紫苑と秋葉を連れ、咲夜の屋敷の応接間に案内した

その際に、やはりというか…曹操は街並みや人の顔、更には言葉の一つ一つに注意を払っているようだった
やはりこの人物は本物だなと理解した咲夜だった

屋敷に着くと、まずは軽く食事と御茶を取りながら話でもしようと咲夜が提案し、事前に用意させていた軽食を差し出した

今回はサンドウィッチにしてみた

良い小麦が手に入ったので作ってみた
結構いい具合になったと思う

「劉封、これは何かしら？」
「俺がこの大陸から出て、船を使って旅をした際に見つけたパンというものを使って、その中に色々な具を挟んだものです。調理法も簡単ですし、片手でも食べられるので非常に便利な食べ物なんですよ。名前は…そうですね、挟壱（さんどいち）っていうのはどうでしょうか？」
「どうでしょうかって…貴方、これを初めて作ったの？」
「いえ、幾度か食べてるんですけど名前はつけなくても良いと思ってまして」
「…まあ良いわ、じゃあ頂くわね」

パクッ×４

「Σ　あら、これは…」
「う、美味い！！」
「うむ、このぱんという食べ物と中に挟まれている牛肉と野菜の組み合わせが何とも言えんな…」
「喜んでくれているようでなによりですよ」
「…ねえ、このパンという食物の技術」
「タダでは渡しません、それは当然のことでしょう？」
「ふふ、それもそうね。では貴方は私に何を望むのかしら？」
「我が領地と曹孟徳が領地との不可侵条約」
「あら、そんなことでいいのかしら？」
「俺は出来る限り戦いを避けたいと思っている。この乱世の中、こ

んなことは戯言に過ぎぬかもしれない。だが、最初からあきらめていては何事も成し遂げることは出来ない。だから、俺は戦を起さずに争いを止める方法を行使している」
「…そのようね、こちらの情報によると貴方の土地では殆ど争いは起こらず、他の領地から賊徒がやってきても殆ど被害を出さずにかたを付けているそうね」
「それは賊となった彼らの意見も聞いているからですよ。殺戮を目的とした賊ならば俺は一切容赦はしない。だが、食糧難やこの腐敗している大陸の情勢に反抗するために武器を取り賊となったものであるのなら俺はそのことを当人の口から直接聞きたいと思っている。一応とは言え、俺も漢の臣下になったみたいだからな。それならこの世の中の腐敗を止められない俺の力不足もあるのだから」

実は咲夜、先日朝廷から樊城太守兼主簿に任命された
主簿、簡単に説明すると生徒会の書記のようなものである
最初は樊城の太守としての仕事があるため辞退したいと連絡したのだが、時折で良いから手伝って欲しいと頼まれて仕方なくその任を請け負ったというわけだ

今では定期的に洛陽に訪れて朝廷の仕事を手伝っている

因みに殆ど俺は朝廷では一部の人間としか会っていない
理由はやはり十常侍と現大将軍の何進、そして李儒に王允、袁紹に袁術の存在があったためである
これらは皆、朝廷を我がものとしようとしている輩のため、有能な

ものに分類されている咲夜を何とか勧誘しようとしつこいのだ

勿論、咲夜は内心面倒だと思いながらのろりくらりとその話題を逸らしているのだが

まあそれなりに中が良いのは劉弁、劉協、董卓、賈駆、呂布、陳宮、華雄辺りだろう

っとまた頭の中が別のことを考えていたな
俺の悪い癖だなこれは

「まあそういうわけだ、だから俺は少しでもその朝廷の尻拭いをしようと思ってな」
「それは必要ないのじゃないかしら？」
「おれがそうしたいだけだよ」
「…なら単刀直入に聞くわ。貴方はこの漢王朝はどうなると思っているの？」
「……盛者必衰の理、この国はその末期だ。故にいずれこの大陸全土を揺るがす大乱が起こると俺は思っている」
「なら漢は滅ぶと？」
「それは仕方ないことだろうね、ここまで腐敗するのを誰も止めようとせずむしろ促進させてきたのだから」
「そうね…それを言われるとこちらも同意せざるを得ないわね」
「よく言うよ、貴方も宮仕えなのだからそれくらいは理解していただろうに」

「ふふ、何のことかしらね」
「…まあいいや、それで話はまだあるのかな？」
「ええ、この国を見て思って今確信したわ。劉封、貴方私につかないかしら？」
「……素敵なご誘いだが、断らせてもらおう」
「き、貴様――――！！！　華琳様の誘いを断るとは！！」
「春蘭、黙っていなさい。それで理由は教えていただけるのかしら？」
「…俺と貴方の往くべき道が同じではないから、かな？」
「…そうね、私は我が覇道を往くわ」
「俺は俺の我儘をこの世で貫く」
「ふふ、気にいったわ、劉封。でも覚えておきなさい？　私は自分が欲しいと思った者を諦めたことがないのよ」
「…まあそれは置いておいて、詳しいことを話しましょう」
「ええ、そうね。そちらが望むのは相互不可侵だったわよね？」
「ええ、俺は無駄に民や兵の命を危険にさらすようなことはしたくありません。故に今まで何処とも同盟を結んだりもしませんでした。彼等の目的は我が軍の技術などですからね」
「…そう、でもそれにしては貴方の所の兵はかなり強いという噂を耳にしているわよ？」
「それほど強くはないと思うんですけどね、ただ俺は生き抜くために必要な技術を皆に教えた、それだけですよ」
「…ふぅ～ん、なら私からの要求はそちらの持っている幾つかの技術提供よ」
「分かりました。では三つ、新しい技術を提供させてもらいます」
「ただし役に立たない技術は要らないわよ？」
「そんなことはしませんよ。相互不可侵を決めるのですから、そちらがこちらを信用できるようにしていきたいですからね」
「そう、なら後で詳しく教えてもらうわね」
「はい、ではそろそろ休んだ方がいいのでは？　お連れの方も疲れ

て眠ってしまいそうですよ？」

そういうと曹操は言われたとおり、連れて来ていた夏候惇の方を見たすると既にウトウトして今にも眠ってしまいそうだった
どうにも挟壱が気に入ったようで、満腹になるまで食べたようだ

「…部下の恥ずかしい姿を見せて申し訳ないわ」
「気にしなくても良いよ。それだけこちらの用意した食事を気にいってくれたんだからね」
「…華琳様、そろそろ姉者のことをしっかり寝かせてあげたいのですが」
「ああ、そうね。劉封、部屋を教えてもらえるかしら？」
「はい、分かりました。それで、皆さんは一緒の部屋が良いですか？　それとも一人一人の部屋がいいですか？」
「別々でお願いするわ」
「分かりました」

そのまま咲夜が曹操達をそれぞれの部屋に案内した後、咲夜は一息つき自室に戻っていった

翌日、いつも通りの時間に目覚めた咲夜は少し気分が良いので食堂に行き、朝ご飯を作り始めた
今日のメニューは白米、お味噌汁、鮎の塩焼き、お漬物、卵とベー

コン炒め
味噌は自分で試行錯誤しながら作ってみた
苦労はしたが、何とか作り上げることが出来たので今はこうして活用している

「ふふふ、やっぱり俺の朝食はこうでないと♪　では、いただきま～～「あら、美味しそうね」……あれ？　曹操さん、何でここにいるんですか？」
「何でって言われてもお腹がすいたから何か食べに行こうと思って貴方がつけてくれた侍女に聞いたらこの時間なら食堂で劉封が何かを作っているころだと聞いたのよ。だから少し興味が出たの」
「…そうですか」
「それで」
「ええ、構いませんよ。どうぞ」

そう言って咲夜は自分が食べようとした朝食をそのまま譲った

「口は付けていませんから」
「貴方はどうするの？」
「もう殆ど準備も終わってますし、魚とかを焼くだけなのでもう一回作りなおしますよ」
「悪いわね」
「気にしないでください」

曹操はそのままずは味噌汁を一口

「Σ　これは…」
「どうですか？」↑鮎を焼いている
「美味しいわ、なんていう名前なの？」
「味噌汁ですよ、東方の倭という国では好まれて使われている味噌を使った汁物です」
「そう…でもこれは朝食向きね。さっぱりして美味しいわ」
「ふふ、お気に召して何よりです」

その後、夏候惇と夏候淵もその匂いにつられて食堂にやってきたため、咲夜は更に二人分の食事を作ることとなった

「ふぅ、御馳走様」
「美味かったぞ劉封」
「確かに…今まで食べたことのないものがあったから新鮮だったぞ」
「いえいえ、どういたしまして。それより、今日はどうしますか？」
「そうね…悪いけど、今日も泊めてもらえるかしら？　少し、城下を見て回りたいのだけれど」
「構いませんよ、では案内を付けますので。俺はこの後仕事があるので」
「悪いわね、邪魔しちゃって」
「気にしないでください」

それから咲夜は時間の空いている劉延と孫礼の二人（武官で焔耶の部下）に案内を頼むことにし、自身は仕事をするために仕事部屋に入っていった

やはりというか…今日もかなりの仕事の山だった
もうチョモランマ3倍位？いや、これはエベレストだろう
なんてくだらない脳内劇場が出来る位に酷い竹簡と木簡の山がそこにあった

既にその部屋で仕事をしているのはふわわ軍師こと、徐庶であった
ふわわ軍師と言うのはいつも口癖で「ふわわ」なんて言っているが
故にいつの間にか定着していた
当人は最初こそ、止めて欲しいと言っていたのだが…結局止められず今に至る

他にも文官はいるのだが、その人たちは皆別室で各自、仕事を取り行っている
咲夜と麻理が一緒なのは、仕事が重要な案件ばかりで相談しつつ仕事を取り行うためであった
それくらいしないと一日の仕事が終わらないのである

「（さらさらっと）…これくらいかな？　麻理、この案件はこれでいいかな？」
「…はい、十分です。咲夜様、こちらの金額は？」
「あ、それは孤児院経費だね。一応、額は変わっていないと思うけど？」
「そうみたいですね。あ、でもこの孤児院収穫高、これ少し変動してます」
「本当？　…あ、でもさほど悪くなったわけじゃないね。多分、初

めて作物を育てる子もいたからこれ位は仕方ないんじゃないかな？」
「そうですね…ではこれはいつも通り処理しますね」
「頼むよ」

などというやり取りをしながらテキパキと仕事を終わらせていった

そんなやり取りを続けること幾時間…

ガチャッ

「失礼しますわ」
「しゃくやしゃま～♪」

仕事部屋に来たのは紫苑とその娘の璃々だった

「あれ？　紫苑に璃々ちゃん、どうしたの？」
「いえ、お二人ともそろそろご休憩なさったらどうですか？　もうお昼になりますよ」
「え？　あ、ふわわ！！　も、もうそんな時間ですか！？」

「態々伝えに来てくれたのか」
「いえ、咲夜様と一緒にお昼でもどうかと思いまして」
「しゃくやしゃま～、いっしょにごはんたべにいこ～」
「ふふ、良いよ璃々ちゃん。どこで食べたい？」
「ら～めん～～♪」
「あらあら璃々ったら。御免なさいね、咲夜様」
「気にしなくても良いよ。子供は好きだからね」

それから咲夜は紫苑、麻理、璃々を連れてお気に入りのラーメン店に入った
そこには意外な先客がいたのだが…

「あら、劉封。貴方もここに来たの？」
「…曹操さん、どうしてここに？」
「どうしてって…そろそろお昼の時間だから案内をしてくれてる二人にお勧めの店を聞いたらここだっていうからね。ついさっき、注文を取った所よ」
「そうですか…まあ良いか。親父～、皆いつものね～～！！」
「おうよ、任せときな！！」

何だか少し騒がしい昼食になりはしたけど、咲夜はとりあえず腹を満たすことを考えた
その際、何故か紫苑や麻理が注文した餃子をあ～んとしてきたり、

璃々が杏仁豆腐をあ～んして貰いたがったのでやってあげたら周りから温かい目で見られたり…
咲夜は精神的にものすごく疲れた

その後、再び仕事に戻る咲夜
竹簡の山が処理し終わると今度は武官の仕事を手伝いに行き、それが終わったら町の警邏の手伝いをしつつ、町の問題を見つけながら子供たちと戯れる

すべてが終わったのはもう日も完全に暮れる頃であった

咲夜は今、城壁の上に居た
酒瓶を持ちながら町の風景を眺めていた

時折、咲夜はこうして町を眺めている
それは咲夜が決意したことを再認識する為である

―――自分の手が届くところに居る人たちが手を伸ばしてきたら、俺はその手を掴んでやる。何があってもな…

この樊城は咲夜にとって大切なものを具現化したものだ

自分の守りたい物…守るべきもの、それらがすべてこの場所に会った
だからこそ、咲夜は決してそれを忘れない
その為にこうして町が一望できる場所に来ているのだ

だが今日は一人で町を眺められない様だが

「あら、劉封じゃないの」
「り、劉封様！？」

そこにやってきたのは、曹操と今案内を担当している杏だった

「あれ、曹操さんと杏じゃないか。こんなところに何か用で？」
「あ、あの…曹操様が一度町を一望したいということで…その…」
「成程ね。ってあれ？　夏候惇さんと夏候淵さんは？」
「…春蘭、夏候惇が昼間にはしゃぎ過ぎて今、ぐっすりと眠っているわ。秋蘭がそれに付き添っているわ」
「…いいんですか、それ？」
「仕方ないでしょ、我が陳留では見ることの出来ない娯楽や店があって私も少し羽目を外していたしね」

それ以降、二人の間で会話が途切れた
その様子を見て杏があわあわしていた

「…それで、貴方はどうしてここに居るのかしら？」
「……その前に一献どうかな？」
「…頂きましょう」
「杏、悪いけどちょっと軽く摘まめる物と追加のお酒を持ってきてもらっても良いかな？」
「は、はい！！」

逃げるように杏はその場から逃げていった

「（こくっ）あら、美味しいわね」
「うちの酒職人が精を込めて作りあげた逸品だからね」
「もう貴方の城は技術大国って呼んだ方がいいのかしらね」
「まあそれは自由にしてください」
「…それで、さっきの質問に答えてもらえるかしら？」
「ここに来た理由は…俺が力を持った理由を忘れない為さ」
「…聞かせてもらっても良いかしら？」
「……俺は以前までは羅侯寇氏の一人息子だったらしい。だが城は敵に攻められ崩壊し、俺は運よく母に助けられ、叔父である劉泌のいるこの樊城に入ってきた。俺の命はこの二人によって今がある様なものだ。それと同じように命と言うのは鎖のように何かに繋がっている物だと俺は思っている。絆、運命、偶期、それはまた一人一人違うのだがな。でもそう思うからこそ、俺はそのつながりを大事

にしたいと思っている。そのつながりを守るために俺は力を得た。殺戮の為でも侵略のためでもない、この力は俺の守りたいものを守るために使う、それを忘れない為に度々こうして町の風景を眺めているんだよ」

そう言い終え、咲夜は一口酒を飲みほした

「…成程ね、貴方が噂で仁君と言われている理由が良く分かったわ。でも、貴方はそれを貫けるのかしら？　この乱世の中で」
「貫いてみせる、それが俺の決意だ」
「……ふふ、益々気にいったわ。ねえ、真名を教えてもらえるかしら？　私の真名は華琳よ」
「咲夜、それが俺の真名だ」
「そう、咲夜。私はいずれ貴方を手に入れて見せるわ」
「ははは、もし俺が華琳に仕えることになったのならそれは俺の天命なのだろうな」

そして翌日、華琳達は樊城を去っていった
その際に、華琳と咲夜が真名を交換し合ったことが分かり、夏候惇と夏候淵が咲夜に真名を授けることとなった

三人が帰っていくのを確認すると、咲夜は深く溜息をついた

「ハァ～～～、次は孫堅殿か……ハァ～～～～～～」

曹操と会うだけでこれだけ疲れたというのに、この上孫堅とまで会わなくてはならないなんて…俺って不幸だよＯＴＺ

それから数日後…
孫堅文台が樊城を訪れてきた

「初めまして、俺はこの樊城太守「ああ、そんな堅苦しい言い方はせんでいい」…はい？」
「儂は長沙の太守、孫文台じゃ。　ほれ、お前達も挨拶せい」
「こんにちは、貴方があの噂の劉封なのね～。私は孫策よ」
「…私は孫権という、少しの間だがよろしく頼む」
「…甘寧だ」
「…済まないな、劉封どの。何やら礼儀にかけた挨拶で…私は周公瑾だ」

「…いえ、もう何か慣れてますからこういうのは」

先日の曹操とは対照的で軽い人多いなぁ
まあ春蘭さんが二人になったと思えば良いか

「ねえねえ、劉封♪　早速案内してよ、お酒の美味しい所」
「……は？」
「ちょ！！　姉様、来て早々それはいくら何でも…」
「そうだぞ雪蓮、それは後のお楽しみということにしておこう」
「あ、結局飲むんですね」
「当然よ、まあそれよりも大事な話があるがな」

そのまま、何というか力強く中に入っていった孫堅とそれに続く孫策だった

それを呆然としたまま見ていた咲夜だった
流石に予想外過ぎた

「…すまない、うちの太守と問題児が迷惑を掛ける」
「……いえ、いいですよ」
「本当にすまない、後で母様と姉様には私達からよく言っておくから」

「…ハァ、まあ気にしないでください。皆さんは皆さんで楽しんでいって下さいね」
「…なあ、劉封殿」
「はい、どうかしましたか周瑜殿」
「貴公はこの【相棒】や【黄門奉行】の作者なのだろう？」
「あ、買って下さったんですか？　ありがとうございます」
「いや、私の方こそ礼を言いたい。これほど面白い本はあまり読んだことがないのでな」
「……劉封様」
「えっと…甘寧さんでしたよね？　どうかしましたか？」
「次の本はいつ頃出るのですか？」
「あ、甘寧さんも読んでくださっているんですか？」
「ええ、まあ」
「俺の新書はもうこの国で発行される予定ですよ。恐らく明日には本屋の店頭に並ぶ予定です。まあそちらの国だと…一月先だと思いますが」

そう言った瞬間、周瑜と甘寧の目が光った

「ど、どんな本なんだ！？」
「ふえ！？　え、えと…今回の話は音楽家の旅の話です、よ？」
「ふふふ、今から楽しみだ」
「冥琳様、早速明日本屋に行きましょう」
「そうだな、こんなこともあろうかと私金を持ってきておいて正解だったな」
「はい」

…気にいってくれているのは嬉しいんだけど、ここまで行くとちょっと引くなぁ

などと思っている咲夜だった

「…うぅ、本当に申し訳ない」

「あ、孫権さん。気にしないでください、俺の本を好きだと言ってくれるのですから嬉しいですよ」

「そ、そうか…まあ確かに貴公の書は今までに見たことのない魅力があるからな」

「あ、あはは…（まあそりゃ俺の世界だとベストセラーの物とか元ネタが人気あった奴選んでるからなぁ）」

そのまま、咲夜は孫堅達を以前と同じように咲夜の屋敷の応接間に案内した

連れてきた兵３００は今度は劉延と紫苑に任せ、一応咲夜の付き人として秋葉が付くことになった

全員分の御茶を出してもらう様に侍女に指示し、全員で一息つくとその場に居た二人が直ぐに空気を一変させた

「…単刀直入に言わせてもらう、孫呉と同盟を結ばないか？」

孫堅と

「同盟はお断りしますが、不可侵条約なら良いですよ」

咲夜だった

「ほぅ…どうして同盟を断る？」

「簡単な理由です、我が樊城は争いは可能なら避ける精神である故」

「…この戦国の世ではそんな惰弱な方針では喰われるぞ？」

「江東の虎らしいお言葉ですが、俺や家臣一同、この構えを解くつもりはありませんし、もしいずれかの勢力が押し寄せてきても防ぎ切り、後の憂いを断つくらいの力はありますよ？」

「…らしいな、以前お前の土地を狙って劉表の軍が攻めたが返り討ちにあい、そのまま逆に城を取られたとか…」

「ええ、まだ完全に戦後処理が終わったわけではありませんが、襄陽城は我が手中にあります」

そう、実は一月ほど前、こちらの配下に付けなんていう理不尽極まりない手紙を送ってきた劉表に返事として

『もう一回生まれ変わって常識と礼儀を学んできたら考えます』

と送り付けた

流石に腹が立ったのだ

まあそんな具合でこちらと劉表軍の中は悪くなり、あちらが樊城に攻め入ろうとしてきた
だから先手を打って奇襲をし、軍を立て直し不可能になるまで痛め付けた後、別働隊を動かして襄陽を攻め取った

劉表軍の兵士達は治療した後、直ぐに荊州城に送り届けてあげたけどね

一応更に警告して、次攻めてきたらこんなものでは済まさないと伝えておいた

まあ何せ、この戦いだけで向こうの蔡和、蔡沖の二人の将を討ちとり、大将の蔡瑁は捕縛した
劉表軍の被害は他にも兵数だけでなく、兵糧、馬、武器等もこの戦いでかなりの数を失った
それに比べて、劉封軍は被害は殆どなかった

普段の訓練が他国よりも過密な為、兵士一人一人の質も異なっているのだ

現在、襄陽城は劉泌に統治を任せている
少ししたら咲夜もそちらに赴く予定だ

「正直に言おう、儂は主が…いや、この主の治める領地のものすべてが敵にすると恐ろしいのじゃよ、だがお主が仲間になってくれるのであればこれほど心強いことはないと思っておる」
「…悪いがそれは出来ない。俺は悪戯に皆を傷つけたくない」
「…ふむ、では考えてもらうという形はどうじゃ。どうであれ、人の心は変わっていくものじゃからな」
「……それならまあ」
「とりあえず領土不可侵なら良いのじゃな？」
「ええ、俺としても貴方のような人と対立するのはあまりしたくないですからね」
「ほう、どうしてじゃ？」
「…第一印象としてですけど、孫堅さんと孫策さん、そして甘寧さんは武人としてはかなりの実力者みたいですし…周瑜さんはかなりの智将と聞いています。孫権さんは物事を冷静に見ることが出来、武も智もそれなりにある非常に安定感のある人だと伺っていますから」
「ほう、分かるのか？」
「一応俺も国主である前に武人であり、文官でもありますからね」
「ほぅ…噂だけではやはり人は測れんな。いずれ手合わせしたいものじゃな」

「え、構いませんよ？」
「「…は？？」」
「この後、訓練がありますから丁度兵士たちに俺と徐晃、魏延と太史慈の戦いを見せる予定でしたから。誰か代わりますか？」
「はいは～～い♪私がやる～～」
「しぇ、雪蓮！？　お前は何を言って…」
「まあ良いではないか冥琳。だが雪蓮よ、それは私がやらせてもらうぞ？」
「え～、母様は駄目よ～。太守でしょ？」
「…母様も姉様も駄目です！！」
「…ならば私が出ましょう、それならば問題はないと思われますが」
「思春…そうだな、それならばいいだろう」
「「ええ～～～」」
「ではこちらは俺が交代しますね。甘寧さんの相手は徐晃になりますがいいですか」
「…劉封殿ではないのか？」
「あはは、それはうちの四大将軍を倒してからにしてくださいよ」
「ほう、それではその４人は強いのか？」
「ええ、力の魏延、技の徐晃、早さの太史慈、弓の黄忠ですね。その中で一番強いのは…やっぱり黄忠ですかね？　４人の中で一番頭が回りますし」

なお、それが悔しくて現在秋葉と焔耶は必死に勉強中だが…
杏は実力不足だと思い、自主訓練もしている
杏自身、頭の方は悪くない為

「ほう、ではこの樊城で最も強い奴がその黄忠ということになるのか？」

「いえそれは違います」

突如、口を出してきたのは今まで黙っていた秋葉だった
秋葉…普段は口悪いのにこういう時は丁寧なんだよねぇ

「？　どういうこと？」
「この樊城で最も強いのは劉封様です。以前、私と徐晃殿、そして魏延殿と黄忠殿の４人がかりで戦ったにもかかわらず我らは負けましたから」
「「「ほう…」」」

ひいぃ…な、なんだか三つほど怖い視線を感じます！！　それも近距離から！！！

嫌な寒気を瞬間的に感じ取った咲夜だった

それから何とか話を逸らしつつ、城下町を案内した
すると孫堅は煙管や酒瓶の専門店に飛び付き、孫策は札遊戯の賭け事に興味を持ち始めたり、孫権は装飾品店に夢中になり、甘寧は忍者道具セットをこれぞとばかりにじっと眺めたり、周瑜は携帯用筆を買うか買うまいか悩んでいた

…フリーダムっすね、呉の人って

先程までの真面目な雰囲気が一瞬で何処かに飛んで行ってしまったようだ

まあ色々な意味でたいへんだったよ

それから数刻、城下町で全員がそれぞれ観光気分で堪能してくれたただその手には大量の土産やこの樊城でしか食べられない屋台の食べ物で一杯だった

「う～ん♪　ここの料理、凄く美味しいわね」
「そうだな、さっぱりして食べやすかった」
「帰りにもう一度買って行ってシャオ達の御土産にしましょう、姉様」
「はっはっは、この焼き鳥は最高じゃな！　酒にようあっとる」
「……」←忍者セットを買ってご満悦のようで

「…ハァ～～～」

何だか胃に穴があきそう
紫苑とかだったらこんなことないけど、孫堅さん達って一応来客だ

から気を使わないといけないし…

あ～、この人たち帰ったら璃々ちゃんや町の子供たちと一緒に遊んで癒されようっと

それから部屋を案内して、荷物を置いてもらった後、軍部の訓練場にやってきた咲夜達
既にそこでは武官たちが準備運動を始めていた

その中には紫苑、焔耶、秋葉、杏の姿もあった

紫苑は大弓「颶鵬（ぐほう）」、焔耶は大金棒「鈍砕骨（どんさいこつ）」、秋葉は双棍「爆犀牙（ばくさいが）」、杏は大鉞「乾坤一擲（けんこんいってき）」を調整している所であった

それに続き、それぞれの部下達も劉延や孫礼を筆頭にそれぞれの武具の状態を確認していた

「へぇ～、一人一人が凄い覇気を出してるわね」
「そりゃうちが誇る第一軍の訓練だからね」
「え、第一軍ってどういうことなの、劉封」
「簡単に説明するとうちは部隊がそれぞれの特徴を持って別れてるんだよ。第５軍が主に城の守りに徹した訓練を行う部隊、第４軍が

騎馬、騎射技術を磨き機動性に富んだ部隊、第３軍が歩兵、弓兵で汎用性に富んだ部隊、第２軍がそれらすべてを富んだ部隊でどんな状況にも対応できる部隊、そして第１軍がその２軍を越えた技術と技量を持ち、一人一人が一騎当千の力を持つ、最強の部隊。本来はもっと細かに分類しているけど、大まかに説明するとこんな感じかな？　新兵には最初は第６軍の訓練を受けてもらい、そこでどの部隊に所属するかを決めるんだ。その後で、部隊に入って訓練を行って貰うわけだけど、成長する見込みがある者は別の部隊に移動し、またそこで訓練を行う。一人一人の実力を生かす、それが俺の考えた部隊だからな」

「へぇ～、ならその訓練を見せてくれるってわけ？」

「いや、流石にそれは企業秘密なんでね。今日はただの模擬戦だよ」

「え～～、見せてくれても良いじゃないの～～」

「だ～～めっ」

「「ぶぅぶぅ」」

…子供ですかあんた達は

なんて思っている間に兵士たちの訓練が始まった

１０の舞台上でそれぞれ兵士たちが１ＶＳ１で戦っていた

皆が皆、かなりの質の戦いをこなし、それを真剣な目で見ていたのは孫堅、孫策、孫権、甘寧だった

周瑜だけはその４人とは違った目で兵士達を見ていたが…

数刻して兵士全員の訓練が終わり、ついに将達との訓練となった

まずは先刻言っておいた通り、甘寧と杏の模擬戦となった

甘寧には事前に選んでもらった模擬刀を渡し、杏は自身の愛用している武器と瓜二つの模擬刀を持った

「…始め！！」

審判役の者が合図すると、杏は猛連撃を甘寧に浴びせた
鉞がまるで複数ある様に見える様にして、相手の視覚を潰す
だが、甘寧はそれをもろともせずに防ぎ反撃の機会をうかがっていた

「へぇ…凄いね、甘寧さん。あの杏の連撃をこうも凌ぐなんて」
「ふふ、思春は早さと鋭さでは呉一番の武将だもの。これ位当然よ」
「でも、多分杏は戦いを本来の物に戻してくるでしょうね、あれは様子見をする際の杏の戦い方ですから」
「へぇ～、それはどういうことなの？」

孫権が興味を持った顔をして咲夜に質問してきた

「さっきも言ったけど、杏の優れているのは力でも早さでもない」

おおおおおっーーーー！！！

兵士たちの盛り上がる声が聞こえた後、静かにこう告げた

――凄まじいほどの戦闘技術だ

舞台上では先程とは異なり、甘寧が自身が誇る早さを持って杏をせめていた

そのはずなのだが…

「はあああぁッ！！！！！」

ブゥン！！

「ふっ…」

ガキンッ！！！

「ハァっ！！！」

「くっ！！！」

甘寧の攻撃を防ぐだけでなく、その攻撃によって生まれた隙を上手く突き、攻勢に転じる
所謂カウンターである
杏は守りながら攻撃を行い、相手をどんどん追いつめていく
それが杏の戦い方である

「うわ、あれは凄いわね」
「しかも杏の凄いところは受け身だけでなく、自ら攻勢に転じることも出来るところです。攻撃と防御の両方を兼ね備え、それらの切り替えが異常な位に早い。だからこそ、杏は技の徐公明と言われるんです」

そのまま甘寧は自分の獲物を跳ね飛ばされ、杏の勝利となった

「くっ…負けたか」

「いえ、正直危なかったです。甘寧さんって凄くお強いんですね」
「…思春だ。我が真名、お前に渡そう」
「あ、なら私のことも杏って呼んでください。又機会があれば、戦いましょうね」
「…ああ」

何やら二人の間で友情のようなものが芽生えたようで…

その後、焔耶と秋葉の戦いが始まった

この二人は幾度も戦っていて、戦績は５０戦２６勝２３敗１分けで秋葉が勝っている
というのも力で優れる焔耶と早さで優れる秋葉は少し相性が悪いのである
その相性の悪さを補いつつ戦っている焔耶も凄いのだが…
相性を上手く使いつつ、戦っている秋葉も凄いのだ

今日の戦いは二人とも劉封が見ている上で外からの来客もいるということでいつもよりもやる気を出し、かなりの戦いが舞台上で行われた

その結果…

「「……」」↑正座中

もう完全に駄目になってしまった舞台の上で大人しく正座をさせられていた二人であった
いくらやる気を出していたとしても度が過ぎたのであった

「全く、二人ともやり過ぎるなといつも言っているだろう？　この舞台だってタダじゃないんだぞ？」

二人に物凄く良い笑顔をしながら説教をする咲夜
だが、その笑顔が異常なくらい怖いのだ
微かに焔耶と秋葉が震えている位に…

結局、二人の戦いは引き分けという形で強制的に終わらせる形となってしまった

「…申し訳ない、うちの恥ずかしいところを見せてしまって」
「かっかっか！！　気にするでない、久しぶりに面白いものが見れたでのう！」

咲夜はその後、孫堅達の部屋への案内を紫苑と劉延達に任せ、焔耶と秋葉には罰として修繕部隊と共にその壊れた舞台を治すことを命じた
その後、咲夜の処理する竹簡の量が普段の３割増しになったことは言うまでもない

翌日、孫堅達が長沙に帰るということで皆で城門まで送り届けることとなった

「いやはや、楽しかったぞ」
「…楽しんでいただけて何よりですよ。それからこれは土産としてお持ち帰りください」
「何から何まで悪いのぅ」
「いえ…気にしないでください。あ、それから決まりについての詳細は後日そちらに書を送らせてもらいますが、それで良いですか？」
「ああ、ではな」

そういって孫堅は孫策達を引き連れて出ていこうとした
だが、その前に何かを思い出したように戻ってくると

「そうじゃそうじゃ！！　忘れとったわ」
「？　何か？」
「真名を交換したいと思っての！」
「……はい？」
「主と直接会って儂はお主が気にいった。だから我が真名、受け取って欲しいのじゃよ」
「…まあいいですけど」
「うむ、では改めて自己紹介といこうかの。儂は性を孫、名を堅、字を文台、真名を紅蓮と言う」
「俺は性を劉、名を封、字は持っていない。真名は咲夜だ」
「うむ！　ではな」
「ちょっと待って母様。私も真名交換したいわ」
「咲夜が良いというのならそうするがよい！」
「良いかしら？」
「…ええ、どうぞ」

というわけで咲夜はその後、孫策、孫権、周瑜、甘寧とも真名を交換し合った

それに満足すると紅蓮達は長沙へと帰っていった

それを確認すると、咲夜はもう今までで一番の溜息をつき、自室に戻っていった

余談だが、その日は咲夜は仕事をする気になれず、璃々達と一緒に遊んで心の疲れを癒していたとか…

部下達も咲夜の心情を理解して、咲夜に変わって仕事をこなしていた

第一話（後書き）

オリジナルで目立ってくるキャラは後何名か追加したりします
キャラ紹介は後で纏めて書きますので…

それにしても…文官すくねぇ！！
武官多いですね
とりあえず雛里と風を加えたいところですけど…
この二人は軍師の中ではお気に入りなので
…どうしよう

第二話（前書き）

曹操や孫堅らと真名を交換し、同盟は結ばなかったものの友好な関係を築き上げ互いの領土に攻め入らないという約束を交わすことが出来た咲夜
だが、咲夜にはまだまだ多くの試練が待ち受けていた
それは腐敗し、すでに崩壊しつつある後漢王朝であった
そんな乱れ往く世の中、咲夜は信頼すべき仲間たちと共に樊城と新たに手に入れた襄陽城で日々を過ごすのだが…
日に日に増える文官の仕事に限界を感じつつあった咲夜は新たに文官を雇うことにした

第二話

曹操、孫堅が樊城に訪れて来てから暫く経った後、劉封こと、咲夜は今は襄陽城に居た
劉表軍からとった新たな領地である
元々、正当防衛で取った土地であり、加えて少し人口が限界を越えつつあったのでこの新たな領地は渡りに船であった

「劉泌叔父さん、どうですか？」
「ああ、どうやら領民は皆、咲夜がこの土地を治めることに賛成しているよ」
「そうですか、それは良かったです。では早速新しい政策に取り掛かることにしましょう」

咲夜は樊城のことを焔耶、劉延、孫礼などに任せ、自身は麻理と秋葉と紫苑を引き連れ、襄陽城で仕事に取り掛かることにした
元々、襄陽の土地はかなり肥えているため、以前とは比べ物にならないほどの利が得られる
だが、そのためにはまず咲夜達が変えるべき所を変えなくては話にならないのである

そして仕事に取り掛かるのだが…

こなしてもこなしても終わらない竹簡の山…

「…やっぱり文官が足りないなぁ」
「しょ、しょうですね」

普段から殆どの文官の仕事を受け持っている咲夜と麻理…このままだとどちらかが倒れれば国が崩壊する可能性も…

「やっぱり文官になりえる人材探した方がいいかもね」
「あ、そういえば今度、文官の試験があるそうです。そこで探してみるというのはいかがですか？」
「それってこの襄陽で行うんだよね？」
「はい、その予定です」
「…ならそれに頼るしかないね」

それから少しして…
咲夜は秋葉を護衛にその試験会場にやってきていた
本当なら一人でも大丈夫なのだが、麻理が…

「太守が一人で出回るなんて非常識でしゅ！！　あ、か、かんじゃいましゅた…」

なんて言うから…半強制的に秋葉と共に見に行くことに…

「…さてと…名前の一覧はあるかな？」
「あ、劉封様！？　ど、どうしてこちらに…」
「情けないことに今こちらには文官が不足していてね、だからちょっと有能な子がいれば登用したいと思っててね。で、一覧を貰えるかな？」
「は、は！！　こちらになります」

渡された竹簡にはかなり数の名前が書かれていた

「凄いなこれは…こんなにたくさんの人たちが」
「それだけ皆さん、劉封様に仕えたいと思っていらっしゃるのですよ」

その言葉を聞いて嬉しく思いつつ、名前を確認し続けた
すると…その中にいくつか気になる名前があった

――――荀攸公達
――――鳳統士元

――程？仲徳
――劉曄子揚
――諸葛瑾子瑜
――董允休昭
――姜維伯約
――王平子均
――馬良季常

などなど…有名所盛り沢山である

（○△○）

暫くこんな顔をしていた咲夜だった

暫くして、目が覚めると咲夜は受け付けをしていた文官に自分の知っている有名な人物達の名前の所に印を書き、この人物達は後で咲夜の屋敷の応接間に通すようにするように指示した

そんな冷静な支持の中…

咲夜の頭の中ではかなりぐっちゃになった脳内討論が行われていた

↓咲夜の脳内↓

咲夜A「おいいいいぃ！！！！　どういうことだよ！！！！　どうして伏龍鳳雛として例えられた一人の鳳統がここに来るの！？」

B「あ、た、多分…麻理がいるから？」

C「加えて何で程？が来るのよ！？　この人は華琳さんの部下になる人でしょうが！！」

D「不明不明、我理解不能」

E「それに荀攸って…軍師としてはかなり有能な人だよね？　本当にどうしてここに…」

F「情報が足りません、もう少しまともな情報を得てから動くのがよいかと」

G「（カサカサ）…」

H「チョッ！？　何でゴキブリがここに居るんだよ！！！！」

I「落ち着け、そいつはゴキブリじゃなくGだ」

J「…まあそれで結論は？」

K「決まってるだろう！！　有能＝即登用だぁ！！」

L「それは早計ではないのか？後、この王平さん…確か忠志なら武官だったと思うんだけど」

M「でも王平さんって以前受けた武官の試験で落ちてたと思う」

N「あ、だから今度は文官として来てくれたってわけ？」

O「……どうする？」

P「とりあえず試験が終わるまで待つというのは？」

一同「異議なし！！」

↓Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ↓

という結論に至った

それから数刻の間、試験が終わるまで咲夜は劉泌と秋葉と一緒に軽く何かを食べることにした
因みに麻理は試験官の一人を担っている

「…そういえば叔父さん、詳しい事情とかは聞きませんでしたけどどうして俺に太守を譲ったんですか？　俺は叔父さんの下で働ければいいと思ったのに」
「…実はな、私はお前に太守を任せる少し前に夢を見たんじゃよ」
「夢？　どんな夢なんですか？」
「うむ…なんだかよく覚えていないのだが…劉封に太守を任せれば樊城は更なる繁栄を遂げ、天下になお残す龍となるであろうと言われたのじゃ」
「誰に？」
「よく覚えとらん。だが…褌を穿いた筋肉質の漢だったような気がする…その後は思い出すと何故か気分が……うぷっ」
「お、叔父さん！？　大丈夫！！？」
「あ、ああ…大丈夫だ……まあそんなわけでその助言に従ってみたんだ」
「そ、そんな単純な理由だったんですか…」
「まあそれもあるが…何よりも時期が良いと思ってな」
「はい？」
「私はもう歳だ。これよりさらに混乱の増す世を治めていくだけの気力と才を持ち合せていない私が太守を続けていても結局苦しむの

は民だけだ」
「……」
「だからこそ、今は力強い新しい波が必要だと思ってね。だが私には子がいないし、知り合いの若い子は咲夜しかいなかったからね」
「…そう、か」
「…やっぱり嫌だったかい？」
「…いや、それを聞いてもうちょっと頑張ろうと思ったよ」
「そうか…」

それからまた暫くして、咲夜は劉泌と秋葉と共に麻理のいる試験会場に向かって行った
もうこの時間だと試験も終わり、残っているのは麻理と試験を担当した文官のみだからだ

「お疲れ、麻理」
「あ、咲夜様」
「どうだった、試験の方は」
「実は咲夜様が目を付けていた方々を優先的に採点したのですが…皆、凄いです。合格点を軽く越えて、私では思いつかないような案を出した方もいらっしゃいました」
「そう…そういえば麻理は鳳士元とは同じ私塾出身だったんだよね？」
「はい、ですがだからと言って採点を甘くしたりはしていません」
「それは最初から分かっているよ。麻理は仕事に関して凄くまじめだからいつも助かっているしね」
「とりあえずこれで一次試験は終わりです」
「合格者の番号を書いてそれを張りだしてあげて。ああ、それから

明日は俺が二次試験の審査をやるから」
「はい、明日は面接ですから。でも念のため私が付きますね」
「頼むよ」

そして翌日…

二次試験会場には多くの一次試験合格者がいた
どうやら今回は有能な人材が多くいるようだ

二次試験は面接でどうして咲夜の元で働きたいか、その動機を聞いたり、戦う覚悟を問うたりするのが目的だ
順番はくじで引いた順番で行い、呼ばれた者から別室に居る咲夜達の元に案内され、そこで試験が始まる

「では次は…鳳士元ですね」
「（いよいよか…どんな人物なのか、楽しみだな）」

コンコン…

「どうぞ、お入り下さい」

ガチャッ

部屋に入ってきたのは何やら魔女っ子が被っていそうな帽子を被った麻理と同じ位に小さな女の子だった

「ほ、鳳士元でしゅ」
「ふふ、ゆっくりでいいから。落ち着いて」
「は、はい…」
「俺は劉封、一応この土地の主をしているよ」
「あわわ／／／よ、よろしくお願いしましゅ／／／」

麻理といい、この鳳統といい…水鏡塾の生徒って舌噛んだり、あわわとかふわわって言うのが癖なのかなぁ…

なんてことを思いながらも質問を続けていった咲夜

時折どもりながらもそれを的確に答えていく鳳統

「（ふむ…やはり当たりか）」

話していく度に、鳳統が有能な人材であることがはっきりしていく時折甘さの見える回答もあるのだが、許容範囲内故にこの時点で合格であった

「ふむ…じゃあ合否は後で伝えるよ。御苦労さま」
「は、はひ…あ、あの……最後に一つだけ聞いても良いですか？」
「ん、何かな？」
「そ、その…劉封様はこの乱れ始めている世の中で何を望みますか？」
「……俺が望むのは俺が守りたいものを守れるだけの智と力」
「それは劉封様の覇道のためですか？」
「いや、俺自身の我儘の為」
「ふえ？」
「俺は自分の手の届くところに居る人たちを、俺の大切なものを守り抜く。例えどんなことをしてもな。その為に力が欲しい、ただそれだけ」
「で、でも劉封様の国は自分から攻めることは殆どないって」
「守るためにも力はいるだろう？　それにこの襄陽のように俺から攻めることもある。それは今後の憂いをなくすためでもあるんだ。俺は俺の守りたいものを守るためなら悪にでも魔王にでもなってやる。それが俺の覚悟だ。まあ基本的には非戦闘主義でいるつもりだけどね」
「……」
「失望したかな？　結局のところ、俺は何かを失うことを恐れてる

臆病者だよ。だから亀みたいに普段は甲羅に籠っている」
「いえ…だからこそ、領民の皆さんは安心して暮らしているんだと思います。私はこの襄陽に来る前に徐州や徐南を訪れていましたが…どちらも領民の皆さんは貧しい人たちの方が多かったです。でも、この襄陽や樊城付近に住んでいる人たちは皆笑顔の人たちばかりでした。それは全部、劉封様が」
「それは違う、ここまでこれたのは俺についてきてくれた人たちと領民の人たちが俺を信じて、自身で努力を怠らなかったからだ。俺は大したことはしてないよ」
「……」
「さて、君は合格だけどよく考えてね。俺を主として良いのか悪いのか。その判断は君に任せるよ、鳳士元」

咲夜はそのまま、鳳統を部屋から出した
次に会う人たちを待たせていたからである

次に部屋に入ってきたのは程？である
なのだが…

「くーーー…くーーー…ヒュルル…」

…何この子、寝てるんですけど

「……なあ、程？さん？」
「おおっ！　すいません、寝ていました」
「いや、見れば分かるけど…疲れているの？　それなら二次試験は後日に延期することも出来るけど？」
「…普通、一人の人間にそのような事はしないと思うのですが…」
「今は一人でも多くの人材が欲しいからね。その為なら少しくらい時間がかかっても構わないよ」
「ほうほう…流石は噂に名高い名君ですね」
「そんなつもりはないよ。でも少し嬉しいかな」
「風はこの試験を受ける前日、不思議な夢を見ました。風は大きな日輪を沢山の人たちと共に支え、その日輪を一匹の大きな龍が呑み込み、風たちを乗せて高々と天へと昇っていく夢です」
「へぇ、確かに不思議な夢だね、それで？」
「風はその昇り龍が劉封様ではないかと思ったのですよ」
「ふむ…それで、その夢に他に特徴的な事はなかったかな？」
「…そうですね……ぐぅ」
「いや、何でそこで寝るのかな！？」
「Σ　おおっ、これは失礼しました。えっとですね…そういえば、沢山の花が咲き乱れていましたね…日輪が良く輝いて見えたので…多分時間帯は夜なのだと思うのですよ」
「……（それって思いっきり俺の真名指してないか？　咲夜だし、俺）」
「ほほう、その顔は何か心当たりがあるようですね」
「…まあ俺の真名が咲夜だからな。こじ付けかもしれないが、その程？さんの夢は確かに俺を示してるのかも知れないが…それを知って程？さんはどうするの？」

「是非とも劉封様に仕えたいのですが」
「……秋葉、麻理。どう思う？」
「それはもう咲夜様はご決断なさっているのでは？」
「俺達は咲夜様の判断に従います」
「…そうか、ではこれから我が軍の軍師の一人として働いてくれるかな？　程？さん」
「はい～、お任せ下さい～。風は性を程、名を？、字を仲徳、真名を風と申します～」
「俺は性を劉、名を封、字はない。真名は咲夜だ、これからよろしく頼むよ、風」
「……ぐぅ～～…」
「……また寝てるよ、まあ良いか。とりあえず風を文官用の宿舎に案内してあげて」
「御意」

少しして、起きた風を文官の一人が先導して宿舎に連れていった

「…何だか結構癖があるんだな、軍師って」
「ふわわ！！　そ、それって私にも癖があるっていいたいんですか！？」
「…そのふわわって言う口調と時折舌をかむ癖を治したら修正するよ」
「…ふわわ、そ、それは難しいかもです…」

根付いた癖って治しにくいよねぇ

次に部屋に入ってきたのは荀攸

「君が荀攸さんだね。初めまして、劉封です」
「……」
「？　どうかしたんですか？」
「…いえ、想像とは少し異なっていたので」
「因みに聞きますけど……どんな印象を俺に持っていたんですか？」
「綺麗な女性と聞くと、すぐに手を出して侍らせるとか」
「……」
「冗談ですよ、これは私の従姉の桂花、荀？が口にしていたことです」
「え、えっと…君の従姉さん、もしかして…」
「ええ、大の男嫌いよ。まあそれは昔、盗賊に攫われて大事なものを奪われかけたからなんだけどね」
「……それは普通、俺みたいな他人に話すことではないと思うのだが…」
「ああ、いいのよ。貴方はそういうことを口外するような人間じゃないでしょ？」
「…まあそうだね、それで色々聞きたいんだけど…どうしてここの試験を受けに来たの？」
「…最初は袁紹の所で働いていたんだけどね…あいつ、ただうざったい笑いを響かせながら偉そうにしてるだけだし、これは付いていっても長くはないと思ったの。次に曹操だけど……確かにあの人は英雄たる器を持ち、そして世の流れに乗りつつある。付いていくのならかなり期待できる人…なのだけど、あの百合百合しい空気は嫌なのよ！！！」

「ゆ、百合百合しい？　それってつまり…そういうこと？」
「…ええ、私は荀？と違って普通の恋愛がしたいの。だからちょっとあそこは息が詰まりそうになってね」
「…それでうちを選んだってわけ？」
「ええ、もしここが期待外れだったら次は孫堅のいる長沙にでも行こうかと思っていたのだけど…その必要はないみたいね」
「それは俺が君の眼鏡に適ったってことなのかな？」
「まだはっきりとは言えないけどね…でも、治めたばかりのはずのこの襄陽の治安と領民たちの顔を見たら貴方はこの世で生き残る力を持っていると思うわ。だからこそ、私は貴方に仕えたい。理由はそれだけじゃ駄目かしら？」
「…いや、十分だ」
「そう、なら改めて自己紹介をさせてもらうわね。私は性を荀、名を攸、字を公達、真名を燐花よ」

それから咲夜は燐花に真名を渡し、文官を呼び出して宿舎に案内させた

それから順番に一次試験合格者たちと面接をしていき、それらが終わると既に日も暮れかけていた

「ふぅ～～、これで終わりかな」
「お疲れ様です、咲夜様。どうですか？」
「とりあえず決まったのは燐花と風の二人だね。後は合格者たちの名前を張りだしてそれでもこちらに仕えるのを望む者は講堂に集め

させるように手配して」
「御意です」
「あ、そうそう。麻理、今日はもう仕事を終えても良いよ」
「え…」
「鳳統さんとゆっくり話したいこともあるでしょ？」
「あ…ありがとうございましゅ！！！　あぅ／／／」
「あはは、ほら早く行ってきなよ」
「はい♪」

嬉しそうに部屋から出ていく麻理
残った咲夜は竹簡と書類を纏め、自室に持っていき残った仕事に取り掛かることにした

とりあえず合格者は自分が印を付けた者達を含めて、２８名
これだけの人数をどの部署につかせるか、その草案を作るのも咲夜の大事な仕事である
その為、咲夜はその晩寝ずにずっと仕事をこなし続けた

朝日が出て、小鳥の囀りが聞こえ始めた頃、咲夜はようやく筆を下すことが出来た
一次試験で得た合格者たちの最も優れていて部署に入って直ぐにでもその能力が使えるように適度な場所に分散できるようにし、二次

試験で分かった合格者たちの性格や癖などで問題が起こらない様に相性の悪そうな者同士は組むことのない様に慎重に草案を書きつらぬった

試行錯誤しながらも何とか出来あがったのだが…もう咲夜の腕はプルプル痙攣していて目の下には真っ黒な隈が出来ていた
徹夜明けなので少しテンションもおかしいことになっているのだが…
前世の頃のように珈琲やレッド〇ルーなんかもない為、とりあえず自分で淹れたお茶を飲んで一休みすることにした

幾刻か経った後、麻理と紫苑が咲夜の仕事部屋にやってきた
あの食事を終えた後直ぐに劉泌と秋葉には樊城に戻って貰い、紫苑には襄陽に残って貰ったのだ

二人は最初は咲夜の自室に向かったのだが、誰もいなかったためここにやってきたそうだ

部屋に入ってくる前は何やら楽しそうな顔をしていた二人だったのだが…咲夜の顔を見てからその顔が一変した

「さ、咲夜様!?　ど、どうしたんですか、しょの顔?!」
「え…ああ、これから入ってくる人たちの部署分けの草案考えてて…気付いたら朝だった」
「さ、咲夜様…とりあえず顔を洗ってきた方がよろしいかと」

「ふあああ〜〜…そうするよ。紫苑、それに麻理。悪いけど、この草案ちょっと確認してみて。一応、合格してもうちに所属しない人がいたりしたらその分、穴埋めも出来るようにして有るんだけど…問題あるかもしれないから」

そう言い残し、咲夜は部屋を出て顔を洗いに行った

「ふわわ…咲夜様、相変わらず無理をして」
「そうね…でも新しい人たちが仕官してくれるようになったからこれで咲夜様も少し休めるようになるでしょうね」
「…寧ろ皆さんの見本となろうとして更に無理をしそうな気がするんですが…」
「そうさせない為に私達が咲夜様を支えないといけないわね」
「はい！」

咲夜が部屋に戻ると、紫苑と麻理が少しでもいいから時間まで寝る様に懇願し、咲夜はまだやることがあると言ってそれを断ったのだが…

その後に来た璃々に泣かれそうになって渋々その忠告に従ったのだが…

「あ…あの～」
「はい？　何ですか、咲夜様」
「…何で俺は紫苑に膝枕して貰ってるの？」
「ふふふ、良いじゃありませんか」
「…それに何で麻理も俺に抱きついてるの？」
「き、気にしないでくだひゃい！！／／／」
「…璃々ちゃんもどうして俺の頭を撫でてるの？」
「えっとね、おかーさんがしゃくやしゃまがつかれてたらこうしてあげなさいって」
「……紫苑さん、何を教えてるんですか」
「あらあら♪」
「いや、あらあらじゃないですよ」

これだけやられても女心に疎い上にどうとも思わないある意味達観している咲夜だった
前世では並はずれた身体能力や頭脳のせいで煙たがられていた為だが当の本人は向こう吹く風で全く気付いていなかったのだが…

それから少しして…
約束通り少しだけ休んだ咲夜は今日から仕官することになった人たちに会うため、侍女に璃々を任せ、紫苑と麻理を連れてその場所に向かった
咲夜がそこに入ると既に古参の文官や武官は勿論のこと、新たに仕

官する燐花や風の姿もあった
そして、鳳統の姿もあった
どうやら咲夜を主として行きたいということなのだろう

その場に居た人たちを一瞥し、咲夜はまず簡単な挨拶から済ませ、
その後それぞれの部署を皆に告げ、少し休んだ後に仕事を始めて欲しいと連絡した

それから時間を作り、新規の仕官者達を一人一人皆の前に出して、
自己紹介をして貰った
これから共に働く者同士、仲良くしてもらいたいと思った為である

それが終わった後、咲夜は姜維、王平、劉曄、諸葛瑾、董允、馬良を中心に新しく入った文官の約半分を樊城に向かってもらうよう指示した
正直、この襄陽も仕事が多いが樊城も同じ位多いのだ
加えて、現在樊城には文官が少なすぎるためこうしてちゃんと仕事の出来る人たちを送ったのだ

残った文官は雛里（真名は交換した）、風、燐花らを含めた十名に襄陽で仕事をして貰うことにした

新たに獲得した土地では戦後処理はもちろんだが、様々な改革に取り掛からなくてはならない

特に衣食住は何よりも大事な事だ

他にも色々と処理すべきことがあるため…

「…何これ？」
「いや…竹簡と木簡の山」
「……これを処理するの？」
「気にしたら駄目だ、それに俺と麻理はいつもこれだけの仕事をこなしている」
「…は？　この量を今まで二人だけでこなしてたの？」
「まあ時折他の人にも手伝って貰ったけど…基本的には二人だけだね」
「……咲夜、貴方何時か過労死するわよ？」
「あ、あはは…それは否定できませんね」
「いや、麻理も俺と同じ位仕事してるじゃん！？」
「だって咲夜様って…文官のお仕事以外にも武官の仕事や町の人たちの手伝い、それから町の中に設立した孤児院に行って子供たちと一緒に遊んでるじゃないですか」
「……訂正するわ、貴方は絶対近い未来倒れるわ」
「確定なの！？」
「あわわ…咲夜様、わ、私達が今後はお力になりますから…もうそんな無理はしないでくださいね？」
「……その優しさが何だか辛いよ、雛里」

それから総出で積まれていた仕事を片付けることにした

「…へぇ、人口を細かに知るために戸籍っていうものを作ったのね。これはすごく便利だわね、税の支払いの有無も確かめやすくなるみたい」
「あわわ、この算盤も凄く使いやすいです。それに纏め方が凄く綺麗で過去の資料と比べ易いです」
「ふ～む…お兄さん、こちらはどういう物なのですか？」
「えっと…それは……ってお兄さんって何？」
「いけませんか？　風はそうお呼びしたいのですが」
「……まあいいか。っと、それは今度行う町内会の日程だよ」
「町内会？　なんですかそれは？」
「うん、簡単に説明すると俺が直接、領民の皆に何を改善して欲しいか、何か不満はあるか、それを聞くために開く会議みたいなものだよ。最も、樊城ではこういったことはしないんだけどね」
「どうしてですか？」
「樊城では主に【目安箱】をいうものを設置して、領民の人たちの意見を聞いているんだ。でもそのためには皆が字が書けないといけない」
「あ～、確かに字が書けない人は多いですからね～」
「うん、でも樊城の領内に住んでいる人は大半の人が計算と読み書きが出来るんだ」
「なッ！？　それは本当なの！？」
「燐花落ち着いて。本当だよ、うちは自主性で読み書きと計算を学べる場所を提供しているんだ。小さい子供はもちろん、大人もそこで学んでもらっているよ」

風、燐花、雛里の三人は驚いたようだった

確かに一般の人が読み書き算盤が出来るようになれば色々と便利にはなる

だがその半面で、知を得たことで反旗を翻す輩も出てくるはずなのだ

しかし、今まで咲夜が治めた土地でそういったことが起こっているという報告は全くない

それは咲夜の治め方がかなりうまいことを示している

そればかりでなく、三人は竹簡を見ていくうちに他の地域との違いに驚くしかなかった

圧倒的に多い収入と歳出、だが安定感がありそれが一定に保たれている

加えてこの地域のみの特産物が他とは比べ物にならないほどに利益を出している

「…お兄さんは太守でなくても商人としてやっていけますね。どこでこんな知識を？」

「旅の中、色々と見て回ってきたし…昔から色々と応用したり組み合わせたりして新しいことを生み出そうとしてたからかな？（本当は未来の知識だけど…こういっておいた方がいいよね）」

「…そうなのですか～」

「それで…どうかな、ここの状態は少しだけ分かってもらえたかな？」

「……くぅ～…」

「寝ないの」

「Σ　おおっ！」

「…風は突然寝るのが癖なの？」

「そうですね～。昔からこうなのですよ～」
「…まあ良いか、雛里と燐花はどうかな？」
「まだ完全に把握したわけじゃないからどうともいえないけど…凄く働きがいはあるわね」
「はい、これは楽しみです」
「そう、そういって貰えるのならうれしいよ」

それから5人で積まれた仕事を片付け始めた
最初こそ、ここの仕事のやり方に慣れていなかった風、燐花、雛里の三人だったが咲夜と麻理がサポートしつつ、仕事をこなした為、一時間もしないうちに三人は慣れていった
流石は稀代の名軍師として称えられた三人である

そして、いつも咲夜と麻理が掛る半分の時間も使わずに5人は大体の仕事を終えた

「ふぅ～、これで一段落ね」
「まだ明日、今日よりは少なくなるだろうけど仕事はあるけどね。それにしても助かったよ、君達みたいな優秀な人たちが入ってきてくれて」
「そ、そうでしゅか？」
「うん、本当にありがとうね（ナデナデ）」
「は、はひっ！？　／／／」
「ひ、雛里ちゃん、落ち着いて。咲夜様は褒めてくださる時、いつ

も頭を撫でるのが癖なの」
「ほうほう、それは興味深いですね。ぜひとも風の頭も撫でて欲しいのですが」
「良いよ、ほらこっちに来て」
「あ、じゃあ私も良いかしら？　母様には幼い頃に良く撫でてもらったことはあるけど、異性にされたことはないから、少し試してみたいわ」
「良いよ、じゃあ順番ね。麻理はどうする？」
「そ、その…お、お願いしましゅ／／／」

それから紫苑がとあることの連絡に来るまで咲夜は４人の頭を撫で続けた

一人一人撫で終えると咲夜は紫苑に向き合って話を聞くことにしたどうやら幾人か使者がやってきたようだ

「で、紫苑。誰からの使者？」
「一人は袁紹。二人目は劉表。三人目は霊帝殿下です」
「…とりあえず袁紹には『だが断る』って返事を」
「み、見ていないのにそんなことしても良いんですか！？」

雛里が驚いたように大声を上げた
まあ知らない人ならそう思うよね？
でも、慣れたような顔をしてる麻理と紫苑をよく見た後、風と燐花は何となく察したようだ

加えて、燐花は袁紹のことをよく知っているようなので苦笑どころか苦虫を潰したような顔をしていた

「…まああんまり説明したくないけど……あの駄名家の馬鹿袁紹は何時も何時もしつこく俺に下に付けって文とか使者を送ってくるんだよ。俺はその度に無駄な時間を使わされるってわけ。だから、袁紹関係＝無視っていう法則が成り立ったわけ」

「あ、あはは…」

「そういえば以前、それなりに本気で袁紹を挑発したことがありましたね」

「ほう、お兄さんはそんなことを…」

「いやだってなぁ…あの馬鹿の無駄な笑い声聞くと無茶苦茶苛々するんだよ」

「あ、それ分かるわ。何度暗殺してもらおうかと思う位ムカつくのね、あの馬鹿」

「だな」

「い、いい過ぎですよ二人とも」

「じゃあさ、紫苑や麻理はあの駄名族、一緒に居て疲れないの？」

「「……」」

二人とも反論できないどころか、明後日の方を向いて誤魔化した

「そ、そんなに酷いんですか…」

「過去の遺産にいつまでも囚われているある意味では宦官と大して変わらない奴って言えば分かる？」

「あ～～…」

それを聞いて雛里も納得してくれた

「それにしても…雛里がこんなことを知らないなんて思ってもみなかったな」

「そ、それは…少しの間、私は朱里ちゃんと一緒に旅をしてて…別れたのは袁紹さんの治めている冀州とは離れた村だったので…」

「？　誰だいそれは？」

「諸葛亮孔明、私と雛里ちゃんの同級生です」

「ブッ！？　（こ、孔明って！？）」

「？？？　咲夜様、どうかしたんですか？」

「い、いや…何でもないよ。それで…その子はどこに？」

「あ、はい。何でも朱里ちゃんは公孫賛さんの所に行くって言ってました」

「…その子は軍師なんだよね？　一人で大丈夫なの？」

「あ、はい。私と別れる前に丁度護衛さんを雇ってた商隊の人たちがいたので。その人たちと一緒に」

「そう、なら大丈夫だね（よ、、良かった…孔明がこっちに来なくて…本当に良かった…神様は……ああ、駄目。神はいない。だって俺はあんな変態を神として認めてないからな！！　運命は俺をまだ見捨ててなかったな！！！）」

外面は普通にしているが内心では盆踊りを始めそうな咲夜だった

「二人目は劉表か…風、どう思う？」
「……ぐぅ～～……」
「だから寝るな」
「Σ　おお、すいません。そうですねぇ…多分、この襄陽を取られて更には蔡瑁さんを捕縛されていることを理由に宣戦布告じゃないですかねぇ。もしくはその蔡瑁さんを返して欲しいというものではないかと」
「…ふむ、燐花は？」
「蔡瑁の返還でしょ？　だって、劉表は優柔不断で有名な奴だもの。あいつが荊州を収められているのは有能な蔡瑁、張允、黄祖辺りが上手く補佐しているからよ。そのうちの一人が居なくなったのだから上手く機能しなくなってきたんでしょうね」
「成程ね…そのことを踏まえて皆はどう思う？」
「…あの、蔡瑁さんは今どうしてるんですか？」
「とりあえず刑務所という俺の設立した犯罪者や捕虜の人たちを捕える場所で軟禁してるよ。と言っても、他の場所の牢屋よりも待遇は良いし、食事もちゃんと与えられるから、問題はないと思うよ」
「そ、そうですか…なら、もし蔡瑁さんの返還を望む使者なら交換条件を見てから決めるというのはどうですか？」
「…ふむ、じゃあその使者に後で会おう。だけど念のため、忍び部隊を控えさせて紫苑にも一緒に居てもらう。その使者の目的が俺の暗殺だという可能性もあるからな」
「承知しましたわ」

「さて、最後の使者は霊帝様の使者だから直ぐにでも会わないとな…まあ霊帝様の名を語った十常侍の連中の使者の可能性大だがな」
「…あの咲夜様、そういうことはあまり公言しない方がいいのでは

？」
「良いんだよ、俺は一応裏では霊帝様と劉弁様、劉協様の陰の相談役として雇われたんだから」
「「「……へ？」」」
「…それにしても今回の使者は【表】か…それとも【裏】か。どの道面倒な事になりそうだな」

今聞き捨てならないことがあったような気がする…

「あ、あの～…咲夜様？」
「ん、どうかしたの燐花？」
「今とんでもないことを言ったような気がするんですが？」
「お兄さん…皇帝様の相談役だったんですか？」
「陰のだけどな。表立ってそういう役職にはしないでくれって頼んだら、秘密で受け持って欲しいって頼まれたんだよ。だから時折、洛陽を訪れて相談に乗ってたんだ」
「…お兄さんって器が大きいのかそれとも天然なのか…判断しかねますねぇ」

結果的に言うと
1. 袁紹→面倒だから【断】、【否】、【拒】の三文字だけ送った
2. 劉表→風と燐花の読み通り、蔡瑁を返して欲しいという要求。とりあえずタダでは返さないという返礼。正直、劉表のことはあま

り好きではない為。というか勝手に攻めてきて、自業自得なのに何で上から目線？　なんて思っている咲夜
3．　霊帝→洛陽に来て欲しいという連絡。董卓や賈駆が会いたいと言っているようだ。ついでに霊帝自身も会いたいようだ。咲夜はそれを承諾して、後日向かうことを使者に告げた

という感じで処理した

仕事がすべて終わったので、皆で今日から入った人たちの歓迎会をすることにした
因みに樊城ではもう宴会騒ぎであろうと咲夜と麻理と紫苑は悟っていた
何故なら、一人祭りごと大好きな奴がいるからである

―――秋葉である

彼女は新しい人が入るたびに宴会を開くのだ
しかも可能なら自費で…
あり得ないほどに宴会や祭が好きなのだった
それが分かっているので咲夜達も大して止めはしない
まあしっかりと仕事をこなしてからやるので、特に咎めたりはしないのだ

…たまに飲み過ぎて翌日遅刻したりするが…
その際には、咲夜と紫苑のダブルの説教が待っている
しかも正座で…

最長記録は3時間である

第二話（後書き）

と、こんな感じになりました
後日、キャラ紹介＆雛里が襄陽に来るまでのこと＆咲夜が樊城太守になるまでのちょっとした事件を書きます

ー次回予告ー
風、燐花、雛里など有能過ぎる文官兼軍師を手中に収めることが出来た咲夜
これで咲夜の負担が減るかと思いきや、今度はついに勃発する黄巾の乱
果たして咲夜はこれにどう対処するのか！？

キャラクター設定（後に追記有り）（前書き）

オリキャラは少なめにします
自身も混乱する可能性ありなので

一刀君は登場しますが、意外なところに居ます

キャラクター設定（後に追記有り）

恋姫無双　設定集

劉封

真名は咲夜

転生者であり、憑依した人間でもあるちょっと風変わりな元２５歳のやんちゃな日本男児

自分では一般人であると思っているのだが、頭脳明晰、運動神経抜群、容姿端麗といった完璧超人だった（身体能力に関しては異常と言えるほど）

死去した後、神と名乗る妙な女性に転生させられることになった

転生後は黒髪に蒼眼とミスマッチな容姿にはなったが、男の娘の姿をしている

当の本人はそれを全く認めていないのだが…

好きな食べ物は和食（転生した世界では食べられなかったので、自力で似非日本食を編み出す）

嫌いな食べ物は魚介類（イカやエビなど）

ただし、川魚は食べられる

何故か海の魚は食べられない

趣味として本を書いている（かなりのベストセラー状態）

幼い頃に様々な場所を旅して回った為、色々と知識も豊富となった上に転生前も知識も継続されていた為、治めた領地は他の領地よりも豊かになった

転生して得た力は【前世の能力引き継ぎ】、【死亡フラグ回避能力】、【お気に入りの武器プレゼント】とちょっと微妙なものだが、咲夜自身身体能力は馬鹿みたいに高いのでかなり役に立っていた

武器は二本の脇差とハルバード
脇差は対個人、ハルバードは対集団戦用に使用している

共や家族とも言える存在を得てから、その人たちと自分の居場所を守るために戦うようになる
自分の大切な存在が傷つけられた時、咲夜は顔が笑顔のまま、優しい性格が一変してどSとなり、敵と認識した存在を排除する傾向にある
その姿を見た者は必ず咲夜に恐怖している

太史慈　子義
真名を秋葉

咲夜が樊城で雇った優将の一人
一人称が俺で好きな事が強者との戦いと咲夜の作った漬物と樊城の美味い酒という喧嘩好きな姉御肌
咲夜の世に対する姿勢や取り組みを気にいった為に劉封軍に入った

嫌いな事は卑劣な行為と中途半端な事
知略もそれなりに優れてはいるのだが面倒だと言ってやりたがらないのが悪い癖

真っ白な髪に漆黒の目、Ｂ８９とそれなりにスタイルもよい
髪にいつも咲夜に貰った髪飾りを付けている

武力は関羽よりも少し弱い位だが、まだ発展途上
武器は二本の棍棒を使っている

徐晃公明
真名を杏

咲夜の噂を聞き、直ぐに樊城へ赴き少し咲夜のことを見て、主としてこの世界を共に歩んでいきたいと決心し、咲夜に仕えることになった武将
樊城では４大武将の一角を担うほどにまでなった優将である
普段は黄忠（紫苑）と共に魏延（焔耶）と秋葉を抑える苦労人の立場
知略、武力共にすぐれているため攻めも守りも担える

好きな事は咲夜と共に居ること
嫌いな事は咲夜を困らせることとかなり咲夜に熱が入っている
咲夜を困らせる者は力づくで排除しがちなちょっと困ったさん

だが、普段は冷静沈着な為、他の武官、文官達からはかなりの信頼

を得ている

容姿はＣＬＡＮ○ＡＤの藤○杏とそっくり
Ｂは７９と微妙

荀攸公達
真名を燐花

元々、荀？と共に曹操に仕える予定だったのだが、百合百合しい雰囲気を嫌悪し、次に行く予定だった咲夜の元で試験を受け、見事に合格した

咲夜の元で仕事をし、ここなら自分の能力を最大限に生かせると認識し、樊城、襄陽に根付くことにした

好きな事は読書
樊城には他の地域に出回っていない咲夜が世界を回る際に手に入れた本や記録などが書かれた書物などが置かれているため、燐花にとってそこは天国である

因みに発情はしません

嫌いな事は自身の常識から外れたこと（百合とか薔薇は勿論）

容姿は荀?と瓜二つだが、髪の色が緑で頭には犬の耳フードを被っている

キャラクター設定（後に追記有り）（後書き）

番外編

～世界を旅する劉封編～

「う～ん…今は倭国なのか～…まだ米作りが伝わってないし…技術とかはまだ中国大陸の方が上なのか～」

日本…倭国に来て咲夜の第一感想がそれだった

「ふぅむ…ならもう適当に出歩いて必要なものとか物々交換しまくって行くかぁ」

まあそれなりに普通な旅を…

「あ、でもただ交換するだけじゃつまらんから…昔ゲームでよく遊んだものを伝えようかな♪」

普通の旅を…

「あと稲作とか芋のこととか…長持ちする食べ物教えたら面白いことにならないかなぁ」

…訂正、全く普通じゃない旅を始めた咲夜だった

それから３００年後…倭国全域が咲夜が治めた樊城と同じ状態になったのは…まあ補足だろう

言うなれば文明が異常な位に進歩した位だろう

「さて次はっと♪」

こんな感じで咲夜は原作ブレイクならぬ歴史ブレイクを始めていったそうな…

咲夜の旅した場所は各地で変化を起していった

一部では咲夜は神の御使いだと崇め始める集団もいたとか…
無論、咲夜がそのことを知ることはなかったそうだ

樊城に戻ってくると、咲夜はまず叔父に会いに行くことにした

「劉泌叔父さん、ただいまです」
「お、おおおーーーー！！！　劉封か！？　よく帰ってきたなぁ」
「叔父さんお土産ですよ。これらはこの大陸から離れた地で得た珍しいものです」
「ほお～、これは見たことのないものだな…で、どうだった？　見知らぬ土地を旅してみた感想は」
「まず俺は南蛮とは貿易関係を築いた方がいいと思います。あそこにはこの土地では手に入らない砂糖や珍しい香辛料があります。それらを手に入れられるだけでもこちらにはかなりの利益が出るでしょうしね」
「ふむふむ…」
「だからそれを考えて、俺は旅の最中、その南蛮の王に謁見を申し出ました」
「何と！！　それで？」
「…びっくりしたんですけど……南蛮の住民は皆猫耳でした」
「……は？」
「いえ、だから皆に猫耳でした。南蛮王も猫耳でした」
「……それで、どうしたのじゃ？」

「会わせてくれるのなら美味しい料理を作ってあげるよって言ったら……直ぐに通してくれて…で、良かったら貿易しないか？　って言ったら貿易の意味から問われて……それを教えたらまずは俺の料理を食べさせろと言われて…食べさせたら凄く気に言ったようでいつでも貿易してくることになってます」
「……」

流石の劉泌も空いた口が塞がらなかったようだ
無茶苦茶過ぎる交渉術の為、それは仕方のないことだろう
傍から見たらただの餌付けだ

「他にも色々と面白い技術も有りますよ」
「……咲夜、頼みがある」
「え、なんですか？」
「私の代わりにこの樊城の太守を「却下です」…早っ！？」
「言ったじゃないですか、俺は太守とかそういった立場ではなく、一人の将として居たいって」
「う、ううむ…じゃがのう」
「？　何か問題でも？」
「…まあ後日嫌でも分かるわい」
「？？？？」

その時、咲夜は全く理解していなかった

それから来る日も来る日も…

「劉封様！！　お願いします！！！　これはこの樊城に居る武官、文官の総意でございます！！」
「なにどぞ、なにどぞこの樊城の太守となってくだされ！！」
「劉泌様も既にこの樊城の太守を劉封様にする準備を整え済みでございます！！」
「残るは劉封様のご返事のみなのです！！」

「……え、何これ？」

城内の至る所でこういった様に懇願する人たちが後を絶たず…

「あ、あれは劉封様じゃねえか！！」
「おい、聞いたか？　近々劉封様はこの樊城の太守になってくれるんだと」
「本当かそれは！？　なら安心だな！！　劉泌様も善政をしてくれているけど、劉封様はもっと凄いらしいからな」
「劉封様、ばんざーーい！！」

「……え、本当に何これ？」

町に出ると咲夜を称えたり、拝んだり、咲夜に差し入れを渡そうとする人が後を絶たないのである

流石にそれが毎日のように続くので咲夜はその理由を劉泌に聞いてみることにした

「…叔父さん、これはどういうことなんですか？」
「ん、お前は自分の噂のことも理解してないのか？」
「？　噂って…確か俺が何故か【深紅の鎧を着た正義の使者】って呼ばれていることですか？」
「ああ、それにお前は知らないだろうが、お前が通過した町は必ず何か幸福をもたらすともいわれているんだよ」
「……はい？」
「つまりだ、劉封。今までお前が通過してきた道に会った城や村などで必ずと言っていいほど良いことが起こったそうだ。例えば、飢饉が起こりかけた村ではお前がその人たちを救った後、不作が嘘のように豊作になったとか」
「…（あ～、それって俺が手を出したこの世界にとって真新しい農作物の育成法とか後は地形を見てお金になりそうな産業とかを教えて飢饉が起こっても大丈夫なように手助けしたり、それとなく俺が稼いでたお金の半分を置いておいたのが原因かなぁ…）」

「他にも病に苦しむ人達が多く居た村にお前が訪れてからはそれが嘘のように治ったとか」
「…（まあそれは昔読んだ病原体の本に乗ってた症状と一致したからまさかと思って教えたらビンゴだったって言う話なんだけど…）」
「そんなわけでその噂が至る所に広がってな。だから皆、お前が太守になればより安心して生活が出来ると思ったのだろうな。だから殆どの者はお前に太守になって欲しいと言っているんだよ」
「…で、でも反対意見もあるんでしょう？」
「うむ…じゃがそれも時間の問題だろうな」
「へ？」
「未だに反対意見を持っている者は皆、賛成派に説得されているからそろそろ…」

バンッ！！

「も、申し上げます！！　先程、最後まで渋っていた最後の反対者が賛成派に入るという連絡が！！」
「ふむ…というわけじゃ」
「……もう好きにしてください」

これによって咲夜は樊城太守になることになった

第三話

霊帝からの使者が来てから数日後…
襄陽も一段落した為、咲夜は護衛に焔耶と洛陽には言ったことのないという雛里を連れて洛陽に向かうことになった
その間、襄陽は紫苑、燐花、風に。
樊城は劉泌、秋葉、そして新たに入ってきて頭角を見せ始めた姜維や諸葛瑾らに任せた

「それにしても…霊帝様は何の用があって咲夜様を呼んだんだろうな…前回って何の為でしたっけ？」
「…劉弁様、劉協様に世の中のことを教えてやって欲しいと頼まれたから俺の知っていることを話したんだよ。でも霊帝様自身と劉弁様に聞かせることは出来なかったがな」
「？　どうしてですか？」
「十常侍。主に張譲。霊帝様には無駄な知識を付けて欲しくないみたいだな。自身の操り人形にしておきたいんだろうな。そして劉弁様はハッキリ言うと劉協様よりも物覚えは良い方じゃない。つまり…」
「…第二の霊帝様を作るため…ですか」
「そういうこと。加えて言うのなら劉弁様は元々正式な皇族の者同士の交際ではなく、現大将軍の妹との間に生まれた子だ。その為、今朝廷では劉弁様派と劉協様派とで対立が日に日に激しくなっているそうだ。だからこそ世は乱れているんだよな」

そう言い終えると焔耶も雛里も何も言わなくなってしまった
少しは知っていた程度であった、現漢王朝の腐敗気味を生で聞いたのだから仕方のないことなのだろうが…

「…これから……この国はどうなっていくんでしょうか？」

雛里が恐る恐る咲夜に尋ねた
だがその目は何か悟ったような…そんな気配を漂わせていた

「…十中八九、朝廷の混乱に乗じて大反乱がおこる。現にその徴候が今起こり始めている。ここ最近、冀州、揚州、荊州、徐州、豫州などを中心に中規模な暴動が起こっている。それも一度や二度でなく幾度もそれだけのことが起こっている。これはもうただの暴動じゃないだろうな」

咲夜が知っているこの時代の知識、その中で後漢の衰退の中起こる大反乱、それは黄巾の乱だ
１８４年（中平１年）、太平道の教祖張角を筆頭とし、その弟張梁と張宝らが主犯者となった大規模な農民反乱である
「蒼天已死　黄天（夫）當（当）立　歳在甲子　天下大吉」というキャッチフレーズはかなり有名だろう
だがこれと全く同じことが起こるとは限らないだろう
この世界は咲夜の知識とは少しかけ離れている部分がある
だからこそ咲夜は今まであらゆる可能性を想定して様々な事に対処

できるように準備はしていた

洛陽に着くとまずは謁見の間に案内された
霊帝とその後ろには張穣率いる十常侍の姿が…

ここに呼び出された理由は最近起こっている反乱を鎮めるために軍をだして欲しいという要請だった
それについて咲夜は疑問に思うことがあった
この洛陽は現在、董卓や何進大将軍らを筆頭にそれなりに名を連ねた将軍が居るはずなのだ
そのはずなのに態々咲夜に出兵要請
加えて董卓や賈駆は勿論のこと、他の重臣が全く姿を見せていない
今ここに居るのは非戦闘員であり、私腹を肥やしている駄宦官だけだった
それを見て何となく分かったことがあった
つまりは戦力不足になってきたのだろう

相手は数で勝る元農民の反乱軍
今はまだ指導者が出ていない様だから数の暴力のみみたいだが…
その反面、朝廷は現在最低限の軍しか保有することが出来ていない
つまりは多くの兵を雇えるだけの金がないのだろう
だから過去の威光を利用して諸国の太守達にこうやって無理に従わせているのだろう
もし、これに従わなかったら朝敵とされるからな…

「…（断れんな流石に…ハァ、仕方ない。皆に伝えた後、領民の皆

にも伝えておくか）」

咲夜は渋々その要請を承諾し、その後劉協の元に案内された

また霊帝と劉弁に会うことが出来なかったのだが…

案内された部屋には董卓、賈駆、華雄、呂布、陳宮、そしてまだ会ったことのない女性と劉協が居た

「よ、久しぶり」
「あ、咲夜さん」
「咲夜、手紙読んで来てくれたのね」
「ん、まあな」
「……咲夜、おなかすいた」
「れ、恋殿～。いきなりそれはないと思いますですよ？」
「ふははは！　仕方ないだろう、咲夜の作る食事は美味いのだからな！！」
「へぇ、ってことはこいつが劉封かいな」
「…えっと、貴方は？」
「自己紹介が遅れたなぁ。うちは性を張、名を遼、字を文遠や。よろしゅう」
「ああ、こちらこそ（…何で関西弁？？？）」
「咲夜、久しぶりなのじゃ！！」

「劉協様こそ、お久しぶりです」
「むぅ〜〜、咲夜。ここには月達以外は誰もおらん。真名で呼んでたも」
「…はい、承知しました。聖様」

「うむ、でじゃ！！　早速咲夜の作る珍しいものを食したいのじゃ！」
「ふふ、承知しました。月ちゃん達はどうする？」
「へぅ、では頂いてもよろしいですか？」
「そうね…丁度お昼時だし、ボクも貰うわ」
「何や？　劉封が作るんか？」
「ああ、霞は知らないのだったな。咲夜が作る料理は絶品なのだ！」
「はいなのです！！　咲夜殿が作ったあの甘〜いお菓子は最高なのです！！」
「ほぅ、それは楽しみやな！！」
「……いっぱいたべる」
「…あ、あはは…まあ期待にこたえられる様にするよ」

「ん、そう言えばさっきからあんたの後ろに居るの…焔耶は分かるけど、もう一人は初めて見るわね」
「あ、紹介が遅れたね。この子は先日、うちの軍師であり文官でもある鳳士元だよ」
「は、初めまして！！　ほ、ほうし、ほうしげんでしゅ！！？　（がりっ）〜〜〜〜〜っ！！」
「あ〜、雛里。あんまり緊張しないの。後口の中見せてみなさい、舌噛んだんでしょ？」

この数日で雛里への対処も慣れた咲夜だった

その後、咲夜はとりあえず簡単に作れるお菓子を作ってあげた
というよりも前もって少しだけ用意はしていたのだ
以前来た時、恋が無茶苦茶食って咲夜はその食すスピードに追い付くほどの速さで恋が満足するまで手を止めなかったのである
あの時のことを思い返すだけで腕が痛くなる思いがする咲夜だった

その後はいつもと同じように劉協に洛陽外のことや自分が経験してきた旅の体験談を話したりした
この大陸の外のことには月達も興味を持ったようで皆真剣に聞き入っていた

だがそんな楽しい空気も劉協のある一言で分散してしまった

「のう…咲夜」
「はい、どうかなさいましたか聖様」
「…主は漢王朝がこれからどうなっていくと思う？」
「……それはどういう意味でしょうか」

「誤魔化さんでもよい。分かっておるのじゃ、もうこの漢は長くはないということが…」
「っ…！！」
「…父様と弁兄様に意図的に会わせなかったり、十常侍が裏で色々とやってるのは聞いてる」
「…誰から？」
「何進大将軍」
「っ！？　何であいつが…」

ハッキリ言うと何進にとって劉協という存在は邪魔なだけな存在である
何故なら何進は劉弁を時期皇帝の座に押し上げて自身の立場を更に強くしたいという野心を抱いているためである
なお、この考えは現大后である何進の妹も贅沢な生活を手放したくない一心で何進に賛同しているそうだ
つまり、劉協にそういった裏の事情を話すのは何進にとってデメリットしかないともいえるのである

だが咲夜や詠、音々音、雛里などの有能な軍師はその思惑を見抜いていた

「…成程、何進ってただの小心者ってわけじゃないのね」
「いや、多分あの鶏野郎には多分助言者がいるんだろうな。じゃなきゃこんな先を見通したこと出来ないぞ」
「それについてはねねも同意するのです。でも一体誰が…」
「…何進さんが更に堅固な権力を持つことによって利を得ることが

出来る人物…それだけでもかなり多くの人がいます。絞り込むには情報が足りないかと」

「？　どういうことや？」

「…簡単に説明すると何進は誰かに助言されている」

「いい？　霊帝様の体は正直言ってかなり悪くなっているわ。つまりもう先が殆どない。そんな中、何進や張穣みたいな連中はどうにか今以上の権力を得ようとするわ」

「でも今は劉弁様と聖様という二人の次期帝候補がいるのですよ。だから、権力を得るには取捨選択を強いられるのです。つまり、どちらかしか選べないのです」

「ですが何進さんにはその選択肢という選択肢を撤廃する方法も有ります。例えば、劉弁様が次の皇帝の座についたとします。そうなると何進さんは自然と強大な権力を得ることが出来ます。逆に聖様が皇帝の座についたとします。その場合、何進さんは今と殆ど変らない権力しか得られません。そればかりか場合によってはその権力を失う恐れさえあります。ですが、もし聖様がその座に就く前に何進さんに絶大な信頼を託した、もしくは何進さん以外信用することが出来ない状況になる。そうなってしまえば話は違ってきます」

「…つまり、何進は今、どちらが皇帝になっても自身に利が来るように動いているってわけ」

それだけ話すと皆ようやく納得してくれたようだった

「確かにそれなら納得がいくわな」
「ああ、あの何進にそんな考えが出来るとは考えにくい」
「普段は愛人と閨に居るだけのぐうたらな奴だからな」
「…それにしても…一体誰が……」
「…詠ちゃん、もしかしたら李儒さんかな？」
「…その可能性も大きいけど……ハッキリそうだとは言えないわ」
「なら王允の可能性もあるのですよ」
「……王允？」
「恋、王允には何度も会っているであろうに。あの何を考えているのか分からない爺のことじゃよ」
「……あ」

だがここで考えても何も分からないという結論に至ったので皆はとりあえず現状の打開策を考えることしか出来なかった

「…とりあえず咲夜がここに呼ばれたのはここ最近頻繁に起こっている反乱を鎮めるために軍を出せという勅を受けるためだったのね」
「そういうことだよ詠。まさか俺の所までそんな命令が下るなんて思ってもみなかったけどさ」
「…拙いわね、そうなると月やボクは勿論、ねねや恋、華雄や霞もこの洛陽に来るのは出来ないわ。それに咲夜だってこの件で益々洛陽に来れなくなるだろうし…」
「洛陽には混乱の種を作る人しか残らなくなるってわけか…確かにそれは拙い……乱がなくなった後、一気に崩壊が加速する恐れがあるな」

「うう〜〜…どうすればいいのですか……このままだと」

皆頭を抱えて悩むしかなかった
これと言ってよい案が浮かばないのである

「うううぅ〜〜〜、咲夜！！　何でこんな時にいい考えが浮かばないのですか！！」
「いや、俺のせい！？」
「ねね、やつあたりは良くないで」
「確かにそうね…でも誰かいい考えはないの？　貴方はどう、鳳統」
「う、う〜ん…私は皆さんと違ってここは初めてですし…何より情報が足りません」
「…確かにそれはねぇ」
「せめて誰か一人でも絞り込めれば……」
「……同士討ち」
「「「「「……は？？」」」」」

恋は静かに言った
――同士討ち
っと

それを聞いて咲夜、詠、雛里、音々音の四人は頭の中の種がパリーンと割れるようにアイディアが閃いた

「恋、それはいい考えだ！！」
「そうね…確かにその手は今までちょっとリスクが大きかったけど、今は朝廷も頻度の多過ぎる反乱でドタバタしてる」
「時期的には丁度いいのですよ！！」
「あわわ、なら直ぐに考案した方がいいと思います」
「そうだな！！　よし、幸いここには誰の目もないようだし静かに討論を…」

「ちょ、待ってな！！」
「そちらだけで勝手に話を進めるんじゃない！！」
「咲夜様、教えてもらえますか？　どうにも私だと分からない部分が多いのですが…」
「へぅ～、詠ちゃん～。教えて～～」
「妾を空気にするとは…」

どんどんと話を進めていく四人に流石に空気となっていたメンバーが総ツッコミした

「ああ、ごめん月。ついこっちに夢中になっちゃって」
「も、申し訳ありません、聖様！！　良き策が思いついたので…つい」
「その策とやら、妾にも教えてたも」
「…これから話すことは他言は駄目でございますよ？」
「無論じゃ」
「じゃあ、分かっていない焔耶達にも教えようか、雛里、詠、ねね」

「そうですね、これは味方が多い方がいいのですよ」
「そうね、後恋には後で何かお礼をしないと…」
「……？」

自分の手柄に気付かないでいる恋だった

「じゃあ雛里から説明を頼むよ」
「は、はひぃ。　で、では説明しまちゅ…あううぅ／／／」
「ゆっくりでいいからね」
「はい…え、えっとまず先程呂布さんが言った同士討ちという言葉…そこから導き出された答えは宮中に居る不正を行っている人たちを互いに疑心暗鬼に陥らせるというものです」
「…成程なぁ、ちょっとえぐいなぁそれは」
「へぅ…詠ちゃん、それ本当にやるの？」
「仕方ないでしょ？　これしか今のところ思いつかないし」
「それに対象は今まで好き放題やってきた連中のみなのですよ。自業自得というやつなのです」
「じゃが効率的なのは確かじゃろうて」

ここまでの説明で理解出来たのは聖、月、霞の三人だ

残る焔耶と華雄は…

「「？？？？？」」

ちょっと分からないようだった

「ハァ…焔耶、華雄。簡単に説明するとこの策は相手を互いに潰しあうように仕向けると同時にその際に何進に助言している輩を絞り込むことが目的なの」

「おお、そういうことか！！」

「？　だけど咲夜様、潰し合いを促進させるのは分かりましたけど…どうやって何進の助言者を絞り込むんですか？」

「…見張りを立てるよ、勿論うちの自慢の密偵を使ってね」

「…ああ成程ね」

「確かにあの人だったらそれは可能ですね」

「？　誰のこと？」

「それは秘密、何故ならそいつのことを知っているのはうちの軍のごく僅かな人だけだから」

「…信用できる？」

「出来る」

「ならそっちは任せるわ」

こうして裏で動き始めた咲夜達

果たしてその結果が何を引き起こすのか…
それはまだ誰にも分からない

それから必要な処理を終えた咲夜は直ぐに洛陽から樊城へと戻っていった
その際に、またしつこい勧誘などがあったことは言うまでもないだろう…

そのせいで表面上では普通に振る舞っていた咲夜も心中ではかなり苛々していた
付き合いの長い焔耶はその為かなり脅えていたのだが、会ってまだ日の浅い雛里は何だかよく分からないという顔をしていた

道中、雛里は不思議に思って焔耶にその理由を聞いてみた

「焔耶さん、どうしてそんなに震えて？」
「あ、ああ…咲夜様、雛里にはどう見える？」
「え？　えと…凄く笑顔でいるだけに見えますけど？？？」
「雛里には分からないだろけど…あれは咲夜様が本気で怒っている時の顔なんだよ」

「え！？」
「ああ…思い出すだけでも震えが止まらないよ……あれは雛里が来る前のことだった」

焔耶が語ったのは仕官してから少しした後、砦に立て篭もる盗賊団を討伐しに行くという聞くだけならそれほど難しくなさそうな仕事だった
それに赴いたのは咲夜と焔耶、そして５００の兵だった

敵は３０００、だがそこは咲夜の用いた策によって咲夜達は殆ど被害を出さずに賊を追い詰めることが出来た
だがその際に、砦に籠っていた賊の頭が捕えていたであろう小さな女の子を人質にして軍を引けと言ってきた
その瞬間、咲夜の顔が一変した

それまで真面目で引き締まった顔が笑顔になったのだ
ただ、その笑顔の裏には何故か鬼のような顔が見えたとか…

更に異常な位に低い声を出して、盗賊達を脅えさせ、その隙に咲夜は弓を引いて矢をその盗賊の頭の額のど真ん中に直撃させ、絶命させた
それと同時に焔耶達に突撃命令を下し、自身は先程まで囚われていた少女をすぐさま救出に向かい、その戦いは終わりを告げた

それから、兵士たちの間では咲夜を決して怒らせてはならないという暗黙の決まりが出来たのだ

「そ、そんなことがあったんですか？」
「…しかも帰ってからも暫くの間、咲夜様の機嫌が物凄く悪くて居るだけで殺気を振りまいてたから…（ぶるぶる）」
「焔耶さん！？　だ、大丈夫ですか！！？」
「…ああ、悪い。ただもうあの雰囲気は味わいたくない……」
「……因みにどうやってそれは止まったんですか？」
「…璃々がそこに来て咲夜様と遊んでもらう約束をしてからだ」
「…へ？」
「そしたら咲夜様の殺気が嘘みたいに消え去って顔も普段の物に治ったんだ」
「…璃々ちゃんが治したんですか？」
「というよりも咲夜様は苛々した時子供と接してそれを発散させてるんだってさ」
「……」

意外な咲夜の一面を知った雛里だった

樊城に帰ってきた咲夜達はすぐさま会議室に向かった
事前に襄陽に使者を送り、紫苑達には既に樊城に来てもらうように指示しておいたのだ
会議内容は勿論のこと、出兵のことである

それを聞くとその場に居た皆が咲夜を労わる様な目で見始めた
その時の咲夜がストレスを抑えながら、あたかも冷静であるかのように話している光景が目に浮かんだのだろう

「さて、皆は出兵に関して何か言いたいことはあるか？」
「とりあえずどこに行く予定なんですか？」
「…まあ予定だとまず汝南、その次が江夏。その後は情報次第かな。この二つは俺達の領地の近辺で最も賊の被害が酷い場所なんだ」
「汝南って…確か袁紹の従妹の袁術の治める領地の近くじゃ…」
「……だから正直行きたくはないんだ。でも北は月…董卓や賈駆達の担当になったし…南東は長沙があるから紅蓮達がいるし、南と西は問題外、必然的に行けるのは東と北東だけになるんだよ」
「？　咲夜様、南は南郡が劉表の領地だからだというのが理由だというのは分かりますけど…どうして西まで？？」
「…焔耶、西には主にどの城がある？」
「え、えとぉ…」

「…焔耶さん、ここから西にある城は上庸が一番近くです」
「あ、そ、そうか！！　ありがとうな、雛里」
「い、いえ…どういたいまして…」
「そこは現在、有能な太守が治めているという情報が入っているし…何より西は比較的賊の被害は少ない。その理由は分かる、秋葉」
「うえっ！？　お、俺か……えっと……Σ　ああ、そういうことか。西には益州、もしくは漢中しかないからか」
「そういうこと、あの地は険しい山が多いし、正確な地図でも持っていないと進軍はかなり難しい。賊にとっても進み難い道だから、わざわざそっちを選んだりはしないだろうからな」
「成程…」

皆これで納得してくれたようだ

「さて、ではこれより部隊編制及び、俺のいない間に樊城、及び襄陽を守る将を言い渡す。心して聞くように」

「まず俺と共に出兵する武将は魏延将軍と太史慈将軍」
「しっ！！」←ガッツポーズ
「俺も出陣か…」

「次に軍師に程？、副軍師に鳳統」
「あわわ、わ、私ですか／／／」
「…ふぅむ、初めての軍の采配となるわけですか～」

「次に襄陽で内政を行いつつ、劉表軍を警戒する将、黄忠、徐晃将軍。そして軍師に徐庶、副軍師に荀攸」
「あら。では咲夜様のご期待にこたえられる様にしなければなりませんね」
「ふわわ…お留守番ですかぁ」
「ふふふ、任せておきなさい。私がいるからには劉表軍なんてこっちに近寄れなくなる位にしてやるんだから」

「燐花、程ほどにね？　コホン、次に樊城の太守を再び劉泌にお願いしたいのだが…よろしいですか？」
「ハッ！！　大役、この劉泌がしかと承りました！！」
「その補佐として姜維、諸葛瑾、董允、馬良、劉曄などを残しておきます。何かあれば相談して下さい」
「「「「はっ！！！！」」」」

「次に…」

こうして咲夜は次々と役職と仕事内容を告げていった

「最後に兵士達ですが…まず劉表軍との最前線になっている襄陽には一軍と五軍を配置。樊城には二軍と新兵達を。遊軍として四軍を配置しておきます。俺と一緒に行くのは三軍とまだ配置の決まっていない訓練を終えたばかりの人たちです」
「すべてにおいて優れている一軍と守りに特化した五軍…移動力のある四軍を遊軍として配置し、何かあれば臨機応変に対応できるようにして念のため二軍の兵士たちに樊城に待機させつつ、新兵達を鍛える。それは確かにかなり良い配置だと思われます。ですが…」
「咲夜様、よろしいのですか？」
「？　何が？」
「いえ…共にするのが三軍と訓練を終えたばかりの者のみで…」
「大丈夫だよ、皆あれだけの訓練をやり遂げた人たちばかりだし…それに何があっても対応できる三軍の人たちなら色々と応用が利くしね」
「…咲夜様がそれでもいいというのなら止めませんが」

そしてそれから数日後…

「じゃあ、紫苑に燐花、それに麻理。襄陽の留守は頼んだよ」
咲夜は先日言った通り、風、雛里、秋葉、焔耶と三軍の兵士３０００と無所属の兵士２０００、計５００００の兵士を連れて出陣することになった

「咲夜様、お気をつけて」

「こっちのことは気にしないで、怪我とかしない様にして帰ってきてくださいね？」
「あ、それから他の討伐軍と会ったらちゃんと挨拶しておいてよ？」
「…三人は俺の母さんか？　そんなに言われなくとも大丈夫だよ」

何となく締まらない出発となったのだが、士気は皆高いようだった特に…

「うおおおおーーーーっ！！！！　燃えるぜぇーーーーー！！！！」
「おお、やる気だな秋葉！！　よぅし！！　私もやってやるぜぇーーーー！！！！」

…テンション上がり過ぎて若干キャラが変わっている将が二人いたのだが…

「…ハァ」
「あわわ…さ、咲夜様」
「…ぐぅ～～～…」

こんなんで本当に大丈夫だろうか…
咲夜は不安に思うしかなかった

第四話（前書き）

少しだけアンチ劉備が入ってるような気がします
嫌いではないんですけどね

第四話

不本意な出兵となってしまったが、兵は皆咲夜が事前に理由を説明して、どこに出兵するのか大まかな予定は話していたので納得してくれた
その後の咲夜の軍の進軍は好調だった
初戦は賊徒１００００が籠るとある砦だった
まず咲夜は降伏するのなら命はとらない
だがこちらに攻撃を仕掛けるつもりであるのなら容赦は一切しないという矢文を敵に送り付けた
その後に咲夜は護衛に秋葉を連れて手紙と同じ内容のことをその砦の前に行き、直接言いに行った
勿論、その際に策を練っていたが

その時は交渉は決裂し、賊は咲夜が大将だと知ると我先にとばかりに門を開いて攻めてきた

その為、咲夜は説得を諦め殲滅行動に移ることにした

まず咲夜と秋葉は逃げるように撤退した
それを調子に乗って追いかけてくる賊
だが少しした後、開いた道に入ると急に咲夜と秋葉は敵に向かって反転し、同時に賊に矢の嵐が吹き荒れた
雛里の率いる弓を持った兵士１０００が待ち構えていたのだ
そしてその背後には焔耶の率いる兵２０００が混乱する賊に攻め入った

それと同時に待機していた風の率いる兵２０００が側面から賊を突いた
また先程まで弓を射ていた１０００の兵士も剣を持ち、咲夜と秋葉と共に突撃した

こうして初戦の戦いは終わりを告げた
ほんの少し怪我人は出たが、それも大したものではなかったため、初戦は大勝と言っても良いほどだった

降伏した賊は約３０００
咲夜はどうしてこんなことをしていたのか一人一人聞いてみることにした
するとやはりというか…大抵の者は食べるものを大方領主に絞り取られ、普通に生きることすらできなくされてしまったとか…
後は漢王朝に対する報復だとか…そういった人ばかりだった

咲夜はそれを聞くと静かに諭した

「…なあ、食べる物に困って賊になったのならうちの領地に来ないか？」
「え…」
「うちの領地には元盗賊だった人たちもいるんだよ。勿論、矯正のためにちょっとしたことも学んでもらうけど、それが終わった人たちは皆、今ではちゃんと一人一人仕事を持ってしっかりとした生活を送っているんだよ」
「…そ、それは俺たちにも生きることが出来るようになるってのか！？」
「勿論、ちゃんと一日三食食べられるし、仕事もあるし、娯楽もあ

る。それに俺の所ではちゃんと領民の生活を保障する法を作っているからね」
「…信じて…いいのか？」
「うん、それはそっちの好きにして」

それから賊の人たちは皆、咲夜の領地に行きたいということになり、必要な荷物を纏めてもらい、その後にそれなりに近くにある襄陽の方に三軍の兵数人を道案内役として任せて連れていってもらうことにした

こんなことを続け、咲夜の軍は連戦連勝
降伏した賊の殆ども咲夜の元で保護下に置かれることとなり、その賊の数も約２００００を超えていた

「ふぅ…これで何回賊と戦ったっけ？」
「えっと…多分、１３回目だな」
「ならもう良いか、これで命令も果たしたことになるだろう。朝廷は出兵しろといっただけで賊を滅ぼせなんて言っていなかったしな」
「でもいいんですか？　報告によると、今までとは異なる規模の賊が暴れ回っていると聞きますよ～」
「み、皆頭に黄色い頭巾を被っていることから朝廷は黄巾党と名付けたそうです。その黄巾党の被害もどんどん広がっているそうです」
「だからこそ、今は領内の守りを固めるべきだろう？　それにこれ

以上、朝廷の身勝手な命令に兵士達を戦わせたくないしな」
「う～ん…なら後二月、進軍しませんか？　今は黄巾党の活動が活発化する時期です。そんな時に私達だけが領内に戻ったら朝廷に何か理不尽な事を言われかねません」
「あ～、それは風も賛成ですね～。とにかく今は襄陽、樊城のことは劉泌様や紫苑さん達に任せて風たちは進むしかないと思います～」
「…ふぅ、仕方ないか。ならその胸を兵士たちに伝えておかないとね」

それから再び、戦いを目的とした進軍が始まった
その最中、幾人もの兵が死んでいった
咲夜は戦いが終わる度に死んでいった者達のために簡単だが、葬式を執り行い、それを記録に残すと死者達を火葬して遺骨を骨壷に入れていった
この時代、本来なら土葬なのだが咲夜はそれをせずに火葬して骨を遺族に送り届けることにしていた
死んでいった者達のことを忘れない為に…咲夜は絶対にその記録を…死者達の顔を…忘れない

それらが終わると咲夜は一人、誰の目もない所で泣いていた
人の上に立つ者なら弱い所を見せないようにしなければならない…
それ故に咲夜は人前で泣くようなことはしないのだ

無論、大半の将兵たちはこのことを黙認しているため、何も言わずにただその咲夜の後姿を見て、咲夜の助けになろうとするだけだった

進軍を再開してから三日たったある日のこと…周りを偵察していた一人が慌てて咲夜の元に戻ってきた

「も、申し上げます！！　この先に官軍が黄巾党と戦っているようです」
「旗は？」
「劉と曹の旗、他にも関、張、夏候等の旗も有りました！！」
「……（何だろう、それを聞くと物凄く嫌な予感がするんだけど……）華琳さんと…後もう一人軍を率いている人がいる…か」
「あら～、どうしますか、お兄さん」
「…華琳さんの性格のこととか今の状況を想定して考えると…会っておいた方がいいかもね」
「わ、私もそう思いましゅ…あうぅ／／／」

一応、念には念を入れて共を秋葉と雛里に頼み、その間、軍のことを焔耶と風に指揮してもらうことにした
これでもし賊の奇襲があったとしても直ぐに対処できるように前もって準備している上に、有能な将と軍師のいる状態なので、咲夜がいなくても大丈夫なのだ

事前に華琳の元に使者を送っておき、返事を貰った後に咲夜は雛里と秋葉を連れて曹の旗印のある陣に入っていった

陣に入った後、咲夜は華琳のいる場所に案内され、その手前で秋葉と雛里は待機ということになった

「久しいわね、こうして直接あなたと会うのは」
「と言ってもそれほど久しいわけではないでしょうに」
「ふふ、それにしてもまさかあなたまで出兵することになっているなんてね。それを聞いた時は驚いたわ」
「…まあ勅だったのでね」
「そう…それで貴方はどれくらいの兵を連れているの？」
「とりあえず５０００だった。まあ戦っていくうちに何名か死んでいったけどね…」
「…そんな少ない兵数でよくここまで戦って来れたわね」
「こっちは数よりも質と軍略で勝ってきたようなものだからね」
「捕虜は？」
「もう樊城と襄陽に護送済み。矯正を受けた後に軍に所属するか町で働くか、町の外で働くかを決めてもらう予定」
「…相も変わらず風変わりな方針ね。普通元賊の輩をそうやって直ぐに職につかせたりはさせないと思うのだけど…」
「え？　だって賊となった人たちの大半は生活に困って仕方なく、生きるためになるしかなかったのが理由だからね。そのことを考えると…ね」
「…やっぱり甘いわね、貴方」
「あはは、それは自分でも自覚してるよ。でも俺は俺のやりたいようにやる。ってそれは前も言ったね」

「ふふ、ええそうね。でも残念ね、貴方ほどの有能な人ならどんなことをしてでも引き入れたくなるわね」
「あはは、俺よりも優秀な人なんか華琳さんの元に一杯いるでしょうに」
「それがそういうわけでもないのよ…秋蘭に春蘭、それに貴方には後で紹介するつもりだけど…桂花と新しく入ってくれた凪、真桜、沙和、稟、流流に季衣。他は私の親戚とか桂花には劣るけどそれなりに仕える武官と文官が少しって感じで時折手が回らなくなるのよ」
「…まあその気持ちは良く分かりますが…華琳さんの領地は今陳留だけですよね？」
「他にもチラチラと治めている領地も出来たから咲夜と会った時よりは領地は増えているわ。だからそれに伴って人手がどんどん必要になってきてるってわけよ」
「…その気持ちは良く分かります」

それから少し雑談した後、咲夜は気になっていたことを聞いてみることにした

「そう言えば華琳さん、さっき劉の旗が見えたんですけど…あれって華琳さんの軍じゃないですよね？　どこの軍なんですか？」
「ああ、あれね。偶然義勇軍の一部隊と出会ったのだけれどちょっと気になったから軍を共にしているのよ」
「……（あれ、何か俺の中の第六感と脳髄と魂が雄たけびをあげながら警告しまくってるような感じがするんだけど…）…一応聞きますけど…その軍を率いてるのって…」
「ああ、それは…」

――――――劉備玄徳よ

・・・・・・

一瞬、咲夜の周りだけの空気が凍りつき…

「（ぎゃあああああああああああああああーーーーーーーーーーーーーーーっ！！！！）」

咲夜は心の中で驚愕の雄たけびを上げ…

「（○△○）」

暫く開いた口が塞がらず、茫然としていた

「ちょ、ちょっと？　大丈夫、咲夜？」
「Σ　あ、ああ…わ、悪い。ちょっと疲れてるみたいで…えっと、もう一度言ってくれないかな？」
「え、だから劉備玄徳だって」
「……ＯＴＺ」
「え！？　本当にどうしたの！？」

咲夜は失念していた
昔読んだ書物には曹孟徳は黄巾党制圧の戦いの際に劉玄徳との会合の時を得ていたことを…

「…（って言うかタイミング悪過ぎだろ、俺！？　何で会いたくない人物に……いや待てよ…そうだ！！　このまま何事もなく帰れば…）」

だが運命は余程咲夜のことを嫌っていたのだろう…

咲夜にとってこの世界の人生で最も逢いたくない人物は・…

「あの～曹操さん」

空気を読まずに…

「あらどうかしたの、劉備」

「え〝…」

「えっと…実は先日お話した兵糧についての相談なんですけど…ってあれ？　誰ですか？」

咲夜の前に姿を現した

「ああ、前に話したでしょ？　貴方と似ているようで全く違う理念の元に軍を持つ奴がいるって」
「え、じゃあこの人がその劉封さんなんですか？」
「そうよ…って咲夜、貴方はどうして逃げようとしているのかしら？」
「（ギクッ）　い、いえ…俺が関わったらいけないような話のようだったので空気を読んで出ていこうとしただけですよ」
「いえ、構わないわよ。何なら貴方も一緒に進軍しない？　その方が効率が良いでしょ？」
「出来ればそれは断りたいですね。俺達はもうあまり戦わない予定だったので」
「あら、どうして？」
「もう合計で２０戦はこなしているのでこれで直に従う義理は果たしたと思っているからですよ。そもそも今回の出陣は乗り気じゃなかったので」
「ふぅ、まあ確かに貴方は半強制的に出兵させられたものだしね」
「あ、あの～どういうことなんですか？」
「ああ、咲夜は元々出陣なんかする気はなかったってことよ」
「え、ええ？！　ど、どうしてですか！？」
「理由は簡単。えっと、劉備さんで良いんだよね？」
「あ、はい」
「樊城、襄陽の話は聞いたことあるかな？」
「えっと……あれ？」
「…知らないの、貴方は。どこの領主ももう誰でも知っていることよ？」
「い、いえ！！　し、知ってはいるんですけど…わ、忘れちゃって…」

「ハァ…仕方ないわね。樊城・襄陽の太守、劉封。字の無い、珍しい人物だが仁君として謳われ、自身からは決して他の領地を攻めることのない変わり者。だけど、自分の領土を侵された場合、一変して攻めに転じ、攻めてきた軍の領地を掠め取ってしまう。決して手を出してはならないというのが売りの変わり者よ」
「…華琳さん、どうして変わり者を二回も繰り返したんですか？」
「大事な事だからよ」
「……」
「まあそんなことは置いておくとして…ともかく、咲夜はこちらから手を出さない限り絶対に戦ったりはしないってことで有名なの」
「そ、そんな人がどうして…」
「咲夜は朝廷で官職を与えられたの。現漢王朝皇帝、霊帝に気にいられてね。で、そのせいで今回、こうして出兵することになったのよ」
「ハァ…まあそういうこと」
「…何だか大変なんですね」
「まあそんなことはもう良いから。それよりも二人はどうしてこの地に？」
「劉備とは偶然、先の戦の終息の際に出会ってね。ちょっと興味が湧いたのよ」
「…ああ、そういうことね」
「で、劉備達は兵糧が足りないということであげる代わりに一緒に戦って貰ってるってわけ」
「あうううぅ…」
「ふむ、成程。でもそこまで聞いても劉備さんに利はあっても華琳さんには全く利がないように思えますが？」
「そんなことないわよ。私にだって利はあるからこうして受け入れたのよ」
「……ああ、そういうことね」
「ふむ、それを聞いて私の考えを悟ったか…流石は劉封といったと

ころかしら？」
「そんなことありませんよ。華琳さんのことを知っている人なら大抵の人が察することが出来ると思いますよ」
「過ぎた謙遜は良くないと思うわ」
「そんなつもりはないんですけどね」
「ふふふ…」「あはは…」

「？？？？？」

「それで？　そんなことを話して華琳さんは俺に何を望む？」
「だから言ったでしょ？　貴方も私達に少しの間、加わって欲しいのよ」
「…ハァ、それはうちの軍の技術を得たいからですか？　それともうちの軍師や将の実力を測りたいからですか？　それとも単なる好奇心ですか？」
「全部よ」
「……そこまで正直に言われると断るに断りきれないのだが…ハァ、仕方ない。なら少しうちの軍師や将と相談しても良いですか？　これを俺一人で決めるのは流石に無責任なので」
「まあ良いわよ。待っているわ」

咲夜は直ぐに陣から出ようとしたのだが…

「あ、あの！！」

劉備に呼びとめられた

「…何ですか？（おいいいいぃ！！！　何で話しかけてくるんだよ！！！）」

「少し…劉封さんと御話がしたくて…その…そ、それに私の所で軍師をしてくれている朱里ちゃんが劉封さんの所で軍師をしている鳳統ちゃんに会いたいとも言っていたので！！　そ、その…良いですか？」

「……ええ、まあ良いですよ（くそぅ…そんな上目遣いで言わないでくれ！！　断るに断れんだろうに！！）」

こうして咲夜の陣に劉備達が訪れるという

咲夜にとってこの世界の人生で最も不幸なイベントが舞い降りることになった

それから自身の陣に戻る最中にそのことを雛里と秋葉に話し、それを聞くと雛里は凄く喜んだ顔をした

だが、秋葉は少し考える様な顔をしていた

陣に戻り、風と焔耶の居場所を見張りをしていた兵の一人に聞き、その場所に行くと…

「では焔耶ちゃん。この模型を使って８種の陣形を作りあげてください」
「う、う～ん…こ、これが魚鱗？」
「…それは鶴翼の陣です。では次です」
「え、えっとこれが長蛇の陣？」
「…ふぅ、それは鋒矢の陣です。焔耶ちゃん、ちゃんと復習してませんね～」
「ウグッ…」

どうやら暇な時間を使って焔耶に風が陣構成を教えているようだ
それにしても…

「ぷぷっ…焔耶、お前そんなことも分かんないのか」
「な！？　あ、秋葉！？！　それに咲夜様に雛里も…っ！！」
「おや、お兄さん。いつ戻ってきたんですか？」
「ついさっきだよ。それにしても焔耶…ちゃんと予習復習はしようって約束したよね？」
「ううぅ…」

「ぷぷ…っ」
「く、秋葉！！！　貴様ぁ！！！」
「はいはい、そこまで。秋葉も挑発しないの。なら秋葉が続きを解きなさい」
「ええ～～…」
「文句言わない」
「…はい」

咲夜は風と焔耶の二人に事情を話しながら、雛里に秋葉への問題を出題することを任せた

「…というわけだ。どう思う？」
「ふぅむ、雛里ちゃんと秋葉ちゃんはどう思っているのですか？」
「二人とも軍を共にすることに賛成だと。雛里に至っては諸葛亮って言うこの事もあるんだろうけど…劉備さんと華琳さん、その二人はいずれ乱世で頭角を現すだろうから見ておいた方がいいって言ってたよ。で、秋葉は…まあいつも通り強そうなやついたら共闘したいって…」
「おやおや、いつも通り秋葉ちゃんは勝負好きですねぇ」
「咲夜様！！　強い奴っているんですか！？」
「う～ん、華琳さんのところは言う必要はないと思うけど、春蘭さんに新しく加わったらしい楽進さんって言う人もいるらしいし…劉備さんの所には関羽さんや張飛さんって言う物凄く強い人がいるらしいよ」
「咲夜様！！　私も一緒に軍を進めることに賛成します！！」
「……まあ焔耶の方はそうだと思っていたからよしとして…風はどう思う？」

「ふぅむ、風もこの際、曹操軍と劉備軍のことを実際に見ておくことを推奨します。理由は二つあります。両軍の強さを知っておくこと。それから雛里ちゃんや燐花ちゃんと話してる時に聞いた荀？さんと諸葛亮ちゃんの力量を同じ軍師として見ておきたいのですよ～」
「…だけどそれはあっちにだって同じことだろう？」
「はい～、ですがこちらには三軍とまだ無所属の兵士さん達しかいませんし、何より常に戦闘の中核を担っていたお兄さんが本気を出さずにいれば問題ないのでは？」
「……むぅ、確かにそれを想定した訓練も行ったけど……焔耶はそれでも大丈夫？」
「はい！！　お任せ下さい！！」
「よし、なら少しの間だけだが俺達は曹操・劉備連合軍に加わることにしよう。風、補給部隊は？」
「先程こちらに入ってきました～」
「よし、その補給部隊の人に手紙を渡しておくか…少しだけ帰るのが遅くなるだろうからな」
「それが良いかと～」

それから咲夜、風、雛里で必要な処理を済ませ、その間、焔耶には兵士たちの陣中訓練を、秋葉には華琳及び劉備へ軍を共にするという返答をしに行ってもらった

それらを終え、暫くした後咲夜の陣に劉備達がやってきた

「劉封さん、お邪魔します」
「ええ、ところでまずはちゃんとした自己紹介から始めませんか？
幾人かは面識がありますが、初見の人もいるでしょうし」
「あ、そうですね。私は性を劉、名を備、字を玄徳といいます」
「俺は性を劉、名を封、字はない」

「私は性を関、名を羽、字を雲長と申します」
「鈴々は性を張、名を飛、字が益徳なのだ～！」
「わ、わらひは性を諸葛、名を亮、字を孔明といいましゅ！！　あうううぅ…」

「俺は性を太史、名を慈、字を子義という」
「私は性を魏、名を延、字を文長という」
「風は性を程、名を？、字を仲徳といいます～」
「わ、わらひは性を鳳、名を統、字を士元といいましゅ！？（ガリッ）あうううぅ…舌をかみましゅた」
「あ～、雛里。こっちに来て口の中見せてみなさい」
「う～ん、何か朱里ちゃんと鳳統ちゃんって似ているね」
「あ、桃香様。私と雛里ちゃんは昔、一緒に司馬徽先生の元で勉強した仲なんです。桃香様達とお会いする前に別れたんですけど…」
「え、そうだったんだ。じゃあ、二人はお友達なの？」
「はい」

そんな会話を他所に咲夜は雛里の口の中を注視していた

「ふむ…」
「あ、あうぅ…／／／」
「よし、どこも切ってはいないか。雛里、初見の人に挨拶するからって慌てちゃ駄目だよ？」
「あ、はい…申し訳ありません」
「ふふ、良いよ。でも次からは気をつけようね？」
「あ、はい♪」

そんな光景を何やら複雑な顔で見つめる面々
まあ心中は異なっているのだが…
例えば…

ケース1・風の場合
「むぅ～～、雛里ちゃん。ずるいです……風も後でお兄さんに構って貰うことにしますか」

ケース2・焔耶&秋葉
「…（何だろう、咲夜様が他の奴と一緒に居ると…胸が痛い……この痛みは？）」
「（むぅ…咲夜様って本当に天然の女たらしだ……よし、今度紫苑

と一緒に咲夜様の寝室に忍び込むか…）」

ケース３・諸葛亮孔明

「（う～ん…雛里ちゃん、出来ればこっちに引き入れたかったんだけど…あの顔だと無理かなぁ～…でもあの雛里ちゃんが君主とした劉封さん…今後、桃香様にどう影響するか…軍師としてしっかり見ておかないと…）」

などなど…

「（ブルッ）？　なんか変な予感がするなぁ……まあいいか」
「？　どうかしましたか、咲夜様」
「いや、何でもないよ。で、君が諸葛亮ちゃんかな？　雛里からよく話は聞いていたよ。何でも雛里は鳳雛と言われていたことに対して君は伏龍と呼ばれていたそうだね」
「あ、は、はい！！　こ、光栄でしゅ」
「ふふ、緊張しなくても良いよ。それで？　劉備さん、君はどうして関羽さんや張飛ちゃん、諸葛亮ちゃんを連れてこの陣に来たの？　俺は劉備さんが数人の護衛の身を連れて来るものだと思っていたのだけど？」
「え！？　え、え～っと…それはその…」
「ああ…そういうことか、要はうちの陣の様子や武器のこと、食糧などの情報を得たかったのね」

「ギクッ！？　な、なんのことですか～？　（の▽の）」

バレバレやがな…

「と、桃香様…その反応はバレバレですよ」
「あうぅ…」
「ハァ…まあ良いですけどね。どうせ華琳さんも同じ理由で軍を共にしたいそうですから」
「…あの、劉封殿」
「ん、何ですか関羽さん」
「一つ尋ねたいのですが…曹操殿とはどのような仲なのですか？真名を交換し合っていたようなので…」
「ふむ…二言でいうのなら不可侵条約を結んだ仲といった所ですかね。それが何か？」
「あ、いえ…あの曹操殿が男性の方と仲良くなるというのがどうにも信じられずにいて…」
「華琳さんは別に男嫌いというわけではない様ですよ？　ただ、自分にふさわしい男性が居ない為に今は気にいった女性達を閨に入れて楽しんでいるそうです」
「……それは曹操殿に聞いたのですか？」
「そういった話になった時に華琳さん本人が口にしたことですよ」
「はあ、そうなんですか…」
「さて、時に劉備さん」

その一言を言い終えた瞬間、咲夜の顔と雰囲気が一変した

笑顔だった顔がいきなり真面目な顔になった為、劉備達は驚いたようだった

「あ、はい」
「これは華琳さんにも似たようなことを聞いたことなのですが…貴方は何のために義勇軍を結成したのですか？」
「…私は力のない人を虐げる傾向にあるこの世の中を変えるために義勇軍を結成しました。力のない民を…皆救うために」
「（ピクッ）…へぇ、立派な夢だね。そんな夢が叶ったら確かに良いことかもねぇ」
「え、じゃ、じゃあ…劉封さんも私と同じ夢を！？」
「違う、俺はそんな非現実的な理想も夢も抱いたことはない」
「え…」
「ッ！！　貴様ぁ！！！　桃香様の理想を非現実的だと！！！」
「ああ、そうだ関羽雲長。そんな世界などこの世界、いや、どこの世界に行っても有りはしない。そんな夢が叶うのは人の夢の中だけだ」
「っ…どうして…ですか！！！」

劉備は怒りと戸惑いが混じった顔をし、関羽、張飛は今にも槍の矛先を劉封に付きつけそうな位に怒り、諸葛亮も咲夜に対し、怒りを露わにしていた
その様子を風、雛里は静かに見て、焔耶と秋葉は万が一に備えて自らの獲物に手を掛ける準備をしていた

「…ならいくつか聞こう。劉備玄徳、君は力のない民を皆救うために義勇軍を作った。そうだね？」
「……（コクッ）」
「だがな、良く考えろ。君達が敵と認識している賊も大半は元力無き民だ」
「え……」
「ならどうしてその民達は賊となった？　それは生きるためだ。自身が生きるために他の物を犠牲にしても行きたいという意思を示し、武器を取って賊となった」
「で、でも…それは……」
「確かに正しい行為とは言えないだろう。だが君は正面から彼等に言えるのかい？『貴方達の行為は間違いです』と？　彼等はこう言うだろうね『なら俺達はどうやって生きればいいんだよ！！』とな」
「う……」
「それにな、民が弱いって君は認識しているのかもしれないけどさ。そこまで民は弱くない。民がいなければ国も軍も宦官も…そして皇帝すら成り立たなくなる。それほど民の影響力は強い。だから民が弱いだなんていう前提はお門違いなんだよ」
「……」
「貴様！！　桃香様はこう見えても」
「何を他人事のように見ている」
「何！？」
「お前達も同罪だ、関羽、張飛、そして諸葛亮」
「？　どういうことなのだ？」
「…お前たちとて愚かではないだろう。特に諸葛亮、君なら気付いていただろう？　劉備の理想の現実との矛盾に」
「……」
諸葛亮は何も言えずに黙っていることしか出来なかった

「その沈黙は…肯定と受け取るぞ」
「どういう…ことですか？」
「…ハァ、なら聞く。劉備、君に突然ある選択を迫られた。それは民１０００を救うために関羽を殺せという二者択一の選択だ」
「え、ええ！？」
「さて、君ならどちらを選ぶ。ああ、ちなみに両方という答えは無しだ」
「っ……そ、それは……」
「……ふぅ、君は考えが甘すぎる。こんなことは今の時代、有り得ることだ。俺や君は軍を率いる立場…つまりは他者の命を背負う立場だ。今の君のままだと…いずれ大事なものを失うぞ」
「……ッ！！」
「なら……」
「ん？」

先程まで黙っていた諸葛亮が口を開いた

「なら貴方ならどうするんですか！！　例えばそこに居る魏延さんと民１０００を救うのならどっちを選ぶんですか！！」
「焔耶だ」
「え……」

一秒もせずに咲夜は諸葛亮の質問に答えた

「俺は自分の大切だと思える存在以外は基本的に助けない。まあ、助けて欲しいと手を伸ばされたら俺は出来るのならその手を掴む。だけど見知らぬ誰かを助けるために俺の大切な人たちを危ない目に会わせるなんてことは出来ない」
「っ…ならその１０００人はどうなるんですか！！！」
「死ぬだろうね、それを承知の上で俺は焔耶を選ぶ」
「／／／／／／」

焔耶は顔を真っ赤にして俯いてしまった

「無論のことだが、何もその千人を見殺しにするわけではない。俺は自分の手が届く者は可能な限り守る。そして、救えなかった者たちがいたらその者たちの夢を引き継ぎ、背負って行く」
「……」

「俺や劉備、華琳さんのような立場の人間は時に９を捨て１を救ったり、９を救うために１を捨てる。そういった覚悟が必要になる。そんな覚悟すらないのなら義勇軍など率いず、誰かの配下にでもなれ。…劉備、あと一つだけ忠告してやる」
「……なんですか？」
「理想や夢を持つことは人間にとって当たり前のことだ。だがな、夢や理想は呪いと同じなんだよ。その呪いを解くにはそれを叶えるしかない。叶えられなかった人間は一生呪われたままなんだ。高すぎる理想、非現実的過ぎる夢は人間を悪い意味で逸脱させる。理想に埋もれて死ぬ、それが今の君の未来の姿だ」
「……」
「…よくよく考えることだ、君はまだ若いし、君の周りには君を助けてくれる存在が居る。関羽、張飛、諸葛亮、君達もよく考えるん

だな。君達がこれからどうあるべきかを…」
「「「「……」」」」
「…ふぅ、雛里、風、焔耶、秋葉。後は頼む。俺は少し華琳さんと話しておきたいことがあるから」
「「「「御意です」」」」

咲夜は劉備達を一瞥すると、華琳の元に向かって行った

「……朱里ちゃん、大丈夫？」
「……うん、平気だよ。ちょっと…色々と考えちゃって…」
「…愛紗ちゃん、私……何か間違っていたのかな……」
「そ、そんなことは……そんなこと…あるわけが…」
「…ふぅ、お兄さんは皆さんにただ現実と理想を区別するようにと注意しただけなのですよ～。まあ、風も少しお兄さんの雰囲気に驚きましたけど～」
「ああ、そうだな。あの人は普段、殆ど笑顔を絶やさない人だからな…本気で怒った時の笑顔ほど怖いものはないが……（ブルブル）」
「そういうことです～、ですから恐らくお兄さんは劉備さんの理想の危うさを問いたかったのだと思いますよ～」
「…現実を見えていない者に理想を語る資格はない。咲夜様の教えられたものでそういった言葉があります。例え辛くとも目を逸らすことをしてはいけない現実を見ろ、それは人の上に立つ者、国を率いる者の当然の義務だ。そう言っていました」
「……ねぇ、鳳統ちゃん。もっと劉封さんについて教えてくれないかな？」
「あ、はい！」

「ふむ、なら風もお手伝いするのですよ」
「…俺は見回りに行ってこよう」
「頼む秋葉。私は一応、ここの見張りをしておく」
「ああ…それで、関羽と張飛、それに諸葛亮はどうするんだ？」
「…私も雛里ちゃんに劉封さんのことを聞きます」
「…なら私もだ」
「鈴々も聞くのだー！」
「…ということらしい」
「了解した」

それから劉備達は咲夜が陣に戻ってくるまでずっと雛里と風の話を聞くことにした

一方で咲夜の方はというと…

「ＯＴＺ」

陣の外で無茶苦茶凹んでいた
陣の外と言っても少し離れた場所に居るので、誰にも咲夜の声は聞こえない

「…言い過ぎた、確かに劉備さんの理想が非現実的過ぎてくちゃくちゃ腹立っていつの間にか口が動いてた……うおおおおおおーーーーーっ！！！　俺の馬鹿ぁーーーーーー！！！！！　劉備があんなに可愛いおんニャの子って言うことにも驚いたけど、あんなにぼろくそ言う俺自身に驚いたわーーーーーーーー！！！！！」

今度は地面にのた打ち回りながらゴロゴロと回転し始めた

「ううう…一緒に軍を共にするってことになったのに……これからどうやって会えばいいんだ……しかも…劉備さんって容姿無茶苦茶俺の好みのタイプやんけ～～～～！！！！」

…今度は木に頭を打ちつけ始めた

「うぐぅ……これって俺の中の劉封が劉備さんの何かに惹かれたのか…それとも前世の俺の好みが劉備さんなのか…もうどっちでもいいけどさぁ……俺これからどないすればええねん！！！」

それから暫くの間、咲夜は葛藤しながら頭の整理を付け…

その結果が

「うん！　ポーカーフェイスでいこう」

などという変な結論に至った

本当に大丈夫か？　劉封

第四話（後書き）

劉封のキャラが定まらなくなってますねＷＷ

第五話（前書き）

お気に入り登録３７５件、ＰＶ１４３，５２４アクセス、ユニークが１３，６９５人を突破しました
読者の皆様、私の小説を読んでいただき誠にありがとうございます
これからも一生懸命書いていきます

第五話

どうしてこうなったんだろう…

「どうしたの咲夜、さっきから元気がないみたいだけど？」
「その現況を作った人が言わんで下さい」
「あら？　何のことかしら、私分からないわ♪」
「（うわぁ…ぶっ飛ばしてぇ）」

内心毒づいているのだがそれでも今咲夜に起こっていることは変えられない

「りゅ、劉封様！　ご教授願います！」

目の前で拳を構えているのは先程紹介された楽進

「凪～、頑張ってな～」
「凪ちゃん、ファイトなの～！」

その後ろで応援しているのは李典と于禁
どうにも楽進の古くからの付き合いらしい

「凪〜、それに咲夜〜！　次は私だからなーーー！！」
「姉者、少し落ち着け」

咲夜にとって不幸な塊みたいな春蘭
その隣では秋蘭が咲夜に対して申し訳ない顔をしながら春蘭を抑えている

「……」
「ふむ、あれが噂の劉封殿ですか…お手並み拝見といった所でしょうね」

咲夜を憎しみとも言える眼差しで見ている猫耳フードの女の子にその隣には眼鏡を掛けた凛とした女の子

「（あれって多分、燐花の言ってた荀?さん。それに風の知り合いの郭嘉さんかな…）」
二人の特徴は風と燐花から既に耳に入れていた為、誰かを直ぐに判断出来た
「（でも…風の言ってた鼻血軍師というのはどういう意味だろう?

…見た所普通だけど…）」

「ねえ、流流はどっちが勝つと思う？」
「う～ん、凪さんの強さは分かるけど…劉封さんがどれだけ強いのか分からないから何とも言えないよ」
「ふ～ん…それよりも流琉、ボクお腹すいたよ～」
「ハァ…後で用意してもらうから我慢だよ、季衣」

そして華琳さんの両隣で会話しているのは許緒ちゃんと悪来典韋ちゃん
見てるだけで何か和みます…

そしてお子様二人の真ん中に居るのが今の咲夜の現状を作りあげた華琳こと曹孟徳

「本当に…どうしてこうなった……」

ことの発端は咲夜が華琳の陣を訪れてから暫くした後のこと…

「あら？　もう来たの…ということは私と劉備の連合に参加するということでいいのね？」
「…まあそういうこと。じゃあ具体的な話をしようか」
「あら、劉備はいいのかしら？」
「…劉備さんは暫く来ないと思うので」
「…何かあったのかしら？」
「まあ…それなりに、ね」
「ふぅん…まあ良いわ。と、その前に皆を紹介しないとね。春蘭と秋蘭は以前会ったから…桂花や凪達を紹介するとしましょう」

華琳はその場に待機していた兵の一人に命じて、将と軍師を全員集めるように指示した
暫くすると9人の女性がやってきた

「華琳様、至急の用とは…とおお！　咲夜ではないか！」
「え、何その驚き方…俺が来てるって知ってると思ってたんだけど…」
「ん？　そうだったか、秋蘭？」
「ハァ…姉者、華琳様が我らに指示を出す前に言っていたことだろう」
「う…ま、まあそんな昔のことは置いておいて…」
「「「…ハァ」」」←華琳&秋蘭&咲夜

「咲夜はどうしてここに居るんだ？」
「簡単に説明するのなら軍を共にすることになったからその連絡にさ」
「？　それならば伝令に任せればよいことではないか」
「これは大事な事だから自分の口から言いに行きたかったんだよ（加えて今陣に戻れん…劉備さん達に滅茶苦茶説教したからなぁ）」

咲夜は早速、今後のことを話し始めようとしたのだが…

「か、華琳様！！　どういうことですか！！　こんな男に進軍に加えるなど！！」
「あら、桂花は私の考えに反対だというの？」
「え…い、いえ…その…Σそ、そう！！　こんな男が華琳様の役に立てるなどと思えないので！！」
「あら、それなら問題はないわ。何せ、こいつはあの劉封なのだから」
「「「「え！！！！！」」」」

「えって…何その反応は？」

「か、華琳様！！　本当にこいつがあの仁君、劉封なんですか！？」
「ええ、本当よ」
「へぇ～、噂で聞いた通り深紅の鎧を着とるんやなぁ」

「黒い髪に蒼い瞳…確かに噂通りなの」

じろじろと見始める面々
流石にその視線を受けて恥ずかしくなったのか咲夜は話を進めるべく、華琳に向き直った
すると…

「…Σ　（ニヤリ）」

物凄く悪どい事考えてます的な顔をしながら妖美に微笑んでいた

咲夜は第六感で嫌な予感を感じ取り、目を背けようとしたがそれよりも一手早く

「咲夜、春蘭と凪、どっちでもいいから戦いなさい」
「…は？」
「今思い出したのだけど…樊城を訪れた時は新しい娯楽や建物の構造のほう等に目が向いていて、貴方自身の噂を確かめ忘れていたの。何でも万の賊に一人で立ち向かってその賊たちを皆殺しにしたらしいわね」
「いやいやいや！　そんなことしてませんから！　俺が手を下した

のは大体１０００位ですし、賊も総数１００００ではなく７０００程ですから！」
「大して変わらないじゃないの。でも一人で戦ったのなら賊は数を頼りに押し寄せてきたんじゃないの？」
「一応、一対一になれる場所で戦いましたし…数を減らした後、ちょっとした手を使って俺以外にも伏せている兵がいると見せかけて混乱させましたので」
「…へぇ」

ひいいぃ！？　更に華琳さんの顔がコイツ欲しいわ。何が何でも手に入れてやるわ的な顔をしているよ！？
などと思っている矢先…

スチャ…カチャカチャ……

ふと咲夜の目に入ってきたのは自分の刀を用意し始めている春蘭と…

シュッ！！　シュシュッ！！

何故か準備運動的な事を始めている楽進…

「あ、あの～…お二人は何を？」
「ん？　これからお前と戦うのだろう？」
「うえ！？　そ、そんなの承諾してないですよ！？　嫌ですからね！！！　俺は無駄に戦わない主義なんですよ！！！」
「何！？　華琳様、どういうことですか！？」
「気にしなくても良いわ春蘭。貴方は準備を済ませておきなさい」
「は～い華琳様♪」

「…華琳さんや、貴方の頭はどうかなったんですか？　俺は嫌だと言いましたよね？　何ですか、俺の言葉だけ通じないんですか？」
「そんなわけないでしょ？　でも、私は信憑性のない噂なんかより自分の目を信じるのよ」
「…つまり俺の力を実際に見たいだけということですか？」
「有体に言えばそうなるわ」
「……やる気がない」
「ふむ…なら二人に勝ったら貸し二つ、一人でも勝てば貸し一つ、逆に二人に勝てなかったら私の言うことを二つ聞いてもらうというのはどうかしら？」
「え～……（Σ　うん…待てよ、黄巾党の乱が終わった後、起こるのは確か……そうだ！！　反董卓連合の結成だ…確か盟主は・・・あの馬名族袁紹、それから丞相に華琳さんだ…もし、それが結成されたら……そうだな、ここで一応保険を作っておくことはいいか）
　分かりました」
「ふむ、ならそちらの武器はその腰にある双剣でいいのかしら？」
「いえ、これはちょっと俺自身も手加減できるかどうか分からないので…」

咲夜は腰にぶら下げている袋の中から何やら少しゴツ目のグローブを出した

「これで戦います」

「…貴方、無手でも戦えるの？」

「ええ、だっていつでも武器が俺の傍にあるとは限らないでしょう？　だから念のため、武気無しでも戦えるように鍛えていたんですよ」

「どれくらい強いの？」

「ん～…それなりといった所ですかね。この双剣を１０とするなら、戦斧が7、無手が8位ですかね。強さの度合いだと」

「そう、なら期待しても良いのね？」

「ええ、どうぞ。もうこうなったらとことんまでやりますよ」

咲夜は半分将来のための保険、半分もうやけで戦うことにした

まず動きやすいように鎧を脱いで、中の服だけになった

それから万全な状態になるまでウォームアップを始めたのだが…

身体が温まると同時に頭はどんどん冷えていった

「…俺、早まった？」

というのがことのすべてでした

「…ハァ」
「あ、あの…劉封様？　大丈夫ですか？」
「あ～、ええまあ…ただちょっと理不尽さを感じつつ、どうしてこんなことをやけになって承諾してしまったのか、頭が冷えていく度に後悔しているだけですよ」
「あ、あの…ご迷惑でしたか？」
「ん、いや…もう色々と諦めが付いたから。いつまでもうじうじ言っているのは男らしくないしな……（キュッ…キュッ）…よし、これで装着完了っと」
「？　咲夜様は戦斧、もしくは双剣で戦うと聞いていましたが」
「あ～、悪いね。戦斧は対集団戦だけにしか使わないし、双剣だと始めて対峙する相手だと手加減があまり出来なくて…以前、俺部下うっかり殺しかけたからさ」
「へ？！」
「まあそんなわけで初見の相手の模擬戦の場合は無手なんだよ」
「そ、そうなんですか」
「でも……結構強いと思うから油断しない様にね」
「…元より、油断などするつもりはありません」
「そう、ならいいんだ」
「はい！　ではよろしくお願いします！！」
「ふふ…では」

咲夜はグローブをもう一度、ハマっているか確かめ直しながら

「――――限界まで……飛ばすぜ」

静かに集中力を高めていった

↓Ｓｉｄｅ　楽進（凪）↓

ッ…

劉封様の雰囲気が変わった…

さっきまで無だった殺意の気配が有になった…

そんな劉封様の雰囲気に恐怖を覚えると同時に…凄く嬉しく思う

今まで私は無手を相手に戦ったことは殆どない

大抵の相手は武器を持つ者ばかりだったからだ

だから劉封様が無手でも戦えると知って少し嬉しかった

「それでは…凪　対　咲夜…模擬戦、開始！」

華琳様の開始の合図と同時に劉封様に私は一気に詰め寄ろうとした

無手は完全近接戦闘型故

劉封様も接近することから始めると…私は思っていた
だがその予想は裏切られることとなった

「烈風拳！！！」
「て、ええ！？」

劉封様が拳を思い切り前に突き出したと思ったら、何かが私に向かって飛んできた

「くっ…！！」

私はかろうじて避けることが出来た

「い、今のは…氣？」
「いや、違うよ、楽進さん」
「え、で、でも…」
「あれは単に思い切り拳を突き出して、風圧の塊を目標に向かって当てる技。簡単に言うと氣とかそんなものじゃなくただの力技」
「あ、有り得ないですよそれは…」
「ん？　そう、こんなことも出来るよ？　双魔人拳！！」

劉封様は今度は両手を交互に突き出しました
すると先程の空気の塊よりも大きなものが私の横を通過しました

「まあこんなことは修行次第で誰でも実行可能な技だ。小手調べに使ったんだが…これを避けるってことは結構強いってことだ、楽進さん」
「きょ、恐縮です！」
「…さて、そろそろまじめにやりますか」

劉封様は私が今まで見たことのない構えを取り始めました

「くっ…行きます！！」
「こい、楽進！！」

ヒュッ！！

私は一気に接近し、まずは蹴りを劉封様の右脇に当てようとしました

パシッ

「ッ！！」
「どうした、これが君の実力かな？」

あろうことか、劉封様は私の蹴りを防御するどころか、足を受け止め掴んでいました
まるでそれくらいの蹴りならば見切れると言わんばかりに…

「くっ…はあああああぁッ！！！」

私は私の可能な限りを尽くす為に、猛打連蹴を劉封様に浴びせた
だが劉封様は私の攻撃をすべて右腕のみで防ぎきってしまった

「くっ…」
「本気を出せ、楽進」
「本気など…当に出しています……くっ、ここまで攻撃が通用しないとは…流石にへこみますよ…」
「ふむ…成程な、君はまだまだ自分の力を出し切れていない様だ」
「え…そ、それはどういう…」
「ま、それは自分で考えることだな。受けるのは次で最後にしよう。楽進、君が持てる力、すべて最後の一撃で出し切って来い」
「はい！！！」

私は可能な限りの氣を足に籠め…

「猛虎蹴撃！！！」

ドゴオオオオオオオオッ！！

劉封様は私の攻撃を避けず、氣弾の直撃直線状に…って！？

「り、劉封様ーーーーー！？」

「ふっ…」

劉封様はニヤリと微笑むと…

「ふっ！！！」

バキッ！！！

ドムッ……

「「「「「「「……え？」」」」」」」

い、今目の前で信じられないことがありました

「いったぁ～～…か、かなり密度の濃い氣弾だったな。無茶苦茶手が痛かった。って言うかこの特殊加工したグローブでも痛みを軽減できない程って……これで発展途上って言うんだから末恐ろしいよ」

り、劉封様が何か言っているようですけど…

「り、劉封様？　い、今何をしたんですか？」
「え、何したって…氣弾をぶん殴って直撃を避けただけだよ」
「……（ポカーン）」
「でも二度とやらん。無茶苦茶痛い…」
「だ、大丈夫ですか！？」
「ああ、大丈夫大丈夫。昔、龍と戦った時に比べれば大したことないから」

…またとんでもないことが聞こえたような気が……

「り、劉封？　龍とは何のことだ？」

私の代わりに春蘭さまが聞いてくれた

「ん、ああ…旅の途中に山を登ってたら急に天気が悪化したと思ったら、龍が現れて襲ってきたから返り討ちにしたんだよ。で、その時に龍に認められて鱗とか牙とか身体の一部を譲渡してもらったんだよ。で、その時の素材使って作ったのが、この特殊手袋ってわけ……まあ、その時死ぬかと思う位怪我したけど」

そう言って劉封様は上着を脱いだ

すると…

「うわぁ…すごっ」

「た、逞しいの…」

真桜と沙和が何かずれた意見を言っていたが…

私は劉封様の体に目が離せなくなった

至る所にある傷…その中には火傷、裂傷、切傷等があり…一番目についたのは背中にある大きな斜めの裂目…

「さ、咲夜…その背中の傷は？」
「ああ、これが龍と戦った際に付けられた傷なんだけど……治るまで結構時間がかかりましたよ…」
「…大変だったのね」
「まあ、武者修行のつもりでもありましたから、仕方ないですよ」
「そ、そんなことは良いから早く服着なさいよ！！！　か、華琳様の目が汚れるでしょ！！」
「あ、すいません荀？さん」

ああ、劉封様が服を着直してしまった…
思わず私は桂花様を睨みつけてしまった

「え、な、何この視線は…」

ふと気付くと、皆桂花様を睨んでいた
華琳様までも…まあ私もですけど……

「…桂花」

「な、何ですか華琳様」
「貴方はこれから一月、私と閨に入ることを禁じるわ」
「そ、そんな！！　華琳様！？」

…自業自得だと思います、桂花様

↓Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ↓

「ふぅ～、それにしても驚いたよ。ここまで質の高い氣を扱える人は今まで見たことがなかったからね」
「劉封様は氣を使うことは出来るんですか？」
「う～ん…残念だけど、俺は昔から氣は才能がないから全く駄目だったね。だから、氣が使えなくとも強くなれるように体を鍛えたからね」
「…劉封様、先程使っていた技…たしかれっぷうけん？　と言いましたか」
「ああ、あれね。あれがどうかしたの？」
「も、もしよろしければ私にも使える様に教えていただけませんか！？」
「……へ？」
「だ、駄目ですか？」
「う……も、物に出来るかどうかは楽進さん次第だけど。それでもいい？しかも期間は短いよ？」
「大丈夫です！！」

「そう、分かった。どこまで教えられるかどうかは分からないけど…やってみることにしよう」
「ありがとうございます！！　これからは私のことを凪と呼んでください」
「…それって真名だよね？　いいの？」
「はい！！」
「ふむ、なら俺のことも咲夜と呼んでくれて構わないよ」
「分かりました、咲夜様！」

こうして咲夜は凪の師となることとなった

「（各ゲーの技、凪に出来そうなの思い出しておかないと）」
実は前世で隠れ各ゲーファンだった咲夜だった
ただし台バンした際に何台かゲーム機破壊したことがあった為、地元のゲーセンに入ることが出来なかったという黒歴史持ちだが…

「さて…次は私だな、咲夜！！」
「え～、休み抜きで春蘭さんですか？」
「何だ、もうへばったのか？」
「いえ、ちょっと待って欲しいんですよねぇ。ん～、流石の俺でもこの手袋じゃ春蘭さんだと少し厳しいですねぇ。華琳さん、ちょっと危険かもしれませんけど双剣使っても良いですか～？」
「良いわ、でも私が止めるように言ったらどんな状況でも模擬戦を止める様に」

「…もし止まらなかったら皆さんで止めてくださいね」

咲夜はグローブを腰の巾着に終い、双剣に手を掛けた

「…見たことのない剣ね」
「脇差、それがこの刀の総称です。とりあえず両方とも無銘の刀ですね。長年の相棒ですけど何だか良い名前が思いつかなくて…」
「咲夜、その刀の特徴は？」
「攻防両方に適した刀ですね。俺の戦いの型にぴったりだったので」
「貴方の型というのは？」
「それは自身で見て判断を」

咲夜は右手の刀を前方に突き出し、左手の刀を背中に回し、クラウチングスタートのような格好をし、集中し始めた

「？　なんだその珍妙な構えは」
「……」
「春蘭、どうやら咲夜はもう戦闘に集中できるようにしているようよ。油断しないことね」
「はい、華琳様！！」

スチャッ…

春蘭も華琳に言われ、咲夜に向かって剣を構えた

「…始め！！」

華琳の合図とともにまず先手を取ろうとしかけたのは

「うおおおおおおおぉッ！！！」

猪こと、春蘭でした

勢いよく春蘭は咲夜に上段で切りかかろうとした
だが咲夜はその攻撃を何事もなかったかのように避けた

だが春蘭はそれだけで攻撃を止めず、剣の嵐のような連撃を咲夜に繰り出した
流石にその連撃を避け続けるのは難しく、咲夜も刀を使い、剣の軌道をずらし攻撃をやり過ごしていた

「ふふふ…やるな咲夜！！　ここまで私の攻撃をかわすことの出来た男は父以来だ！！」
「どんだけ～っていうか父って…どういうこと、秋蘭さん」
「ああ…昔、私と春蘭が華琳様にしたえるまで姉者の相手を父がしていたのだよ。他の男だと相手にならなくてな」
「…春蘭があるのはその父親のお陰ってこと？」
「まあそうなるな。もっとも今は腰を悪くして剣を握ることが出来なくなってしまったがな」

ヒュオッ！！！

「とっ！！　（ガキッ）　春蘭さん、今秋蘭さんと話をしていたのですが？」
「戦いの最中に目を逸らす方が悪いだろう」
「…まあそれもそうですね」

咲夜は再び剣を構え集中することに…

「おい咲夜！　今気付いたのだが、さっきから私からばかり攻撃し

ているぞ！　お前からも切りかかって来い！！」
「…やれやれ、春蘭さんって鋭いのか鈍いのかよく分かりませんね」
「？？？？」
「そうですね…もう時間的にも良い頃ですし……そろそろ終わらせましょう」

咲夜は最初と同じ構えを取ると一息入れ…

「ふっ！！」

春蘭に向かって切りかかった
それに対し、春蘭は勿論のこと、周りでその戦いを見ていた華琳達も驚きを隠せずにいた

その理由は…

ガキッ！！

「グッ…」
「……あれを受けるか、ならもっと速く…」

尋常でないほどの速度…
文官である桂花と稟には見えないほどで、華琳や凪、真桜や沙和、季衣と流琉にはギリギリ見える位、そして弓使いである秋蘭には何とか目に入るほどの速度だった

そして咲夜は再び春蘭に斬りかかった
それも先程よりも早い速度で…

キンッ！！
ガキンッ！！

「くっ…」
「ちっ…これだけの速度での連撃を防ぐって…どれだけだよ！！」

いつの間にか口調も雑になっている咲夜
だがそれだけ余裕がないのも現状だ
常人相手なら一撃目、もしくは二撃目には終わっていたはずなのに
春蘭はもう数十回もの攻撃を防いでいるのだ

流石の春蘭もこの速度は見えていないはずなのだ
だが現に彼女は防ぎきっている

ズザッ

ひとまず咲夜は距離を取ることにした
一旦、頭に上った血を冷ます為である

「ふぅ…ふぅ…」
「ハァ…ハァ…」

流石に春蘭も息が上がり始めていた
咲夜の方は落ち着くために深呼吸していただけなのだが…

「ふぅ…よし、落ち着いたっと」
「ふふふ…」
「？　春蘭さん、どうかしましたか？」
「いや、ただ楽しい…それだけだ」
「あはは、実は俺もですよ、春蘭さん」
「ならば…全力を出し合ってやり合おうぞ！！」

「おう！！！」

それから少しの間、咲夜は春蘭と笑いながら刀を交えた
華琳達もその二人をずっと見ているだけで誰も止めようとはしなかった

カランッ…

やがてペース配分を考えずに全力で刀を交えていた二人の手から刀が滑り落ちた

「ふぅ～、もう私は流石に剣が握れぬようだ」
「俺も少し疲れましたね…ちょっと休みたいですよ」

咲夜は何とか刀を拾ってそれを腰にぶら下げている鞘に収めた
春蘭の方は七星餓狼を秋蘭に持ってもらうようにしたようだ

「お疲れ様、春蘭。それにしても咲夜…貴方本当に強いのね。春蘭とここまで打ち続けて平気でいられる男なんて初めて見るわ」
「あはは…光栄ですよ」

「ふふふ…益々貴方が欲しくなったわ」
「……（正直、諦めて欲しいのですが）」
「無理ね」
「…心を読まないでください」
「何となく分かっただけよ」
「…さいですか」

こうして模擬戦は何とか終わった

咲夜はいつの間にか場から離れていた凪が持ってきた水を一杯貰うと腰を落ち着かせることにした

「ふぇ～、暫くはこういう風に戦いたくはないですね」
「あら、でも楽しそうだったけど？」
「俺は基本戦闘狂ではないので。互いを高め合う戦いとは好きですけど…」
「あの…咲夜様」
「？　何かな、凪」
「えっと…私と戦っている際に咲夜様、私のことを発展途上とか自分の力を出し切れていないとか言っていましたが…あれはどういう」
「あ～それね。多分だけど、凪はまだまだ成長するってこと。そうだな…今のままだと春蘭さんに１０本中一本も取れないだろうけど…効率の良い鍛え方をすれば１０本中５～６本は取れるようになるよ」
「ほ、本当ですか！？」

「おい咲夜、それは私が凪に負けるということか？」
「あくまでちゃんとした鍛え方をすればの話ですよ。それに春蘭さんには天武の才以外にも恐ろしいほど鋭い第六感や長年の戦闘経験も有りますからね」
「そ、そんなに褒めるな…」
「咲夜様！！　どうすればいいのですか！？」
「お、落ち着いて凪。そうだな…ちょっと時間をくれるかな？　凪専用の訓練の目録とかそのやり方を書いた物を渡すからさ」
「い、良いんですか！？」
「ただし、それは他人には決して見せてはいけない。いいね？」
「は、はい！！！」

それから咲夜は魏の面々全員と真名を交換し合うこととなっただが一名、それを物凄く嫌がっていたが…

「……」
「あ、あの～荀？さん？」
「…何よ」
「荀？さんのことは常々、燐花から聞いていますよ」
「…あいつ、あんたの所に仕官していたのね」
「ええ」
「…元気？」
「え？」
「…燐花は元気？」
「ええ、今はうちの四軍師の一人として働いてもらっていますよ」
「……そう……桂花よ」

「はい？」
「真名よ真名！！　桂花だっていったのよ、私の真名は！！」
「あ、はい。ありがとうございます、俺の真名は咲夜です」
「ふ、ふん！！」

こうして何とか桂花とも真名を交換することが出来た

「さて…そろそろ食事の時間ね……咲夜、貴方はどうするの？」
「そうですね、時間的にも丁度いいのでそろそろ陣に戻ろうかと思います」
「あら、残念ね。貴方の作った味噌汁や漬物をまた食べたいと思ったのだけども」
「ん～、ならうちの陣に明日来ますか？　将や軍師の皆さんの分ぐらいでしたら用意できますよ」
「あらいいのかしら？」
「まあそれくらいなら」
「ふ～ん…なら明日、そっちに行かせてもらうわ」
「では俺はこれで」

咲夜はそのまま陣を出て…

曹の旗から結構離れた距離まで来ると…

「ハァ〜〜〜〜〜〜〜…」

ふかーーーーく溜息をついた

「つ、疲れた…何が疲れたかというと春蘭さんとの戦闘と常に気を使いながら周りの情報を得ることに対して…」

とりあえず咲夜は再び深呼吸をして身体を落ち着かせると、陣までゆっくりと戻って行った

「…とりあえず雛里か風、どっちか暫く抱っこさせてもらおう」

咲夜は普段、城に居る時は子供達を抱っこしたり遊んであげたりしてストレスを発散している
城中に居る時は璃々、雛里、風、燐花の内、誰かを抱っこしてゆったりとするのが好きなのだ
別に咲夜がロリコンというわけではない
咲夜は自身の体にすっぽり収まる子をひざに抱えて抱っこするのが好きなだけだ

「…ただいま～」
「あ、お帰りなさい、咲夜様」
「雛里～…疲れたから抱っこさせて～」
「あわわ…／／／／　で、でも今は朱里ちゃんや桃香様達もいらっしゃいますから」
「……へ？」

咲夜はあたりを見ると確かにそこには劉備達が居た
どうやら今は風が咲夜のことを教えているようだ

「…というわけでお兄さんは犯罪者や賊となった者を直ぐに殺さずに刑務所という所に収容することにしたんです」
「…ですがそれでは予算が酷いことになるのでは？」
「いいえ～、その建物内部ではしっかりと仕事をさせているのですよ。その仕事の出来次第で彼等の衣食住が決まってしまうので彼等も必死になって仕事をしていくれるのです。外に出てからも彼らには適した仕事を与えて、そこで得た能力を十分に使って貰っています」
「ただ、弐度目は許されない。後、重度の犯罪…つまり殺傷や放火、人身売買など非人道的な行為を行った人間は処断されている。咲夜様はそういったことを決して許さないんだ」
「焔耶ちゃんの言った通り、咲夜様は甘いようで厳しいのですよ。特に自分の大切な存在が傷つけられたり泣かされたりした時の咲夜様は本気で怖いですよ～」

「…凄いんですね、劉封さんって」
「そうですね…今まで誰も考えたことのなかった奇抜な考えもそうですが…それらを用いてなお領民の方々に厚い信頼を得ているみたいですし」

何やら真剣に話しているようで咲夜が戻ってきたことに気付いたのは雛里だけだったようだ

「…雛里、まだ長く続きそうだから俺の天幕行って抱っこさせて」
「あうぅ／／／／　わ、分かりました」

咲夜は壱秒でも早く癒しが欲しかったため雛里を連れて自身の天幕に移動しようとしたのだが…

「…所で、どこに行くつもりですか？　お兄さん…」

風に呼びとめられてしまった

「何だ風、俺が戻ってきてたことに気付いていたのか？」
「お兄さんは独特な匂いを漂わせていますからね～」

「…何、俺ってそんなに臭いの？」
「いえいえ～、どちらかというと落ち着くいい匂いですよ～」
「俺には分からん（人間って自分の臭いは無臭に感じるように出来てるみたいだし）」
「所でお兄さんはどちらに？」
「華琳さんの所に行ってた。最初は軍を共にすることを連絡した後でこれからどう動くかを相談しようと思ってたんだけど……何故か凪…楽進さんと春蘭さんと戦うはめになって…」
「…お兄さん、相変わらず不幸ですねぇ」
「言わないで風…まあ一応、凪には勝って春蘭さんとは引き分けたよ」
「咲夜様と引き分けたのは…夏候惇か……ふふふ、戦ってみたいものだ」

バトルジャンキーと化しているのは焔耶こと、魏延

「…焔耶？（にっこり）」
「（ビクッ）　な、何ですか咲夜様！！」
「無駄に戦うのは駄目だよ？」
「は、はい！！」
「…まあともかく、今回の華琳さんの陣を訪ねていくらか分かったことがあるからそれは後で軍議を開いて発表するから」
「り、了解しました！！（ブルブル）」

咲夜が焔耶に向けて恐ろしく整った笑顔を見せたようだ

「ふ、風ちゃん。あれがさっき言ってた」
「ええ、そうです。お兄さんの恐怖、笑顔な筈なのに何故か恐怖を感じる顔なのです」
「た、確かにあれは底知れぬ恐怖を感じる」
「鈴々も凄く怖いって思ったのだ…」
「ですが劉封さんが怒ったのは焔耶さんを心配してのことですよね？」
「その通りです朱里ちゃん。咲夜様は基本的に怒ったりはしません。咲夜様が怒るのは仲間のためなんですからね～（ですが、色々と鈍いですけど）」

それから何やら劉備達が咲夜に話があるとかで結局その天幕にとどまることに…

咲夜は当初物凄く嫌そうな顔をしたのだが…

「～～～♪（ナデナデ）」
「ふぅ、お兄さんは本当にしょうがない人ですねぇ」

風を膝に乗せて撫でることで落ち着いたようだ
因みに雛里は流石に劉備達の前で咲夜の膝に乗ってなでなでされることを想像しただけで固まってしまったのでその代わりに風が乗ることとなった

「あ、あの～…風ちゃん？」
「ん、何ですか桃香さん」
「その…劉封さんっていつもこうなんですか？」
「そうですね～、疲れた時や苛々してしまった後なんかは度々私か雛里ちゃん、後は璃々ちゃんをこうして抱っこしてますね～」
「だ、大丈夫なんですか？」
「大丈夫ですよ朱里ちゃん。お兄さんはただこうして私の頭を撫でているだけですからねぇ」
「た、対象は？」
「ん～、とりあえず私や雛里ちゃんの様にお兄さんの体にすっぽり収まる位なら誰でもいいみたいです。この中でだと…朱里ちゃんと鈴々ちゃんも承諾すればナデナデされますね」
「？？？どういうことなのだ？」
「お兄さんは必ず事前承諾を得てからこうして抱っこするんですよ。無理矢理とか命令で渋々とかは嫌だそうです」

そんな話が繰り広げられているにも拘らず咲夜はずっと風をナデナデしていた

そしてそれが数十分ほど続き…
ようやく咲夜も落ち着き始めた

「そーいえば…風たちは皆真名を交換し合ったのかい？」
「はい～、咲夜様が曹操さんの所に訪ねている間に～」
「ふむ、臣下が既に真名を教えているのなら俺も教えなければな。劉備さん、諸葛亮ちゃん、関羽さん、張飛ちゃん、我が真名は咲夜という。そちらが良ければ真名を我に授けてはくれぬだろうか？」
「…お兄さん、似合わないです」
「ウグッ…ま、まあこういう時くらいは真面目にしようと思っただけなのだが…」
「クスッ。　咲夜様は普段通りの方がよろしいかと思いますよ」
「うう…雛里まで」

「咲夜様今戻った…って何だこの状況」
「お、秋葉か。それにしてもずいぶんと遅かったな」
「暇がてら偵察にも行ってきた。どうにもこの近くには黄巾党はもういないみたいだ。後、勝手だが偵察部隊も動かして情報を探ってみたんだが…どうやらここから南に行った方に黄巾党の大部隊が留まっているとか。数は今探らせているが」
「…う～ん、咲夜様に話した方がいいな。でも咲夜様、今あの状態だし…」
「またか…まあいい」

戻ってきたばかりの秋葉だが、焔耶に簡単な状況説明を受けると直ぐに理解した
というよりもこの状況に既に慣れてしまったのだろう

「ふぅ…咲夜様？」
「お～、秋葉…俺ってそんなにしっかりとした口調って似合わないのかな？」
「ん、どういうことだよ？」
「コホン…我が名は劉封。我求は「似合わないから止めろ」が～～～ん！！」
「確かに…その言い方は咲夜様らしくないな」
「え、焔耶まで…←」
咲夜、味方０の為座りながら落ち込んだ
ただし、風を撫でる手を止めはしないのだが…

「あ、あの！！　わ、私はカッコいいと思いますよ？！」
落ち込んでいる咲夜を見て劉備が励ました

「ああ…どうも」
「え、えと…わ、私の真名は桃香といいます！！」
「え、あ、ど、どうも？」
「そ、それであの…さ、咲夜さんにお願いがあるんですけど」
「……何？」
「私に咲夜さんなりの国に対する考え方や治め方を教えられるだけ教えていただけませんか！！」
「……ふむ、それは何故？」
「私はやっぱり私の理想を諦めたくありません。でもそのためにはまだまだ私は色々な事を学ばないといけないと思ったんです。咲夜さんに色々言われて…凄く悲しかったですけど……でも、咲夜さん

は何も間違ったことは言っていませんでした。だから…私は現実から目を逸らさずに私の理想を貫きたい。その為に、咲夜さんや他の皆さんの考え方を参考にしたい。そう思ったんです」
「……ふむ、それならどうして俺に？　一緒に進軍する華琳さんでもいいんじゃないのかい？」
「それは咲夜様が一番よく分かってるんじゃないですか？」

横から朱里が口出ししてきた

「…諸葛亮ちゃん、どういう意味かな？」
「私の真名は朱里です。以後、真名で呼んでください」
「ああ、じゃあ朱里ちゃん。どういう意味かな？」
「桃香様と曹操さんの考え方は全くの正反対ということです。その反面、咲夜様と桃香様の考え方は似ている所があります。自分の大切な存在を守る…だから桃香様は咲夜様に色々と師事して欲しいとおっしゃったのです」
「…成程、桃香さん。先程の朱里ちゃんの通りかな？」
「はい！　だから…お願いします！！」

そう言って桃香は咲夜に頭を下げた

「…ふぅ、仕方ない…か。雛里、風。俺は曹操軍の楽進将軍にも師事して欲しいと言われている。だから、桃香さんと二人のために取れる時間を調整してもらっても良いか？」
「御意～」「御意です」

「あ、ありがとうございます！」
「ッ…　こ、今回だけだからね！！（プイッ）」
苦し紛れに顔を逸らした咲夜
だがその顔はトマトみたいに真っ赤だった

それから咲夜はまだ真名を貰っていなかった関羽と張飛からも真名を貰い、そして師事する日時と時間を指定すると、咲夜は自分の天幕へと戻って行った

咲夜が居なくなってからのガールズトーク

「咲夜さんって本当に優しいね♪」
「はい、私達誰もが誇れるとても素敵な主ですから」
「…雛里ちゃん、良かったね。いい人に仕えることが出来て」
「うん♪　そういう朱里ちゃんだって桃香様は凄く立派な人になると思うよ」
「勿論♪　朱里ちゃん達が誇れるくらいに立派になってみせるよ」
「…ふふふ、胸の方はもう既に立派ですけどね～」
「あ、あう／／／　ふ、風ちゃん！！／／／」
「ふふふふ～」
「うう…桃香様、羨ましいです」
「（ジ～～～～）」

「うううぅ〜、朱里ちゃん、雛里ちゃん！！　そんなに見ないで〜〜」

桃香、風、朱里、雛里のトークでした

っていうか風…セクハラだろう、その発言は

「ふむ…それにしても秋葉殿の武器は双棍か。随分と珍しい武具を使うのだな」

「色々と昔は使っていたがこれが一番私に合っていたのでな」

「焔耶の武器も大きいのだー」

「ふふふそうだろう！」

「だが力があるだけで小回りが利きにくいのが偶にキズだがな」

「グッ…そ、そういうお前こそ早いが私ほど決定打が有るわけではないだろう！」

「くっ…」

結局はどっちもどっちなのだった

第五話（後書き）

咲夜、不幸度静かに加速中・・・・・・

第六話（前書き）

クオリティの低さに脱帽中…

第六話

咲夜は自分の天幕に戻ってから今までのことを振り返ることにした
自分は確かに前世の記憶…この世界でいうと天の世界の記憶…らしいが…
まあこの世界の未来に近い記憶を所持していた為、当初は劉備や曹操、孫堅などとは関わりを持ちたくないと考えていたはず…
なのにだ…

運命は余程咲夜を嫌っているのだろう

樊城の太守になることを拒んだはずなのにいつの間にか領民や武官、文官の人たちの希望を受けて、樊城太守になっていて…自分の記憶を使ったり今まで学んできたことを活用しては領民の人たちに幸せになって欲しいと願っていたらいつの間にか樊城が他の領域よりも繁栄していて…
その影響があってか他の諸侯達もこっちを気にするようになって…
そしたらまたいつの間にか曹操とか孫堅と真名を交換する中になったり…
今日は劉備に何故か懐かれていたり…

「ふぅ…儘ならないか、やっぱり不幸なのかねぇ俺は」

劉封の体のせいなのか…それとも本来の自分が元々不幸体質なのか…あるいは両方なのか…
咲夜は度々こうして思い悩んでは、その解決策を探しているのだが

…何分これは目に見える問題ではないのでどうにも出来ないのだ

そしていつも出る答えは

「ケ・セラ・セラ…だな」

結局こういった結論にしか至らないのだ
それでも前向きに生きていこうとするのが今の咲夜である

「ふぅ…」

咲夜は一息入れ、次のことを考え始めた

それは先程真名を交換した劉備こと桃香と楽進こと凪のことであった

それぞれ教えることは異なるがこの進軍の最中に可能な限りのこと
を教えて欲しいというのが二人の希望

「凪に関しては俺の独断でどこまで強くするかは決められる…けど
桃香に対しては……雛里と風の二人と相談して決めるか」

さらさらと咲夜は持ってきていた木簡に目録を書き始めた
書いているのは2本の木簡にそれぞれ桃香用と凪用である

それを約３０分かけて作成し終えた後に少しひと眠りしようとした
その時…

ヒュンッ

咲夜の背後に何者かがやってきた

「…影夜か」
「（コクッ）」

咲夜がかつて育成した忍び部隊の一人で主に諜報を任としている者
である
性名を捨て、咲夜から与えられた真名のみで生きている者の一人で
ある
咲夜が忍者部隊としたのはかつて戦争で両親や親類を失って行き場
を失った子供たちである
その中で希望を集い、厳しい訓練を積み、それをやり遂げた者がこ
うして忍びとなって生きているのだった
樊城にはこういった忍びが約３００人はいる

因みにそうならなかった子供達は沢山いるが彼らにも新しい場所を提供したりしているため、問題は一切起こっていない

「…樊城？それとも襄陽から？」
「…（カキカキ）【襄陽よりお手紙を】」
「そう…なら貰えるかな」
「（コクコク」

影夜は昔、賊によって両親が目の前で殺されたため、その時から話せなくなったそうだ
影夜は両親の配慮によって物陰に隠れたため難を逃れたのだが…
咲夜に助けられた当初は重度のショック状態で何も食べず飲まずで
今にも死にかけそうな状態だった
それを助けたのが咲夜であり、咲夜は影夜の親代わりとなって仕事の合間をぬって影夜の面倒を見てあげていた
その成果があってか、影夜は少しずつ心を開くようになったのだ
今ではこうして咲夜の影となって精一杯働いている

咲夜は影夜から手紙を受け取るとそれを開封し、読み始めた
その間、影夜はというと…

「～～～♪」
「えっと、何々？（ナデナデ）」

抱き枕状態になっていた
咲夜の体系は雛里と大して変わらない為、咲夜の抱き枕係の射程圏内なのだった

「……ふぅ、また劉表の狸爺が襄陽に攻める準備をしている気配有り…懲りないねぇ。……いっそ、徹底的に滅ぼすか？（ボソッ）」
「（ビクッ）」
「ああ、ごめんごめん。驚かせた？」
「（フルフル）」
「さて…（サラサラ）よし、これ位で良いかな？　後は狸宛てに送る手紙をっと…」
「～～～♪」

咲夜は襄陽宛、樊城宛、そして劉表宛に手紙を書き、それを影夜に手渡した

「よし、これを持って行ってくれるかな？　劉表のいる荊州城にはいつもの通り矢文で。わざわざ使者を立ててやる義理はないから」
「（コクコク）」
「ふふ、この戦いが終わったら一緒に遊んであげるからね。頑張ってよ、影夜」
「／／／／／」

影夜は一瞬顔を真っ赤にすると、すぐさま自分の仕事に戻って行った
咲夜以外に気配を悟らせずに…

「やれやれ…あの狸爺、残った城は荊州と江陵辺りが有力だからって面倒な事だ。ん～、やっぱり早めに手をうったほうがいいか…このままにしておくと無駄に領民の人たちに被害が及ぶ可能性もある……ふぅ、まずはやっぱり劉表軍の頭となっている蔡瑁と張允を捕えて…向こうの有能な人材を引き抜くか。内側からボロボロにしてやる」

末恐ろしいセリフを吐きながら今後の対劉表軍殲滅作戦をキーワードだけ木簡にメモして行く咲夜
その背後には鬼が居た

その為暫くの間…咲夜の天幕には誰も近寄ることが出来なかったそうだ

そして翌日…

「ふぁ～～～…もう朝か」

咲夜は何時も決まった時間に起きている
だがいつもと違うのは咲夜の周りには散らかった木簡が幾つも転がっていたこと
そして咲夜は寝台ではなく、何故か天幕の中の床で眠っていたこと
咲夜の体には幾多の生傷と打撲の跡が残っていた

「あ～、今日はあの日かぁ～…ついてない」

あの日というのは…

ガンッ！！！

「いったっ！？」

ぐきっ！！

「ギッ！！！？」

ゴンッ！！！

「んぐぁ！？」

咲夜は起き上がって直ぐに頭をぶつけ、足を捻り、そのまま側頭部を寝台に打ちつけた

「いっ……たい……ハァ……」

そう、咲夜の言うあの日というのは…咲夜に不幸が降りかかる日であった
といっても丸一日続くものではない
精々続いて半日といった所だ
洛陽に居た際に詠の不幸の日と絡んだ時は咲夜が真剣に死ぬ寸前にまでいった程だった
だが一つ違うのは咲夜の不幸体質は周りに飛び火しないこと
咲夜自身のみがこの不幸を被るのだ
だがこの日に至っては咲夜は自分の周りに人を寄せ付けない様にしていた
何故なら、自分の不幸に他人を巻き込む可能性があるからだ
飛び火はしないが巻き込みはする

無駄に厄介な体質である

だがここで咲夜はある重大なミスをしていた

「……あれ？　そう言えば今日って華琳さん達が食事に来る日じゃね？」

サアッと咲夜の顔から血の気が引いた

「（ヤバ…もし今日華琳さんが俺に付き添ったりしたら……マジやばい……くっ、こうなったら皆に協力してもらうしか……いや、待て華琳さんのことだ。ここは正直に話した方がいいのでは？いや、一応不可侵の関係ではあるため多少は信頼し合うべきだが、こんな変な弱みはあまり握られたくない……どうする？　どうする？どうするよ俺！？）」

再び悶え苦しむ咲夜

暫く考えこんだ後…

「…正直に話そう。無駄に波紋呼びたくないし。まあ華琳さん達が来る前に不幸が終わってくれるのなら万々歳なんだけど」

真っ向から理由を話すことにした

「それにしても…幾ら悲劇の将軍とか不幸な人だって言われてたからって…これはないでしょ？」

実は咲夜は気付いていないが、前世から咲夜はあまり運が良い方ではなかったのだ
その為、特典で引いた【前世での能力引き継ぎ】という物は運動神経や頭脳だけでなく、不幸値という面も引き継いだのだ
劉封に憑依したのもそれが一因である
加えて、劉封の体がもともと持っていた不幸体質に加えて、咲夜の引き継いだ不幸値が合わさったのが今の咲夜だった

それに気付かない咲夜は…

「（ガンッ）　…痛い、ハァ～～～～……不幸だぁ」

酷い目に合う羽目となっていました
特典もいいことばかりではないのです
加えて言うのなら咲夜の引いた【死亡フラグ回避】の能力ですが、
これもどんなフラグを立てても死なないだけで、死ぬギリギリの目
にはあうという意味もあったそうな…
唯一まともな特典は武具だけだった

こんなことになったのも実はあの山田という咲夜が転生する前に合
った女性によって加えられた要素であった
こんなことをした理由はというと…

「あん？　私に気にしていることを抜かしたからよ」

だそうです

傍若無人にも程がねぇ？

だがいくら山田でも手を出し過ぎることが出来なかったので、こう
して特典にちょっとばかりのマイナス要素を加えることしか出来な
かったのだ

だがそれでも咲夜にとって地味にきついものだった

「くっくっく…ばれなきゃいいのよ」

…どSでした、この痴女

ということもあって、咲夜は本日はＵｎｈａｐｐｙ　Ｔｉｍｅなのでした

咲夜は身支度を整えるとすぐさま皆の集まっている場所に赴き、全員の前で宣言した

「…今日は、あの日です」

ピクッ…

それを聞いた瞬間、皆の目が一瞬で咲夜を憐れむような顔をし出した

「あ～、お兄さん。大丈夫ですか～？」
「…あ、あはは…も、問題ないよ。ただここに来るまでに何回も躓いたり頭打ったり、何故か頭上から色々なものが降ってきたりしただけだから…ＯＴＺ」
「だ、大丈夫じゃない気がします」
「おいおい、大丈夫か？」
「咲夜様、今日はもうずっと天幕に居た方が」
「…いや、正直外に居た方がまだましかもしれん……加えて、今日は華琳さん達が食事に来る予定だ」
「「「「え゛…」」」」
「…何その反応は？」
「じ、実は…その後で皆で咲夜様に伝えようと思ったのですが…その…」
「あ、ああ…桃香達も食事に来たいって・・・」
「ＯＴＺ…俺の不幸加速中」
「さ、咲夜様」

咲夜…先程からずっと凹みっぱなしである

「皆…一応言っておくけど気を付けて……特に女性。何故か着替えていたり湯浴みをしている時とか何故か俺が飛ばされたりするから

……」
「「「「は、はい！！（べ、別に咲夜様なら構わないのだけど／／／）」」」」

地味にフラグ立ててもてているのだが、それに全く気付いていないのも咲夜クオリティ

それから華琳や桃香達が来るまでの間…咲夜はもうドリフの罰ゲームとしか言いようのない不幸を味わった

何故か頭上からたらいが落っこちてきたり…
何故かどでかい鳥に服の先を咥えられてリアルスカイダイビング経験したり…
その後で女性兵士たちが水浴びしている所に落っこちたり…

気付けば体中ボロボロになっていた咲夜（女性陣の所に飛び込んだ際は助けられるだけで何もされなかったのだが…）

「…もういや…疲れた……」
項垂れて真っ白な灰となった咲夜
さながら明日○ジョー的な絵柄がぴったりだった

「あうぅ…さ、咲夜様ぁ」
「あらら、お兄さん。今回は特に酷いみたいですね」

身体の治療をしながら食事の用意を手伝う風と雛里
秋葉と焔耶はそれぞれ桃香、華琳を呼びに行っている
因みに不幸スキルは夕方になってから効果が薄くなるため、今の時間を見計らって咲夜は食事を用意し始めたのだ
下準備は雛里や他の料理の得意な兵士たちに任せておいたため手間は殆ど掛かっていない

「あら、どうしたの？」
「あ、あれ？　曹操さん？　それに……って咲夜さん！？　ど、どうしたんですかその怪我！？」

暫くして秋葉に連れられ、華琳、春蘭、秋蘭、桂花、凪、真桜、沙和、流流、季衣
陣の方は曹仁、曹真、曹純、夏候恩という将達に任せたそうだ

桃香の方はというと愛紗、鈴々、朱里が焔耶に連れられてきた
陣の方は靡芳、靡竺という二人に任せたそうだ

全員咲夜の姿を見てひどく驚いたようだった

「ああ…実は」

咲夜は自分の体質のことを話し始めた
すると…

「グスッ…さ、咲夜さん。い、今までそんな苦労を（ウルウル）」
「…良く今まで生きて来れたわね、ある意味感心するわ」

桃香は泣きだし、華琳は半分呆れたような顔をした
だがその場に居た全員の顔には咲夜に対して憐れむ目が向けられた

「…あの、そんな目で見ないで…いやマジで。俺はもう既に割り切ってるから」

非常に不本意な同情を受けるのはもう慣れたという顔をして普通に接する咲夜

だが食事が始まるまでの時間、咲夜はずっとそんな目で見られ続けた

やがてすべての食事の用意が終わり、皆用意されていた場所に案内された

「さて咲夜、進軍中の食事は本来味よりも保存を主としている。だが貴方は私を招待した。その意味は分かっているのね？」
「まあ俺の軍は補給した日には御馳走を作るって決まっているし…多分他の軍よりも食事はいいと思うよ？　色々と悪い所を改善していったからね」
「そう…なら期待させてもらうわ」

席順は

桃香・咲夜・華琳
愛紗・焔耶・春蘭
鈴々・秋葉・秋蘭
凪・真桜・沙和
朱里・雛里・桂花
稟・風・季衣・流琉

という風に三人一組状態で座っている
最後のは一人余る形となったので大きめの席に座ることに
席が円状になっているので誰でも気軽に話しかけやすくなっている

「さて本日の食事の献立は…（パチンッ）」
咲夜が指を鳴らすと食事を持ってきた女性兵士たちがやってきた
ただし、着ている服が和風メイド服だった

「…さ、咲夜さん？　この人たちの服は？」
「ああ、それは俺が職人に考案を渡して作らせた給仕服だよ」
「か、可愛い…」
「こういった服は樊城に来れば手に入るよ？」
「「「「ほ、本当に！？」」」」

おしゃれに興味津々の子たちが咲夜のセリフに喰らいついた
特に沙和が…

「で、でも～、阿蘇阿蘇にはそんなの載ってなかったの～」
「それはうちの中で情報規制を厳しくしたからだよ。国内が安定しないうちは内部の特産とか新しい物は外に伝わりにくくしたわけ」
「うう～、他にはどんなものがあるの～？」
「…まあそれはいずれ来た時のお楽しみということで。それよりも今は食事を楽しんでね」

その日用意したのは味噌煮込み饂飩と味噌煮込みおでん他にも色々と用意し、それにちょっと何か摘まみたいという人のために酒とフライドポテトを用意しておいた
勿論、一から作るのは結構大変だったようだ
特に油の臭いの面や饂飩を一から作る作業、おでんの具作りなど大変な事盛りだくさんだったが…

「では…頂きましょう」

パクッ…モグモグ……ッ！！！

「お、おいしぃ～～～～～～～♪」
「これは……今までに食べたことのない」
「美味いのだ～～～♪」
「…いいなぁ、雛里ちゃん。いつもこんなの食べてるの」
「そ、そんなことないよ！？　わ、私がこれを食べられるのは進軍中は本当に時々だから！！」
「むぅ…今日のおでんは中々……秘蔵の酒を持ってくるべきだったなぁ」
「秋葉…お前な」
「……（これは以前食べた味噌汁という物に似ている…だけどこの麺は何かしら。こしがあって…）」
「（がつがつがつがつ）」
「姉者、もう少し落ち着いて食べてくれ。流石に恥ずかしいぞ」
「ふ、ふん！！　男が作ったにしてはまあまあじゃないの！！」
「あらら～、桂花ちゃんは素直じゃないですね～」
「ふむ…それにしてもこんな味は食べたことがありませんね…」

「（もぐもぐもぐもぐ）おいひぃ～～～♪」
「ああ、もう季衣。ほっぺに色々と付いてるよ」
「咲夜様！　本当に美味しいです」
「ほんまやな！　特にうちはこの芋の揚げ物が好きや！」
「沙和はこの煮物が好きなの～」

各々に食事を楽しんでくれているようだった

「楽しんでくれてなによりだよ」
「…咲夜」
「何ですか？」
「これは長い間持つ物なの？」
「いえ、味噌は黴が生えやすいのでそうとは言えませんね。だからこそ補給して直ぐに作ったんですよ。長期にわたって保存できる物は他にありますから」
「…おしえな「駄目です」…即答したわね」
「当たり前でしょう。これらは樊城で生まれた食事なんですから。それに味噌は色々と工夫しやすいんですよ」
「…例えば？」
「そうですね…味噌ラーメンとか味噌御握り、魚の味噌煮込みとかも作れますからね」
「…ならまた訪ねさせてもらうわ」
「厄介事なしでお願いします」
「分かってるわよ」

食事会が終わり、咲夜は片付けに向かった
その間、女性陣は各自の天幕（陣）へと戻り（移動し）、ガールズトークをすることとなった

↓劉封陣にて↓

「皆さん、どう思いますか？」
「風さん、やっぱり私は桃香様、曹操様のお二人はいずれ咲夜様にとって障害になり得る方だと思います」
「そうだな…桃香の方はまだまだがこの進軍の際に咲夜様が色々教えるみたいだし…それに愛紗、鈴々、朱里と粒玉も揃っている。これに兵力と名声が加われば恐ろしい敵だ」
「曹操の方は着々と力を付けていっているし、覇道を往く奴だ。桃香様よりも樊城に攻めてくる可能性が高い…と私は思うのだが……合っているか？」
「焔耶ちゃん、正解です。その調子でしっかりと考えることを止めないでくださいね。では残った諸侯で警戒する必要のある勢力といったらどこでしょ～？ふぅむ…秋葉ちゃん」
「俺か？　そうだな…とりあえず当たり前だが劉表だな。奴とは領土が隣合わせだし、襄陽の件もあるからな。後は……西涼の馬騰、幽州の公孫賛、益州の劉障、長沙の孫堅、南陽の袁術、それに…ここ最近噂になっている【天の御遣い】が落ちたと言われている袁紹だな」
「正解です。加えていうのなら孔由、鮑信、韓馥、張燕、張魯、丁原などもまだまだ油断ならない勢力ですよ～」
「私達の勢力、樊城・襄陽は他の領域に比べて裕福な上に総兵力が先の戦いの捕虜たちを加えて約６００００、将兵の数も他に比べてかなり多くなっています。そういった面では樊城・襄陽のどちらか

が落ちても拙いことになるというわけです。だからこそ、咲夜様は出陣の際、鉄壁とも言える守りで自領を固めたんです」
「それに襄陽を守っているのは紫苑、杏、麻理に燐花と厳重過ぎるといっても良い位に守りに長けてる皆が守っているし…樊城の方も汝南への国境付近は厳重な罠が敷かれているし、警備も万全。とりあえずそれで少しは安心できてるんだよな」
「汝南…確か袁術が治めている領土だったな」
「そういうことです～。まあ悪く言えば私達は袁術と劉表に挟み打ちということも有り得るんですけどね～。でもまだ江夏の地に劉祥さんもいらっしゃいますから今すぐに袁術が攻めてくるということはないでしょう。…袁術がアレなので少し不安ですけど」
「「「ああ…」」」

三人ともそれだけで納得してしまった袁家クオリティ

「それにしても…天の御使いが袁紹のいる渤海に落ちたなんてなぁ」
「でもその占いだってあの出鱈目で有名な管路が占った物なんだろ？　当てにならないだろう」
「いえ～、報告によるとその人は男性で何でもキラキラと輝く服を着ていたとか～」
「…それならもう既に咲夜様が似たような服を作っているだろう？」
「そうですね…現状では全く分かりません。でも私は今は問題ないと思いましゅ」
「…雛里がそういうのなら」
「風も雛里ちゃんの意見に同意ですね～」
「俺もだな、今こう考えていても仕方がない。それよりも今は実のある話をしようじゃないか！！」

「実のある話？　秋葉、それは一体…」
「コホン…【第一回、咲夜様を男性として好いている人はいるか居ないか！！　大告白大会！！】」
「「えええええええーーーー！？」」
「成程～、それは確かに興味深いのですよ～」
「チョッ！？　風！！　なんてことを言うんだよ！！」
「しょ、しょうでしゅよ！！　そ、そんなふ、不敬な…／／／」
「ふむふむ…その反応を見る限り、雛里ちゃんはお兄さんが好きということですね～」
「あわわ…そ、それは…しょの／／／」
反論できずに顔を真っ赤にする雛里

「他にも今留守にしている奴だと…紫苑、麻理、杏は確定か？　燐花はちょっと難しいな。あいつ、普通の恋がしたいって言ってたからなぁ」
「他国の将だと…女の勘では楽進将軍と桃香様が怪しいですねぇ～」
「（プシュ～～）／／／あわわ…あわわ／／／」←フリーズ中
「いや、風。流石に今日会ったばかりで好きになるなんて」
「甘いぞ焔耶！！　例えるなら出来たての胡麻団子に更に砂糖と蜂蜜を加える位に甘いぞ――――！！！」
「うえ…それは確かに甘ったるそうだな」
「そういう意味ではないのですよ～。恋はいつも突然。そういった言葉が咲夜様の小説に書かれていたではないですか～」
「う…だ、だけど流石に現実でそんなことが起こるわけが」
「女心は雲のようだ。そうも書かれていましたよね～？　女性の心は変わりやすいのですよ～、ましてや恋心なら尚更なのですよ～」
「ウグッ、な、なら風はどう思っているのだ！？」
「好きですよ～」

「俺も好きだな。咲夜様は今までに見ないいい男だ。確保したいというのは女として当然だろう？」
「うううぅ～～…」
「なら焔耶ちゃんはどうなのですか～？」
「……わ、分からない」
「ふむぅ、まあ時間はまだまだありますよ。ゆっくり考えるといいですよ～」
「……うん」
「かっかっか！！　あの魏文長も咲夜様のことになると骨抜きじゃな！！」
「ウグッ…」
「あううぅ…あわわぁ／／／」←未だフリーズ中

「やれやれ…お兄さんはこれだけ好かれているというのに。当の本人は全く気付かないのですからねぇ～。困ったものですよ」
「おうおう、鈍感王とはまさにあの人のことだな」
「これこれ宝？、そういうことは言ってはいけませんよ～」

↓劉備陣にて↓

「どうだった朱里」
「そうですね…まず曹操軍ですが、いずれ私達がより大きくなった時に真っ先に対立するのは曹操軍です。その理由は思想の違いですね」
「？？？」
「…それって、やっぱり私の考えが甘いから？」
「…曹操さんが目指すのは覇道。その道を往くために障害を力で排

除し、己が天命を全うすべし。それが曹孟徳のやり方ですからね。桃香様の思想とは真逆なんですよ」
「…でも私は諦めないよ。咲夜さんに色々と教えてもらって私は私の理想を現実にして見せる。難しいかもしれないし…他の人には受け入れてもらえないかもしれないけど…でも私は諦めないよ！！」
「桃香様、私達はそんな桃香様だからこそ、一緒にその道を歩んでいきたいと思ったのです。桃香様が揺らぐことないように、桃香様の理想を現実とするためにこの関雲長、存分にお使いください！！」
「愛紗ちゃん…ありがとう」
「鈴々も難しいことは分かんないけど、頑張るのだーーー！！」
「鈴々ちゃん…」
「ふふ、桃香様。私も精一杯頑張らせていただきます。ですから、桃香様は私達をもっと頼ってくださいね」
「うん♪　でも皆にばっかり任せるわけにはいかないよ？　私自身ももっと頑張らないと…」

「所で…その咲夜殿の方は如何致すのだ？」
「こちらから攻めたりするのは絶対に禁物にしましょう。樊城・襄陽は他の領域に比べても異常なくらいの差があります。ですから私達が城を任された際には直ぐに同盟、もしくは曹操さんと同じように不可侵の約束を取り付けることが良いと思います」
「４大将軍に４軍師…それに兵力が確か以前まででも５００００００はあったそうだな」
「はい、それに他にも有能な将や文官も揃っていますし、軍師金や兵糧のことも殆ど問題なく調達することが出来ます。相手にすれば確実に負けるでしょう」
「つまり…どういうことなのだ？」
「（ガクッ）　り、鈴々ちゃん？　少し黙っていてね？」
「分かったのだーー！！」

鈴々は何処かに走って行った

「コホンっ。さて…とりあえず咲夜殿には一定の距離を保つということでいいですか、桃香様？」
「……（ボー…）」
「と・う・か・さ・ま？」
「Σえ、な、何！？」
「？　どうかされたのですか、桃香様？」
「んっとね…ちょっと咲夜さんのことを考えていたんだけど……その、ね。な、なんだか咲夜さんのことを思い浮かべると……そ、その／／／」
「…（なあ朱里、これって…）ヒソヒソ」
「…（た、多分…愛紗さんの思っている通りだと）ヒソヒソ」
「（ま、拙くないか？）ヒソヒソ」
「（と、とりあえず今は気付いていない様ですし…黙っておくほうがいいかと）ヒソヒソ」
「？？？　二人して何を話しているの？」
「「な、何でも有りませにょ？！」」
「？？？」

咲夜…地味にフラグ建設
それが死亡フラグなのか…ただの恋フラグなのか
それを知る者は誰もいない

↓曹操陣↓

「やはり咲夜は現在最も警戒する必要のある人物ね」
「華琳様、劉備も今はまだ力無き物ですが、武将には関羽と張飛、そして軍師には伏龍と謳われている諸葛孔明が居ます。私は劉封よりも劉備の方が華琳様の覇道を阻害するものになると思いますが」
「桂花、それは分かっているわ。でもそれよりも恐ろしいのは咲夜が敵に回った時よ。劉備と異なって咲夜は名声に兵力、そして有能な将と軍師が揃っている。今の私たちでは敵わないわ」
「その面なら既に不可侵の約束を取り付けてありますし…問題はないかと」
「そうね…でも秋蘭、物事には絶対なんてないのよ」
「…そうですね、申し訳ありません」
「だから一番いいのは咲夜をこちら側に入れることなのよ」
「それは難しいのでは？」
「そうね稟。普通のやり方ならあいつは懐柔なんてされないでしょうね。でも普通じゃないやり方ならどうかしら？」
「…華琳様、それはもしかして…」
「ええ、あいつとの間に子供が生まれてしまえばいいのよ」
「「「な、なんだってーーーー」」」

無茶苦茶過ぎる…

「まあそれは冗談よ。一応は有効な手ではあるけどね」

「そ、そうですよね…」
「まあ兎に角、あの劉封がこちらに入ってくれるようになればよし。ならなければ我が覇道を脅かすものとして見なければならないわ」

それから各陣営で話し合いが行われていた

その頃、咲夜はというと…

「えっと…とりあえず凪は氣が使えて身体能力もそれなりにあるから…烈風拳入れるとして…ライジングタックルとか疾風迅雷脚とか飛燕疾風脚、後ネタとしてＫＯＦのザキさんのヤキ入れとか教えてみようかな？」

…何やらいらないことを考えていたようだった

「後は…とりあえず体を軸として、身体全体を使った技と合気道とかみたいにカウンター主体で力を殆ど使用しない技とかも教えるといいかなぁ」

サラサラっと木簡に記していく咲夜

「やれやれ…とりあえず凪のはこれでよしっと…次に纏めるのは桃香の分だな」

咲夜は自身の仕事をこなす序に二人のために色々と考えたものを木簡に書き記していった

その夜、各天幕では明りが全く消えなかったそうだ

第六話（後書き）

オリキャラ紹介は纏めて後日

第七話

「凪、そこから右に回し蹴りした後、周りを目で瞬時に確認」
「はい！！」
「（パンッ）甘い！　足だけで蹴らない！！　身体全体を使う」
「はい！！」

今現在、咲夜は凪に教えられるだけの格闘技を伝授していた
幸いといっても良いのか、凪は基礎の面ではほぼ合格ラインに達していたので直ぐに技を教えることが出来ていた
今は強者との戦いを意識した対スピード型の裁き方を教えている

「ハァ…ハァ…」
「よし、前よりも良くなっているね」
「はい！！　ありがとうございます！！」

凪との訓練は早朝に取り行い、その後朝食を取り、進軍
そして夜になると咲夜は自身の天幕に桃香を招き、自身の知識を教えられるだけ教えていた

「あの咲夜さん。ここは？」
「ああ、これは需要と供給の問題だね。これはね…」

念のため、何が起こっても対処できるように兵５０に自分の周りを見回って貰うことにしているみょんなところでチキンな咲夜だった

そんな調子で進軍して２０日が経ったある日…

「伝令！！　これより先に孫の旗印あり！！」

先方させていた見張りが急いで咲夜の元にやってきた

「孫の旗…ってことは紅蓮さん達かな？」
「恐らくは～」
「さて、どうする「報告！！」……何かな？」
「ハッ！！　曹操様より『今から孫堅と会談するから来なさい』とのこと！」
「……また面倒な事になりそうな予感」
「お兄さん、お疲れ様です～」
「ハァ～～…仕方ないか、じゃあ雛里と焔耶。付いてきてくれるかな？」
「「御意（です）」」

何だかんだ言っても咲夜は基本的優しい上にフェミニストなため大抵の要求なら飲んでしまうのだった

だが咲夜はそれを後ほど後悔することとなった

「……」
「あ、あの…咲夜様？」
「…ゴメン雛里。帰っても良いかな？」
「え、えっと…」
「…それに同意したいところだけど…出来ないだろうね」
「デスヨネー」

孫堅ら一行と会うために用意された天幕…
そこからは並々ならぬ怒気や殺気を感じ取った咲夜達
その気配は周りに居た者たち皆を怯えさせていた

周りの状況を察するにどうやら孫堅と曹操は既に天幕の中に居るようだった
だが咲夜は入ることが出来ずにいた
何故なら頭の中でずっとアラートが鳴り響いていたからである
入ったら後悔する、絶対に後悔するだろうと…

とりあえず咲夜は心の中でだが強く思った

———帰りたい…平和で静かな樊城に戻りたい…

と…

だが現実は非情である

「いつまで私達を待たせる気かしら、咲夜？」

どうやら咲夜のいたことに気付いていた華琳が天幕から顔を出したようだ

「あ～…すいません」

「まあ良いわ。さっさと入りなさい」
「……はい」

咲夜は諦めて天幕に入った瞬間、その天幕に居た全員に鋭い視線を向けられた

「……（え、何この視線？）」
「久方ぶりじゃのう、咲夜」
「あ、お久しぶりです紅蓮さん」
「やっほ～♪　会いたかったわ、咲夜」
「あ、雪蓮も居たんだ」
「そうよ～♪」
「冥琳も久しぶり」
「ああ」

呉組と久しぶりの再会を果たし、一人ずつ挨拶した咲夜
その天幕に居るのは孫堅、孫策、周瑜の三人だった

「蓮華や思春は？」
「ああ、あの二人には今は陣の守りについてもらっている」
「ふ～ん、なら後で挨拶に行った方が良いかな？」
「ああ、そうしてくれると有難い」

とりあえず咲夜は挨拶して回った後、空いている場所に座ることにした

桃香達も既に天幕内に居て既に用意された場所に座っていた

座っている状況を説明すると…
スクエア状態で咲夜達が華琳達と向き合い、桃香達が紅蓮達と向き合っているという状態だ

「さて…先程までの話はまたあとで話すということでいいわね」
「はい！！」「ああ、よいぞ」

「あの～…先程の話って何のことですか？」

咲夜が恐る恐るそう聞いた瞬間…先程まで天幕を覆っていた気配が復活した

「…咲夜、聞いていいことと悪いこと…あるわよね？」
「はい！！！　すいませんでした！！！」
「…咲夜、空気読め」
「すいません…もう聞きませんから許して下さい」
「……」
「…無言でこっちを見ないでください桃香さん。地味にきついです（泣）」

といった感じで流されてしまった咲夜だった

「コホンッ。それでは再開するわ」
「…今日は何を話すんですか？」
「ああ、それなんだけど実はこの近くに黄巾党の大部隊が集結している場所があるという情報が入っていたのは忘れていないわよね？」
「あ～、そう言えば先日制圧した衢地は黄巾党の兵糧を蓄えていたところだったね」
「ええ、敵もそれでかなりの打撃を受けているという情報もあるわ」
「まあ数が数だからねぇ」
「儂らもその情報を聞きつけ、この地に赴いたのじゃよ。こういった戦いは根底となるものを潰さねば鼬ごっこじゃからな」
「そこで私が考えたのは私達魏と咲夜の襄陽樊城軍、劉備の義勇軍、そして孫呉の同盟を結び、その大部隊を破るということよ」
「……ふむ、確かにそれは効率的だな。それに…その大部隊の中に敵の首領である輩もいるという情報も入っている。上手くいけばこの乱を鎮めることが出来るな」
「咲夜、劉備。貴方達はどう思うかしら？」
「私は賛成です。この乱を鎮めることが出来るのならこれ以上のことはないと思いますから」
「……ふむ、反対する理由もないだろう。戦力は多ければ多い方がいい。何せ相手はこちらよりも遥かに多いからな」
「それじゃ全員賛同ということでいいわね」
「ああ」「はい」「うむ」
「では次にこれからの行動を決めるわ」

「とりあえずその場所に進軍しつつ、情報収集するというのは確定だな」
「ええ、次に…」

咲夜、華琳、桃香、紅蓮の四人はどんどんと話を進めていった
時に軍師として一緒に居た雛里、桂花、朱里、冥琳も話に混ぜながら次々と必要な事柄を決定し…

そしてそれについていけない焔耶や愛紗ら武官たちはその時ばかりは空気と化していたのは余談である

それから幾時かの時間が過ぎていき…

「ふぅ…これで大体のことは決まったかしら」
「そうだな、後は敵さんの動きを見てから決めないとな」
「ふぇ～…疲れましたぁ」
「…とりあえず話すことは話したんで少し休息取りますか？」
「…いえ、今日はこれ位にしておきましょうか。こっちはこっちでまだまだ話したいことがあるのよ」
「「！！！」」

華琳のその言葉を聞いた瞬間、少しだけだらけていた桃香と紅蓮が物凄い反応をした

「…え、ええと……なら俺は退出した方がいいですか？」
「ええ、そうして頂戴」
「な、なら紅蓮さん。ちょっとそちらの陣に挨拶に行っても良いですか？」
「ああ、一応先に連絡に行かせておこう」
「助かります」

こうして咲夜は半強制的に天幕から追い出され、何故か雛里と焔耶はその場に残ることとなった

「…何かここ最近一人での行動多くなったなぁ」

…普通、君主が一人になるなんてこと、有り得ないと思う

「まあ良いか♪　とりあえず蓮華たちに挨拶に行かないとな」

閑話休題

さて…一方でこちらは華琳達のいる天幕

「…さて、咲夜も居なくなったことだし……続きを話すとしましょうか」
「…そうですね曹操さん」
「ああ、この際だからきっぱりと決めようじゃないか」

目から火花が飛びだしそうな勢いでにらみ合う三人

「あ、あの～…一体どんな話を？」

それを見かねて雛里が恐る恐る聞いてみた

「コホン。先程まで私と劉備、孫堅が言い争っていたのはどうやったら咲夜を振り向かせることが出来るかについてなのよ」
「……はい？」
「そ、それはどういう？？？」
「あら、分からないかしら？　咲夜はその辺の男とは違ってかなり優良株よ。料理が出来て、頭が良くて、噂だと呂布にも負けずとも劣らないと言われている。なら、女として傍に置きたいというのは当然のことでしょ？　それに今の時代、咲夜の力は絶対に必要となってくるでしょうしね」
「「！！！！」」

最初こそいきなりのカミングアウトに混乱していた雛里と焔耶だったがその場にいた大半の人の顔をみた瞬間、それが冗談ではないことを理解した

「ふふふ、言わずとも私は咲夜のことを狙うわよ」
「ッ…わ、私だって！！」
「くはははははっ！！　儂とてあやつなら雪蓮や蓮華、それに小蓮を任せられると思っておるわ。だからこそ、あ奴に儂の娘の誰かを継がせようと考えておるのじゃが…」
「しょ、しょれは確か咲夜様がお断りした筈でしゅ！！」
「あら、そうなの孫堅？」
「まあのう、じゃがそれだけで諦める儂じゃないわい」

暫くの間、天幕内では咲夜のことが話されることとなった…

ゾクッ…

「な、何だろう…凄く嫌な予感がする…」

蓮華と思春のいる陣に行く途中、妙な寒気を感じた咲夜
だが、それが予感ではなくいずれ現実となることであったということを彼は今は知らない

再び、華琳達のいる天幕にて…

「ふぅ…このままだと水掛け論になりそうね。結論はまた今度ということにしようかしら」
「その方がいいと思われます」
「ああ、それに…一番肝心な咲夜様が…」

「「「「「「「「「「ああ、そういえば…咲夜（様）って滅茶苦茶鈍感だし…」」」」」」」」」」

「はくしっ！！」
「だ、大丈夫か？」
「…風邪ですか、咲夜殿」
「いいや…多分誰か噂してるんだと思う」
「そうなのか？」
「まあ経験上、俺の勘って結構当たるからね。（ずず…）あ～、久しぶりにゆったりした感じがするよ」
「…大変なのだな」
「それはお互い様でしょ、思春さん。それより…（ガサゴソ）っと、あったあった。これ、俺の書いた新作なんだけど、いるかな？　まだ発売前のやつだよ」
「い、いいのか！？」
「まあ友好の証にね」
「感謝する！！　蓮華様！！！」

「あ、ああ。分かった思春。暫し、抜けてもいいぞ」
「ありがとうございます！！」

そう言い残すと思春は消えるような速さで駆け抜けていった

「あ、あはは…」
「思春さんが俺の書いた本を愛読してくれてるのは以前の訪問で分かってたことだけど…ここまで好きになってくれてたんだなぁ」
「まあ咲夜の書く本はどれも面白いから分かるのだけれど…思春は異常なくらいに嵌まっているのよ」
「…まあ作者からしたらこれ以上ない位に嬉しいことですけどね」
「所で先程渡した本はどういった物なのだ？」
「今回の本は恋愛の話ですね。一人の女性に複数の男性が恋をしたり、愛ゆえに苦しみながらもその女性がその内の一人を好きになって行くという話ですよ」
「…いいわね、私も後で読ませてもらおうかしら」
「ええ、是非後で感想を聞かせてくださいね」

ゆったりとした空間を蓮華と一緒に堪能した咲夜だった

それから幾日の間…咲夜は桃香、華琳、紅蓮の軍と進軍を共にし…ついに黄巾党の大部隊を接触することになった

「…これは壮大ですね」
「人がゴミの様ね」
「…（ム○カ！？）そ、そうですね」
「報告によると敵の数は２０万だそうだ」
「かなりの数ね…これなら確かに敵の首領が居ても不思議じゃないわ」

桃香、華琳、咲夜、紅蓮、雪蓮の５人は護衛を引き連れて敵の様子を確認し終えた後、立地の良い場所に陣を構え、早速作戦会議を開くことにした

「敵陣の詳しい情報が入ったわ。どうにも向こうは兵法皆無といった所で適当な状態でいるみたいね」

「…これは酷い」
「そうですね…ここまで酷い陣は久しぶりに見ましたね」

軍師である桂花、稟、風が冷静に突っ込んだ

「向こうは元は農民です。数は多くとも学のある人物はそうはいないのでしょう」
「ふむ…ならば後は向こうの将を担っている者を打ちとって行けば総崩れになるのでは？」

同じく、軍事である雛里と冥琳が補足を加えた

「ならばまずは敵陣内の将の配置を把握した後に、それぞれの割り当てを決めなければなりませんね」

最後に朱里が補足した

「…荀？、郭嘉、程？、鳳統、周瑜、諸葛亮…これだけ有能な軍師が勢揃いしているのは凄い光景なんだろうな」
「ふふふ、そうね」

軍師が方針を提案し、それを咲夜達で相談しあって…

「ではこれより敵、黄巾党殲滅作戦を説明する。司会は俺、咲夜とその補助役として雛里が担当する」

「よ、よろしくでしゅ／／／」

全員を集め、軍師達が考え、国主が決断した策を話すトキになった

「まずはこちらに入っている黄巾党軍の将についてです。まず首領

である張角、張梁、張宝。この三人は余程厳しい警備が敷かれているので顔が割れていません。ですが、他の将についてはかなりの情報が入っています。まず名前だけ挙げると…馬元義、波才、張曼成、韓忠、孫夏、趙弘、卜己、楊奉、韓暹、劉僻、程遠志、？茂がいます」

「…そう聞くと流石に将の数が多いのだな」

「でも将の質はこちらの方が上です」

「そうね、まあ当然のことよ」

「次に敵の陣と数についてです。皆さんももう既に知っているとは思いますが黄巾党は総勢２０万を超える数です。布陣は主に2か所。1か所は背後を断崖の絶壁が守る形を取っているここ」

雛里は広げられた地図を咲夜特製の指示棒を使ってその場所を指し示した

「そして二つ目の陣は一つ目の陣よりも少し離れた場所にあるここです」

次に雛里が指し示した場所は山の上にある場所

「数はそれぞれ１０万ずつ配備されているようです」

「ここまでで何か質問はありますか？」

咲夜がそう尋ねると春蘭が手をあげて

「なぜわざわざ陣を二つに分けているのだ？　一つにまとめた方が良いと思うのだが…」
「それは二つ目の陣には兵糧が蓄えられてるんだよ。加えて、少し前に俺達が敵の衢地を制圧したことを踏まえているのか兵糧は別の所にあるみたい。加えて防衛のしやすい山の上にしたって感じかな」

春蘭の質問に咲夜がサラッと答え、その後、咲夜は雛里に話を進める様に目で指示した

「それ故に策はまずこの兵糧の蓄えられている陣を攻めることから始めます。まず、荷駄隊に偽装した兵１，０００を先行させます。怪しまれない様に５０００の兵を護衛に付けます。恐らく、これに釣られることでしょう。彼等は確かに兵糧は持ち合せていますが長くは持たない量ですから。その為、この餌に必ず食いついてきます。そして荷駄隊は敵を釣りながらこの位置に移動します」

雛里が指し示したのは道が狭くなっている道筋
その図から縦にならんで十数人程度しか同時に通ることしか出来ない狭い道である

「荷駄隊がここに逃げ込んだ後、峡谷上から弓兵と落石部隊を動かし、敵を殲滅します。その後、陣に戻ろうとする残兵を伏せ兵部隊によって打倒します」
「その後はどうするの？　荷駄隊を追いかけて逆に殲滅させられたなんて情報が敵に渡ったら敵は守りを固めてしまうでしょ？」

華琳は何やらニヤニヤとしながら咲夜と雛里に問いかけた

「…華琳も分かってるだろうに。まあ他の人にも分かる様に説明すると…敵はすべて殲滅させるわけじゃない。数名は残して敵陣に態と逃がす。その際に、俺の軍にいる偽装工作や変装などの特化した奴を敵陣に送り込む。勿論、黄巾党に偽装させてな。その際に使うのは火薬だ。偽装させた兵の服の中に火薬を仕込ませてそれを敵の陣の至る所に仕掛けさせる。幸いにも今は空気が乾燥している時期だから火の手は回り易い。俺の予測だと明日は少し強めの風が吹くようだしな。仕掛けが終わり次第にこちらから仕掛け、火矢を射る。そして外に出てきた連中を討つ」

「その際、もう一方の黄巾党軍がいる陣にも火の手が上がったのが見えるはずです。そうなれば彼等は慌てて向かってくるでしょう。その際に、いくらかの兵を伏せておき、奇襲を仕掛けます。そして、可能ならばその部隊は全滅させます」

「後はその都度臨機応変に対応すればどうとでもなると思うけど…とりあえず簡単に言うと相手は雑兵に等しい上に数だけ多いのだから、その利点を逆手にとる策をとれば勝てるってわけ」

結果として、連合軍の勝利に終わった
黄巾党軍は策にハマり、将は次々と咲夜達に討たれていき、兵も次第に混乱を極め、散り散りになりながらその数を減らしていった

そして敵の兵糧庫は勿論のこと、今現在、敵の本陣は火の海に包まれていた

本陣に攻め込む際、曹操軍は正面から、孫堅軍は左翼から、そして劉備及び劉封軍は右翼から本陣に向かって行った
劉備軍と劉封軍が一緒になっているのは劉備軍の兵数が極端に少ないためである

「さてと…後の敵さんはどこかな」

劉封こと咲夜も１０００の護衛と焔耶を引き連れ、向かってくる敵

を次々と打倒していった

「咲夜様！！　危険ですから少しは自重して下さい！」
「そうは言っても敵の大将、張角、張梁、張宝を捕えないとまた大乱が起こる可能性がある！！　だからこそ、今少し無茶をしてでも探さないと！！」
「…それはそうですが」
「秋葉、風、雛里のほうはどうなってるか分かるか？」
「そちらは私達とは別のほうに向かっているようですが…約４０００も引き連れさせて良かったんですか？　半々にした方が良かったと思うのですが」
「秋葉達のほうは逃げていく賊兵たちが多かったからね。それにここなら華琳さんや桃香にみられないだろうし…少し本気を出しても問題ないだろうしね」
「…ハァ、仕方ないですね。って…あれは？」
「ん？」

咲夜と焔耶が見つけたのは火の海の中から逃げようとしている三人の女性
その後ろには数名の黄色い頭巾を付けた男達

「咲夜様！！　あれは黄巾党に捕まっていた人たちでしょうか！？」
「……分からない、とりあえず保護しよう」

咲夜はそのまま焔耶と１０００の兵を引き連れ、黄巾党の残党兵に

向かって行った

「な、なんだ！？　こ、こんなところにも官軍が…」
「く、くそっ！！　てんほーちゃん、早く逃げてくれ！！」
「ちーほーちゃん！！　愛してる～～～～！！！」
「れんほうちゃん！！　デレてくれーーーー！！！」

三人の女性を追っていた輩が咲夜達に向かってきた
だが…

「フンッ！！」
「はぁ！！！」

ザシュッ…
グシャッ…

咲夜の戦斧で体を真っ二つにされ、焔耶の鈍砕骨でぺしゃんこにされ、向かってきた男達は直ぐにあの世へと旅立っていった

それを確認すると咲夜は周りの警戒を兵たちに任せ、自身は焔耶と共に先程まで逃げていた三人の女性たちの元にゆっくりと歩いてい

った

「…大丈夫か？」
「は、はい！！」
「…混乱しているかもしれないがいくつか聞きたいことがある。いいか？」
「…それには私が答えます」

二人の女性を庇うように眼鏡を掛けた一人の女性が前に立ち、咲夜に向かいあった

「…そうか、ではまずどうしてここにいる？　ここは黄巾党達の集う場所だ」
「…連れていかれてきたんです。それで火の手が上がってきたので私は姉さん達を連れて逃げようとしたのですが、追手が来て」
「へぇ…官軍が攻めて来て、しかも陣に火の手が上がっているのにもかかわらずタダ連れて来られたという君達三人を追うなんて…奇妙な事もある物だね」
「っ……あ、あの人たちに随分と気に入れられていましたから」
「成程成程…でもさぁ、俺はさっき切り殺した男達を見て、こう思ったんだよ。…こいつらは君を逃がそうとしたんじゃないかって」
「…どうしてそう思ったのですか？」
「それは君達が張角、張梁、張宝だからじゃないのかな？」
「「「っ！！！？」」」

それを言った瞬間、三人が凍りついたように見えた

「？　咲夜様、この三人が黄巾党を率いていたっていうんですか？」
「可能性は高いだろうね。まあ黄巾党の捕虜は何人か捕えているだろうから、その人たちに顔確認させれば大丈夫だろう」
「ならば捕えますか、この三人」
「逃げようとしなければね」

眼鏡を掛けた女性が一番早く、冷静になり咲夜に再び顔を向けた

「…私達を捕えて……どうするんですか？」
「本来なら打ち首だろうね。これだけの大乱を引き起こす原因を作りだしたのだから」
「そ、そんな…」
「ち、ちーたちはただ歌いたかっただけなのに！！」
「し、死にたくないよ…」
「ふざけるな」
「「「！！！」」」

文句しか言おうとしない三人に咲夜は静かにキレた

「歌いたかっただけ？　死にたくない？　そんなので自分達がやってきたことの罪をなくせるとでも思っているのか？」
「だ、だって…」
「確かに君達三人はただ単に歌いたかっただけなのかもしれない…だけど、君達が原因でこのような大事態が起こったのも事実だ。違うか？」
「……」
「それよりも何よりも君たちだって気付いていたはずだ。拙い状況が起こっていると」
「…」
「沈黙は肯定と見るぞ。それが暴走する前に君達には幾らか対策も取れたはずだ。例えば、黄巾党になった輩の暴走を止める努力をするとか一時期歌ったりするのを中止して、時間をしっかり空けた後、再び歌うとかな」
「そ、それは…」
「つまりは君達が考え無しにただ自分のやりたいことをやって、その内に周りが自分たちが制御できなくなる位に大きくなり、そして暴走してしまった。それだけだ」
「「「……」」」
「故に君達は償わなければならない。君達の罪をな…。この大乱だけでどれだけの人間が死んでいったと思う？　どれだけの無関係な人々が苦しんでいったと思う？　それらを理解したうえで君達は文句を言っているのだろうな？」

三人はそれ以上何も言えなくなってしまった
今まで目を逸らしてきたことが余りにも過酷で…あまりに残酷な事だったから…

「ふぅ…さて他に何か言いたいことがあるか？」

咲夜はそれだけ言うと一息つき、三人を見据えた

「……なら私達は処刑される…ということですか？」
「漢王朝ならそういう処罰を下すだろうな。だけどさ、君達が死んだだけで問題が解決すると思うのか？」
「え…」
「悪いけど俺は君達三人が死んだ程度では何にも解決しないと思うよ。精々、君達三人の首を帝に献上して権力を手に入れるくらいしか価値はないね。まあ俺はそういうことに全く興味はないけど」
「じ、じゃあ…私達は……どうすれば」
「生きろ」
「「「え…」」」
「生きて償うことだ」
「どういう意味ですか？」
「死は逃げ、生は苦しみ。それが咎人に与えられるものだ。だから君達は生きて君達の罪を償え。その為の手助けは少ししてやろう」
「「「え…」」」

それだけ言い残すと咲夜は焔耶にその三人を自身の陣に連れていくように命を下し、自身は一人、周りを警戒していた兵たちを纏めるためにその場から離れて行った

「え、えっと…さっきの言葉はどういうことですか？」

眼鏡の女性が焔耶におずおずと尋ねた

「知るか。咲夜様には私達には分からない考えがあるのだろう。お前たちはただ私についてくればいい…だが、もし逃げようなどと考えれば…今ここでその命を絶ってやろう」

自身の武器をしっかりと持ち、三人に見せつけると三人は真っ青な顔をしながら首を縦に振り、焔耶の後をしっかりと付いていった

こうして黄巾党の乱は静かに終わりを告げていった

第七話（後書き）

相変わらずクオリティ低し…

第八話（前書き）

今回はかなり短めです
書きたいことが少なかったのと、次への伏線というか…
次章への繋ぎのようなものですから

第八話

黄巾党との戦いが終わった直後、咲夜は張三姉妹を自身の天幕に連れてくるようにと焔耶に指示した
そして秋葉と風に周りの見張りの手配とすべての話が終わるまで誰も近づけないようにさせた

やがて顔を真っ青にした張三姉妹が連れて来られた

その場に立ち会うことになったのは焔耶・雛里の二人
この二人を選んだ理由はまず雛里は普段はあわわ軍師などと言われているが、こういった時はきちんとした判断を下すことが出来るためであり、尚且つ風は丁度事後処理の担当だった為、不参加となったのだ
次に焔耶をその場に留めたのは軍師でも国主でもない軍部にいる焔耶からの意見を聞くためである
因みに秋葉は風と同じく戦後処理の担当のため不参加

咲夜の天幕は自身が選んだ３０の兵で覆われており、張三姉妹には完全に逃げ場はなく、更に誰も近づけない様になっている

そんな中、いよいよ咲夜の話が静かに始まった

「さて、自分の立場は良く分かったね」
「「「……」」」

三人は未だに顔色を悪くし、俯いたままだった

「ふぅ、話が進まなそうだからさっさと用件だけ言おうか。俺や雛里、焔耶も今は忙しくなりそうな立場にあるしね。まず第一に先程、俺は君達に罪を償うための手助けをしてやるといったね。だがその前に君達に選択肢をあげるよ」
「選…択肢？」
「ああ。一つ目はこの場で打ち首にして自分の罪から逃げ、曝し首にされること」
「「「っ！！」」」
「二つ目は既に張三姉妹は我が軍が討ちとったことにし、君達は名を捨て真名のみで生き、俺の元で働くこと」
「「「……」」」
「三つ目は二つ目とほとんど同じだけど、俺達の保護を受けず三人だけで下野すること。ただ、そうなったら他者の前で一切歌ったり踊ったりすることを禁じる」
「そ、そんな…」
「言っておくけど、選択肢を与えただけでも寛大だと思うぞ？　他の太守何かに捕まってたら、出世のための糧にされるか…性的な意味で食いものにされるか」
「「「っ！！？」」」
「そうですね…でも咲夜様、いいんですか？」
「…雛里、言いたいことは分かるがそれはこの三人との話が終わっ

たらにしてくれ」
「……分かりました」

雛里はそのまま何か言いたそうだったが、咲夜に頼まれその場では黙っていることにした

「焔耶は何かあるか？」
「いえ、私は特にありません。ただこいつらが咲夜様の害になるのであれば即処分しようと思っている位です」
「そうか」

「…一つ、聞いてもいいでしょうか？」
眼鏡を掛けている子がおずおずと聞いてきた

「何だ？」
「…その…二つ目の選択肢を選んだ場合、歌うことは出来るんですか？」
「暫くは駄目だが、情勢が落ち着き、尚且つ三人が十分に罪を償えたのではないかと俺が判断出来たら許そう」
「…分かりました、なら二つ目の選択肢を選ばせて下さい。ねーさんたちも…それでいいよね？」
「……うん」

「…分かったわよ」

ロングヘアーの子は悲しそうに…ポニーテールの子は少し不満げにそれを承諾した

「なら今から君達は名を捨てること。今から真名のみで生きてもらうから。分かったね？」
「「「はい…」」」
「じゃあ一人ずつ教えて」
「…私は天和です」
「…ちーは地和だよ」
「……人和です」

「ん、なら暫くは君達は見張りは付けさせてもらうからね。雛里、何人か女性で選んでおいて」
「了解しました」

そうして天和、地和、人和の三人は用意された天幕に連れて行かれた

「…ふぅ」
「…お疲れ様です、咲夜様」
「お茶をどうぞ」
「ああ…ありがとう」

三人が離れたことを確認すると咲夜は深く溜息をついた

「……可哀想だけど、彼女たちはああするしかなかったんだよな」
「…咲夜様」
「あの子達は本当にただ純粋に歌って踊っていたかっただけだったんだろうけど…時期が悪かったんだろうね」
「はい…平和な時代であるのなら彼女たちがこうなってしまうことはなかったのでしょうね」
「…そうだな」

咲夜も好きであのような厳しいことを言ったわけではない
だがあそこでああ言わなければ彼女たちはまた同じ過ちを繰り返してしまうかもしれないそうなればまた多くの人たちの命が犠牲となってしまう
そうなることを防ぐため、そして彼女たちの行動によって起こった乱の被害と彼女たちの罪をちゃんと認識させるためにあえて厳しく接したのだ

「…さて、彼女たちはもう我が軍で助けると決めているからね。変わりは用意してあるしね」
「変わり…ですか？」
「雛里、さっきこっちで幾人か元黄巾党軍所属の兵に秘密裏に通達しておいたんだが…こう言う考えはどうだ？」

ヒソヒソ…

「…いいと思います。ですが何人かはそれが嘘であることに気が付いてしまうと思いますよ？」
「いいよ、それぐらいは承知の上だ」
「…分かりました」

後日…

咲夜は風、雛里を連れて華琳の陣に向かっていた
というのも黄巾党の頭である張角、張梁、張宝は咲夜と焔耶が討ちとったということになっていたからである
その為、咲夜は三つの首が入っている桶を三つ持ち、会合に参加することになったのだ

咲夜達が陣に入り、一つの天幕に案内されると既にその場には桃香、朱里、華琳、桂花、紅蓮、冥琳が居た

「すまない、待たせてしまったか？」
「いいえ、それほど待ってはいないわ。それよりも貴方が首領を討ちとったと聞いたわ。それは本当なの？」
「それが…どうにも分からないんだ」
「？　どういうことですか？」
「皆、首領である張角、そしてその血族である張梁、張宝の三人の顔。誰か一人でも知ってる？」
「…知らないわね」
「知らんな」
「知りません」

華琳、紅蓮、桃香の三人が咲夜の言いたいことを理解し、咲夜は説明を続けた

「というわけでこちらとしては黄巾党軍の捕虜にそれらしい連中の首を見せて確認させることしか出来ないんですよ」
「…成程ね。それで？」
「とりあえず捕虜たちの声を聞いた結果、これらがその首領だそうです」

そうして出したのは首の入っている桶
勿論蓋は閉まっている

「確認させてもらうわ」

「どうぞ」

華琳・紅蓮は普通に、桃香は少し嫌そうに桶に入っている首を確認した

そこに入っていたのは何やら髭面で顔中に傷があるというのだけが分かるのだが、目や鼻などの至る所が重度の火傷であるために少々判別がしにくくなっていた

「…本当にこれがそうなの？」

「仕方ないだろう？　あれだけ多くの火を使ったんだから。鎮火した後の死体となれば、これでも状態は良い方だと思う」

「…まあそうだな。では今回は咲夜が敵の総大将を討ちとったということになるのかの？」

「いや、この場にいる全員で討ちとったんでしょ？」

「「…は？」」

「だって今回のこの戦い、どれか一つの部隊でも欠けていたらもっと苦戦していたかもしれない。更には華琳さん、紅蓮さん、桃香、俺たちの中の一つでも参戦していなかったらこの戦いもどうなっていたか分かったもんじゃない。だからこそ、この勝利は皆で勝ちとったものだと俺は思うのだけど」

「……まあそういう考えもあるのだろうけど…」

「ふむ…」

「まあ朝廷には率直に伝えればいいじゃないですか？」

「…そうね、そういうことにしておくわ」

何やら含みのあるような顔をして華琳は咲夜を見据えた

「さて、じゃあこれで連合軍は解散ということになりますね」
「いえ、このまま洛陽に行くことになるわ」
「あ～、成程。でも俺はあまり行きたくないですねぇ」
「え？　爵位や恩賞は……ってそういえば貴方はそういうことに全く興味がないのね」
「ええ。ハァ…でもどの道呼び出されそうですし…仕方ないか。一部の部隊のみ引き返させることにしますか」

それから咲夜は仕方なく、半分の兵を雛里、焔耶に任せ、張三姉妹は厳重な監視の元、その部隊に入れ、襄陽に送ることとなった
咲夜のほうは風と秋葉を連れて仕方なく、洛陽に行くこととなった

そして洛陽に辿り着き…
桃香は新野の城の太守になった
そして華琳、紅蓮もそれぞれ相応の報酬を貰うこととなった
だが、咲夜のみそれを拒否した

だが、霊帝やその周りにいた者たちもそれを少しも不信とも思わなかった
何故なら、咲夜は今までもこういったことがあっても殆どそういう物を受け取らなかったのである

そして一時的な連合が解散されることとなり…皆それぞれの土地に戻ることとなり

「師匠…」
「凪、これを渡しておく。これにはお前の力を引き出す為の訓練方法が書かれている。自身の仕事がない時、必ずこれに従って自らを鍛えておくこと。今度会う時、どれだけ成長しているか…楽しみにさせてもらうよ」
「はい！！！」

本当に短い期間だけだったが師弟関係を築いていた凪（半泣き）と咲夜は一つの約束を交わし…

「今回の戦、貴方と一緒に戦えて私も得る物があったわ。感謝して

おこうかしら？」
「あ～、まあこっちもそれなりに楽しかったよ」
華琳とは少し腹の読み合いをし…
「…咲夜よ。今度、荊州にいる邪魔者のことを話したいのじゃが」
「…分かりました。近いうちにそちらに使者を送ります」
紅蓮とは密約を交わし…

「咲夜さん！　新野って樊城から近いですよね！？」
「あ、ああ…そうだね」
「だから落ち着きが出来たらそちらに行ってもいいですか？　また色々と教えてもらいたいんです！！」
「……か、考えておくよ」
「前向きにお願いしますね♪」

咲夜は相変わらずというか…桃香にタジタジ状態…
やはり苦手意識があるのか…それとも前世の記憶のせいなのか…
それは今は誰にも分からない

こうして別れを告げて、咲夜は風、秋葉と共に樊城へと戻って行った

その帰り道…

「…さて、風？」
「はい～。詠ちゃんから手紙は受け取っておきましたよ～」

洛陽に行った際、咲夜は序として詠から今洛陽における宦官たちの状況や月達の立場についてなどを纏めた書状を受け取っていた

そこには主に二つのことが書かれていた
一つ目は策略によって悪質な宦官たちへの偽情報を流したことで潰し合いが上手くいっていること
二つ目は最近、霊帝が病気気味のようでありとあらゆる医者たちが部屋を出入りしているということ

この二つの情報を得て、咲夜は少しだけだが嫌な予感を感じざるを得なかった
そして…それは少ししした後、現実の物となってしまう
そう…咲夜が知る忠志での出来事…

――――反董卓連合

第八話（後書き）

とりあえず原作通りにはいかないようにしたいと思います

番外編：襄陽での咲夜（前書き）

今回は５０００文字位ですね
いつもの半分位なのでちょっと反省しますＯＴＺ
少し早さが足りないような感じがしたので…早めに投稿を目指しました
その結果がこれだよ！！

番外編：襄陽での咲夜

番外編：襄陽での咲夜

洛陽から襄陽に戻った咲夜はそこにいた家臣全員に挨拶をすると、直ぐに自分の仕事を確認するべく、自身の仕事部屋に入って行った

かなり時間、黄巾党殲滅のために進軍していたために部屋にはかなりの量が溜まりに溜まっていた

「うわ～…これ全部俺の仕事ですか。見てるだけで軽く欝になるなぁ…」

文句を言っていても仕方がないため、とりあえず咲夜は目の前にある物をちゃっちゃと片付けることにした

「えっと…まずは」

「失礼します！！」

バタンといきなり扉が強く開かれ、仕事を始めようとした咲夜は思わず固まってしまった

ドアを開けたのは何やら少し焦っている焔耶だった

「ど、どうしたんだ？　そんなに慌てて…」
「咲夜様！！　帰ってきたのなら直ぐに私の所に来て下さいよ！！！　あの三人をこれからどうすればいいか分からなかったんですから！！！」
「あの三人……ああ、天和、地和、人和の三人だね」
「そうです！！」
「…ふむ、ならこの部屋に連れて来れるかな？」
「了解です！」

焔耶はそのままかなりの速度で部屋を出ていった

「やれやれ…これでようやく落ち着いて仕事が始められるかな」
焔耶が来るまで時間がかかると思って咲夜は再び、仕事を始めようとしたのだが…

ガチャッ

「失礼しま～す」

今度は風がゆっくりと扉を開けて入ってきた

「…焔耶の後は風か？　何か用か？」

「そうですね～、今後の動きの確認と洛陽で詠ちゃんから受け取った手紙の内容の確認、それから風が町で見つけた優秀な子を武官として推薦したいのですよ～」

「…前の二つはとりあえず雛里、麻理、燐花の三人も入ってもらおうか。残っている諸葛瑾、姜維、劉曄、董允、馬良たちはそれぞれの部署で一生懸命に働いて貰っているしね。で、最後の推薦したい子って？」

「はい～、じゃあ雛里ちゃん達を呼ぶ時に一緒に連れてきちゃいますね～」

「了解」

そうして風も部屋を後にしていった

「…中々仕事が始められないな…まあ今度こそ」

コンコン…

「…二度あることは三度ある、か。…どうぞ」

ガチャ

「失礼します、咲夜様」
「しつれいしま～す」

今度は紫苑に璃々ちゃんの二人だった

「ん、二人とも何か用？　取り急ぎの仕事は俺や風たちだけで紫苑達留守番組は今日は休暇のはずだけど？」
「ええ、ですから今日は璃々と一緒にゆっくりと買い物でも楽しもうと思ったのですが…」
「ねぇねぇ、しゃくやしゃま。今日は一緒に璃々とお母さんと一緒にあそびにいこ～よ」
「…え、えっとね璃々ちゃん。今日は俺は紫苑とは違ってやらなくちゃならないことが沢山あるんだ。だから…」
「い～～～や～～～～～！！！　あ～～～～そ～～～～～ぶ～～～～～の

〜〜〜〜！！！！」

珍しく、璃々が駄々を捏ね始めてしまった
しかも少し涙目でだ

「…う〜ん」
「申し訳ありません咲夜様」
「…よし、なら午後からにしないかな？」
「え？」
「今日はこの竹簡の山の片づけとちょっとした話し合いだけにして、午後から紫苑と璃々ちゃんと一緒にお出かけしてあげるよ」
「本当！？」
「ああ、約束するよ」
「わ〜〜い♪」

先程までの涙目とは裏腹に打って変わって笑顔になる璃々ちゃんに咲夜は…

「（この子っ！！　紫苑とはちょっと似てないかなって思ってたけど…こう言う所は本当にそっくりだっ…璃々、恐ろしい子っ…）」

という風に考えていたとか

「ほ、本当によろしいのでしょうか？」
「まあとりあえず重要な案件だけかたして、後は焔耶に指示を出した後に、風たちとちょっとした話し合いをするだけだから」
「…分かりました。あ、それから咲夜様に一言お願いがあるのですが…」
「？？？」
「今度、是非杏ちゃんとも一緒に出かけてあげて下さい」
「あ～、そういえば杏は今どうしてるの？」
「お料理の訓練中ですよ。自分の部隊の中にいる料理上手の子に色々教わっているみたいですね」
「へ～…努力家だね、やっぱり」
「ふふふ、咲夜様。是非、杏ちゃんの料理は一番に食べてあげて下さいね」
「ああ、今から楽しみだよ」

それだけ言い残すと紫苑は璃々を連れて部屋を出ていった

「ふぅ～、さて！！　ちゃっちゃと終わらせましょうか！！！」

それから咲夜はまさに疾風の如く、右手に筆を持ち、左手は確認必須の竹簡を確認しながら必要事項を書き記していった
大事な所には印を押し、即刻部隊や他の文官に回すべき物は直ぐに部下を呼んで届けさせた

そんな仕事をしながら、まずは焔耶が天和、地和、人和の三人を連れて部屋に戻ってきた

咲夜は仕事を片付けながら三人には基本的には給仕をして貰うことにした
そして手が空いている時は、人和には文官の手伝いを、地和には町に出回っている服専門書籍などの出回り具合や町中にある服専門店などの手伝いを、そして天和には寺子屋や孤児院で子供たちの世話係をして貰うことにした

そして厳重注意として絶対に人前で歌ったり踊ったりしないことを再確認させ、三人にはとりあえず少しのお金と三人それぞれの部屋を用意してあることを伝えた
それから三人には個々に町の案内役を付け、今日は一日町の様子を見て回っておくようにと確認させた

それぞれの面持ちをしながら三人はそれぞれの案内役と共に町へと歩いていった
残された焔耶は、咲夜の指示によって今度攻めるであろう荊州城陥落のために兵たちにそれを意識させた訓練を行わせるようにした

そして焔耶と入れ違いに今度は風たちが部屋にやってきた

風、雛里、麻理、燐花、そして咲夜を中心として今後の動きを検討し始めた
まず第一として攻めるべきは劉表のいるであろう荊州、そして兵糧などが多く蓄えられているという情報のある江陵

ここまでは以前から決まっていることだった
だからその後、どうするかを決めているのである

「それにしても悪いな。燐花に麻理。二人は俺達が帰ってくるまでの間、留守を任せっきりで忙しかったはずなのに」
「しょ、しょんなことありましぇんよ！？」
「そうね…忙しいとしたら馬鹿狸（劉表）から来る書状とか明らかに挑発としか思えない行動に対して備えたりとか…それぐらいしかなかったわ」
「それでもだよ。二人とも、ありがとうね」
「…別に良いわ。それよりも咲夜はどう考えてるの？」
「…まあとりあえず荊州と江陵は落とす。序にだけど荊州が落ちれば後は自動的に江夏、上庸、西城辺りは自動的にこっちの領土に入ろうとして来るだろうな」
「まあ江夏、夏口辺りは劉表の影響もあるし、それが消えてしまえば後ろを守ってくれる輩がいなくなるから当然のことね」
「でも上庸、西城辺りは領土に入ってもあまり意味はないんじゃないですよ～。逆にあの地を守るとなれば今度は劉障軍と戦うことになるかもしれませんしね～」

咲夜の考えを燐花と風が補足し、その問題点などをあげていく

「でもそれは殆ど心配いらないのではないかと思います。劉障は愚王と言われ、今治めている領地をほぼ放っておき、自身は女性と日々を過ごしているとか」
「税もかなり高く、民からも不平不満が募っている一方とか…」
「まあ確かになぁ。それに今の蜀って、主に呉懿、張任、法正、張松、孟達、李恢、李厳等に支えられて、外からの敵に対しては巴郡にいる厳顔という将軍が纏めているとか」

雛里、麻理は風の考えに対して自分の考えを答え、麻理もそれに同調し、咲夜も現在の蜀に対する情報をあげていく

「そういえばお兄さん、最近蜀から密使が来たということを耳にしたのですが…」
「……何処で聞いた？」
「影夜ちゃんからです。お兄さんが少し神妙な顔をしていたので気になったそうです」
「……ハァ、まあ確かにそうだな」
「？　どうしてそんなこと黙ってたの？」

咲夜の様子を見て燐花が不思議そうに聞いてきた

「…実はな、蜀の重臣の一人であるはずの張松からの密使だったんだよ」

「「「！！！」」」

「…ほぅほぅ。それで？　内容は何だったのですか？」

「…今蜀は、現益州王の腐敗した政治体制の影響で民は苦しんでおります。故に私と心通じ合う仲間が手はずを整えます故に蜀の地を得てはみませんか？…っていう内容だ」

「つまりは…蜀に進軍するならこちらは中から動くということですか…」

「それで…その…咲夜様は何とお答えしたんですか？」

「はっきり断った」

麻理の質問に対し、僅か０．５秒の速さで即答した

流石の四人もそれには少し驚いた

「わ、訳を聞かせてもらってもよろしいですか？」

「理由はいくつかあるが…（まあ孟達が居るのが絶対に嫌なんて言えないしな…それが第一の理由というわけではないけどさぁ…）まず第一に遠征するだけの軍備と兵と将が足りない。正規軍が現在約８万、今回の黄巾党の乱の際に捕虜としたうえで新たに軍に加えよ

うとしている兵が約3万、計約１１万となるわけだけど、まず樊城と襄陽に最低限でも兵は残すなら４万づつ。何故なら確実に俺達が遠征をするというのなら留守を狙おうとする輩がいるからだ。第二に、いくら張松などがこちらについたとしても益州は地の利が進軍するには悪い。戦をする前に兵が疲れてしまうし、地の利も向こうのほうがあるから奇襲を受けてしまえば大打撃だ。その上、兵糧を輸送したりする際にそれを狙われてしまったりもすればまずそれが命取りになりかねない。第三に張松などが信用出来ない。俺は手紙や風評のみでは人を完全に判断したりはしない。故にこの張松がいくら手紙を送ってきたとしても俺はまず信用はしないだろうな。後はやっぱり蜀を甘く見ることが出来ないから…かな？」

「？　どういうこと？　三つ目までは理解出来たけど最後のは分からないわ。だって蜀軍は殆ど守ってばかりで戦の経験のあるのはごく僅かだって聞いているわ」

咲夜が地震の考えをすべていい終えた後で、燐花が最後の蜀軍に対する咲夜の認識に対して疑問を抱いた

蜀軍は国主、劉障が馬鹿な故に戦をしようとは思っておらず、唯一対立しているのは漢中の張魯位なのである

後は、五胡や南蛮の侵攻を防ぐために防衛線を張っていたりするだけでそれらを動かすことは出来ない為に、中心にいるのは新兵、もしくは戦の経験が全くない兵士のみだと報告に入っていたのだ

その為、燐花は勿論、雛里や麻理もそう思っていた

ただ一人、風だけは違っていたのだが…

「皆さん～それは少し浅慮だと思います」

「？　どういうことですか、風さん」

「確かに蜀軍は我が軍と比べると大した練度ではありません～。しかし、立地の条件をそこに加えると蜀軍はそれだけで脅威になるのです～。それを踏まえたうえでの考えだと風は蜀への進軍は反対します～」
「…風、補足してくれてありがとう」
「いえいえ～」

咲夜の説明を風が少し補足し、雛里たちも納得してくれたようだった

「じゃあ簡単に纏めるよ。まず荊州・江陵を落とした後、さっき言った四つの都市の太守がこちらに来たら状況などによって受け入れをするかを決める。それを終えた後、もしかしたらだけど他の荊州の郡へも進軍するかもしれない。武陵太守金旋、零陵太守劉度、桂陽太守趙範…どの太守もまともな政を行っておらず、私腹を肥やしている傾向有りとか。まあまだ確定事項ではないからな。とりあえず確定してるのは狸ブッ転がすことだけだ…フフフフフフ…」
「しゃ、しゃくや様！？　こ、こわいでしゅ…」
「お、おちちゅいてくだしゃい！！」

どす黒いオーラを出しながら笑顔で静かに笑う咲夜…
しかも目だけが嫌なくらいに微妙に開いているのでそれが余計に怖さを助長させる

雛里、麻理はそれなりに長く咲夜と共にいるがこれだけは慣れずにいた

話が終わりかけていた頃、咲夜は一つのことを思い出した

「あ、そういえば風。一人、推薦したい子がいるって言っていたよね？　誰かな？」
「……ぐぅ」
「「寝るな！！！」」

思わず咲夜と燐花が突っ込んだ

「おお、これは失礼。すっかりそのことを忘れていました。今は私の部屋に待たせてたのです」
「？　何でだ、連れて来てくれっていったのに」
「それが「これから重要な話し合いがあるのだろう？　それに見ず知らずの居るとなれば会話しにくくもなるであろうに。故に私はここで面までも食べて待っているとするぞ」だそうです～」
「……何でメンマ？」
「大好物だからだそうですよ～」
「そ、そう…とりあえず会おうか」

麻理、燐花には休暇を楽しんでもらうことにし、雛里には自身の仕事に戻って貰った

風はその紹介したいという人物を今度こそ、咲夜の元に連れてきたその間、約5分ほど

「始めまして、俺がこの襄陽、そして樊城の太守をさせてもらっている劉封だ」
「…ふむ、風から色々と話は聞いたが…確かに良き漢であるな」
「そうですよね～」
「……風、君は俺をどういう風に説明したんだ？」
「そんなことよりも星ちゃん、自己紹介ですよ～」
「ふむ、そうだな。劉封殿、私は性を趙、名を雲、字を子龍と申す。此度は我が友程？殿の推挙と私自身の目を持って貴方を我が主とし、仕えたい」
「…ふむ、君があの噂の【常山の昇り竜】か」
「おや、私のことをご存じで？」
「ああ、槍の名手だそうだね。だけど聞きたいことがある。何故、我が軍に入りたいと思った？　他にも有力な勢力は多々あるだろうに」
「…私は各地を旅し、私が槍を振るうべき主を探していた。袁紹、曹操、孫堅、公孫賛、張魯などなど…だがどの主も私が使えても私が槍を存分に震えぬと思えて仕方なかった。故に私は一時、時を待ち、私が使えるべき主が現れるまで身を潜めようとも思った。その矢先、風が仕官したと聞いている襄陽の近くにたまたま居たのでな。旧友を深めようと思い、訪ねてきたのだ。そして、先程風からここに仕官したらどうかと聞かれた。最初はいくら風からの言葉でもと思ったのだが…この国の民の顔を、町の様子を、そして貴方の顔を見て決めたのです。我が槍、龍牙（りゅうが）を振るうべきに値するであろうと」
「……成程ね、了解した。これからよろしく頼むよ、趙雲殿」
「星とお呼びください、劉封殿」

「ならば俺のことも咲夜と呼んでくれ。それが俺の真名だ」
「ふふふ、ならば主とお呼びしても？」
「ああ、ご主人様とか変な呼び方以外なら何でもいい」
「おやおや、主はそういうことはお嫌いですか？」
「偶にならいいが…別に俺にはそう呼ばれたい願望なんてないし」
「ふふふ、分かりました」
「じゃあ、これから星は軍部に所属して貰うことになるから。この城のことは風に聞いてくれ」
「「分かりました（〜）」」

そんなことがありながらも咲夜は何とか自身の仕事で早めに終わらせるべき物を終わらせ、璃々と紫苑を迎えに行き、一緒に出かけることにした

その際に璃々は咲夜に肩車をしてもらい、紫苑は咲夜と手を繋ぎながら町の中を歩くこととなった

「わぁ〜い♪」
「うふふ、璃々ったら」
「……」

咲夜は一人、町の光景を見ながら璃々と紫苑の笑顔を…そして町の中に溢れている人々の笑顔を見て、自分のやってきたことが間違っていないのだと強く思うことが出来ていた
表面上は冷静な顔をしていても、咲夜はやはり時々不安になってしまう時があるのだ

――自分の行った政は正しかったのか？
――もっと最良の策があったのでは？
――救えた命があったのでは？
――時を違えてしまったのではないか？

などなど…様々な負の思考が頭を過ってしまうのだ
そういう時、咲夜はまず自らの周りを見ている
自らの行いによる結果は、大体他の人を見ていると分かったりするものだ
咲夜は樊城の太守になる前まで様々な場所を旅して回ってきた
そこで見た物は文明や技術だけではなく、人々の笑顔だった
だが、時折その笑顔が消えてなくなり…変わっていく所も幾度も見てきた
悲しみに…憎しみに…恐怖に…
それを見るたびに咲夜は胸が締め付けられるような痛みを経験した
そしてその時、こう思ったのだ

【もう俺は…誰かの涙を見たくないっ…】

まあこれの元ネタは仮面ライダークウガなんですけどねぇ
因みに咲夜は前世ではライダーシリーズは大好きで特にクウガの主人公には一種の憧れを抱いていたのだ

そんな咲夜を隣にいた紫苑はちょっと心配そうに見ていた
それに気付いた咲夜は紫苑に「大丈夫だよ」とだけ答え、そのまま買い物を続けた

そして、その後、一人執務室に戻った咲夜は残りの仕事を片付けることにした
明日、また皆が笑顔でいられる様に…

そう心に願って…

番外編：襄陽での咲夜（後書き）

暫くは番外編&荊州攻略戦がメインになります
誰かとの絡みを書いて欲しい等の要望があれば是非
ご応募、待っております

それから、活動報告にて今後の方針アンケートがありますのでよければ見てみてくださいね

番外編：張三姉妹と咲夜（前書き）

グラムサイト2より希望のあった張三姉妹との絡みです

オリキャラ達は出ますがチョイ役の人たちばかりなので、紹介は無しです

番外編：張三姉妹と咲夜

咲夜の元に星がやって来てから暫くした後のこと
咲夜はいつものように執務室で自身の仕事を片付けていた

「さて…次はっと…えっと何々？　『最近、ちょっと面白そうな兵器を考えついたのですが…是非劉封様に見てもらいたく、こうして書状を送らせていただきました』か…Σ　こ、これって…虎戦車！？　昔漫画で見たのとそっくりじゃん！！…製作者は…黄月英！！？　よし、採用してみるか」

こうして仕事をしていると面白い出会いや体験と対面することがあるので、咲夜は仕事を楽しみながら次々と片付けていった

そして午後になる直前には山の用にあった竹簡と重要書類は片付けられ、送るべき場所に送られていった

「ふぅ～、次は警邏か…あ、なら序に天和、地和、人和の三人達の様子でも確認しておくか。え～っと、今日の担当は…杏と星か。丁度いいか」

咲夜は一応、特殊グローブを装着し、腰には双剣を装備しておいたそして部屋着から外に出かけるための服に着替えると直ぐに杏と星を迎えに行った

そして街中…

星と杏を引き連れて、咲夜は街中をぶらぶらと巡回しながら街中の様子を確認して歩いていた

「ふむ、やはりこの襄陽は活気に満ちておりますな、主よ」
星は感心した様な顔をしながら咲夜に話しかけた
「あはは、それは嬉しい限りだよ」
それを聞いて咲夜は嬉しそうに星に応えた

「所で咲夜様、今日の巡廻予定はどこですか？」
「とりあえず今日は第七交通行きに行ってからそのまま6、5、4、3、2、1っていう感じで回って行く予定だよ」
「？　どうしてですか？」
「天和達の様子も見ながら巡回した方がいいと思ってね」
「主よ、その名は真名であろう？　何故名で呼ばぬのだ」
「…まあ色々と事情のある子たちなんだよ。訳はちょっと言えないんだ」
「…ふむ、分かりました。その理由は聞きませぬよ」
「助かるよ、星」

まず咲夜達が訪れたのは天和が居る孤児院だった

そこに咲夜が訪ねたのを一人の子供が目で確認すると、その子が咲夜が来たことを他の子にも告げ、あっという間に咲夜は子供たちに囲まれた

「りゅうほうさま～」
「なにかよう～？」

「ん、今日からここに来たお姉ちゃん、居るかな？」
「えっと…」
「あ、おっぱいおおきいおねえちゃん？」
「……た、多分その人かな？」
「わかった～」
「つれてくるね～」

子供たちの中で何人かが建物の中に入って行き、残った子供たちは咲夜に乗っかろうとしたり、咲夜の手を引っ張ったりしていた

「あいたたた、こ、こらこら！　ひ、引っ張らないの」
「りゅうほうさま～、あそんでよ～」
「あそんであそんで～」
「う、う～ん、今はちょっとお仕事中だからね。明日じゃ駄目かな？」

「え～」
「いまあそびたい～」
「ゴメンね。明日は絶対に遊びに来るから、ね？」
「「「「「は～～～い」」」」」

子供たちは素直に咲夜の言うことを聞き、咲夜から離れてまた遊びに行ってしまった

「ふぅ、流石にあの数で一気に来られると疲れるよ…」
「ふふふ、主は子供らに好かれているようですな」
「星ちゃん、実はこの孤児院はお兄さんの自腹で建設した襄陽最初の孤児院なんですよ」
「なんと、自前の金銭を使ったというのか」
「最初に襄陽に来た時は無駄にお金が使えない状態だったからね。だったら俺が自分で建てようって思ってさ」
「…成程、流石噂に違わぬ方だ」

そんな話をしていると天和が出てきた

「…あ、あの……何か、用ですか？」
「ん、警邏の途中だから様子を見に来ただけだよ。どう、仕事のほうは？」

「え、えっと…ここの偉い人（？）に色々とお仕事を教えてもらっている所です」
「そう、院長は優しい人だから何か困ったら直ぐに質問するといいよ」
「あ、はい…」
「んじゃ、それだけだから」
「え？」

咲夜はそれだけ言うと直ぐに仕事に戻ってしまった
その後ろをぴったりと付いていくのは杏で、何やらニヤニヤとしながら少しその場に留まっている星

「おやおや、主もお優しいことで」
「あ、あの…」
「む、何か？」
「ど、どうして…あの人は？」
「…ふむ、貴方が先程主の言っていた訳有りの者というわけか。何、大したことではあるまいて。ただ、主は貴方が心配でここに様子を見に来た、それだけですぞ」
「で、でも…」
「他に聞きたいことがあるのなら主に直接聞くのがよかろう。私に聞かれても私自身、ここに仕官し始めたのはつい先日のことなのだからな」

そう言って星も咲夜と杏の歩いて行った方に走って行った

その場に一人残された天和は…

「……分からないよ」
「おねーちゃん」
「Σ　ど、どうしたの？」
「いんちょーせんせいが呼んでるよ？」
「あ、う、うん！　直ぐに行くね」

天和はとりあえず仕事が終わった後に地和、人和と一緒に咲夜の部屋を訪ねてみることにした

それから咲夜、杏、星は巡回ルートを何の問題もなく歩き回りながら残っている地和と人和の仕事場を訪ねて行った

地和は服屋で働いている最中で、咲夜を見かけた瞬間、嫌な奴にあってしまったと言わんばかりの顔をしていたが、咲夜はそれを軽く流し、店長に挨拶をしてから直ぐに警邏に戻ってしまった

そして人和は文官の手伝いをしているため、咲夜は警邏をすべて終

えてから人和のいる文官の部屋を訪れて調子はどうかと聞きに行った
人和の主な担当は客将でも扱える物ばかりな上に簡単な仕事ばかり
のため、人和もそれほど手間取らずに仕事を終えることが出来ていた

それらを確認し終えると咲夜はほんの少しだが微笑み、自室に戻っ
て行った

そこには…大量の竹簡の山が…

「何でさ」

実はあまりに咲夜が仕事を早く片付けてしまうので他の文官達が負
けてられないとばかりにやる気を出してしまった上に、咲夜が以前
に出版した【猿でも解る参考書：文官編】を発行してしまったが故
に、それを読んだ文官がパワーアップしてしまったのだ
勿論、その本は許可証がないと買うことが出来ない限定版なのだが…
処理が早くなったので咲夜に戻ってくる仕事も早くなるのだ

「と、とりあえずこれ位か…（ボキッ）」

咲夜は片付けられるだけ片付けて…結果、山が半分まで減ってくれた
終わったと同時に使っていた筆が折れたのだが…

「…新しい物買おうかな」

そんなことを考えながらとりあえず食事をとってから風呂にでも入
るかと考え、咲夜はとりあえず湯浴みの用意をしようとした

その時

コンコン

部屋のドアを誰かがノックする音が聞こえた
因みにノックの礼儀を教えたのはやはり咲夜が発行した【今日から
君も礼儀の達人】という本である

因みに売れ行きはかなり良い

その本のお陰で大分、ノックのことが広まり、今では大半の場所で使われるようになっていた

「誰かな？」

「あ、あの…私達です、劉封様」

扉越しに聞こえたのは人和の声だった

達、ということは天和と地和も一緒なのだろうと咲夜は理解し、部屋に入るように指示した

恐る恐る三人は咲夜の部屋に入り、咲夜に進められるがままに用意されている椅子に座った

「さて、何か用かな？」

「そ、その…てんほー姉さんが劉封様に聞きたいことがあるそうなので…」

「…そ、その…どうして今日、私たちの所に訪ねてきたんですか？」

「仕事半分、御節介半分」

「え？」

「警邏の途中にちゃんと仕事しているかどうかを確認しに行っただけだよ。それに少し心配だったからさ」

「どういうことよ」

「ちょ、ちょっとちぃ姉さん！？そんな言い方は駄目よ！！」
「いや、構わないよ。ちゃんと公私の区別を付けてくれれば」
「だってさ、なら構わないでしょれんほー」
「う～ん…」
「で、どういう意味？」
「流石に俺も強く言い過ぎたような気がしたからね、あの時は。でもさ、それは君達に理解して欲しかったんだよ。望もうと望むまいと君達が切っ掛けとなり、先の大反乱は勃発した。そして、その争いを君達は知らず知らずのうちに助長してしまっていた」
「「「……」」」
「あの戦いで多くの人たちが傷つき、亡くなっていった。それにより、誰かがどこかで泣いていたはずだ……なあ、君達はどうして歌い、踊る？」
「え…」
「そ、それはちーたちが歌ったり踊ったりするのが好きだから」
「……それだけ？」
「う、うん…」
「…ふぅ、なら少し君達に合わせたい人たちがいる。ちょっと付き合って貰ってもいいかな？」
「ど、どこに？」
「ついてからのお楽しみだ」

咲夜は天和達を連れて襄陽内にあるとある建物の中に入って行った

その建物の看板にはこう書いてあった

――――襄陽歌劇団

建物の中に入ると受付をしに行くと、受付嬢をしているであろう女の子が驚いた顔をして何処かに走って行ってしまった

「ありゃ、やっぱり事前に連絡はしておくべきだったかな？」
「あ、あの…ここは？」
「…簡単に説明するとここは役者たちの舞台。歌手、俳優、演劇家などが集って客に自身の磨いてきた物を魅せる場所だよ」
「……何でちー達をこんなところに連れてきたのよ。見せびらかす為？」
「…直ぐに分かるよ」

少しした後、先程の受付嬢が一人の女性を連れて戻ってきた

「すいません劉封様、お待たせしましたか？」
「いや、こっちこそ突然訪ねて悪いね」
「いえいえ、今この劇場があるのは咲夜様の支援のおかげですから。ところで、本日はどのような用が？」
「…この子たちにこの劇場にいる子たちのことを見せてやりたいと

思ってね」
「そうですか…なら劉封様もご一緒に？」
「ああ、特別席は？」
「空いておりますよ。あそこは劉封様達専用の席ですから」
「ならそこにこの子たちも入れてやってくれ」
「承知しました、直ぐに手配いたします」

咲夜達が案内された席は二階にあるゲストや来賓、または国主である咲夜とその関係者のみが使用できる特別席で最初、そこに案内されたばかりの天和達は酷く驚いていた

それも仕方ないだろう
このような建物は襄陽や樊城以外には今はまだ存在していないのだから

咲夜は生前から様々な本を読み漁っていたために、その中の一つである建築の方法を大工たちに教えることで今はこうして異常な位に広く丈夫な建物を建設することが出来ていた

天和は案内役の女の子に渡されたお菓子や飲み物を楽しみ、地和は渡されたパンフレットに書かれていることを見るのに夢中になり、人和は劇場内を隅々まで見ていた

そして、それから少しした後劇が始まった
今回の舞台の題材は咲夜の著【幻ノ里：紅き館編】だった
ネタは東の方です
その為、今回の劇は殆どの役者が女性である

劇が始まると先程までの雰囲気とは打って変わって天和達はその演技に、歌に、役者たちの立ち周りに心を奪われたような顔をしていた
それほどまでに彼女たちの演技は素晴らしかったのだ

劇が終わると他の観客達からも拍手喝采があり、天和達も思わず拍手をしてしまった

その後、未だに夢心地気分でいた天和達を連れて咲夜は役者たちが集う舞台の裏方に案内された
何でも、一言咲夜にお礼がいいたいということで館長もそれを許可したのだ

案内された部屋には数名の女性たちがいた
その中には先程の舞台に立っていた人もいた

「初めまして皆さん。この襄陽で太守を勤めている劉封です。後ろにいるのはちょっとわけがあって今日、一緒にここに来ることにな

った子たちなので特に気にしないでくださいね」
咲夜が挨拶をすると女の子たちがキャーキャーと騒ぎ始めた
咲夜は何事かと思いながらも話を進めることにした

「え、えっと。劇の方、凄く良かったですよ。俺が書きたかったこと、文字だけじゃ表しきれなかったことがよく表現されていて」
「ふふ、ありがとうございます劉封様。作者である貴方にそう言って貰えるだけで私達はとても嬉しく思います」
「それで今日ここに来たのは君達とこの三人を会わせたかったからなんだ」
「ん～、その子たちと？　別に良いですけど…役者希望なんですか？」
「…今は理由があって表舞台に立つことを許されていないけどね」
「成程、分かりました。えっと、貴方達名前は？」

天和、地和、人和に話しかけてきたのは一番年上のようで、とてもきれいな髪を持ち、唇が魅力的な女性だった
三人は困惑しながらもその質問に答え、自己紹介をした後、女性たちだけで話そうということで個室に案内されることとなった
咲夜はそれを確認すると、一人この劇場の館長がいる部屋へと向かって行った

↓Ｓｉｄｅ　人和↓
綺麗な人に連れられてきたら、そこには沢山の女の人がいた…
皆、さっきの劇に出てた人たちばかりだ

「皆～、劉封様に頼まれてこの子たちとお話しして欲しいそうよ～」
私達をここまで連れて来てくれた人がそこにいた他の人たちに声を掛けると、凄い勢いで寄ってきた

「ねえねえ貴方名前は！？」
「え、えっと…れ、人和です」
「私は桜よ！　ねえねえ、貴方達って劉封様とどういう関係なの！？」
「え、えっと…それは」
う、ど、どう答えればいいんだろう

「こらこら、さっき劉封様が言っていたでしょ？　訳ありだって」
「え～、でも香澄さんは気にならないんですか～」
「桜？」
「う…わ、分かりました」

桜と呼ばれた人が離れ、思わずホッとしてしまった

「御免なさいね、あの子まだ子供だから好奇心が強くて」
「あ、いえ…あの、貴方は？」
「ああ、私は香澄（かすみ）。ここで劇団員をさせてもらっている一人よ」
「そうなんですか…あの、ここって？」
「ああ、ここは劉封様が支援して下さっている団体の一つで、ここで働いているこの大半は皆、戦の影響で仕事を失っていたり、家族を失くして一人身になっていたり、捨てられて放浪していた子供たちが居るのよ」
「え！？」
「因みに私も戦で夫を失って、食い扶持に困っている時に襄陽に来てここを紹介して貰ったの。今ではここが私の新しい家で、ここにいる皆はもう私の家族も同然ね」
「…そうなんですか」
「あの今、神流（かんな）と愛莉栖（あいりす）に捕まってる子と…麻利亜（まりあ）と紅蘭（こうらん）に化粧されている子は…貴方の家族かしら？」
「…ええ、大事な姉です」
「そう、ならそのつながりは大切にしなさい」

それから暫くの間、私はこの香澄さんから色々な話を聞いた
この劇場のこと、団員のこと…そして、あの劉封という男のこと…
最初はただ単に何がしたいのかさっぱり分からない男だった
だけど、香澄さんの話を聞くうちに少しずつだけど分かったことが

あった
劉封という男は…かなりのお人好しだということだ
この劇場や団員だってあの男が保護してり無償で仕事を与えたりしたうえで設立していたそうだからだ
だけど、同時にあの男は氷のように冷たい一面もあることは理解していた
あの戦場で私たちに見せたあの顔は忘れようにも忘れられない…

「あの…香澄さん、貴方はどうしてここで働くんですか？」
「そうね…最初は生きるためだったわ。お金を稼いで、ちゃんと食べられるようになって、ちゃんとした布団で寝る。それだけが私の望みだった。でもね、今は少し違うの。私の夢、それは誰かを笑顔にすること。それも私たちの踊りや歌でね」
「え…」
「劉封様が言ってたの。歌や踊りは自分が楽しむ為だけじゃなくて…それを見ている人を幸せに、笑顔にすることも出来るすばらしい文化を形にしたものって。だから私はこの仕事が好きになったの。誰かを笑顔に出来るすばらしい仕事だから」
「……」

もしかして…あの人はこれを私達に教えたかったんじゃないのかしら…
だって少し離れてはいたけど、すみれさんの言葉を聞いていた私は勿論、てんほー姉さんもちぃ姉さんも…この言葉に重みを感じたから

↓Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ↓

場所は変わって管理人室
ここでは咲夜がここの責任者と話をしていた

「…というわけだ。あの子達は暫くの間は歌や踊りの世界から離れてもらうけど…その後はここで仕事をさせたいと思っている」
「そうですか…劉封様がそうおっしゃるのなら、そういうように手配しておきますね」
「迷惑を掛けるな」
「いえいえ、ここにいる皆は劉封様がいらっしゃらなければこうして幸せな日々を送ることが出来ていませんでしたから。これ位の事は」
「そう言ってくれるとこっちも嬉しいよ。じゃあ頼むよ、霊夢（れいむ）」
「はい♪　劉封様から頂いた名にかけて約束いたします」

霊夢との話を終えた後、咲夜は三人を迎えに行き城に戻ることにした

その帰り道…

劇場から出て来てからずっと沈黙を続けていた三人だったが、地和

が咲夜に話しかけ始めた

「ね、ねえ…今日、ここにちーたちを連れてきたのって…私達にあの子達を会わせたかったからなの？」
「それも有るけど…君達三人にどうして歌い、踊るのか。その理由を見つけて欲しかったからだ。そうすれば君達の罪を意識しやすいと思ったんだけど…どうだった？」
「…私は、あの場所に行けて良かったと思います」
「れんほーちゃん…私もだよ」
「…うん、ちーもあそこに行けて良かったよ」

三人とも劇場に入る前とは違って、いい顔になっていた
それを見て咲夜は少しだけ連れて来て正解だったと思えた

「…君達が」
「え？」
「君達が十分に罪を償い、そして十分な時が過ぎたら…あの場所で働いて貰うつもりだ」
「え…じ、じゃあ…私達、また歌えるの！？」
「その予定だ。だから…頑張れよ」

咲夜は早歩きでその場を去ろうとした

だが…

キュッ…

天和が咲夜の服の袖を掴んでいたため、去ることが出来なかった

「…何だ？」

「……ありがとう」

「…何に対してだ？」

「…私達のこと、ちゃんと見てくれて…叱ってくれて…それから…助けてくれて」

「……ああ」

「私達…頑張るから！！」

「…ああ」

「えへへ、じゃあちーちゃん、人和ちゃん♪　帰ろう～」

「そうね、明日も仕事があるしね」

「では劉封様、これで失礼します」

「ああ、頑張れよ」

こうして三姉妹は咲夜のことを再認識し、今自分に与えられている仕事を一生懸命にやり遂げることに集中し始めることとなった

一方で、咲夜も彼女たちのために彼女達専用の踊りと歌を書きつらぬった書籍を用意していた

いつか…彼女たちが本当の笑顔で…多くの観客達を笑顔にしてあげられる

そんな未来を予想しながら

番外編：張三姉妹と咲夜（後書き）

団員の元ネタはサクラ〇戦です
最も責任者である人の元ネタは東〇ですけど

いずれ、張三姉妹も原作の様にライブなどをさせてあげたいと思っています
今はそれどころではないと思うので…

番外編：とある人の活動日記（前書き）

ａｓｄさんより希望の姜維伯約との絡みです
と言ってもネタ臭満載ですが…

とりあえず姜維と同時期に仕官した子たちの真名は東○から来ました

これは変えた方がいいという物があれば変えます
私自身、ちょっとこれはないだろうという物も有りますからＷＷ

番外編：とある人の活動日記

番外編：とある人の活動日記

皆さんはじめまして、私は雛里ちゃんや風ちゃんと同時期に襄陽の試験を受けて、見事合格することが出来た文官の一人、姜維です♪

因みに字を伯約
真名は美鈴（めいりん）です♪
言っておきますけど…みすずって読まないでくださいね！！

今現在、私は咲夜様と共に江夏と襄陽の真ん中あたりに位置する地域で起こった賊による反乱を鎮圧している所です

それまでは私は樊城で劉泌様のお手伝いをしていました
その時はお友達の文官さんたちと一緒に働いてました
あ、そのお友達というのは魔理沙ちゃん（王平）、慧音（劉曄）、雛ちゃん（諸葛瑾）、椛ちゃん（董允）、智（さとり）ちゃん（馬良）だよ

皆同じ時期に襄陽で試験を受けたから、その時のお陰で凄く仲良くなったんだ♪

話をしてると、雛ちゃんは諸葛亮孔明っていうこのお姉ちゃんで麻

理ちゃんと雛里ちゃんとは同じ学び舎で一緒に勉強した仲なんだって
だから最初は雛里ちゃんを試験会場で見かけて、しかも試験官が麻理ちゃんだったことに凄く驚いたんだって

智ちゃんは妹が一人いて、今はまだご両親の許可が下りてないから仕官することが出来ないらしいよ
名前は馬謖なんだって
会うのが楽しみだなぁ～♪

っと、今は戦の最中でした！！
でももう追討戦に入っていて、私がやるべきことは捕虜の確保と怪我人がいたら医療班に渡すという簡単なことなんですけどね

あ、でも戦が始まってから直ぐに私の所に突っ込んできた人いたから思わず斬っちゃったけど…あれはなんだったんだろう？

先方ではもう咲夜様と杏様が賊を蹂躙してます
もう一方的（ワンサイドキル）ですね

さて、ここで私がどうして連れて来られたかという話に移ります
それは…先日、江夏の太守だった人が咲夜様に太守の印綬を渡して、配下に加えて欲しいという知らせがあり、しっかりと太守直々に挨

拶をしに来たので咲夜様はそれを認め、この賊の処理が終わり次第に江夏に訪れることにしたそうです
その為、武官と文官を振り分けて行動に移ることとなり、私は江夏に行くことになったんです
因みに私以外には杏様と燐花様がいます
燐花様は中軍にて戦線の指示を出していました

あ、咲夜様と杏様が後退してきました
どうやら戦も終わったようです

戦後処理を終えた後、私達は江夏に行き、そこの太守の人にあいさつした後、咲夜様は領民を集めて、今後江夏を劉封軍が統轄することを告げた

それを聞いた領民は皆凄く嬉しそうだった
まあそれもそうでしょうね

咲夜様が治めている樊城と襄陽は他の軍と比べても凄く裕福ですから

咲夜様は元々江夏にいた武官、文官の人たちにそれぞれの役割を振り分け、杏様と燐花様にも指示を出した
ここまでを見ると流石は咲夜様です♪

でも一つだけ不思議な事が…
何故か私だけが仕事を指示されず、その場に止まるように言われたのです
わ、私…何かしましたか？

「…ふぅ、これで後は俺の仕事に取り掛かるのと…っとそうだった。お～い、美鈴」
「あ、ひゃ、ひゃい！！　なんでせうか！？」
「…落ち着きなさい」
「す、すいません…」

は、恥ずかしいです
よりにもよって咲夜様の目の前で噛んでしまいました

「落ち着いた？」
「え、はい。大丈夫です」
「そう、ならちょっと美鈴に頼みたいことがあるんだ」
「えっと、何でしょうか？」
「今までの働きと今日の功績を評価して君には俺の副官を担って貰いたいんだけど」
「……はい？」
「だから君を俺の副官にしたいって言ったんだよ」
「え…えええええええええ～～～～～～！！！？」
「そ、そんなに驚くこと？」
「お、驚きますよ！！　ど、どうしてですか！？」

わ、私なんかが咲夜様の副官！？
つ、つまり咲夜様の傍で…そ、そそそそそんな大それた仕事が私なんかに務まるわけありませんよ！！

「ん～、理由としては今まで美鈴には文官の仕事のみをさせてたけど、その仕事の取りかかる早さと正確さ。それは俺が仕事をする際に手助けをして貰うには最適だし…何より、美鈴には武官としての才もある。今日だって、美鈴が討ちとったのは賊軍の副将だったからね」
「そ、そうだったんですか！？」

き、気付きませんでした…

「他の子はどちらかが優秀ではあるが、君は両方に才がある。だからこそ、俺は君に副官となって貰いたい。頼めるかな？」
「…身に余る光栄です！　これからも精進させていただきます！！」
「これからよろしくね、美鈴」
「はい！！」

う、嬉しいです
まさか咲夜様の副官になれるだなんて…

えへへ♪
皆に自慢しちゃおっと

↓Ｓｉｄｅ　咲夜↓

姜維こと美鈴は凄いな、本当に
俺が前世の記憶で知る限り、姜維はかつて馬遵という魏の将に仕え、蜀との戦いで趙雲と真っ向から戦い、互角に打ち合ったことがあるその後、孔明の策によって姜維は蜀に下り、孔明に気に入れられたそして孔明の死後、費？と蒋？という有能な文官と共に蜀を治めることとなるが、この二人が死んでから蜀を姜維が支える様になったとか…

でもネットとかでは北伐大好きっ子とか言われていたり、蜀の滅亡のきっかけとも言われている

これ位かな？

でも目の前にいる子はそんなことする子には見えないし、何より今の俺には必要な能力も十分過ぎるほどに所持している

…絶対に孟達なんかよりもいい副将となって俺を支えてくれるはずだ

そう信じたい…

出来れば北伐思考持たない様にさせないと…

↓Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ↓

…何でしょうか？

突然ですが今凄く変な映像が頭を過ぎりました…

北伐？？？

何のことでしょうか？

まあ良いです♪

江夏での仕事は楽しいの一言でした
今までの樊城や襄陽での城は主に他の人の仕事を手伝ったりしただけでしたが、この江夏ではすべてが一から始めたといっても過言ではありませんでした

咲夜様はまず街並みや通路の改善や衛生環境などを整えることから始め、私が今まで見たこともない制度を定めていきました

それも短い期間で異常なくらい高い成果が出て、咲夜様もその結果を見て凄く嬉しそうな顔をしていました

私もそれを見て、凄くやる気が出てきたので咲夜様の仕事の速さに少しでも合わせられる様に成長しなくてはと思ってしまいます！！

姜伯約、今日も頑張ります！！！

番外編：とある人の活動日記（後書き）

これくらいですかね
次は少し本編を進めます

江夏を新しく手に入れた咲夜は今後のことを相談するために紅蓮に使者を出し、荊州攻めを始めようとする
だが、既に紅蓮は軍を率いて動き出しており江陵に向かったとの報告が入った
いやな予感を感じるも咲夜はそれに合わせて荊州を攻めることにしただが…最悪な事にその感は現実の物となってしまうのだった…

第九話（前書き）

今回はほんの少しだけ書き方がグロいものがあります
注意して下さい

相変わらず短いんですけどね

第九話

江夏を治めることになってから暫く経った後、咲夜は襄陽にいる紫苑に連絡を入れ、そろそろ荊州と江陵の攻略に移るべきだと提案した
紫苑の方もそれが良いと咲夜の考えに同調し、江夏、襄陽で咲夜は兵を集って進軍の準備を開始した
その際に、咲夜は以前紅蓮から荊州攻略に関して紅蓮に話がしたいと言われたことを思い出し、まず使者を出すことにした

それから少ししてから使者が戻ってきたのだが…
そこには驚くべきことが書かれていた

長沙の留守を預かっている程普という者からなのだが、既に紅蓮は雪蓮、冥琳、祭、思春、蓮華、明命、穏と兵約２００００を引き連れて江陵攻めに向かったとあった

そして…江陵を現在守っている将は…張允と

――――――黄祖だった

この世界が既に自分の知っている物とは差異があるということは理解していた
まずこの国の大半の将が女性になっていたり、名馬と言われている的盧（渚）や赤兎馬が犬だったり…時代の系列なども少し自分の知っている知識とのことなりがある
故に、黄祖が居ることが紅蓮の…孫堅の死に繋がる＝１００％ではないということは重々承知していた
だが、咲夜は不安を隠せずにいた

「……影夜」

咲夜が名前を呼ぶと、天井から影夜が音もなく表れた

「仕事を頼みたい」
「…（コク）」
「忍び二小隊を引き連れ、江陵に向かって欲しい。一つは敵将、黄祖もしくはその配下が孫堅の軍に何か仕掛けようとしていたらそれを妨害して欲しい。二つ目はもし、紅蓮達がその罠にはまっていたら、影から助けてやってくれ」
「……（コクリ）」
「第一小隊は朔を中心に睦月、如月、弥生。第二小隊は影夜を中心に皐月、水無月、神無月」
「……」

影夜は紙にサラサラっと質問を書きだした

【他は自由なの？　殺しは？】

「…お前たちが必要と判断したら、許可しよう」
「（こくり）」
「じゃあ…頼んだぞ」

それを聞くと影夜は再び姿を消し、移動を始めた

「…これは保険だな。何もないのが一番いいんだけどな」

咲夜はもう一つの孫堅軍が注意すべき不安要素の一つである袁術軍のことを考えていた
袁術は子供な上に世間知らず兼馬鹿と聞いているので恐らくは紅蓮の方もそれほど気をまわしてはいないだろう
だが、袁術の周りには張勲、楽蹴、紀霊などと言った有能な将もいるし、兵数も長沙の兵数と比べると遥かに上である

それ故に咲夜は汝南に対して江夏で対策と練ることにした

「…とりあえず牽制として江夏には十分な兵を置いておき、その上で江陵の城を攻める手はずを整えておくか。今回ですべてを終わらせてやろう、劉表」

それから数日後、咲夜は進軍を開始した
勿論、その前日には宣戦布告をしておいてだ

攻城戦と野戦になることを想定しているため、咲夜はまず自身が向かう荊州城には兵1万5千と十分な攻城兵器を持ち合せることにした
副将として紫苑と美鈴を
軍師をして麻理と雛里を共に連れていくことにした

襄陽の留守は諸葛瑾や王平、董允等を中心に任せることにした

江夏の方には守りを杏に任せ、江陵攻めには焔耶と秋葉、そして軍師を風と燐花に任せることにした
この二人がいればもし、秋葉と焔耶が喧嘩しても止められる上に攻城戦を得意と言っていた燐花と常に物事を冷静かつ的確に対処できる風が合わされば、どんなことがあっても大丈夫だろうと咲夜は判断したのだ

「さて…一応、遊軍として第一軍とそれを任せられる将を残してあ

るけど…どうなるかな」

▽▲▽▲▽▲▽▲

↓Ｓｉｄｅ　紅蓮↓

進軍してからもう十日は経っただろうか…
儂らは既に江陵に進軍し、幾度か劉表軍と野戦を交えた
それらすべて完勝し、儂らの軍の勢いは破竹の勢いとも言えるほどであった

そして江陵城の近くに布陣し、儂らは攻城戦を開始した

穏と冥琳、この二人が指示を出し、前線では祭、思春、明命が城に矢を放ちながら攻城し、雪蓮と蓮華、そして儂が攻城兵器部隊を指揮することとなった

じゃが流石は黄祖と張允と言った所じゃろう
三日ほど続けて攻めさせたが、一向に落ちんかった
じゃが、後一日ほど攻めれば絶対に落ちるだろうと冥琳は言っておった
じゃから儂達は見張りの兵以外は皆、休みを取らせることにした

しかし、その夜黄祖自身が率いる夜襲部隊が陣を攻めてきおった
見張りの者達は皆殺され、数十名の者が殺されてしまった
儂は怒り、黄祖が逃げたという方向に数百の兵を引き連れ、向かった
その際に冥琳は儂を止めようとしたが、儂は止まらんかった

これは儂らの油断あっての被害…
ならば黄祖を儂自らの手で討ちとらねば、この奇襲で死んでいった者達が報われぬ

じゃが…それは罠じゃった

黄祖は自らを囮にし、坂になっている道まで儂らを誘導すると落石を始めた

「くっ…罠じゃったか」
「孫堅様！！　危ないっ！！」
「なッ…」

儂に岩が迫ろうとしていたとき、部下の一人が儂を突き飛ばし、その者は岩に押しつぶされてしまった…

「くっ…」

それからもわしを守ろうと幾人もの部下が儂を庇いおった…
落石の際に頭を打ったようで…朦朧とする意識の中……儂がみたのはその者たちの背中だけじゃった

そして…

薄れ行く意識の際に聞こえたのは…聞いたことのない声と…
誰かが斬り殺され、そ奴らがあげた叫び声じゃった

↓Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ↓

▽▲▽▲▽▲▽▲

「へっ！！　あの孫堅でもこういった手なら簡単に引っ掛かってくれるぜ」

「黄祖様、孫堅は死んだでしょう？　ならさっさと首を取りに行きましょうぜ」
「そうだな、これで俺達の軍は活気付き、あいつ等は士気が下がって後退して行くだろう」

黄祖は落石の罠で孫堅は完全に死んだだろうと判断し、一応待機させていた部下を呼びだそうとし、一人を選び、それを連絡させに行った

だが…
いくら待っても誰も来ようとしなかった

「ちっ、何をやってるんだ」
「黄祖様、もしかしてあっちで何かあったのでは？」
「それにしても誰一人としてこないなんておかしいだろう…仕方ない、この場には数人を残しておいて他は俺と様子を見に行くぞ」

そして部下たちが待機していた場所…
そこに着くと黄祖と部下達は驚愕せざるを得ない現場に遭遇してしまった

そこには人一人居なかった
あったのは…

血生臭い何かの欠片の様な物体と…
それを食している野生の動物達
そして…黄祖のたちの部下たちが持っていたであろう武具などだけ
だった

それを見た瞬間、黄祖の部下たちの多くがその場で吐いてしまった
仕方ないことだろう
ほんの少し前までは一緒にいたはずの者たちが皆、無残な状態で動
物達に喰われているのだから…

この異常な場所から少しでも離れよう
そう判断した黄祖は声をあげようと部下達の方へと向き直った
だが…

ここで一つの異常に黄祖が気が付いた

部下の数が…

減っていたのだ

つい先程まで一緒にいたはずなのに…

「お、おい…お前達、他の奴らはどうした！？」
「ゴホッ…ゴホッ…え、な、なんですか？」
「数が減ってるんだよ！？　お、お前達、見てないか？」
「あ、あれ…ほ、本当だ」
「さ、さっきまで俺達の隣にいたのに…」

その言葉でようやく黄祖の部下達も自分たちの周りの異常に気付くことが出来た
いや、気付いているのだが…
一種の錯乱状態に陥っていた

「お、お前達！！　周りを警戒しろ！！」
「は、はい！！」
「お、おい…また数が減ってるぞ！？」

「う、嘘だろ…」
「い、嫌だ…こ、こんなところで死にたくない！！」

混乱が更なる混乱を呼ぶ
それはもうその場にいた誰にも止められなくなっていた

「に、逃げるぞ！！」
「こ、ここにいたら死んじまう！！」

「お、おいお前ら！！　勝手に逃げるな！！」

黄祖は自分の部下達の逃走を止められず、かといってこの場から身動きできずにいた
その場に残ったのは黄祖自身を加えてほんの数名

そして次第にその数もゆっくりと…そして静かに減って行き…

気が付けば…黄祖の周りには誰も居なかった

そのせいだろうか…

黄祖は精神に異常をきたし

「あひゃひゃひゃ！！！　」

剣を振りまわしながら奇声をあげ、あらぬ方向に歩き始めた

そしてそんな黄祖も…

「あひゃひゃぐガッ……」

静かに討ちとられていった

「……（お仕事終わり）」

暗殺部隊をしている影夜の部隊によって

そして影夜は残った仕事を片付けに動き始めた
少しでも早く咲夜の元に戻るために

それから暫くした後、紅蓮は遅れて追ってきた雪蓮と祭、冥琳の部隊によって救出された
三人は当初、血まみれで右腕は無くなっている紅蓮を見て愕然としてしまったが、息をしているのを確認するとすぐさま軍医にを呼ばせながら紅蓮の容体を確認しつつ、周りに敵兵が居ないかを確認し始めた

やがて軍医が紅蓮の容体を診ると…その軍医は驚きを隠せずにいた
何故なら、紅蓮の体には既に十分と言えるほどの処置が施されており、後は時を待ちながら十分な休息をとることだけであったためである

「…これは明らかに何者かが紅蓮様を助けてくれたのだろう」
「でも変じゃない？　誰もこの場に残っていないし、それに戦闘の痕跡はまったく残っていないのよ？　あるのは母様の部隊の兵の死体だけ」
「そうじゃのう…劉表軍の死体が一つも見当たらぬというのは奇妙じゃ」
「…それにしても誰が」

「…勘なんだけど、咲夜じゃないかって思うのよねぇ」
「何？　咲夜じゃと？」
「ええ、多分だけど…」
「…雪蓮の勘は馬鹿には出来ないけど……奴は今江夏で内政をしている最中だぞ」
「……」

雪蓮と祭と冥琳が話し合っている中…

「しぇ、雪蓮様～～～～！！！」
「あら、明命？　何かあったの？」
「ハァ…ハァ、そ、それが…劉封軍が一軍を率いて我が陣を訪れ、江陵攻めに加わるとのこと！」
「っ！？」
「…やっぱり私の勘は当たってるかもね」
「そ、それから雪蓮様と冥琳様に程？と荀攸から話があると言伝を」
「…行きましょうか、母様もゆっくりと休ませてあげたいしね」
「そうね…」

雪蓮達はゆっくりと自分達の陣に戻って行った
そして陣に戻ると雪蓮は状況の説明を祭に任せ、冥琳と共に風と燐花の待っている天幕へと歩いていった

その場に行くと既にそこには蓮華と思春、そして焔耶も居た

「さて…荀攸に程？。貴方達が劉封の代わりということかしら？」
「そゆことになりますね～」
「現在、我が主は荊州城を攻めており、劉表を追い詰めております故」
「…江夏を治めたばかりというのに、大丈夫なのか？」
「それに関しては我が軍は有能な武官・文官が揃ってますからね～」
「それに既に劉表軍の内部は一部を除いて手を入れていますから」
「…本当に恐ろしい奴だな、劉封という男は」
「私達自慢の国主だからな」

そこまで話すと皆、一呼吸置き…

そして先程とは違って真剣な顔をした雪蓮がゆっくりと問いかけ始めた

「さて、ここに来た理由と…後少しだけ聞きたいことがあるのだけど」
「どうぞ～」
「まず、どうして江陵攻めを？」
「元々我々は二面作戦を実行する予定だったのですよ～。ですが、その前に呉軍が動いているという連絡を受け、至急動くようにとお

兄さんは指示したのです」
「…そうか」
「一応、使者は行かせたが既に進軍しているという報告を受けたのよ。だから、私達も私達の判断で進軍したわけ」
「成程、納得したよ」
「他に聞きたいことは何ですか～？」
「……先程、母様が黄祖の奇襲部隊を追って…落石の罠にはまったわ」
「っ！！？」
「紅蓮…様が？」
「姉様！！　か、母様は！？」
「…大丈夫よ、右腕は失ってしまったけど、一応生きてはいるわ」
「そう…ですか」

蓮華は当初酷く慌てたが、雪蓮の言葉を聞いて安心したのか、それとも腰が抜けてしまったのか、膝を地に付けてしまった
思春は表情に見せない様にしていたようだが、それでも他の者には分かる位に動揺しているのが分かった
それも無理もないことだろう

蓮華にとっては国主である以前に大事な母親なのだ
その母が死んでしまったかもしれないような言われ方をしたらそれは驚くだろう

「さて、それは大変でしたね。ですが、何故それをこの場で？」
「母様の周りの状況が余りにも不自然な事があったのよ。黄祖の罠

は明らかに的中していた。それなら黄祖は母様の首を取ることも出来たはず。なのにそれを行わず、しかもその場にいたという痕跡すら残さずに消えていた。部下の一人も残さずにね」
「……（もしかして）」
「それで？　私達に何を聞きたいんですか？」
「単刀直入に聞くわ。…母様を助けてくれたのは、貴方達の指示？　それとも劉封？」
「さあどうでしょう？　少なくとも我々はそういった指示は受けていませんね」
「……そう」
「それで？　そちらはこれからどうするんですか？」
「冥琳」
「我らは長沙に帰還する。国主の紅蓮様がこの容態なのだ。少しでも早く安静にして欲しいのだ」
「そうですか、なら江陵は私達が攻めますね～」
「ああ…悔しいが、此度の戦は我らの負けだ」

話を終えると雪蓮、蓮華、冥琳、思春はその天幕を後にしようとする
その時、風が一言だけ呟いた

「…袁術に注意」

それに気付いたのは冥琳と雪蓮…

「…国主の忠告なのです～」

「……本当に恐ろしいわね」
「ああ、そうだな」

こうして呉軍はゆっくりと引いていった

その退却の最中、袁術が軍を動かす気配を見せるという情報が雪蓮達の元に入るも、結局袁術軍は軍を出さなかった

いや、出せなかったのだ

何故なら、その動きを江夏にいる杏が袁術に対して牽制をしていたためである

こうして呉軍は三度にわたって咲夜の軍に助けられたこととなった

それから6日後…

江陵、荊州城共に咲夜の軍によって落城することとなった

咲夜はまず内通していた者たちの取り立て、そして国主劉表とその一族、そして側近とも言えた張允と蔡瑁などのことを決めることとなった

まず劉表とその一族だが、咲夜はとりあえずこちらで取り立てることもせずただ、身分を落とすことにした
劉表が生き残ったとしても大した害にはならないと皆が判断したためである

次に蔡瑁、張允の二人だが、この二人は満場一致で処断することになった
生かしておいたら確実に咲夜に牙をむけるだろうと思ったためであるのと、以前蔡瑁が捕えられた時、もう一度咲夜に攻撃すれば今度は命を刈り取る。だから、もう二度と攻めて来ない様に進言しておけと忠告していたのだ
それなのに、荊州軍は襄陽に攻めてきた

それ故に、処断することとなった

次に咲夜が事前に行っていた内からボロボロにするという策、それが見事に的中し、劉表の部下の大半が咲夜に従順することになった

その代表が王威、？越、霍峻、韓嵩、王儁、？義などだった

それから落城した後、その者たちの説得もあって文聘、？季、傅巽なども劉封軍に降伏し、従ってくれることを約束した

こうして咲夜は樊城、襄陽、江夏、江陵、荊州と5つの城と広い領土を得ることとなった

第九話（後書き）

荊州という郡の大半を手に入れた咲夜
そして更に領土は増えていき、咲夜は朝廷にとあるものを名乗るようにという勅を受け取る
咲夜は、こうして更に力を得ていくのであった

次回、第十話
荊州王　劉封

…予告ってこういう感じの方が良いんでしょうか？

第十話

劉表軍を打ち破り、荊州城と江陵城を手に入れてから、咲夜は内政を行いながら他の領土からの侵略などに備えていた。

領土というのは制圧した後というのが一番狙われやすいためである。
その為、武官の半分以上は領土の境の場所に展開させている。
残りの者は皆、兵士たちの訓練などを受け持ったりしている。
文官も文官で非常に忙しくなっていた。
無理もないだろう…
一気に三つも領土が増えたのだから。
だがその分、咲夜の元には有能な者達が集っていた。
元劉表軍にいたのだが、劉表が気にいらないという理由だけで使われなかった者、蔡瑁や張允、黄祖などと仲違いし出世できなくなっていた者達等は、現在以前よりも上の官職で働くことが出来ている。

勿論のことだが、咲夜はまず領民の安全の保障や治安の維持などを第一としていた。
その為、領民は皆咲夜の政治体制に積極的に協力してくれ、咲夜もそれに応える様に成果を出していく。

一月も経った後、江夏、荊州、江陵の三郡は見違えるように発展していった。
ほんの少しずつだが、襄陽や樊城のような店や街並みが立ち並ぶようになり、生活水準も問題なく安定して行った。

そんな中、咲夜は内政を行いながらも外の情報も欠かさずに頭に入れていった。
その隣には常に美鈴がいて、咲夜のサポートに徹底していた。
そして咲夜の陰にはいつも影夜や朔などといった情報収集などの能力を持つ部隊が咲夜の求める情報を可能な限りに集めていった。

咲夜がまず注目したのは今後の憂いとなるであろう武陵、零陵、桂陽の三郡である。
零陵の太守、劉度は対して害にはならないのだろうが、その息子である劉賢、そして刑道栄という猛将（前世ではＫＤＡという名で有名だったＷＷ）。
この二人をどうにかすれば大丈夫だろう。

次に桂陽だが、こちらも国主である趙範は問題ない。
だがやはりというか部下である鮑隆や陳応が問題である。

最後に武陵だが…太守である金旋は好戦的な男であるという情報が入っている。
その為、劉表が居なくなった今、荊州城に攻めてくる可能性は高い。
その為、ここだけは１００％戦う羽目になるかも…

ただ、民のことを思い戦いは避けるべきだと主張する部下も幾人かいるらしい。
その代表が鞏志という将である。

だが、その意見は太守である金旋と息子である金？に強く拒まれてしまっているため、鞏志自身、現在軟禁状態にされているそうだ。

更には金旋は城に韓玄と韓浩の兄弟を向かい入れたそうだ。
確か韓玄は忠志では長沙の太守をしていたようだが…
やはりこの世界は咲夜の持っている知識とは差異が生じているようだ。

「……とりあえずこの三群に使者を立ててみるか。何事もないのが一番いいことだしな」

咲夜はそれぞれの太守に使者を送り、様子を見ることから始めることにした。
何故なら、咲夜にはまだまだやらなくてはならないことが山の用にあるためである。

咲夜は頭をフル回転させながら皆の仕事を上手く振り分けつつ、自分のやるべき仕事をどんどん片付けていった。
流石は咲夜と言った所か、その仕事はまるで疾風の如く。
異常な早さでどんどん減って行った。
それに影響を受け、他の文官もどんどん自分たちの仕事を終わらせる早さが上昇して行った。

だがまだ足りない！！
足りないぞ――――！！！
お前に足りないのはッ！情熱思想理想思考気品優雅さ勤勉さ！
そして何より――
速さが足りない！

文官の頭の中に響き渡った文章だった…

「さてさて、次の仕事を終えたら昼食にしようかね」
そんなこんなで咲夜の仕事もようやく一段落といった時、

「し、失礼します」

腕一杯に山の様な竹簡を持ってきたのは雛里と麻理だった。
扉の方は咲夜が仕事の時、多くの文官達が入れ違いに竹管や書物を置いていったり、持っていったりしたために空きっぱなしになっていた為、二人は問題なく咲夜の部屋に入ることが出来た。
部屋といっても咲夜がいるのは専用の執務室なのだが…

「…また追加の竹簡？」
「は、はい…すいません、咲夜様」
「いや…良いんだけどさぁ。皆どんどん早くなってない？　流石に俺もびっくりだよ」
「し、仕方ないのでは？　皆さん、咲夜様に少しでも苦労を掛けたくないという一心で一生懸命に仕事に取り掛かっているようですし」
「……まあそうだけどねぇ、ハァ」
「あわわ…」
「ふわわ…」

ここ最近の仕事量増加のために流石の咲夜も溜息を出してしまい、それを見て麻理と雛里もあわあわしてしまっていた。

「…でもやるしかないよな。俺が頑張るだけで多くの人たちが笑顔になれるんだから」

うしっ、と一息入れると咲夜はまず雛里と麻理の持ってきた竹簡を簡単に確認しつつ、他の文官達の大まかな状況を二人から聞きだすことにした。

「雛里、まず他の皆の仕事の現在の状況を可能な限り教えてくれないかな？」
「はい。まず治安の方ですが、咲夜様の創立した治安維持部隊と警

邏部隊の成果はかなり出ているようです。その為、担当者の人たちもそれほど忙しくはなっていない様ですね」

雛里が被っているとんがり帽子を弄りながら咲夜に詳細を告げていく。

その様子はちょっと可愛らしいと咲夜は思いつつも、しっかりと雛里の目を見ながら報告を頭に入れていくことに集中していた。

「次に税金と戸籍の方ですが…こちらは少し難航していますね。咲夜様の考えた貨幣を一つにまとめるということがやはり新しい土地の人たちにとって導入しにくいようです。加えて、戸籍の方もまだ完全に纏め終えていないそうで…今、担当の皆さんが一生懸命に完成させようとしています」

「そっちの方は長い目で見た方がいいかもしれないね。でも貨幣の方は出来る限り早く皆に慣れてもらわないといけないから、対策を考えておかないとね」

雛里の話を聞きながらて元にある竹簡にも目を通し、頭に入れていくあたり流石は咲夜といったところだろう。

麻理の方は咲夜に次に目を通すべき竹簡をいち早く判断し、それを手渡していた。

こういう所は、樊城に古くから居た経験が生むコンビネーションなのだろう。

二人の動きによどみは一切なかった。

「えっと…次は街並みの方ですね。こちらはもう家屋が古く、いつ

崩れてもおかしいという場所はこちらで援助して、新しい家を改築しつつ、広い道を確保するということでした。領民の皆さんの中で樊城や襄陽に行ったことのある方々が居たそうなので…そのようにして欲しいという意見が出ているそうです」
「……う～ん…少しずつそうして行くしかないか。とりあえず仮設住宅を作って、４分の一ずつから始めていくのが一番だと思う。いきなり全部は流石に無理があるからね。後は城外の村なんかもちょっとずつ改善していかないと」

咲夜と雛里は次々と話を続けていき、麻理はそれの邪魔にならない様に咲夜をサポートしていった。
その為、簡単な確認だったがそれはかなり早く終わることとなった。

「さて…次は麻理から武官のこと。そして、総兵数と軍備、それから国境の状況なんかを軽く教えてくれるかな」
「は、はい！　まずですけど…新しく参入した方々は皆さん、星さんや紫苑さん達を筆頭にこちらの主義に慣れることから始めてもらっています。次に総兵数ですが…この度、江夏、江陵、そして刑州本城を加えたことによって襄陽と樊城にいる兵を合わせると約３０万になりました」
「…そんなに増えたの？」
「はい！　その三郡以外からも多くの方々が軍役に服したいということから。その為、国境にいる方々以外は皆、新兵さんたちの訓練で毎日忙しいそうです」
「…幾らなんでも増え過ぎだろう」
「ふふ、それだけ咲夜様を慕ってかもしくは信頼しているのでしょ

うね」

そういいながら麻理は麦わら帽子を弄っていた。
そんな麻理もかわいらしいと思いつつも咲夜は、仕事に集中。
こんな時はしっかりと公私の区別がちゃんと付いているのが咲夜なのだ。

「そうなると総領民数の方も凄いことになってそうだね…」
「そうですね…色々な場所から咲夜様の噂を聞いてくる方々が居ますから。咲夜様の考えた法案で異民族の方々も受け入れるようになっていますしね」

最初こそ、多くの反対意見や様々な問題があったが今では樊城、襄陽においては異民族であってもしっかりと規則を守り、治安を乱すような行いをしなければ受け入れられている。
山越、南蛮、羌族等が例としてあげられる。

「次に軍備の方は兵糧と武具、攻城兵器なども充実しています。その為、もし攻めて来られたとしても十分に対応できますね」
「そっちの方はまあとりあえず安心できるか…」

「後は国境の方ですが…実はいくつか書状を受け取っているんです」
「書状？？？　誰から…まあ一部は何となく分かるけどね」

「一つ目は…まあいつもの袁家か「燃やして」ら…？　え、えっと
「燃やして」……はい」
「だ、駄目でしゅよ！！」

咲夜は雛里に説得されて、何とか踏みとどまり念のため読んだのだが…やはりというか内容はいつもと同じだった。
だが、その書状には少しだけ気になることが書かれていた。
それはこの国の言葉ではなく…
咲夜の前世の頃に使われていた……

日本語だった。

咲夜は内心吃驚したが、それを表情に出さずに冷静に分析することにした。
その中で一番有力だろうというのは、以前聞いた情報の中であった冀州に落ちた天の御遣いだろうという男…

少し興味が湧いた咲夜は後で誰かに調べに行って貰うことにした。

「次は武陵にいる鞏志、そして韓玄からです」
「…鞏志は分かるが…韓玄から？」

咲夜はまず鞏志からの手紙を拝見することに。
そこに書かれていたのは今の金旋による軍部拡張などによる民の生活の圧迫化のことや町で行われている非道な行為のことについてが書かれていた。
それを雛里、麻理と一緒に見ていたのだが…次第に二人の顔が悲しそうに見えてきた咲夜だった。
その咲夜自身もこれが真実なら…許せざることだと思った。

「……金旋、やっぱりどうにかしないと拙いかな」
「咲夜様…」
「…次は韓玄からの手紙だな」

気を取り直し、咲夜は次の手紙を開いた。
内容は一部のみが鞏志と同じことを書いてあって、残りは咲夜に武陵を攻めてもらいたいというものだった。
もし、攻めてもらえるのならば零陵と桂陽は自身が説得しようということも書かれていた。

更にちょっと驚くことも書かれていた。

「…韓玄って…紫苑の知り合いなの？」
「そ、そのようですね」

書かれていたのは、

――黄漢升は元気でしょうか？　昔馴染みのため、会いたいとは思っていたのですが…璃々ちゃんとも会いたいものです。

というのが最後に書かれていた。

「…とりあえず紫苑に事実確認してから判断するか。後は燐花と風の二人にも話を通しておかないと…」

手紙を読み終えると咲夜は一息つき、とりあえずだが自分の仕事を確認し終えた。
そして時間を確認すると、もうお昼時を過ぎる直前であることが分かった。

「やばっ…そろそろお昼食べないと」
「あ、しゃ、しゃくやしゃま（がり）～～～～～っ！！！」

雛里が声を掛けようとして、また舌をかんだようで…

「あ〜あ…全く雛里は。落ち着いて話しなさいって」
「しゅ、しゅみましぇん…」
「ふふ、はい。口あけて」

何だか恒例のやり取りとなっていることであるのだが…
咲夜はやれやれといった感じ半分、雛里は申し訳ないと思いつつも何やら嬉しそうな顔をしていた。
そしてそれを羨ましそうに見つめるのは麻理。

「で、何か用かな雛里」
「えっと…さ、咲夜様さえよろしければ私たちとご一緒にお昼はどうかなっと。ね、ねえ麻理ちゃん?」
「そ、そうだね雛里ちゃん!　良いと思うよ!!」
「…そうだな。一人で食べるのも味気ないし…じゃあいっしょに食べに行こうか」
「「は、はい!!」」

咲夜、雛里、麻理の三人は一緒に手を繋いで町まで食事を取りに行

った。
店は咲夜提案似非日本料理店。
似非というのが付く理由としては…純粋に日本料理とは言えない物が多少あるからである。
だが、恐らくこの店に北郷一刀が訪れたのなら…十中八九驚くことだろう…
本来なら樊城もしくは襄陽でしか食べることは出来ないのだが…咲夜が職人に頼みこんで今居る刑州本城に仮の店を立てて貰ったのだ。
それも新しく咲夜の領地の民となる人たちに可能な限り美味しいものを食べてもらいたいと咲夜が思って、手配しておいたためである。
今ではそれが功をなし、かなりの人気が出ていた。

咲夜はこの店で唐揚げ定食、雛里は団子肉定食（ハンバーグ定食の様なもの）、麻理は山菜定食を注文。

食事を終えると咲夜は二人と一緒に仕事場に戻り、自室近くになると二人と別れまた一人仕事を始めた。

そうしたことを幾日か続けていたある日…

金旋が武陵を出て咲夜達が居る刑州本城に宣戦布告をしてきた。
そして現在、江陵に向けて進軍中だと影夜から情報が入った。
先鋒は金旋自身で、兵は２００００。
その間、城の守りを韓玄に任せているそうだ。

その報告を受け、咲夜は一部の武官と兵たちを国境から呼び戻し、戦いの準備を整えることにした。
といっても殆どが終わっているため、後は編成をすればいつでも出れる状態になってはいるのだが…

軍議の場…その場にいるのは咲夜、燐花、紫苑、美鈴の４人。
杏と風は現在、江夏で内政を行っている最中であり、今この場には居ない。
秋葉と雛里は荊州本城で、麻理は襄陽に戻り仕事をして貰っている。
焔耶の方には副官として魔理沙（王平）と雛（諸葛瑾）の二人を付けて益州を警戒して貰っている。
智や慧音などにもそれぞれ苑、揚州などへの警戒を怠らずにいて貰っている。
その為、現在江陵にいる主だった将はこの四人のみなのだ。

「さて、現在もう国境近くに武陵軍が来ているそうだ」
「それで…どうするのですか咲夜様？」
「決まっている」

咲夜はスクッと立ち上がると…

「粉砕！！　爆砕！！！！　大喝采！！！！！　…って感じで野戦でけりをつける。態々領民を危険にさらす気はない」
「了解しました」

先鋒は紫苑と美鈴の二人に任せ、咲夜は燐花と共に中軍を指揮することになった。
因みに先程の咲夜のハイテンションだが…スルーされて少し寂しいと思った咲夜だった…

そして…

戦いの舞台はおとずれた。

劉封軍　３００００
金旋軍　２００００

この時点ですでに決着は見えているようなものだった。

数でも将の質でも金旋の軍は咲夜に負けていた。
その上、金旋の元には有能な軍師が居なかった。
逆に咲夜の元には燐花…荀攸が居たために隙はない。
最も、それ以前に金旋と咲夜では国主の器が全く異なっていたのだ。
いや…比べるまでもなく、金旋には将としての器ならまだしも主はおろか太守の器すらなかったのである。

金旋は意気込んで当初、偃月の陣で自らを先頭として突っ込んできた。
咲夜は定石通りといえば良いのだろうか…それに対して、鶴翼の陣を敷いて金旋軍の動きに合わせて包囲し、せん滅する作戦に出た。

勢いに任せる金旋に対して、咲夜は冷静に対処し、次第に状勢は決していった。

紫苑が弓で的確に敵の命を射抜き、美鈴はその紫苑に近寄ろうとして来る敵を手甲をはめた手で殴り飛ばし、咲夜自身も近寄ってくる敵をハルバートで斬り倒していった。

そんな無双をする三人に次第に敵の兵たちは怖じ気づき、次々と退却を始めていった。
その様子を見た金旋は悔しそうにしながら敗走兵に紛れながら武陵へと逃げていった。

「さて…燐花、どうする？」
「勿論、このまま追討戦に入るわ。当然でしょ？」
「そうだな」

咲夜は全軍を率いて武陵城に向かい、けりをつけることにした。

そして咲夜達は武陵城までたどり着いたのだが…

「…静かすぎる」
「そうですね咲夜様、どう思われますか？」
「罠…の可能性は否定できなくはないけど」

城に近づいても何の行動も起こそうとしておらず、門だけが閉じられていてただ静かに旗が風で揺れているだけの状態。
明らかに不自然な状態であった。
すると、いきなり門が開き始めた。

咲夜達は金旋がまた懲りずに戦いに来たものだと思って皆、戦闘の用意を始めた。
だが門から出てきたのはたった二人。
一人は何やら桶の様なものを持ち、もう一人は何やら布に包んでいる物を持ちながら咲夜の元に歩いてやってきた。

「止まれ！　何者か！！」
美鈴が警戒しながら警告した。

「怪しい者ではありません。私の名は鞏志と申します」
「何…では君がこちらに書状を送った」
「はい」

桶を持っている者は自らを鞏志だと言い、その場に立ち止まった。
もう一人の方はと確認しようとすると、咲夜は紫苑が驚いた顔をしていたのが目に入ったため、どうしたのかと聞いてみた。

「琥珀？」
「ええ、そうよ。久しぶりね紫苑」

もう一人の方は何やら紫苑と知り合いのようで二人で真名を呼び合っていた。

「もしかして…貴方は韓玄でしょうか？」

咲夜はふと思い立ったことを聞いてみた。

「ええ、そうよ」
「……それでお二人だけで城外に出てきたのは？」

燐花が警戒を解かずに問いかけた。

紫苑はびっくりしたのが大きいのか…少し警戒が解けてしまっているのだが…
他の面々は皆警戒を解いておらず、いつ何が起こっても対処できる状態にあった。
こういった所も咲夜の提案した訓練などが役に立っているのである。

「ええ、これより武陵は劉封様に下ります」
「「！？」」
「……どういうこと？　先程は金旋自らこちらに攻めてきたというのに」

美鈴と紫苑は驚き、燐花は先程から曲げていた眉を更に曲げ、質問を続けた。

「簡単よ。私達は元から劉封様に刃向う気なんてなかったの。でも太守がそれを一人だけ嫌がってね。で、太守の独断でそちらに攻めていったってわけなの」
「私はその間に韓玄様に助けられ、共に残った者を説得していたというわけです」

韓玄と鞏志の話を聞き、成程という顔をする燐花。

「じゃあその金旋はどこに？」

「…ここに」

咲夜は当たり前のことを聞くと、鞏志は手に持っていた桶を差し出した。
それを開けるとそこには金旋の首が入っていた。
先程、戦いで見たばかりの顔のため、咲夜達はこれは間違いなく金旋の首であると判断した。

「…武陵にいる人たちは皆こちらに降伏するということでいいのかな？」
「はい」
「……分かった。なら詳しい話をしようか」

咲夜は全軍を率いて、武陵の城へと入って行った。
すると入場した瞬間、民衆がわっと騒ぎ始めた。

「あ、あれが劉封様か？」
「おお、これで暮らしが楽になる」
「劉封様、ばんざーい！！」

その歓迎の声は咲夜達が城にはいるまで止むことはなかった。

これだけでも今までどれだけ苦しい生活を強いられていたかが伺いしれた。

城内にはいり、鞏志と韓玄は応接間に案内した後、席に座って欲しいといった後、真剣な顔をし、咲夜達もそれに釣られ、先程よりも真面目な顔をし始めた。

「ではまず劉封様からこちらにお聞きになりたいことがありましたら何なりとお聞きください」
「じゃあまずどうして俺を選んだかについて聞かせてもらおうかな」

鞏志に応え、咲夜は一番聞きたかったことから聞くことにした。

「簡単よ。民の言葉を聞けばすぐに分かるわ」
「劉封様は良主であり、領民となれば苦少なく生を得ることが可能。そう広まっておりますので」
「……そんなことないと思うのだが。生は良い意味でも悪い意味でも平等だ。俺はただ酷過ぎる落差を失くして、この荒れた世を少しでも良くしたい。それだけだ」

咲夜の調べで分かったことでもあり、咲夜自身前世での記憶にもあったことなのだが…この時代は豪族や宦官などは裕福な生活を送る

ことが出来ているのだが、庶民はその日の糧を得ることすら難しく、酷く貧しい生活を強いられているのだ。
前世で親に支えられながら幸せに生きていたという記憶も持っている咲夜だけにこの世の中の情勢に耐えられずにいたためにこうも一生懸命に動いているという理由もあるのだが…

そんな咲夜を感心したように見る韓玄と目を輝かせながら咲夜を見つめる鞏志。

「さて…次に聞きたいのは韓玄にだ」
「私か…何が聞きたい？」
「韓玄って紫苑と知り合いなんだよな？　ならどうして金旋に仕えることにしたんだ？」
「…ふむ、なら私と紫苑の出会った時の話から始めるとするか。私は昔、紫苑と同郷だったのだよ。それで暫くの間は一緒にいたんだ。でも紫苑が結婚してから、私は弟と旅に出ることにしてな。その旅の途中で黄巾党の乱に巻き込まれてしまったんだよ。で、そんな中私と弟は様々な場所を見てきたし、聞いてきた。一番多く聞いた噂はやっぱりあんたの領土のことだね」
「……」
「だから私達もそっちに行こうとしたんだけど…情けないことに路銀が完全に底をついちまってね。だから客将として武陵に仕えることにしたんだけど…ここは酷かったよ。武官が領民を虐げ、文官は横領し、太守である金旋は酒と女の毎日。そのくせ自尊心だけは一人前。だから私は韓浩と鞏志に話を付けて、金旋を殺してあんたにこの地を任せた方が絶対に領民のためになると思ったのさ」
「…成程ね、納得したよ」

全員が韓玄の言葉に納得し、うんうんと肯いていた。

「じゃあ最後、書状で送ってきた桂陽と零陵を説得するっていうのは？」

「ああ、劉度と趙範の二人は国主としての器じゃない。だからこちらから切っ掛けを作ってやれば直ぐにでも降伏してくる。問題は国主ではなく、その配下にあるが…」

韓玄は咲夜が以前から考えていたことをそのまま挙げてきた。
咲夜はそれに感心しつつも韓玄の発言に耳を傾けていた。

「でもまあそれもあんたを見れば考えも変わると思うよ」

「…そうか？」

「ああ、私が言うからね。こう見えても私は人を見る目があると思うよ」

「…そうか。分かった、ならこの案件は韓玄に任せてもいいかな、皆」

「はい、私は構いませんよ」

「咲夜様の考えにお任せします！！」

「…ま、紫苑の知り合いだって言うし…それに考え自体も悪くはな

いからね。いいわよ」

「おや、加入してもいいってことかな、これは」
「ああ、これからよろしく頼むよ。韓玄、鞏志」
「ああ、任せな」
「これからよろしくお願いします！！」
「じゃあ自己紹介から。私は性は韓、名は玄。真名は琥珀よ」
「私は性は鞏、名は志。真名は雫です」
「俺は性は劉、名は封。真名は咲夜だ。これからよろしくな、琥珀、雫」

それから数日後…

桂陽、零陵からそれぞれ使者がやってきて降伏するという書状を持ってきた。
咲夜はそれを受け入れ、劉度と趙範の二人としっかりと話し合いをし、二つの郡をしっかりと治めることを約束した。

咲夜はこうして短い期間ながらも武陵、零陵、桂陽の三郡を手にしたことで荊州の大半を手中に収めることとなった。

これ以降、民の間では咲夜が荊州を治める王となるのも時間の問題だろうと囁かれる様になった。

第十話（後書き）

刑州の大半を治めることとなり、多くの領土の主となった咲夜。
暫く続いた戦いの日々から離れ、内政をしながら日常を楽しむこととなった。

さて…今日は誰と一緒の時間を過ごすのだろうか。

次回…平和な一日？

第十一話（前書き）

ちょっとだけ咲夜が女性関係の件で一歩だけ前に進む感じです。
やっぱり短いですけど…
もうすこく長く書きたいものです。

第十一話

荊州の大半を治めることとなった咲夜は毎日が忙しいようになってしまった。
だが、古参の部下を中心に新参の部下達も一生懸命になってくれるおかげで咲夜も少しずつだが楽になれていた。
降伏した当初は不穏な空気を漂わせていた刑道栄や陳応等を中心とした降将らは今では咲夜の考えに少しずつ賛同し始め、積極的に協力してくれるようになっていた。

そんな皆の頑張りがあったためか…今日は咲夜は仕事は完全にオフ。
その為、町に出て買い物でもしようかと思っていた。
今咲夜が居るのは江陵。
咲夜は少し前までは誰をどの地に振り分けるかで非常に悩んでいたが、それも燐花、風、雛里、麻理などと相談をして決めることが出来た。

まず樊城の方だが、ここは相も変わらず叔父に任せることにした。
補佐として樊城に昔から居る人たちもおいているため、ここは問題ないだろうと判断出来る。
次に襄陽だが、ここには魔理沙（王平）、慧音（劉曄）と他数名の武官と文官を配置。
江夏には椛（董允）、智（馬良）、韓浩（翡翠）と他数名の武官文官。

零陵は琥珀（韓玄）を中心に任せ、桂陽は雛（諸葛瑾）を中心に、そして武陵は雫（鞏志）を新たな太守としてそれぞれ文官武官を適応に派遣している。
荊州本城には咲夜が選んだ適した人材をしっかりと派遣しているため、こちらも問題はない。
咲夜自身は江陵に紫苑、杏、焔耶、星、秋葉、風、雛里、麻理、燐花、そして美鈴らと一緒にいる。
この江陵という土地は後に重要な場所になると判断した咲夜はこの地を中心に内政を進めていくという方針を下し、この地に留まっている。

「さて…何処から行こうかな」
まだこの地は襄陽や樊城に比べると発展途上なのだが、新しく手に入れた荊州三群に比べるとそれなりの発展を遂げていた。

その為、今江陵領内の町や村はかなり活気付いている。
そして咲夜が荊州の大半を手に入れたことでまず手を出したのは製紙、食品、治水、鉱山関係のことだった。
以前まで使っていた竹簡による紙代わりとなっていた物は保存にかなりの空間を必要とする上に読み難いという欠点があったので咲夜はそれを改善するために色々と工作をしようとしていたのだが、この時代では紙はかなりの高級品になるためにそう簡単に手を出せずにいた。
だが、それもこの多くの領土を得たことによって改善することが出来た。
まず咲夜は製紙のための材料を多く生産できるようにし、前世での紙の作り方を普及させ、紙の値段を下げることを狙った。
そうすることによって、今後色々と便利になるためである。

仕事関係でも竹簡によるものよりも紙によるものの方が管理もしやすくなるため、誰も反対意見を出すものは居なかった。
次に食品関係だが、これはやはり貿易や今までどこも手をつけようとしていなかった物に手を出そうとしていた。
その代表例が蜂蜜である。
咲夜は蜂蜜作成や養蜂の技術を普及させ、自然だけでなく人工的にも蜂蜜をとれるように手配した。
まあこれの狙いは他にあるのだが…
それは今は置いておこう。

そして、治水関係はこれは長江や黄河等の大運河を自領に含んでいるため、水害などの防止になることを目指し、咲夜は防波堤を作ることを指示した。
と言ってもこれは完璧とは言えないが及第点としか言えない物である。
仕方のないことだろうが、ダムなどの施設は作ることが難しいため、こういったことしか出来ないのだ。
後の水関係の物といったら、風呂だろう。
何を隠そう、咲夜は風呂は大好きである。
その為、部下に指示を出して温泉を掘りださせていた。
その内、咲夜は温泉リゾートも創設する予定である。

後は簡易給水施設なども作りあげたために、以前よりも水を多く使うことが出来るようになった。
領民、特に女性達はこの咲夜の功績に大満足してくれた。

最後に鉱山関係だがこれは武器だけでなく、農具や他の生活用品にも鉄などの鉱石は必要であると考えた咲夜はまだ手をつけられていない鉱山を掘らせていった。
これも時間はかかるだろうが、成果が出れば黒字になることは間違いないだろう。

そんなことを考えながら咲夜はちょっと店をフラフラと適当にぶらついていた。
とその時、ある店で知り合いが話し合っている姿が目に入った。
何となく気になった咲夜は声を掛けてみることにした。

「お～い、星に風、それに美鈴～！」

その店とは…夜桜拉麺・江陵店。
襄陽や樊城で咲夜がアイディアを渡して新しい味を追求し、かなりの人気が出たラーメン店である。
今では刑州のほぼ全域に店舗を出すほどとなっている。

「おや、主。主もここのメンマを食べに来たのですか？」
「いや、違うけど…っていうか何でラーメン店でメンマのみ？」
「それは決まっているでしょう。メンマこそ、至高の食物。私は毎日メンマづくしでも生きていけますぞ」

「……とりあえず星がメンマ中毒だって言うことだけは理解したよ」
「失礼な。私はただメンマをこよなく愛してるというだけですぞ」
「…それはもう危ない領域だと思うのだが」

流石の咲夜も星のメンマ好きレベルに引き気味である。
毎日メンマづくし…
死ぬなぁ、それは…
っていうか１００％栄養偏るし。

だけど…咲夜の目の前にいる趙子龍は全く嘘を言わないと言わんばかりの純粋に真っ直ぐな目をしていたため、咲夜もそれが嘘発言ではないと理解した。
その上で…やっぱりちょっと引いた。

「それでお兄さんはどうしてこちらに～？」
「ああ、ただ今日は仕事がないからちょっと町でもふらつこうかなって思ってね。時間的にも丁度いいから、軽く食事をとろうかと思った矢先に三人を見かけてね。で、ちょっと声を掛けたわけだよ」
「ふむふむ、ならお兄さん。どうせならご一緒しませんか？」
「え、いいのか？」
「風は構いませんよ～。星ちゃんと美鈴ちゃんはどうでしょうか？」
「わ、私は構いません！！　む、むしろ…（ごにょごにょ）」
「ふむ、私も構いませぬぞ」
「そうか、なら遠慮なく」

咲夜は開いている席に腰をおろし、店員を呼ぶと注文をして、出さ

れた水を一口飲む。
歩き続けていたために、その水は喉を潤し、半分ほど飲み終えた後、ぷはっと一息ついてしまった。

「おや、それほどに喉が渇いていらしたのですか？」
「あ～、まあそれなりに長い時間歩いてたからね」
「…咲夜様、今日はせっかく仕事がお休みなのですからもっとゆっくりして下さい。でないといつか倒れてしまうかもしれませんよ？」
「あ～、悪いな美鈴。もう癖になってるんだよ、これは」
「おやおや、お兄さんは仕事中毒なのですね～」
「……否定しきれないなぁ、俺ェ」

なんやかんやで仕事をすることが好きになっている咲夜は例え休日であったとしても、仕事に関係することを考えてしまう癖が付いてしまっているため、風の言うとおり中毒といってもいいほどなのである。

「そ、それよりも三人はどうしてここに？」
「ふむ、私達は丁度昼休みで偶然会ったのでな。ならばともに食事を取ろうということになり、この店に来たというわけですぞ」
「まぁ最もこの店に来たのは星ちゃんの強い要望があったからなのですが～」
「そうですね…あの時の星さん、凄く必死に私と風さんを誘って…」
「おや、そうだったかな？」
「ええ、もうそれは必死に…」

美鈴はその時の星の様子を説明しようとしたのだが、店員が注文の品を持って来た為に強制的に話は中断されてしまった。
何となくだが、その時の星は店員にナイスタイミングだと言わんばかりの顔をしていたように咲夜には見えた。

「では頂こうか」

咲夜は無難に醤油ラーメン、風は塩ラーメン、美鈴は豚骨ラーメン麺多めという注文だったのだが…星だけちょっと変わった注文をしていた。
というのも…

「……なあ星、俺の目がおかしくなったのか確認したいのだが……それ、何？」
「何とは？」
「…明らかにメンマと麺の比率がおかしいのだが」
「ああ、私の注文したのはメンマラーメンだからでしょう」
「何それ！？」

そこにあったのは麺がほんの少しでどんぶり一杯に山積みとなっているメンマがスープに浸してあるという奇妙なものだった。
比率で言うと麺：メンマ＝１：９といったところだろうか…

「いやいやいや！　これはもうラーメンじゃないだろう！　例えラーメンだとしても何で麺の方がおまけみたいになってるわけ！？」
「おお、お兄さん。良いツッコミですねぇ」
「いやいやいや！　風もおかしいと思わないわけ！？　美鈴は！！？」
「あ～、風は以前星ちゃんと一緒に旅をしていた時に似たようなことを見たことがあるので～」
「…私もこれが初めて見ることというわけではないですし。その…確かに最初は吃驚しましたけど…人の好みはそれぞれと言いますし」
「……もういいや、それで」

咲夜、ツッコミ放棄。

咲夜、風、美鈴はそれぞれのラーメンをずずっと食べ、星は一人ポリポリという音を出しながら食を取り、それを終えると店員にお茶を注文し、少しの間話をすることにした。
序に咲夜の奢りで甘味も頼むことになったのは咲夜の紳士精神があってのことであったというのは追記するべきか否か悩む所である。

「所でお兄さん、いくつか聞いてもよろしいでしょうか？」

「ん、何かな？（ズズッ）」

食後のお茶を一口、口に含みながら、ああやっぱり茶畑も作らせるようにしたのは正解だったな。などと思っている矢先…

「お兄さんは誰かと閨を共にしたことがありますか？」

「ぶぶぶぅぅーーーーーー！！！」

突然の質問にお茶を噴き出してしまった。

しかしそこは咲夜、ちゃんと誰も居ない自身の下の方に瞬時に顔を向け、被害がないようにした。

「ゴホッ！！　な、何でいきなり？」

「いえ～、ただお兄さんの周りには綺麗系や可愛い系の女性たちが多くいますからね～。少し気になったのですよ～」

「わ、私も聞きたいです！！」

「ふむ…確かに。主のそういった噂は全く耳にしませぬからな。私も興味がありますぞ」

そう言われて咲夜は少し考えてみることにした。

確かに自分の周りには贅沢過ぎるほどレベルの高い女性が多い。

未亡人であり大人の魅力あふれる紫苑、スタイルもよく気易く話しやすい性格をしている秋葉、自分のことをよく慕ってくれている綺麗な髪をしている杏、一生懸命で前向きな上に可愛い所もある焔耶、悪戯な気もあるけれど綺麗でも有り可愛らしくもある星、チャイナ服がよく似合っていてスタイル抜群であり、自分に良く懐いてくれている美鈴。

武官の方だけでもこれだけの女性が集まっている。

文官の方はというと、ちょっと不思議系が入っているが可愛らしい風、何やら保護欲が湧いてくる妹系の雛里、麦わら帽子がよく似合っていて傍にいてくれるだけで心を癒してくれる麻理、気が強くちょっと口うるさい所もあるけれど面倒見が良く兎の耳のフードがよく似合っている燐花。

他にも自分をまるで父親のように思って甘えてくる影夜、少し前まで恨まれているようだったがここ最近はしっかりと咲夜の目を見て話しかけてくれるようになった天和、地和、人和の三姉妹。

他にも劇場の関係者や他の武官文官にも多くの美女たちが居る。

今考えると咲夜は所謂ハーレム状態になっていたのだ。
仕事の虫になり過ぎてそっちの方をすっかりカヤの外においていたために、今まで全く意識していなかった自分が居たことに内心驚いた咲夜だった。

「…その顔だとお兄さんは全くそういった関係を持っていないのですねぇ」

風が何やらがっかりした様な顔をしていた。

「いや、そんなこと言われてもなぁ。今まで自領の管理で忙しかったわけだし…それに俺に尊敬とかの好意ならまだしも男性としての好意なんてそうは持ってないだろう？」

咲夜がそう答えると三人ともびっくりした顔をした後、ハァ～っと深いため息をついた。
そして咲夜を呆れたような目で見つめた。

「え？え、えっと？？？」
「宝？、これはどう思いますか？」
「おうおう兄ちゃん。鈍感過ぎるのも罪ってもんだぜ」
「…風、その言い方だと俺にそういった好意を持っている人が居るように聞こえるんだけど…そうなの？」
「それを俺の口から聞くってのも野暮ってもんだぜ？」
「これこれ宝？。そんなことを言ってはお兄さんが可哀想ですよ」
「……風のその言い方から察すると居るんだな」
「まあそゆことですねぇ」

そう言われ、咲夜は思わず固まってしまった。
例えるのならイ○―クが固くなるを使用した様な状態である。

「おやおや、主は文武共に優れ、仁君として優れた能力を持っていても異性関係はさっぱりということですかな？（にやにや）」
「まあ実際に咲夜様に好意を持っている人は数え切れないほどいますから…（私もですけどね）／／／」

星は面白いものを見つけたと言わんばかりにニヤニヤとしながら…美鈴は少しだけ顔を赤く染めながらもじもじしつつも咲夜をチラチラと見つめていた。

「……Σ　おお、いきなりの事実に思わず現実逃避してしまった」
石化がようやく解け、咲夜は三人に再び向き直った。

「…まあとりあえず誰が俺のことを思ってくれているかなんていうのは聞かないでおくとして……それは聞けて嬉しいよ」
「おや、どうしてですか？」
「ん～、だってそういうのは本人の口から聞きたいし…嬉しいっていうのは俺の将来の夢の一つが良い人と結婚して子供をつくって幸せな家庭で生涯を過ごすっていうのがあるからさ」
「へぇ～、咲夜様の夢ってもう少し大きなものかと思ってましたけど…結構普通なんですね」

「大きいって…どういうものだと思ってたのさ」
「え、えっと…天下統一とか？」
「いやいや、全く俺に当てはまらないでしょ」
「ふむ…確かに主の器は大きいが、そういった野望を全く抱いておりませぬゆえに天下統一という言葉は似合いませぬな」

星が茶化すようにはっはと笑い、咲夜達もそれに合わせて笑いあった。

「ふむぅ、ならお兄さんの好みの女性を聞いても？」
「え？ん～～～～～…俺の好みの女性かぁ。とりあえず第一の条件として常識を持っている人かな？　嫉妬深過ぎたり、暴力振るうのが好きだったり、変態だったり…そういった人はちょっとなぁ。後は…そうだな、自分の意見も言えて俺の意見もしっかりと耳に入れてくれる人かな？」
「成程…内面の方は分かりましたが、外見の方はどうなのですか？」
「特にないかな？　多分、俺が好きになった人ならその人のそのままの姿が好きになるのだろうし」
「…そうですか（これは皆に報告なのですよ）」

それから咲夜は三人に色々と質問され、甘味が来た後、咲夜は残ったお茶を口にした後、三人と別れ再び街中を歩き始めていった。

↓Ｓｉｄｅ　風↓

「ふふふ、お兄さんの情報がかなり集まりましたね、星ちゃん。美鈴ちゃん」

「そうだな。この情報を聞いたら皆はどう動くと思う？」

「…そうですね、まず紫苑さんや秋葉さん辺りは直ぐに動くのではないでしょうか？」

「ですねぇ。雛里ちゃんに麻理ちゃん、それから杏ちゃんは消極的にですが動く可能性はありますねぇ」

「ふふふ、これは楽しくなってきたな」

焔耶ちゃんの方はまだお兄さんのことが好きかどうかは分かっていないですが…風の女の勘は好意は焔耶ちゃんの中ではかなり大きくなっていると思うのですよ。

それに他にも燐花ちゃんなんかは本当に少しずつですけど、お兄さんに惹かれていっているようですし…

他にも天和ちゃんや地和ちゃん、人和ちゃんに劇団員の人たち、それに少し前に加入した琥珀さんたちも少なからずお兄さんの人柄に魅かれていっていますし…

お兄さんの領土外の場所でも凪ちゃんや桃香様、孫呉の一部の人たちもお兄さんのことを好いている人が居ますし…

油断は出来ないのですよ…

「宝？、お兄さんの一番は風が頂くのですよ」
「おうおう、随分と積極だな」
「頑張るのです～」

↓Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ↓

ぶるる…

「な、何だろう…急に寒気が？」

あれから咲夜は町中を歩き回って、色々な人たちと話をしていた。
その中でも一番多く聞いた言葉が…咲夜の本に関することだった。
ここ最近、政が忙しくてそっち方面がおろそかになっていたことに気付いた咲夜は次の新作の題材を考えることにした。
今では少しずつだが、紙の生産量も上がっているため、紙の値段も下がって行き、一般家庭でも少しずつだが使える位になっていた。
その為、咲夜も竹簡での本を使用せず、紙のみの出版に絞ることにした。
更に咲夜は新たにカラー本を出すことを考えていた。
その手の匠と相談しあって、まだ開発は出来てはいないが試作段階

の物が少しずつだが出来あがっていた。

「…ふむ、今度の本は何にするか」

けん〇ファー？　あま〇み？　学園〇示録？　スト〇イク〇ィッチーズ？

元ネタだけならそれなりの知識があったため、そういったものを改変し、時代にあわせて書いていった咲夜だが…次にどれを選ぶべきなのか、非常に悩んでいた。

「…アミダで決めるか」

だが、面倒になったので適当に決めることにした。

案外適当な一面のある咲夜だった。

江陵にある自宅に戻ると…

そこには見知った気配があった。

咲夜はそれをすぐさま察知すると、居間にゆっくりと歩いていった。

そこにいたのは…咲夜お手製の炬燵に入りながら、咲夜の書いた本を読んでいる影夜だった。

「…何でいるんだ？」
「（カキカキ）」
―お仕事終わったから遊びに来た。

「そうか、御苦労さま（ナデナデ）」
「（コクコク）／／／」
「……」
「？？？」
「…影夜、いつも本当に悪いな。汚れ仕事…させて」
「（フルフル）（カキカキ）」
―そんなことない。
―咲夜が私を助けてくれなかったら今頃私は死んでた。
―咲夜が私に生きる意味をくれた。
―名をくれた。
―生きる場所をくれた。
―友達を紹介してくれた。

「…影夜」
「（ニコッ）」

―だから私は咲夜のために生きたい。

そこまで書き終えると咲夜は影夜を抱きしめた。

強く…だが優しく…

影夜もそんな咲夜に逆らわず、むしろ顔を咲夜の胸に埋め、影夜が出来る最高の笑顔で喜んでいた。

その日、咲夜は影夜と一緒に過ごしてあげることにした。
普段は表舞台に立つことが出来ない影夜に咲夜が出来る…小さなこと。

だがそれは他の人にとって小さく見えるだけで、影夜にとっては金銀財宝にも勝る大事な事。

夜が明け、鳥の囀りで目が覚めた咲夜は隣で寝ていたはずの影夜が居ないことに気が付いた。
だが、それに関しては全く慌てずに状況を察することが出来た。
影夜は名の通り、夜の中闇の中で生きる存在。
こうして咲夜の目の前にいないということは再び、仕事をしに行ったのだろう…

「……ふぅ…ん？」

咲夜は昨日影夜が居た炬燵の上に一枚の紙が置かれていたことに気が付いた。

そこにはほんの少しだけ小さくだが、影夜の字で書かれていた。

―ありがとう咲夜。またこれたら一緒にいてもいいかな？

これだけが書かれていた。

「ふぅ…当たり前だろ影夜。お前は…俺の妹のような存在なんだからな」

まぶしい太陽を見上げながら咲夜はそうボソッっと呟いた。
そして体を一通り動かした後、気合を入れた。

「よしっ！！　今日もお仕事頑張りますか！！！」

気合の一言と共に咲夜は駆けだした。
自分の仕事を成す為に。

第十一話（後書き）

見にくかったり、間違い等もあるかもしれませんが…読者の方々がそういった点を指摘して下さるので本当に少しずつですが良くなる傾向にあると思えます。

う～ん…でも他の作家さんに比べて面白い文が書けないですね…難しいものです。

番外編：　その他の領域にて。（前書き）

書きたかったことを書き連ねました。
反省はしておりませぬ。

番外編：　その他の領域にて。

↓　Ｓｉｄｅ　凪↓

陳留にて…私は師匠である劉封様…もとい咲夜様に渡された竹簡に記された修行法を毎日のように続けていた。
一つずつ条件を解消した後、新たな竹簡を開くようにと書かれていて、今はようやく三つ目を開くことが出来ている。

一つ目と二つ目は基礎練習、そしてちょっとした小技の方法と私が咲夜様との模擬戦で使用した氣弾の改善点などが詳しく書かれていた。
それに従いながら私は失敗しても挫けずに日々精進し、そして…

「はあああああぁっ！！！！」

自分でも以前との違いがはっきりと分かる位に成長していることが肉体的にも精神的にも表れていた。

「狼牙（ウルグファング）！！」

全身に氣を纏わせた後、右腕だけに他より多めの氣を纏わせて、それを凝縮。
そして、咲夜様の指示通り、想像しやすい形へと変化させる。

出来れば敵が見ただけで怯む形の方がいいとも書かれていたので、
私は狼を選んだ。

予め置いておいた藁人形（1／1）はその攻撃を受けてバラバラに
砕け散った。

「うわぁ…」
「凪ちゃん、凄いの…」

私の訓練の様子を見ていた真桜と沙和は目を丸くして驚いていた。
まあ私自身もここまで成長できたなんて自覚した時は本当に驚いた。
やはり、あの時咲夜様を師にしようとした判断は間違っていなかっ
た。

咲夜様のお陰で氣質、氣量共に上昇している。
それに以前私が多用していた技よりも威力のある技をいくつも習得
できた。

今日、この狼牙を習得できたことで私は最後の竹簡を開くことが出
来る。

そして…私はゆっくりと書かれていたことを読んでみた。
そこには最終奥義としての技の習得法とそれに関する注意。

そして…
生涯、私の心に残ることとなる文がそこには書かれていた。

――力に溺れることなかれ。
――理、又は信義無き力はただの暴力。
――力は所持者の心次第で変化するもの。
――何のために力を使うのか…自身ではっきりと決めること。
――――次に会った時、どういう風に力を使っているのか楽しみにしているよ。

それを読み終えて、私は少しの間考えて…
思わずふっと静かに笑ってしまった。

既に…答えは出ていたからである。

「私は…私の守りたいものを守るために。我が主、華琳様をお守りするために。そして…私自身の誇りのためにこの力を使う！！　それが私の…生きる道」

後日…私は華琳様に申請して、春蘭様との模擬試合を取りつけてもらった。

やはりというか、最初の方は苦戦した。
私と違って春蘭様は戦闘経験…実戦での命のやり取りをした実績はかなりある。
だけど…私は負けたくなかった。
自分自身のために…そして、私の師となってくれた咲夜様のために…

そう強く思った時、私は春蘭様の一瞬の隙を突き…

一撃を与えた。

華琳様の判断で…その勝負は私の勝利ということとなった。
その言葉を聞いた瞬間、私は涙が止まらなかった。
今までの辛い訓練が実を結んでくれたという事実…そしてそれが夢でないと自覚した。
華琳様も私のことをお褒め下さり、私は華琳様の命で今は警邏部隊の隊長を担うこととなった。

警邏隊長という仕事をしながら私は、咲夜様の指南通りの自主訓練に励んでいる。
何時か…また咲夜様と再会した時に私の力を見せたいが為に。

でも…ここ最近の悩みが……

「なあなあ沙和。ここ最近、凪は容赦あらへんよなぁ」
「そうなのそうなの！　前も沙和が阿蘇阿蘇見てたら急に取り上げて、それを氣弾で燃やしちゃったの！」
「せやな…うちも絡繰の設計図…燃やされたわ」

この二人が相も変わらず仕事をサボりがちだということだ…
いい加減、華琳様に申告した方がいいのだろうか。

「本当に酷くなったの（パクッ）　モキュモキュ…（ゴクン）　それでね、沙和考えたの」
「…ほぅ、何を考えたんだ沙和？」
「それはね！　あの太守さ……」
「ん、どうないしたんや沙和？」

沙和は私の顔を見て何やらガタガタと震え始めた。
そんな沙和を見て真桜は最初こそ、不思議がっていたが沙和が見てた方…つまり私を見ると同じように震え始めた。
…そんなに私は怖い顔をしているのだろうか？
ただにっこりと笑っているつもりなのだが…

「さて…二人とも？　何か言いたいこと（遺言）はあるか？」
「ちょ！？　待ちぃや、凪！！　今、うちの気のせいじゃなきゃ遺

言って聞こえたんやけど！？」
「あっはっは。何か問題でもあるか？（ニッコリ）」
「ま、待って凪ちゃん！　さ、沙和達はただほんの少しだけ休憩を…（ガタガタ）」
「…おかしいな。私の記憶が正しいのなら少し前に昼食をとるために時間を取ったはずだが？」
「そ、それは…」
「……さて、覚悟は良いか二人とも」

ゴゴゴゴゴゴ…

「「ご、ごめんなさーーーーい」」
「許すかーーーーーー！！！！」

それから私は二人としっかりとＯＨＡＮＡＳＨＩをした。
だけど…二人は全く懲りずに仕事をサボり気味…
本当に華琳様に相談しよう、うん。

↓Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ↓

さて、続いての場所は新野にいる劉備玄徳ら一行である。

↓Ｓｉｄｅ　桃香↓

「ん～～～、はぁ。朱里ちゃん、これで今日のお仕事は終わりかな？」

「はい、お疲れ様です桃香様」

私達は今新野の城を中心とした地域を治めることになっていて、多くの人たちが私達を慕ってやって来てくれるようになって…

本当に少しずつだけど、朱里ちゃんが言うには領土が増えつつあるって言ってた。

愛紗ちゃんと鈴々ちゃんは兵士さんたちの訓練と警邏。

朱里ちゃんは文官さんたちの中心になって仕事をしてくれてる。

私は町の警邏をしたり、朱里ちゃんにするべき仕事を選んでもらってそれをやってる。

ちょっと情けないけど…咲夜さんが教えてくれた言葉【適材適所】の通りに従って、私は私の出来る最大限のことをやり終える。

時折終わらなくてちょっと困った時は手の空いている人たちにどうやって片付けるのかを教えてもらったりしてるんだ。

これも咲夜さんの教えの一つで【聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥】って言うんだって。

咲夜さんが教えてくれたこと…全部、私たちの政に関係してる物ばかりだった。

それだけじゃなく、他にも咲夜さんは私に教えられるだけの情報をくれたの…

「ねえ朱里ちゃん、町の方はどうかな？」

「そうですね…咲夜様の提供して下さった情報がかなり有益なもの

だったので、それを取り入れた所、街並みや衛生環境等も以前とは比べられないほどに改善されています。食料や治水関係の問題点も少しずつですが減る傾向にあるので…正直、驚きです。咲夜様は一体どこからこのような知識を得たのでしょうか…」
「そっか…本当に咲夜さんには感謝しきれないね、朱里ちゃん」

咲夜さんのおかげで多くの人たちが笑顔になってくれていた。
最も私も力不足のせいで助けられなかった命もあったけど…私は決めたんだもん！
辛い現実から目を背けず、背負って行くって！！

「あ、そういえば朱里ちゃん。さっき兵隊さんからこんなものを受け取ったんだけど…」
「はい？」

朱里ちゃんが私が取りだしたものを見るとみるみる顔を真っ赤にしたり真っ青にしたり…
顔芸かな？

「と、とーかさま！？　そ、それをお開けになりましたか！？」
「え？　う、ううん。送ってくれたのは雛里ちゃんみたいだし…政には関係ないことだと思って開けてないけど…」

私が持っているものは何だかよく分からないけど…凄く厳重に布でグルグル巻きにしてあるのに、紐できっちりと縛っているものだった。

「あ、あああありがとございましゅ！！！」

朱里ちゃんは私からそれを受け取ると普段とは考えられない早さで走って行ってしまった。

本当に何だったんだろう？？？

↓Ｓｉｄｅ　Ｃｈａｎｇｅ　朱里↓

「ハァ…ハァ…あ、危なかったです」

雛里ちゃんから送って貰った秘蔵の書。

雛里ちゃん曰く、咲夜様に懇願して許可を貰ったため、この事を知ってるのは咲夜様と雛里ちゃんのみ。

送って貰ったのは新野では手に入らない襄陽や樊城では普通に売っている書物。
今回、雛里ちゃんが送ってくれたのは８冊。
５冊は咲夜様が書いた本、そして…残りの三冊は……

「…（ごくり）」

ペラッ…

「はわわーーー！！！／／／」

…ちょっとだけ卑猥なご本なのです。

↓Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ↓

さて…お次は長沙である。

こちらの太守である孫堅は命こそ助かったものの、しばらく安静にしなければならない上に右腕を失ってしまったために、半強制的に太守を辞すことになってしまった。
その為、新たに太守となったのは孫策伯符こと、雪蓮である。
江陵攻略戦が失敗に終わったことによって軍の再編や新政権に必要な事の取り決めなどで雪蓮達は毎日、忙しく仕事に取り組んでいる…はずなのだが……

「うううう…めいり～～ん…助けてめーりん」
「泣きごとなど聞かぬからな、雪蓮」
「うううううぅ～～～～」

太守となっても雪蓮は相も変わらず自由気侭でいるようだった…

「ハァ…雪蓮、こんなことはいいたくないけどね。分かってるでしょ？　今、この長沙がどれだけ厳しい状況にあるか」
「……ええ、そんなことくらい百も承知よ」
「ならもう少し真面目に仕事をしてくれ」
「…でもね冥琳」
「…何だ？」
「咲夜が母様のために送ってくれたお酒を腐らせない様に処理するのも立派な仕事で」
「……」

その後、雪蓮はこっぴどく冥琳の説教を喰らうこととなった。

現段階でも長沙は結構危ない位置にある。
呉郡を治める厳白虎や会稽郡を治める王朗、徐州にいる陶謙、他にも異民族である山越が集う集落なども調査を襲う可能性がある。その為、確かに刑州一帯は咲夜が治めるようになり安全性は増したものの、未だに危ういのだ。

他にも南陽の袁術に寿春の劉（りゅうよう）？と他にも敵は数多くいる。

その上、孫堅がやられ重傷を負ったということが知れ渡っているため、士気の方もかなり悪くなっている。

「…本当にどうにかしないとな。せめて名をあげなければ…我らに待っているのは滅びだけだ…」
「ねえ冥琳、それなんだけど多分そう遠くない内に私達が名をあげられる機会が来るわ」
「…お得意の勘か？」
「ええ、そしてそのきっかけとなってくれるのは……多分、咲夜ね」
「…ふ、ならその時までに擦り減ってしまった虎の牙を磨いておく

とするか、雪蓮」
「ええ、そうね冥琳」

次は洛陽…月たちのいる所である。
咲夜達と合同で考えた策が当たり、洛陽内は静かだが混乱しつつあった。
それも宦官同士が互いに互いを潰し合っていたためである。
その隙を窺って、詠や音々音らを中心に協力者を得ながら力を蓄えていった。
そのため、王允、李儒、何進らは次第に力を失いつつあった。
それを理由に野心家の者達は月たちの力を削ごうとしたり、月を誘拐しようと試みたりした。
だが…それは不可能だった。

何故なら…咲夜がすでに動いていたためである。

月自身は影武者と入れ替わり、月は詠達しか知らない場所に隠れている。
それを守っているのは影夜と同部隊の朔らを中心とした者たちだった。
影武者もその部隊の者たちなので、かなり安心できているようだ。

詠達もその為にしっかりと動くことが出来ていた。

「ふう…これで王允、何進、李儒の三人以外の力は殆ど無力化できたかな」
「ですが油断は禁物なのです！」
詠と音々音が誰にも聞かれない様に秘密の話し合いを行っていた。

「……」
「…どうしたのですか、詠」
「Σ　ううん、何でもないわ」
「…月殿のことなのですか？」
「……」
「心配いらないのです！　月殿はあの咲夜が派遣してくれた隠密部隊が守ってくれてるのです！　咲夜は恋殿も認める男なのです！」
「…そうだったわね」

詠は自分は一人ではなく、沢山の仲間が…そして守りたい友達が居ることを再認識すると、再び気合を入れ直し、再び動き始めた。
この乱世で生き残るために…

次は現在涼州辺りで反乱があったということで出兵することとなった恋と霞、そして華雄である。
こちらも遠征の身でありながら、やはり月のことを心配していた。

「…月」
「ん、何や恋。月っちのこと、心配しとるんか？」
「……ん」
「大丈夫やて、月には心強い味方がおるやろ？」
「……ん」
「せやからうちらはうちらに出来ることをやっとこうやないか。…あそこで一番に突っ込んどる猪みたいにな」

霞が差した先には短期で賊の中心を騎馬で駆けながら自慢の武器を振りまわしている華雄が居た。

「ハァ…ああいう所は見習いたいもんやな」
「…なら恋も行く」
「…せやな、とっとと終わらすで」

そういい終えると霞も恋と共に敵の中に斬り込んでいった。

さて…最後は冀州、袁家の一人である袁紹が治める地である。
ここには天の御使いとしてこの大地に舞い降りるはずだったのだが…何の因果かそれはただの噂話でしかない様になり、当の本人はただの袁紹の下僕となっていた…そう、本郷一刀である。

彼は最初こそ、戸惑っていた。
何故ならいきなり見知らぬ土地に舞い降りたと思いきや、そこは三国志時代のパラレルワールドで、有名な武将の大半が女性になっているとなればそれは驚くだろう。
一刀は彷徨っていた所を顔良に助けられ、それ以降は顔良に助けられたことに恩を感じて何か恩返しをしようとし、自分の知る知識をほんの少しだけ顔良に提供した所、それを知った袁紹が何やら一刀を気にいったようで自分の付き人の一人とした。
と言っても一刀の仕事は荷物持ちや簡単な顔良の手伝いのみなのだが…

「ふぅ〜〜…今日はこれ位かな、斗詩？」
「はい、いつもありがとうございますね一刀さん」
「いや、斗詩には何とか世話になってるからね。字を教えてもらったり、仕事を教えてもらったり。だからこれ位は当然のことだよ」

この冀州は大体、顔良一人で切り盛りしている状態であるため、それを少しでも楽にしてあげたいという一刀がこうして苦戦しながらも手伝っているのだ。
文醜はこう言った頭を使う仕事には向いていないということで警邏と兵の調練位しか仕事をしないし、袁紹に至っては…まあ御愛嬌と

いうことで。
それによって顔良が何だか本当の責任者のような立場にあるのだった。
最初、それを聞いた一刀は苦笑することくらいしか出来なかったのだが…
本当に少しずつだが、今ではそれなりに手伝いをすることが出来ているのだった。

「それにしても…ここ最近、紙を多く使えるようになってきたね」
「あ、それは荊州の方から来た商人さんが売りに来たんですよ。何でも製紙業が発達して紙の値段が少しだけですけど安くなったとか」
「…それにしてもこの紙、俺達が今まで使っていた物とはちょっと質が違うな」
「そうですね…書きやすいというか…肌触りが良いというか…流石は荊州の劉封言った所ですかね」
「（いや…これって明らかにこの時代じゃあり得ない製紙法だ。それに…荊州には他にもこの時代じゃあり得ない技術があるって言われてるくらいだ。もしかしたら…この劉封って言う人、俺と同じなのかもしれないな）」
「？　一刀さん、どうかしたんですか？」
「Σ　い、いや何でもないよ！！」
「そ、そうですか？」

劉封という存在にちょっとした疑念を持ち始めた一刀。
この冀州に対しては咲夜は書籍や技術を記したものを渡さないよう

に手配しており、ただ調味料や紙などの物を売りつけて豊富な財源を少しでも減らそうと試みているのだ。
その為、一刀は咲夜に対して確信を持てずにいた。

「…それでさ斗詩。麗羽と猪々子は？」
「……それが、文ちゃんはお仕事サボって美味しいものを食べに行くって言ったっきりで。麗羽様はその…ふらっと出かけてからその後は分からないんです」
「……ハァ」
「はううぅ…」
「もう何か…俺と斗詩がどうにかしないとこの冀州って成り立たない様な気がするよ」
「…同感です」

「「ハァ～～～…」」

この二人、かなりの苦労人のようだ。
というかこの二人が唯一の冀州の支柱なのだった…色々と間違っている気がする。

↓？？？↓

「くっ…何故この外史に介入できないんだ！！」
「確かに…異常は起こっているはずなのですが」
「北郷一刀が存在し、更にこの劉封という男！！　明らかにこの世界にとってバグのはずだ！！　なのにっ！！」
「…今まではこのような事はなかったのに、どうしましょうかね左慈」
「…調べるしかないだろうな、于吉。どうにかしてこの外史に介入し、間違いを正すぞ！！」

左慈と呼ばれた男はドカドカと乱暴に足音をたてながらその場から立ち去って行ってしまった。

「やれやれ…それにしても本当にこれはどうしたことなのでしょうかね」

于吉はその場にとどまり、こうなっている要因を考えてみることにしたのだが…それはただの時間の無駄だった。
北郷一刀は外史にいるが、天の御使いという立場ではなく、ただの顔良の手伝い兼袁紹の僕。
だがそれ以上にバグとも言える存在、劉封。
今までとは異なる歴史の流れ…
表舞台は立つスポットがなかったはずの人物たちの活躍…

などなど、外史を狂わせる要因は多々あるはずなのに…外史の管理者である于吉と左慈が介入することが出来ない世界…

「…もしかしたら……いや、そんなことはないか」

外史の管理者達は今はまだ気付いていなかったが…後々気付くことになる。
この外史が…もう既に管理者の手の出せない世界…

———正史になりつつあるということを…

番外編：　その他の領域にて。（後書き）

まだ短いですねぇ…
とりあえず後2～3話はほのぼの中心の日常編を書いていく予定です。
次の話は焔耶が中心となります。
他にもちょっと出番の少なかった杏や燐花、麻理などが目立つこととなると思います。
このキャラをもっと目立たせて欲しいという意見がもしあったら、教えてください。

第一二話（前書き）

今回は予告通り、焔耶中心です。
こんなのが俺の焔耶な筈がない！！
という方はバックして下さい。
正直、かなりキャラ変わってると思います。

第一二話

「ふぅ…よし、今日の調練はこれで終いだ！　各自、しっかりと体をほぐした後、解散するように！」
「「「「「はい！！！！」」」」」

魏延文長こと焔耶は仕事の一つである、兵たちの調練を終え、ちょっとした指示を出した後、一人仕事を終えたことを４軍師の誰かに伝えに行くために政庁に向かって行った。

その途中で焔耶のお気に入りの店でちょっと餡饅と肉饅を買って、それを食べながら歩いていった。
その間、焔耶は多くの人たちに挨拶をされ、それを返した。

「はは、咲夜様の言うことがよく分かるな」

挨拶を交わしてくれた人々は皆、笑顔でいてくれた。
それを見るだけで私たちが今までやってきたことは決して無駄な事でなく、意味のあることだということが実感できた。

「えっと…この後の予定は少し休憩した後…うぇ、勉強の時間かぁ」

焔耶や秋葉等の兵法を殆ど学ばずにいた者たちは咲夜が半強制的に簡単なものを学ばせていた。
他にも戦時だけでなく普段の生活に役に立つ知識を暇のある文官や

時には咲夜自身が教えているのだ。
というのも戦時中は必ずしも軍師を率いて進軍するという状況になるとは限らず、時には将軍のみでの出兵も有り得るのだ。
そうなると焔耶を代表とする…所謂脳筋に値する者たちは十中八九危うい状況に陥る可能性が大となる。
最初は多くの武官が反対したのだが…咲夜の熱心な説得によって渋々だが納得してくれた。
そして…それが無駄でないということがしばしばあった賊の討伐の際に証明されたことにより、今では誰も文句は言わなくなった。
まあ勉強する前はちょっと憂鬱になってしまうこともあるらしいが…

「でも仕方ないな。私以外の者も怠けず、日々精進しているのだからな」

その時、背中が何やらゾクッとするのを感じた焔耶…
この感覚は…何処かで感じたことがあると、そう思いながら恐る恐る背後を振り返ると…

キャンキャン♪　バウッ♪
ンモゥ～～～♪　ブルヒヒィ～～♪

…咲夜様の本に似たようなことが書いてあったっけ。
確か…百鬼夜行？
それに近いと言えるくらいの動物達がちょっと大きめの犬を先頭に

私の方に向かってきていた。
焔耶はそう思いながら忘れていたことを思い出した。
かつて、焔耶が咲夜の元に仕える前のこと…幾度なく、犬の大群に追い回されていたということを…

「う…」

それをこんな状況を目の前にして、唐突に思い出したが故…

「うわあああああああーーーーーーーっ!!!!!」

ドドドドドド…

その動物達の大群の行進から一目散に逃げ出した。
だがその行動は逆効果。
犬という生き物はまさに焔耶の様に逃げるものを追いかけたくなるものである上に、焔耶は何やら体臭が犬の好む質を含む様で…
リーダー格でありそうな犬を先頭に動物達は一同、焔耶を追いかけはじめた。

そんな大規模の追いかけっこをしておいて、周りが無事なわけがない。

「うわぁ！？！　お、俺の店がぁ～～～！！！」
とある店の店主は動物たちによって半壊させられた店を見て嘆き…

「ああ！！　この野郎、俺の団子返せ！！」
ある団子屋にいた男は食べようとしていた団子をすべて食われて…

「きゃあああ～～～～～っ！！！」
ある女性は着物に小便を掛けられてしまったとか…

流石にそのような騒ぎとなっては警備隊が動かぬはずもなく…多くの隊員が出動することとなったのだが…
やはりというか、現状に皆最初は困惑していた。

「…動物の反乱？」
「いや、でもあの先頭にいるのって魏延様だぞ？」
「それにしても魏延様…泣きながら逃げているように見えるんですが…」
「…兎に角、この状況はどうにかしないとな。おい、誰か劉封様に

この事を伝えに行け！　部隊は三つに分ける。一つは動物達の鎮圧、二つ目は魏延様を止める、三つ目は怪我人や被害者たちの保護だ！」

「「「「了解！！！」」」」

警備隊の隊長が指示を出すと、皆一斉に動き始めた。

その動きはかなり効率が良かった。

危険度の低い動物達は警備隊が捕縛した後、周りにいる領民に協力を得て隔離できる場所を作り、そこに放り込んだ後厳重に保護した。

危険度の高い、何故か紛れ込んでいた虎やパンダの様な動物達は咲夜考案の捕縛道具を使用し、その後ちょっと無理矢理だが眠り薬を飲ませて大人しくさせた。

そして、医者などの専門家を呼んだ後、怪我人を引渡したりしてもらったりした。

焔耶の方も警備隊に諭されて落ち着いてきたのか、逃げるのを止めて安全な場所へと連れていかれた。

事態が終わりを告げる直前、咲夜もようやく現場に来たのだが…流石に口をヒクつかせてしまった。

自身が予測していた物よりもかなり酷かったためである。

咲夜は警備隊長をしている者に詳しい事情を聞いた後、深く深く溜息をついた。

そしてこの事件を引き起こした者達を全員連れてくるようにと指示を出してから、自身は迷惑を掛けてしまった領民一人一人に自ら謝罪をした後、焔耶の所に向かった。

焔耶が隔離されている部屋に入ると、そこにはこれまでにない位に落ち込んでいる焔耶が居た。
どうやら自分も惨事を引き起こした原因であったということを自覚しているようだ。

「焔耶」
「……」
「どうしてこんなことになったんだ？」
「…それは」

焔耶はほんの少しずつだが自身にあった今までの碌でもない経験を話し始めた。
それを聞き終えると咲夜は納得したという顔をして、焔耶を慰めた。

「焔耶、そういうことなら早く言って欲しかったな」
「…申し訳ありません。咲夜様に仕えてからそういったことはなかったので…すっかり忘れていて…」
「あ～…確かに襄陽や樊城では野良犬とかの対策も施されているからなぁ。でも本当に今日までよくこんなことがなかったね」
「…申し訳ありません」

焔耶が更に落ち込んでしまったが、咲夜はゆっくりと焔耶に話しかけることにした。

「落ち着いて焔耶。確かに結構な被害はあったけど、場所の方はちょっとだけ都合が良かったんだよ」
「え…」
「実は今回の被害現場は近日中に取り壊して新しくする予定だったんだ。あそこに住んでいる人たちは皆納得してくれて、明日には仮住まいに移って貰うつもりだったんだよ。今頃はもう移動を始めてる頃だろうね。急な事だから、今回の仕事を担当してる燐花に連絡を取ってるけど…多分、後で小言言われるだろうね。ハハハ…ハァ」
華琳に仕えている桂花は結構殺傷力のある毒舌を言ってくるが…燐花の方はチマチマとした小言を何時間も言い続けてくるため…かなりきついのだ。
幾度かそれを経験している咲夜はテンションが下がり、焔耶の方は少し顔色が悪くなった。

「まあそっちは今は考えない様にしておくとして…とりあえず焔耶は今回被害を受けた人たちに謝りに行かないとね」
「…はい」
「それから焔耶はちょっと医者に相談してその体質（？）について相談してみようか？　もしくは外に出るときは犬の嫌う匂いのする香水をつけるとか…とりあえず一緒に解決策を探すことにしよう」
「…ありがとうございます、咲夜様」
「あはは、気にしない気にしない。じゃあ、まずは謝罪からしに行こうか」
「…はい！」

それから焔耶と咲夜は被害者一人一人に謝罪に行ったのだが…皆思ったよりも気にしていないようだった。
逆に、焔耶のことを心配される一方で焔耶の方も次第に元気になり普段の焔耶に戻って行った。
…まあ城に帰ってから燐花にグチグチと小言を貰ってテンションが著しくダウンしてしまったのだが…

翌日、あのリーダー格となっていた犬、そして他の動物達の飼い主というか…持ち主が見つかり、話を聞くことになった咲夜と焔耶、そして燐花。

すると、その持ち主はちょっと食事をとるために目を離したすきにいなくなっていたと主張した。
男の職業は動物販売（自称）。
だが、この職の条件は城外に店を構えつつ、周りに迷惑を掛けないという物で町中に動物を引き連れていることは立派な違反行為である。
馬などの軍事用の動物はまだしも、熊や虎、パンダなどの動物は人を襲う可能性があるため、城内への持ち込みは咲夜の許可無しでは不可能となっている。
それを燐花が告げると、その持ち主は外でちゃんと待たせていたとも言った。
だがもう一つ、何故そのような動物達を態々放し飼いの様にしていたのか、そう聞くとその男は無言になってしまった。

「…そうなると門番の怠慢か、この男が嘘をついているということね」
「ん～、ちょっと調べてみるか？　町の人たちに聞けば情報は集まるだろう」
「咲夜様、僭越ながら私が調べたいと思います」
「…なら焔耶に任せよう」
「はい！！」

焔耶はその場から去り、それを確認すると咲夜と燐花は二人でその男への尋問を続けた。

暫くした後、焔耶が戻り集めてきた情報を一つ一つ話した。

結果、その男が嘘をついていたこと…そしてその時門番をしていた者が賄賂を受け取っていたことなどが発覚した。

「どうしますか、国主様？」
「…この男とその門番達は国外追放処分とする。荊州での身分を剥奪、戻ってきた場合は厳しい沙汰ありでどうだ？」
「賛成です」

燐花と二人でその者らの処分を決め、該当者達は皆その日のうちに荊州を追いやられることとなった。

その後、こういったことが二度とない様に咲夜が香水を販売している者たちと協力して焔耶のために犬が嫌う匂いを放つ香水とちょっと強めの臭いを放つ香水が作られた。
犬の嗅覚は人間よりも遥かに優れているため、こういったものの方がいいかというのが咲夜の考えであり、現状で他に良策がない為焔耶はそれを外に出るときは必ず使うようになった。

「ありがとうございます咲夜様。おかげで犬に追われることもなくなりそうです」
「それは良かった。でも問題が解決しなかったらまた相談しに来るといいよ」
「はい！！」
「良かったよ、焔耶が元気になって」
「／／／」

この問題は解決したと言ってもいい。
焔耶は犬に追われることは無くなったし、壊れた町の方も以前よりも住みやすくなり、領民も新しい家に満足してくれている。
だが…咲夜は一つのことに気付かなかった。
焔耶の咲夜を見る目が…多少、変化していたことに。

↓Ｓｉｄｅ　焔耶↓

「咲夜様…」

何だろう、この気持ちは…
やっぱりここ最近の私はどこかおかしい。
咲夜様のことを考えるだけで胸が熱くなる…
咲夜様と一緒にいるだけで胸が高鳴る…
咲夜様と話すだけで時を忘れてしまう…

この感情は何なのだろうか。

そういえば…以前黄巾党軍との戦いのとき、秋葉達に言われたことがあったな。

もしかして…これが恋という物なのだろうか？

…

……

……

ボッ／／／

「だ、駄目だ！！　い、意識すると頭が咲夜様一色にぃ～～～～！！！／／／／」

落ち着け、こういう時は素数を数えるんだ。
素数は私を元気にしてくれる。
1、2、3、4、5……

……Σハッ！！？

わ、私は何を？？？

い、今一瞬意識が飛んだような気がする…

「さ、咲夜様…／／／」

ど、どうすればいいんだろう…

「と、とりあえず誰かに…相談してみよう」

↓Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ↓

仕事を終えた後、咲夜は無駄かもしれないが騒動を引き起こしてしまった動物達の説教をしていた。
心なしか、すべての動物達が何やら落ち込んでいるように見えた…
しかも…

「ハァ…何で渚、お前もいるんだ？」
「ニャァ～」

…確か的盧こと渚は樊城で留守番をしているはずなのだが、どうやら咲夜が恋しくなって咲夜の元までやってきたようだ。
騒動にはノリで参加したみたいで、今は反省しているように見えた。

やれやれといった顔で咲夜は渚を許した後、燐花と相談して残された動物達は咲夜が頼んで襄陽方面で現在、思案されている動物保護区へと移されることとなった。

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

そして後日…

「さ、咲夜様！！」
「うおっ、ど、どうした焔耶？」

お昼頃となり、咲夜は昼食を取ろうと部屋から出た瞬間、その場にいた焔耶に声を掛けられた。
流石の咲夜もこの焔耶の登場には驚いた。
というのも空腹で気が抜けていた上に、これまでに片付けていた竹簡と書類の山を片付ける仕事をしていた為、ちょっと疲れていたのだ。

「す、すいません…」
「いや、別にちょっと驚いた位だから良いけどね。それで？　何か用？」
「え、えっと…その…お、お昼！！」
「は？」
「だ、だからお、お昼を一緒に…い、一緒…いいいいいいい（プシュ～～～）／／／」
「お、おい！？　だ、大丈夫か焔耶！！」
「だ、だだだだだいじょうぶです！？／／／」

顔を真っ赤にしながら壊れたマリオネットの様な動きをしている焔耶。

「…とりあえずお昼を一緒に取らないかって誘いに来てくれたってことかな？」

ようやく焔耶は落ち着きをほんの少しだけ取り戻し、咲夜もようやく焔耶の言いたかったことを理解出来た。

「ど、どうでしょうか？」
「いいよ、丁度俺も昼食取りに行くつもりだったし」
「あ、ありがとうございます！！」
「はは、ならさっさと行こうか」
「はい！！」

昨日、焔耶は色々な人から助言を貰っていた。
それを忘れない様に咲夜には見えない様に服の内側にメモを縫い付けている。

助言その１（出所・星）
…もう何かこの時点で碌でもない様な気がするのは気のせいだろうか？

星曰く、
「主もやはり男だ。男とはやはり大きな乳房を好むのだろうな。幸いなことに焔耶は立派なものを持っているしな（ニヤニヤ）。それを移動する際に押し付ける様に腕に抱きつくと良いぞ！」
何言ってるの、この人！？

「（む、胸を押し付けるのだったな／／／　い、行くぞ！）」

フニュッ…

「な、何を！？　え、焔耶ぁ！？／／／」
「だ、駄目ですか？／／／」
「う…だ、駄目じゃないけど／／／」

二人とも顔を真っ赤にしながら町を歩いていく。
それを暖かな目で見るのはそんな二人が目には言った領民の方々。

助言その２（出所・美鈴）
これはまともそうだ。

「えっと…恋人みたく振る舞ってみるというのはどうでしょうか？
例えば…「あ～ん」とか／／／キャッキャッキャ～～～♪／／／」

いやんいやんと体を震わせながら焔耶に助言した美鈴だった。
どうやら咲夜のことでちょっと危ない思考を持っているようだ。
聞いた焔耶もそれを見てちょっと引いたらしい。

焔耶は事前に調べておいた店に入ると、そこの店主に目で知らせて

気を効かせてもらい、他の人には目の付きにくい奥の方の席に座ることが出来た。

「焔耶は何を食べる？」
「えっと…揚げ物御膳と果物の盛り合わせ、それから梅茶を」
「ふむ…なら俺は豚丼と団子と煎茶を食べようかな」

注文を終え、咲夜はとりあえず気になっていたことを焔耶に聞いてみることにした。

「所で焔耶、何で俺を誘ったの？」
「え！？／／／　そ、その…駄目でしたか、やっぱり？」
「いや、駄目ってことはないんだけど…今思うと焔耶が俺と食事するなんて今までなかったからちょっと気になってさ」
「そ、それはその…」
「ん？」
「い、一緒に食べたかったから／／／」
「…／／／（か、可愛い…か、顔を真っ赤にして上目遣いって…ど、どこでこんな高等技術を！？　い、いやそれ以上に…も、もしかして…風が話してたのって…え、焔耶のこと！？／／／　え、俺はどうすればいいの？？？　そもそも俺にとって焔耶って何なの？　仲間？　気の許せる友人？？　それとも…あああ～～～～～っ、駄目だ！！　こんなことを深く考えたことなんて前世も含めてほとんどなかったから何にも思いつかねぇ！！　やっぱり高校に行ってハイスクールライフの中で恋愛経験しておくんだった…俺中卒だったし。他はずっと家を継ぐために訓練とか知識得るために図書館ライフだったり、料理の特訓したりだったからなぁ。あぁ～、そう考えると

俺の前世って枯れてたなぁ。って言うか青春期が殆どなかったし、性関係の知識って本とかビデオだけだったからなぁ…ってそんなこと今は関係ないだろうに！！　何考えてるんだ俺は～～～～～～～！！！！　うがあああぁ～～～～～～～！！！！）」

頭の中で困惑しつつもそれを焔耶に見せつけずにいるところは凄いと褒めるべきなのだろうか…

注文した品が来ると、咲夜は一旦考えることを止め食事をとることにした。

「「頂きます」」

パクッ…

「ん、今日もここの飯は美味いな」
「本当ですね。咲夜様が考案したんでしたよね、この料理って」
「ん～、まあ昔から色々と試してみたり、旅の中珍しい食材を手に入れたらそれを使ったりしてたからね（前世もあるけどさ）。そしたら自然に上手くなってたんだよ」
「うう…私は料理が出来ないから羨ましい」
「なら今度、教えてあげようか？」
「ほ、本当ですか！？」
「ああ、時間が空いた時でいいのなら」
「是非！！」

焔耶の嬉しそうな顔を見てほっこりとする咲夜。
だが、それも束の間のこと…次の焔耶の行動に再び混乱してしまう。

「あ、そうだ！　さ、咲夜様！！」
「ん？」
「あ、あ～ん／／／」
「何故に！？」
「た、食べてください／／／」
「ブハッ！！」
「さ、咲夜様！？」

その後、咲夜は大量の鼻血を出し、すぐさま診療所に搬送された。
前世のことも含めてこういったことに全く耐性のないため、先程の「たべてください」発言がきっかけとなり、限界を越えてしまったのだろう。

そして翌日…咲夜は店に入った前後の記憶がごっそりと抜けており、それを知った焔耶はちょっとガッカリしてしまった。

↓Ｓｉｄｅ　？？？↓

「ふむ…これでは色仕掛けをした場合、主は出血多量で死んでしまうかもしれませぬな」
「そうねぇ、どうしようかしら」

「お兄さんにはちょっとずつ女性の色気に慣れてもらい、耐性を付けてもらうしかないと思うのですよ」
「う～ん…そうなると、適役は紫苑さんや琥珀さん辺りですか？」
「おうおう、大人の魅力でイチコロってか？」
「これこれ宝？、お兄さんは別の意味でイチコロ（一殺）ですよ。でも鼻血を吹くなんてまるで稟ちゃん見たいですねぇ」

実は焔耶のデートを影から覗いていた奴らが居たのだ。
勿論、件の咲夜も見ていた為、現在その対策を考えている所だった。

「ふわわ…咲夜様、大丈夫かな？」
「だ、大丈夫だよ麻理ちゃん。お医者さんも言ってたけど、ただ血を出し過ぎただけだったから今は血を補給できる食べ物を中心的に食べてるって」
「やれやれ…ここまで思われているお兄さんは幸せ者ですねぇ」

第一二話（後書き）

因みに最後の???は上から星、紫苑、風、美鈴、宝?、風、麻理、雛里、風という順番で秘密の部屋で話しています。
分かりにくいですかね？

次回はどうしよう…
一応、考えているのは出番の少なかった杏、もしくは燐花や麻理辺りなのですが…
まだ書いてません！
正直、まだ本編を進める気はないので…

第一三話（前書き）

かなり短いです…
次への繋ぎの様なものと番外編の様なものを書いただけなので…
というよりも、Ｆｉｒｅｆｏｘが完全に使用不可能となったため、
現在代用としてＳａｆａｒｉを使っているのですが…使い慣れていないインターネットのため、ちょっと使いづらいですね。

第一三話

「さて皆、今日は重大な会議がある」

咲夜が紫苑、星、秋葉、焔耶、杏、風、麻理、雛里、燐花、美鈴らを集めると碇〇ンドウのポーズをとりながら、重々しい顔をして話を始めた。

皆、真剣な顔をしながら手元の資料を確認している。

いつもはふざけている星や寝てしまうことで会議を脱線させがちな風も今回は、かなり真面目な顔をしていた。

「今、下請けの人たちにどんどん申請書を集めて貰っている。もう少しで集計が終わる」

ゴクッ…

「無論、皆の希望も可能なら受け付けることになっている。警備隊は交代制で参加可能。俺達も勿論、警備や受付などの仕事を行う。それは手元にある資料にすべて書かれている」

皆、事前にそれを確認していた為再確認することもなく、また不満もないようで目で早く話を先に進めて欲しいと語った。

「さて、では三日後に…

祭りをやるぞ！！」

「いえええええーーーーい！！」

精神が子供な面々は声をあげて喜び…

パチパチパチ…

精神が大人な面々は拍手をしながら笑顔になった。

そう、重要な会議というのは久方ぶりに行う大々的なお祭りのことだった。

どうしてこの時期に行うのか…それは荊州一帯が殆ど咲夜の領土となり、治安も安定しつつあるため、そして咲夜を筆頭に部下達や領民の今までの努力と苦労を称えるために、咲夜が祭を開こうと提案したのだ。

これを今まで行わなかったのは荊州三郡がまだ残っていたということ…咲夜に刃向う不穏分子が内側にいる可能性があったこと…領民が前太守や王の堕落した治世のせいで生活が苦しく、祭りなどを行

う余裕など一切なかったことなどが関係していた。

だが、今ではその問題は無くなり、余程のことがない限り咲夜の領土である荊州を侵攻しようとする輩はいなくなったのである。
唯一、侵攻してくる可能性のある南陽の袁術の方は大量の蜂蜜を送り、友好関係を築いておいたため、こちらに攻め入ってこないと約束させているため問題はない。
劉障の方も攻めてくる気がないようなので念のため、二人程の守将と兵５０００を国境付近に築いた堅固な陣に配置しているため、一応は大丈夫だろう。
南蛮の方は咲夜が幾度も貿易や取引を行っているので、向こうも納得してくれているので攻めてくる気配はない。
後は新野や陳留だが、こちらも無問題。
劉備はこちらに攻めてくるような性格ではないし、曹操は今、？郡及び濮陽の制圧のため進軍中。
長沙の孫策は内政で手一杯。

そんなわけでこれは滅多にない機会なのだ。
皆仕事づくしで鬱憤もたまっているだろうという咲夜の配慮も入っている。

「よし皆！！　祭までの三日間、それぞれ各自当てられた仕事を全うし、祭りを楽しもう！！！」
「「「「はい！！！」」」」

そういうわけで皆それぞれの役割に取り掛かることとなった。
美鈴と杏は当日の警邏の予定表を調整するために、燐花と協力して集計した調書を見ながら割り当てをどんどん決めていった。
秋葉と風は祭りの際に開く店の簡単な図表を手にで店を開きたいという希望を持つ、商人や領民の元に行き、皆の意見を聞きつつ、当日の場所決めをすることなった。
焔耶と麻理は祭りを行う三日間の間の国境の警備や守衛の確認とミスがないかを確かめに現場へ。
咲夜は紫苑と雛里と一緒に最終的な許可承認などの確認や金銭などの必要事項の確認など総責任者たる仕事をすべてすることとなった。
他の者たちもいつも以上に熱心に取り組み…
そして…
祭りの日、当日…

「これより、第一回荊州郡大祭りを開催いたします！！」

わああああーーーーーーーーっ！！！

咲夜の声を合図についに祭りが始まりを告げた。

舞台となる地は江陵。

ここに今日は荊州中とも言ってもいいほどの多くの人たちが訪れた。

それもそうだろう。

咲夜が事前にこの祭りがあるということを公布していたのである。

しかも祭りは三日間あるため、今日は初日な為、これでもまだ少ないとも言える。零陵や桂陽郡に住む人たちは少し遅れてくるようで、二日目にはより多くの人たちが集まることが予測された。

出店は咲夜が先立って提案したものが多く存在した。

焼きそば、鯛焼き、綿飴（のようなもの）、林檎飴などなど様々な食べ物を売る店。

くじ引きや弓的、亀掬い等のちょっとした娯楽の店。

咲夜が書いた書籍の登場人物たちが描かれている絵巻や咲夜の直筆入りの限定版縫い包み等が売られている特殊な店。

他にも三日ごとにとり行われるイベント。

初日は荊州一恰好良い男、美しい女だーれだ大会。

二日目は大食い大会。

三日目は咲夜作：仮面騎士の英雄演義。

また、特別に用意されている場所では歌劇団による野外演戯が行われる。
これには裏方だが、天和達も参加してもいいと咲夜は許可した。
それを聞いて三人はとても喜んでいた為、咲夜も笑顔になったとか…

咲夜が主に警備隊を配置したのは一日目の美男美女決定大会である。
しかも何故か、本人の承諾なしに咲夜は強制参加。

そして男子部門で優勝してしまった。
準優勝は韓玄の弟こと、韓浩（翡翠）であった。
因みに翡翠の方の容姿はショタに人気がありそうとだけ言っておこう。
投票した8割の女性たちの目が何やら血走っていたらしい…

おお、こわいこわい。

女性の方は紫苑が優勝。
大半の男性の理由は…未亡人故の大人の魅力、だそうだ。
準優勝が韓玄こと琥珀。
こちらも紫苑と理由が似ていて、二人ともほんの数表の差だったそうだ。

三位は前者二人とは票差はあったが秋葉が選ばれた。

次に咲夜が警戒を高めたのが仮面騎士の英雄演義、そして歌劇団による舞台公演である。
例年というか…毎年数名、舞台に上がろうとして警備隊に逮捕される阿呆が居るのである。
その為、咲夜はかなり厳重な警備体制を敷いていた。
その上、裏方とはいえ、今回の舞台には天和達張三姉妹も関わっているのだ。
直ぐにばれるなんてことはないと思ってはいたのだが、念には念を入れることにした咲夜はこうして警戒を万全にしていたのであった。

結果は大成功。
祭りの騒ぎに乗じて、阿呆がやはり台に上ろうとしてきたが…
今回は咲夜自身が即座に逮捕した。
それを見て観客は驚いたような顔をしていたが、劇団員がすぐさまフォローに回り、事なきを得ることが出来た。
まあこういった祭りを開催するのは初めてな為、最初こそ皆戸惑ったりしていたが、次第に堪能していった。
まあ勿論のこと、酒の飲みすぎで暴れたりした輩もいたのだが…そういう類いの者達はすぐさま警備隊によって連れて行かれた。
勿論、逮捕ではなく初回の者は厳重注意。
注意しても周りに迷惑を掛ける者は祭りに参加することが出来ない様に手回しをされてしまうようにした。
祭りとは皆で楽しむ行事であって、小人数に妨害されていいものではないというのが咲夜の持論である。
その咲夜の考えが少しは通じてくれたのか…出入り禁止になった者たちはほんの数名に留まってくれた。

その為、この祭りは9割方成功したと見られた。

祭りがすべて終わり、皆で後片付けを済ませた後、咲夜は皆を集めて祭り終了を祝い、小さなお茶会を開き、そして後日に細かいことを話し合おうと決め、解散した。

祭りを終えた後日、咲夜は遅くなりながらも文武官全員を可能な限り収集させ、以前から考えていた人事についてを発表することにした。

というのも朝廷から遅れながらも州牧に任じられることとなったために、咲夜達は直ぐに官職を変えなければならなくなったのである。

なおこれはかなりの特例である。

何故なら州牧とはどれか一つの州を完全制覇するという条件を満たしている上でないと名乗ることが出来ない。

咲夜が治めている荊州の地は襄陽、江陵、江夏、武陵、桂陽、零陵である。

まずは武官のほうから…

牙門将軍：黄忠漢升（紫苑）
護軍：魏延文長（焔耶）
偏将軍：徐晃公明（杏）
裨将軍：太史慈子義（秋葉）

▽▲▽▲▽▲▽▲

忠義校尉：姜維伯約（美鈴）
昭信校尉：趙雲子龍（星）
儒林校尉：劉曄子揚（慧音）
建議校尉：董允休昭（椛）
奮威校尉：王平子均（魔理沙）
宣信校尉：韓浩（翡翠）
破賊校尉：韓玄（琥珀）
武衛校尉：ＫＤＡこと刑道栄

上記のほうの官職はやはりというか咲夜と一番長くいる武官たちが選ばれることとなった。
しかし…皆は劉曄が何故文官でなく武官なのか…不思議に思っているかもしれない。
確かに普段の劉曄は文官の仕事をこなしている。
だが…時にとある体の一部を使うことにより、その辺にいる武官よ

りも強くなってしまうのだ。

それは…
頭部による強烈な頭突きである。
それを受けた者は最低半日は立ち上がれなくなるほどのダメージを受けるとか…
そのため、劉曄こと慧音は不本意ながらも武官の位にありながら文官をやっている。
時折、兵たちの訓練を見る際にサボり気味の奴を見つけたら頭突きをくらわせている。

文官のほうは…

太楽令：徐庶元直（麻理）
大倉令：鳳統士元（雛里）
武倉令：荀攸公達（燐花）
衛士令：程？仲徳（風）

主簿：馬良季常（智）
諫議大夫：諸葛瑾子瑜（雛）
侍郎：鞏志（雫）
中郎：劉泌

といった感じである。

まだまだ役職が少ないため、本来なら他の者たちにも官職を与えたいのだが、ない者はないため、仕方がないだろう。

「今回はこれで決まりだが、うちは実力次第で官職の入れ替えもある。今回該当しない者たちは入れ替えの機会を得るために、該当する者たちは更に励み、入れ替えられないように努力して貰いたい」

「「「「「ハッ！！」」」」」

そしてさらに数日後…

ついにというか…いよいよ歴史が大きくうなりをあげて動き出す日がやってきた。

そう…

――――中国後漢の第１２代皇帝、霊帝の死である。

第一三話（後書き）

ついに霊帝が死に、歴史が動きだした。
袁紹、董卓、曹操、劉備、孫策らはどう動くのか…そして劉封は？

次回、反董卓連合…！？え、違うの！？

第一四話（前書き）

とりあえず今までにない形を作って行こうとしたらこうなりました。矛盾などがあるかもしれませんが、可能な限り早く正確に書いていきたいと思います。

第一四話

霊帝の死…それは各地に混乱を再び混乱に落とす、きっかけとなることであった。
咲夜の治める荊州を除いて、大半の諸侯が混乱し、それをきっかけに隠れていた黄巾党の残党や夜盗等が再び、活発に動きだしたりと様々な方面で被害をもたらした。
一番酷かったのはやはり洛陽だろう。
霊帝が死んでから、今までは水面下で潰し合いを行っていた者たちが今度は誰からも見て分かる位に、非道な行いを繰り返し行うようになっていた。

まずそんな混乱した漢王朝帝の中、先頭に立つことが出来たのは何進。
それは自身の息子である、劉弁を無理矢理皇帝の位に付けたためである。
その補佐をしたのが、袁紹であり、何進は一時期、王朝を支配できる立場に就くことが出来た。
だが、それを許さないとばかりに何進を罠にかけ、暗殺したのは十常侍の張譲である。
張譲、趙忠、封?、段珪、曹節、侯覧、蹇碩、程曠、夏?、郭勝、孫璋らを中心に何進を妹である何太后を人質にして、上手く罠にはめたそうだ。

張譲らは劉弁を上手く説き伏せ、何進側にいた袁術と袁紹を洛陽から遠ざけ、再び実権を握ろうと目論んだのだが、それは賈駆文和こと詠と陳宮公台こと音々音によって、その野望は水泡と化した。
だが、Gの様な粘り強さで、張譲と趙忠は逃げのび、同じく漢王朝

の実権を握ろうと目論んでいる、李儒の元に逃げ込んだ。
何進が死んだことにより、李儒は朝廷の政権を握るために邪魔なのは王允と董卓の二人であることを理解し、その内最も邪魔になるだろう董卓をどうにかしようと考え、敵である王允と手を組むことを考えた。
王允もまた、李儒と同じことを考えていた為、二人は一時休戦し、力を合わせ董卓を排除することにした。

だが、董卓には軍師として賈駆と陳宮。
武官としては飛将軍といわれる呂布を筆頭に張遼と華雄がいる。
しかも李儒も王允も地味に賈駆と陳宮によって力を削がれ、殆どの力を失くしていた。

その為、今この二人が頼れるのは昔の功と現在の劉弁が王允と李儒を信頼しているためである。
この二人は元々、賢さと威風堂々たる覇気を持ち合せていた劉協よりも何進の血をひき、学のない劉弁のほうが利用しやすいと考えていた為、以前より劉弁の方に信頼を得ようと試みていた。
それが今、この二人の命を繋いでいたのだ。

そこで二人は考えた。

どうすれば董卓を排除できるのか。

そして閃いた。

自分たちに力が足りないのならば、外の力を借りればいいのではないかと。

李儒はまず、十常侍によって洛陽を追い出された袁紹、袁術の二人に書状を送りつけた。

内容は三つ。

1. 現在の洛陽は董卓によって圧政を強いられている。その為、過去より漢王朝に忠誠を持って報いてくれている袁家に助力を頼みたい。
2. 董卓は劉弁を排除し、自身に信頼を向けている劉協を新たな皇帝にしようと試みている。
3. 実は袁紹と袁術を洛陽から追い出すように仕向けたのは董卓の軍師、賈駆と陳宮である。

このような内容の書状を極秘に送り、そして…

「んまぁ～！！　あれは董卓さんの仕業だったのですね！！　おーほっほっほ！！　よろしいですわ！！　この袁本初にお任せなさい！」

「……なあ斗詩、これ止められないよな？」

「…そうですね一刀さん」

「「ハァ……」」
「おっ？　なんだなんだ、斗詩も兄貴も。要は董卓と戦えってことだろ？　良いじゃん♪　つえぇ奴と戦えるんだぜ？」
「「猪々子（文ちゃん）は気楽でいいな（ね）」」

簡単に釣られた袁紹であった。
そんな袁紹を見て、胃が痛くなった一刀と顔良。
実際、ここ最近忙しいのと袁紹の気まぐれに巻き込まれ、胃薬が食事になりつつある二人だった。

「？　のう七乃、これはどういう意味なのじゃ？」
「えっと何々…ああ、これは今董卓さんが洛陽で政権を握って、美羽様が洛陽から追い出されたのは董卓さんの所の軍師の策だから力を合わせて追い出そうってことですよ♪」
「なんじゃとー！！　あれは董卓の仕業だったというのか七乃～！！」
「そういうことになりますね～」
「ムムム、許せんのじゃ！　こうなったら妾たちも洛陽に出陣じゃ～！！」
「はい～♪」

…こちらも簡単に釣られた。

そして袁紹、袁術は諸侯に書状を送り、連合を組み董卓を打ち滅ぼそうとすることになった。

そしてその頃…咲夜はというと。

「ズズ～～……ハァ～っ、うん♪　この茶葉、かなりいい具合に育ってるね。今まで飲んだ中で一番じゃないかな」

のんびりと茶を飲んでいました。

「そうですね～、風もこれは良いと思いますよ～」

風ものんびりしていた。

「…ってそんな場合じゃないでしょう！？」

思わず杏がこの二人に突っ込みを入れてしまった。

根がまじめな分、この二人の今の様子が信じられないといった顔をしていた。

「何だ杏？　一緒に飲むか。これは美味いぞ」

「はいどうぞ」
「あ、どうも…あ、本当に美味しい」
「「でしょ？」」
「…ってそんなことは今はどうでもいいんですよ！！　どうするんですか！？」
「どうするって…何が？」
「何がって…洛陽ですよ！！」
「ああ、それならもう対策は出来てる…というかもう既に実行してるよ」
「……へっ！？」

杏が驚いてポカンとした顔をしたのを確認した後、咲夜は御茶請けとして用意しておいた大判焼きを手に取り、口にした。

「…（もきゅもきゅ）うむ、これも成功か。今度、菓子屋に製法提供しよう」
「お兄さん、風も少し頂いてもいいですか？」
「はいどうぞ」
「…ふむ～、確かにこれは美味なのですよ。でも風は羊羹のほうがいいのですよ～」
「あ～、確かにどっちも捨てがたいよな」
「…Σ　さ、咲夜様！？　じ、実行してるってどういうことですか？」

呆けていた杏がようやく復活し、咲夜に問いただし始めた。

「ん〜、予想ならそろそろ」

シュタッ…

「おおキタキタ」

黒装束を着た者が一人、咲夜の背後にやってきて、いくつかの書状を手渡した。

咲夜がそれを受け取るとその者は直ぐに姿を消し、どこかに去って行った。

「…今のは冥夜だったな」

「…え、お兄さん。顔が隠れてるのに判別できるんですか？」

「？　それくらい皆できるでしょ？」

「「（ブンブン）」」

二人に首を横に振られて、首をかしげる咲夜だったがまあいいやと思い、渡された書状を確認することにした。

一つ目には袁紹と袁術が諸侯に激文を送り、反董卓連合を結成しようとしていることが書かれて入れ、それと一緒に李儒と王允が送ったとされる書状が一緒に挟まれていた。

どうやらこの二人が使った密使を捕えてこれと同じものを作成し、本物を抜き取ったのだろう。
流石は影の部隊だと咲夜は感心しつつ、次の書状を確認した。

二つ目は他の諸侯の動きについただった。
袁紹と袁術を筆頭に鮑信、王匡、孔?、劉岱、張超、橋瑁、袁遺、許?、李旻、崔鈞などといった将達が参戦することになっていた。
李儒と王允側についたのは朱儁、胡軫、徐栄、李?、郭?、樊稠、楊定らが主だった将となっている。
皇甫嵩将軍も誘われたらしいが、断ったために暗殺されたそうだ。
朱儁将軍は一時期、十常侍によって追放されていたが、王允と李儒によって戻ることが出来た上に買収されたらしく、共に闘うこととなったそうだ。

曹操と孫策だが、こちらも諸侯の動きを呼んで参戦する気配濃厚。
劉備、馬騰、公孫賛らも参戦する可能性大。
唯一、参戦する気配のないのは蜀の劉障や揚州組辺りといった所らしい。

三つ目は、詠から受け取った物で月の偽物が捕まったことが書かれていた。
どうやら何処かに隔離されているらしく、それをネタに李儒と王允が脅しを掛けてきたそうだ。
そのため、詠、ねね、恋、華雄、霞は全員?水関で連合が組まれた

際に向かい討たなくてはならなくなったそうだ。
だがそれも咲夜の考えた計画に含まれたことである為、咲夜はニヤリと笑った。
偽月は影の部隊でもＴＯＰクラスの実力者のため、一人でも直ぐに逃げることが可能。
後は…

「周りがどれだけ味方になってくれるかどうかだな」
「？　お兄さん」
「咲夜様？」

咲夜はふぅと一息つくと、先程とは違った顔をしていた。
その顔は普段のゆったりとした咲夜ではなく、まさに王といえる顔をした劉封の顔だった。

「…風、杏、この江陵にいる文武官全員を集めてくれ。場所は…そうだな、中庭にある休憩所だ」
「…御意です」「御意～」

二人が去った後、咲夜は幾らかの紙と筆を持ち、すぐさま中庭に向かった。
そして、全員が来るまでの間とあることを紙に書いていった。

「咲夜様、お話があると伺ったのですか？」
全員が集まり、咲夜達はそれぞれの席に座った。
事前に侍女に頼んでおいたため、お茶菓子も完璧。

集まったのは風と杏は勿論、紫苑、焔耶、美鈴、燐花、雛里、麻理、秋葉、星、韓浩（翡翠）、韓玄（琥珀）である。

「…皆も知ってると思うけど、袁紹・袁術の馬鹿二人が李儒と王允に唆されて、反董卓連合を結成する動きを見せてる」
「あ～、そういえばそうだったな。それにしても袁家ってのは碌な事しないな」
「「「「うんうん」」」」

全員が琥珀の言葉に納得してしまった。
誰一人、擁護などしなかった…

「そんな中、俺達がどう動くか…俺自身の考えはあるが、その前に皆の考えを聞きたいと思ってな」
「成程…なら私は反董卓連合に参戦すべきではないと思います」
焔耶が高らかに宣言した。

「どうして？」
「だってこれは王允と李儒の策なのでしょう？　なら、連合に参加したら私達は董卓と戦うということになってしまう。確かに呂布や華雄、張遼とは戦いたいですが、こんな裏のある条件の中、戦いたくなどありません」
「成程ね…」

「私もこの連合には参加すべきでないと思われます」
今度は雛里が静かに発言した。

「訳は？」
「あわわ…連合に参加すれば確実に袁紹さんや袁術さんに良いように利用される可能性が高いからでしゅ。それに…戦って勝っても得られる物は何もなく逆に、洛陽に私達に害をなす者たちが残ってしまいます」
「成程ね…なら雛里はどうすればいいと思う？」
「あわわ…そ、それは既に咲夜様が思いついているのでは？」
「…ふふ、流石は雛里だね」
「あわわ、こ、光栄でしゅ」

「…咲夜様、このままだと恐らく皆【反董卓連合には参加しない】という結論を出すだけだと思われます。ですから、咲夜様のお考えを教えていただけませんか？」
「…分かった、なら俺の考えを言おう。といっても軍師の皆は勿論、分かってるんだよね？」

「当たり前でしょ？」「当然なのです～」「あわわわ、はいでしゅ」
「ふわわ、わ、分かってましゅ」

「なら言おう。俺は…

反李儒・王允・張譲・趙忠連合を結成しようと思っている」

それを聞いて分かっていなかった者たちは驚き、理解していた者たちはやっぱりそうかという納得した顔をしていた。

「黒幕たちが連合で来るのならこちらも連合で行こうって思ってね。幸い、詠達は？水関で連合を向かい討つっていう手紙をこちらに送ってきたし」
「…成程、ですがどうやって他の諸侯に声を掛けるのですか？既に袁紹と袁術が動いているのに…」
「ああ、それなら問題ないよ。だって、孫策、劉備、曹操、馬騰、公孫賛。この５人には書状既に送ってるし」
「…成程、既に主は動いていたというわけですか」
「そゆこと」
「ならば我らは主のために動くのみですぞ」

「…皆、事後承諾になったけど。俺の考えについてきてくれるか？」
「勿論なのですよ～」
「了解です！！」

その頃…他の領地ではというと。

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲
「華琳様、どうなさいますか？　袁紹の連合か、劉封の連合か」
「…稟、桂花。二人はどうかしら？」
「…私は劉封の連合に参加すべきだと思われます。袁家の連合のほうはどうにも結成の理由が不適格ですし、何より袁紹・袁術らとは違った者達の思惑があると思われますし」
「…不本意ながら私も反董卓連合には参加しない方がよろしいかと。本当に不本意ですが、劉封の方が結成する理由がしっかりしていますし」
「そう…なら直ぐに準備しなさい。これより我らは反李儒・王允・張譲・趙忠連合に参戦するわ」
「「「「御意！！！」」」」

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽
「ねえ冥琳、やっぱり咲夜がきっかけを作ってくれるみたいね」

「…袁術達の方は無視か？」
「当然でしょ♪」
「…まあそうだろうな」
「では姉さま」
「ええ、反李儒・王允・張譲・趙忠連合に参加するわ！」
「「「「了解！！」」」」

「行くのは当然私と冥琳は確定ね」
「ああ、残るのは…小蓮様、穏、それから…韓当、魯粛、程普、凌統？　徐盛？　虞翻？　朱然？　張昭らを置いていくわね」
「え～、またシャオは留守番なの～っ」
「シャオ、我儘を言うな。留守の間、穏や張昭達にきっちり勉学の教えを請うのだぞ？」
「ぶぅ～～～」

「残りは…祭、貴方も残って貰えるかしら？」
「…むぅ、儂も参加したかったのじゃが」
「保険ですよ祭様。残っている方々で紅蓮様を止められますか？」
「……無理じゃな」

超回復と言わんばかりに紅蓮は体を治し、腕を一本失ったというのに戦場に立ちたいと言っているため、家臣全員で何とかとどめている程、戦闘狂である為、現在、完全に隔離状態にあった紅蓮であった。

「そういうわけで…よろしくね、祭」
「…正直、抑えられる自身がありませぬが…可能な限りやってみましょう」

古参である祭ですら抑えるのが難しい…生きた兵器、それが孫文台であった。

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

「朱里ちゃん、書状が三つきたけど…どうすればいいと思う？」
「……咲夜さんの書状が最も信憑性が高いですね。その反面、袁紹さんや袁術さんのほうは目的や動機が不純としか思えません」
「そう…鈴々ちゃんと愛紗ちゃんは？」
「う～ん、鈴々は劉のお兄ちゃんが居るところが良いと思うのだ」
「私も鈴々の意見に同意しますね。それに書状を見る限り、この王允や張譲は董卓を利用し、私腹を肥やしているそうではないですか。ならば、こ奴らは討つべきであると私は考えます」
「…うん、なら私達も連合に参加しよう！　新野の守りは…靡竺さんと靡芳さんに任せようかな？」
「適格だと思われます。兵は…５，０００が限界ですね。それ以上連れて行くと、この新野の守備が心もとなくなってしまいます」
「よ～し、なら皆！　早速用意するよ！！」
「「「御意（なのだ～）！！！」」」

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

「母様！　荊州の劉封から書状が来たってっ…」
「何を慌ててるんだい翠。全く、少しは落ち着きってもんを考えな」
「あ、わ、悪い。　それで…劉封から書状が来たって聞いたんだけど…何だったんだ？」
「翠、最近の洛陽がきな臭くなってるのは知ってるだろう？」
「ん、ああ。確か董卓が十常侍を始末して、それが気に食わなくなった奴らが暗殺しようとしたけど、逆に殺されたってやつ？」
「……ちょっと違うようだけど、まあ良いわ。この劉封からの手紙によると、その十常侍の生き残りが王允、李儒と手を組んで袁紹と袁術に反董卓連合を組むように促したそうよ」
「っ！！　それじゃあ…」
「ええ、このままだと董卓は無実なのに殺されるわね」
「…そんな、あんなにいい子なのに…母様！　どうしたらっ…」
「ふぅ、落ち着きなさい翠。そんな中、劉封がその連合に対抗して反李儒・王允・張譲・趙忠連合を結束するという激文を出してきたわ」
「Σ　それじゃあ！！」
「ええ、上手くいけばあの子を助けてあげられるわ」
「母様！！！」
「分かっているわ。ただし、私はこの西涼の守りをしなくてはならない。だから翠、貴方は蒲公英と妹紅（？徳）を連れて、？水関に向かい劉封と合流しなさい」
「…分かった、母様の代理として立派に務めてくるよ」
「ああ、言っておいで」

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

「ええっと…反李儒・王允・張譲・趙忠連合に…反董卓連合か。う～ん…盟主は劉封と……ゲッ、麗羽か。なら…劉封についた方が気苦労が少なくなりそうだな」

公孫賛こと白蓮は普通に、考え普通に答えを出した。

「普通って言うなーーーーーっ！！！」

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽

書状の返事を受け取る前に咲夜は既に出陣していた。

総兵数１５万。
先鋒は秋葉と杏、軍師に風。
中軍は咲夜自身と美鈴と紫苑、そして軍師に雛里。
後詰として焔耶と星、軍師に燐花。
それぞれに５万ずつ。

麻理、琥珀、翡翠らには引き続き、荊州の守りを任せることにした。

集う地は？水関のある場所から１００里ほど離れた場所である。
何故こんな場所にしたかというと、既に？水関から６０里ほど離れた地に袁紹と袁術の連合軍が居たからである。
咲夜自身、袁家とは無駄な関わりを持ちたくないと考えているため、暫くはここで待機という形をとることにしたのだ。
というのも袁紹たちに詠達が守る？水関が抜けるとは思っても居ないからである。
実はこんなこともあるかと考え、咲夜は自身の領で開発していた対攻城兵器用の兵器をこっそり？水関に運ばせていたのだ。
加えて？水関を守るのは詠、音々音、恋、霞、華雄であるため、まず袁紹たちに勝ち目はないだろう。

そんなことを考えているうちに続々と諸侯たちが集まってきた。
旗は劉、曹、孫、公孫、馬であった。

こうして袁紹を盟主とする反董卓連合。
そして劉封を盟主とする反李儒・王允・張譲・趙忠連合が？水関近くに集い、いよいよ天下を決める戦いが幕を開けることとなった。

第一四話（後書き）

ようやく翠と蒲公英を出せました。
オリキャラとして？徳を出します。
真名は妹紅です。

多分、真名だけ出してという形になる可能性がありますが…
皆さんがこのキャラは目立って欲しいというのであれば、サブキャラまで昇格する可能性があると思います。

第一五話（前書き）

久方ぶりに投稿できました！！
警察事務試験、一次は通ったのですが、現在二次試験の真っ最中です。
なので、また投稿が難しくなりますが、可能な限り書かせていただきます。
これからも応援の程、よろしくお願いします。

第一五話

「それじゃ軍議を始めようか」

第一回、反李儒・王允・張讓・趙忠連合合同軍議が咲夜の陣で開かれた。

参加者は陳留からは華琳、桂花、稟。
新野からは桃香と朱里。
長沙からは雪蓮、冥琳、呂蒙子明こと亞莎。
西涼からは馬超孟起こと翠、馬岱こと蒲公英、？徳令明こと妹紅。
幽州からは公孫賛伯珪こと白蓮、部下として一族の公孫範と公孫越の二人を引き連れてきた。

そして刑州の劉封こと、咲夜は燐花、雛里、風を参加させた。

「では自己紹介から始めよう」

咲夜はまず自身から話し始め、次に燐花、雛里、風の三人に自己紹介をさせた。
次に桃香と朱里が、その次に華琳、桂花、稟が。
その後、雪蓮と冥琳が自己紹介をした後、新入りであり、咲夜とは初対面である呂蒙が喋ることとなった。

「そ、その…姓を呂、名を蒙、字を子明と申します。び、微力ながら、ご、呉軍で軍師を担うこととなりました。よ、よろしくお願いします！」

「まずは皆、手元の資料を手に取って。そこには王允と李儒の悪事、そしてその二人が十常侍の生き残りである、張譲と趙忠の二人を匿っているという証拠、更にあちら側に付いている将兵の詳細が書かれている」

咲夜は引き連れてきた侍女たちに事前に用意して貰うように手配していたお茶菓子と共に自作の資料を必要な分、置いて貰うようにしておいたのだ。

そこにはこれ以上ない位の詳細が書かれていて、初めて咲夜と会う馬超、馬岱、？徳、公孫賛、呂蒙は驚きを隠せずにいたのか、空いた口が塞がらなかった。

一方で咲夜を知る桃香、華琳、雪蓮達も少し驚いたようだった。

「咲夜…これ、本当なの？　だったら麗羽の連合って」

「十中八九、王允と李儒が仕向けた、董卓を殺す為のものでしょうね。それにしても…胸糞悪い…」

「酷い…？　咲夜さん、この洛陽にいる人たちの生活水準一覧って書かれてるんですけど…これは？」

「…桃香、以前これは教えたことだ」

「うぐっ…」

「ハァ、簡単にいうと今洛陽にいる人たちは殆ど食事をとることが出来ず、また王允と李儒側にいる将兵たちが狼藉を働いている。その為、董卓が以前普通に治めた頃と比べると半分以下になってるん

だ」
「そ、それじゃあ…」
「ああ、今洛陽は死体が道に溢れ、多くの人が絶望に苦しんでいる…」
「「「「「っ…！！」」」」」

全員が唇をかみしめた。
これが人のやることか…ッ！！
桃香は今にも泣きそうな位に顔を歪め、華琳は平静を保ってはいるものの内心、かなりの怒りを感じ、雪蓮は僅かながら殺気を出し、ぎゅっと手を握りしめていた。
公孫賛と馬超の二人も手元が震えていた。

「…なあ洛陽の様子は分かった。でも劉封はどうしてここまで詳細な資料を得られたんだ？」

顔を歪めながらも公孫賛は咲夜に尋ねた。
手元の資料の紙に皺が出来てることから、公孫賛も今の洛陽の様子を想像して怒りを感じているのだろう。

「…俺は以前から董卓側の軍師である、賈駆と陳宮…そして、劉協様と相談して洛陽に寄生していた害虫どもを同士討ちさせることで力を削ぎ、自滅させる策を取っていた」
「Σ　咲夜、貴方劉協様と関わりを持っていたの？」

華琳が驚いた顔をしていた。

それも仕方ないだろう、皇女と相談して洛陽の問題に取り掛かっていたなど、普通の人間なら不可能なのだから。

「まあね、それで俺は董卓側から情報を貰ったり、俺の軍に所属している暗部、まあ情報収集とか専門の部隊に情報を探らせてたんだ」

「…成程な、納得したよ」

公孫賛は勿論、全員が咲夜の回答に納得してくれた。

「…本当なら王允と李儒も時間と共に自滅していく運命だったんだけど…それを良しとせず、こちらの隙をついて董卓を誘拐、幽閉したそうだ。その為、賈駆達は無理矢理王允たちに従っている」

「「「「「「！！！！！」」」」」」

それを聞いて、再び全員が顔を歪めた。

「…本当に外道ね」

「…そうね」

華琳と雪蓮はもう殺気を隠そうともせずにただ怒りに震えていた。

「っ…」

「…本当に王允と李儒は人間なのかっ…！！　いくら何でも酷過ぎるっ…」

桃香は我慢できず静かに涙を流し、馬超は唇を噛み締めながら血が出るのではないかと言える位に手を握り締めた。

「皆、落ち着いて」

咲夜が静かに促した。
咲夜自身も静かに怒りを感じていたが、誰か一人でも冷静でいないと認識しているため、その怒りを誰にも察知をされない位に冷静を装っていた。

「そんな人の道を外れた奴らを洛陽…いいや、この世から排除するために俺は連合を作ることを決意した。だから…この場にいる全員に言いたいことがある」

咲夜はそういうと、全員に見てとれるように頭を下げ…

「どうか、俺に協力して貰いたい。罪のない人たち、董卓達、そして劉協様を助けるために…」

咲夜が頭を下げたことに一時、皆呆然としていたが…

「当たり前です！！　咲夜さん、是非協力させて下さい！！」
「まあ、貴方がそこまで頼むのであれば仕方ないわね」
「勿論、良いわよ」
「…こちらこそ、董卓達を助けるために協力して貰いたい位だ。よろしく頼む」
「こんなこと、放っておけるわけないだろう。喜んで協力しよう」

桃香、華琳、雪蓮、馬超、公孫賛は咲夜に協力することを約束し、ここに正式な形で反李儒・王允・張譲・趙忠連合が結成されることとなった。

「さて、じゃあまず丞相は…華琳、頼んでも？」
「ええ、任せなさい。それにしても咲夜、貴方少し変わったわね」
「…そうかな？」
「ええ、前よりも貫禄が出ているわ」

連合の盟主は咲夜で、丞相は華琳と決まった。

それから、咲夜達は疾風の如く、必要な事項をどんどんと決めて行った。

その頃の反董卓連合派というと…
まあ原作通りというか…それ以上に酷いというか……
ストッパーとなれる人物が斗詩と一刀だけであり、袁術側の張勲は話を余計に拗らすだけ、他の諸侯は袁家とは比べ物にならないほど力が弱いため、止められず…
総大将決めすら、かなりの時間を弄していた。
というのも、今回、連合を組もうと諸侯に呼びかけたのは袁紹と袁術。
実はこの二人、それほど仲が良くない為、どちらかが下になるということを理解した途端に言い争いを始めてしまったのだ。
そんなわけでこちらは咲夜達と比べると、せっかく早めに連合を組んだにもかかわらず、咲夜達よりも色々な意味でも後れをとる形となってしまった。

当然、反董卓連合の情報を手に入れた咲夜達は、それを耳にすると本気で呆れてしまった。

「…やっぱり袁紹って大がつくほど馬鹿？」
「あ、あはは…」
「もし咲夜がこの連合を結成しなかったらと思うと…ぞっとするわね」
「今回は孫策に同感するわ。あんな無駄に髪をクルクルした馬鹿になんて付き合ってられないもの」
「にしても李儒や王允って言う奴ら、袁紹たちを利用することしか手がなかったって…どれだけ追い込まれてるんだ？」
「さあな、でも本当に劉封がいてくれて助かったよ…麗羽の元で進軍するなんて考えただけで…胃が痛い」
咲夜、桃香、雪蓮、華琳、馬超、公孫賛はそれぞれ袁紹に対して言いたい放題であった。

「さて、じゃあこれからどう動くか。それを確認しようか」
咲夜の鶴の一声で、緩んでいた空気が一気に引き締まった。

「じゃあ、軍師の皆で纏めてくれるかな？」
「「「「「「御意」」」」」」

今まで静かに情報を分析していた各軍師らがようやく自分たちの力を発揮する場となった。

まず軍師達は咲夜によって用意されていた資料を隅々まで読み、そこから導き出されることを共に用意されていた紙に次々と書き連ねていった。

「まずは袁紹についている奴らのことを纏めるのだけども…やはり気をつけるべきなのは袁家二枚看板と郭図や田豊等の有能な軍師」
「同じ袁家ですと袁術の元にいる紀霊や張勲等も少し注意した方がいいかと」
「鮑信、王匡、孔?、劉岱、張超、橋瑁、袁遺、許?、李旻、崔鈞らは特に注意する必要はないでしょう。有能な将もいなければ、兵士の質もこちらの半分以下の様ですから」
「ですが、袁家の持つ兵力は馬鹿にならないと思いますよ〜」

まず桂花が袁紹の配下の有能な将の名を挙げ、それに続くように朱里、雛里、風が必要な事項を補足していった。

「それで皆は奴らがどう動くと踏んでいる?」
「ふむ…周瑜殿、私は袁紹が先陣を選んでくるとは思えません。何故なら、袁紹は単純だとしても傍にいる顔良はそうではないからです」
「確かにそうだな。麗羽は見ての通り、根拠のない自身の塊みたいな奴だけど、それを抑えている苦労人の顔良はそれなりに知恵の働く奴だ。こちらに曹操、孫策、劉封がいるとなると慎重になるだろうな」
「で、ですが名族の誇りという名目もあるため後ろにいるというわけにもいきません。その為、袁紹は中軍にいると思われます」

冥琳が一つの題を挙げると、それに郭嘉、公孫賛、呂蒙が答えていく。
公孫賛は軍師ではないが、華琳と同じように袁紹とは古い縁があるため、袁紹のことを詳しく知るということで軍師同士の会話に参加しているのだ。

「ふむふむ…大体まとまってきたのですよ～。では次はこちらは反董卓連合に対してどういった姿勢を見せるかですね」

風が今回、かなり重要である事項を話し合おうとした時…

「ふふふ…そんなもの決まっているだろう！！！」

この場にそぐわぬものが思わず耳を塞ぎたくなってしまうほどに大きな声を挙げた。
それは外にいたはずである春蘭だった。
どうやら待っていることが出来ずにこの場に乗り込んで来たらしい。

「…春蘭、今は大事な話をしている最中なのよ？」

「か、華琳様！！　及ばずながら私に考えがあります！！」
「はっ！　脳筋の春蘭が何を言うかと思えば…あんたのその硬い頭で的確な考えなんて思いつくわけないじゃないの」
「な、桂花！！貴様ぁ！！！」
「ふんっ！」

「お止しなさい！！！」

何だか収集が付かなくなりそうな予感がした為、咲夜は目で華琳に訴え、華琳もそれに応え、すぐさま二人を諌めた。

「…桂花、最初から否定するのはよくないことよ。とりあえず春蘭の考えとやらを聞いてから判断しましょう」
「…分かりました、華琳様」
「コホン…それで春蘭。貴方の考えとは何かしら？」
「はい！！　真っ正面から突っ込むことです！！！」

……

その瞬間、春蘭以外の者の時間が止まった。

いち早く復活した華琳はというと…

「……ハァ～」

頭痛がするのか、頭を押さえて深く溜息を吐いていた。

「姉者…それは幾らなんでも…」

秋蘭も流石に苦笑いをしてしまった。

「やっぱり脳筋ね！！　あんた本当に馬鹿でしょ！？」

桂花は先程の続きと言わんばかりに毒を吐きまくった。

そんな中、一人だけ静かに春蘭に向き合った。

「…なあ春蘭、どうしてそう思ったんだ？」

それはやはり咲夜だった。

「ん？」

「さっき配った資料にも書かれていると思うがこちらの戦力とあちらの戦力図を見ただろ？」

反董卓連合の総兵数。
まず袁紹は約４０万、袁術は約２０万、その他の諸侯らの合計は約１０万。
つまり、合計で約７０万。

一方で反李儒・王允・張譲・趙忠連合の総兵数。
まず咲夜は約１５万、華琳は約１５万、雪蓮は約５万、馬超は約３万５千、公孫賛は約８万、桃香は５千。
つまり、合計で４７万。

確かに兵の質では勝っているのだが、明らかに総兵数では負けているのだ。
加えて、袁紹たちが現在陣取っているのは？水関のほぼ正面。
その為、咲夜達が攻め入る際には進路が限定されてしまうのだ。

「これを見てとれるようにこちらとしては袁紹達とは無駄に戦わず、進路を西にとって洛陽に向かうという手もある」
「…咲夜、西の方の防備はどうなの？」
「殆ど手薄の状態らしい。だが報告によると幾日か前にそこに李儒が訪れたらしい」

「…罠の可能性が高いですね」
「恐らく」

咲夜の考えに華琳が気になることを聞き、咲夜はそれに答え、そして稟が最もあり得る可能性を挙げた。

「それならやっぱり？水関から行く方が安全なんじゃないんですか？」←桃香
「だがそのためには袁紹が邪魔ということになるな」←公孫賛
「ハァ…加えてあの袁紹（馬鹿）が事情を説明した所で話を聞くわけないし…」←華琳

「ああ、だからこそだ。こんな状況なのにどうして春蘭は正面突破を選んだのか、その理由が聞きたくなってな」
「そんなのは決まっているだろう？」
「「「「「「「は？」」」」」」」

「この連合には華琳様や咲夜が中心となり、私や秋蘭は勿論として多くの猛将。そして稟たちみたいな軍師がいるんだぞ？　それなら負けるわけがないじゃないか！」

……

再び、時が止まったような状態になった。

「くくく…」
「？　咲夜、どうしたのだ？」
「あはははははっ、確かにそうだな！！　春蘭の言うとおりだな」
「？？？」

咲夜は今まで殆どの者に見せたことがないほどに暫くの間、大笑いした。

そして、落ち着いた後、直ぐに真面目な顔をして全員に向き直った。

「皆、俺は春蘭の言うとおり袁紹とは正面から戦うという方法をとることにした」
「ふふ、聞かせてもらおうかしら。貴方の考えを」
「ああ、まず袁紹に書状を送る。簡潔に、舌戦をしたいということをな。まあ挑発的に書き綴って袁紹を煽る予定だけどな」
「成程な…麗羽の性格なら確実に乗ってくるな」
「次に俺の配下の一人を？水関にいる賈駆に連絡を取り、こちらと袁紹が戦闘状態になったのを見計らって城を出て攻めてもらう」
「…つまり、挟み撃ちにするということですね」
「そういうことだ呂蒙。だがそれだけじゃない。陣は鶴翼にして、相手をこちらまで可能な限りおびき寄せる。そして時期を見計らっ

て左翼から伏兵を突撃させる。それと同時に全軍で攻め入る。その際に右翼だけは開けておく」
「…完全に囲んでしまうと相手は死に物狂いで戦おうとするため、こちらの被害も大きくなってしまうからですね？」
「ああ、朱里。でも、一応奴らの兵数は減らしておきたい。だから、右翼の方向には念のため弓兵部隊を伏せておく。全滅は不可能だが、数は大幅に減らすことが可能だろう」
「ならその近辺に罠を仕掛けておくのもいいと思われます～」
「その案、頂きだ風。なら敵兵が逃げるであろう方角を探っておくか」

こうして咲夜達は行動を本格的に開始した。

作戦は的中した。

袁紹は咲夜が送りつけた書状を読み終えた途端に、髪のドリルをギュルギュル回すんじゃないかという位の勢いで怒り狂い、咲夜の使者を殺しかけたそうだ。
それを何とか顔良と一刀が必死に止め、返事を書いて使者は無事に戻ってきた。

咲夜はそれを聞いて、その者に十分な恩賞を与えた後ゆっくりと養生するように手配した後、袁紹軍との決戦に向けての最終確認を国主・軍師らと共に進めて行った。

そして決戦の時…

咲夜は傍に美鈴、紫苑を引き連れ反董卓連合盟主袁紹本初と向き合った。

「貴方があの劉封ですわね。私は袁本初。今日は…」
「そんな無駄話は良い。こっちはお前の顔を見ているだけで気分が悪くなってくる」
「んなぁ！？」
「「「「「ぷっ…（笑）」」」」」
「さ、咲夜様…」
「あらあら♪」

余りのストレートに嫌悪感を出しまくりながら袁紹を罵倒する咲夜。
そんな咲夜の様子に抑えきれないのか思わず吹き出してしまった桃香達。
咲夜の隣であわあわしている美鈴に何か面白いのかずっと笑顔でいる紫苑。

「あ、あああ貴方！！　わ、私が誰か知っての発言ですの！？」
「ああ、駄名族の馬鹿袁紹だろ？そんなの誰でも知ってることだろう。もうほとんど意味のない過去の威光に縋って、先代の残した資金を使って贅沢三昧、仕事は大抵部下に押し付けて自身はやりたい放題。そういえば先日、変なお祭り騒ぎ起こして街中混乱させたらしいけど…本当に馬鹿だな。っていうか何だその髪型。無駄な螺旋描いてるけど、ハッキリ言って似合ってない上に無駄に空間とるから邪魔なだけだろ」
「な、なななぁ！！？」
「そんなんじゃ洛陽を追い出されたのは当然のことだな。武無し学無し王としての器なしじゃどうしようもない」
「～～～～～～っ！！！！！」

咲夜の挑発の連続によってもはや人の言葉すら発することが出来なくなった袁紹。

「じゃあ改めて言おう。……かかって来い、正面から潰してやるよ糞女」
「い、いいでしょう！！　そこまで言うのならやって差し上げますわ！！！！　おーほっほっほ！！！！」
「気持ち悪い笑い方するな。鳥肌が立つ」
「きいいいいいいいいぃーーーーーーーー！！！！！」

袁紹は怒り狂いながらも自陣へと戻って行き、咲夜も悠々と戻って行った。

「咲夜、良く言ってくれたわ」
「そうね、お陰で少しだけすっきりしたわ」
「あ、あはは…でも凄く怒ってましたね、袁紹さん」

戻った咲夜に華琳、雪蓮、桃香が話しかけてきた。

「あれだけ言えば、余程のことがない限り真っ直ぐに攻めてくるだろう。さて、陣の配置、伏せ兵の配置は？」
「既に終わっているわ。それにしてもこの策はあの馬鹿には最適ね」
「そうだな…もし相手が華琳や雪蓮だったらこんなあからさまな策なんて通用しないだろうしな」
「あはは♪　そうね、でもこの戦は私にとってもとっても都合がいいわ。何せ目の上のたんこぶだった袁術ちゃんをブッ潰せるんだから♪」
「孫策、それは私も同感よ。何せ無駄に数の多い袁紹の兵を減らせるのだから」
「はぁ～、皆さん何だか黒いですね」

何気ない会話を終えると咲夜達はそれぞれの位置についた。

先手には荊州軍からは焔耶と杏、星に秋葉。

陳留軍からは春蘭、秋蘭、凪、真桜、沙和。
長沙軍からは思春、明命、呂蒙。
新野軍からは愛紗と鈴々。

その後ろには咲夜が美鈴、雛里、風を共に。
華琳は流琉と季衣、桂花と稟を共に。
雪蓮は冥琳と蓮華を共に。
桃香は朱里と共に。

そして戦いが始まった。

「行くぞ！！　我に続け、荊州の勇者たちよ！！」
「荊州軍に後れをとるな！！　我らとて陳留の有能な兵なのだ！！
　我が大剣を目印に血路を開け！！」
「…貴様等の命、私が預かる。道を失いしとき、耳を澄まし、鈴の音を聞け。それは貴様等の道しるべとなろう」
「鈴々についてくるのだー！！　鈴々たちは一人で戦ってるんじゃないのだ！！苦しくなったら隣を見るのだ！！　死を覚悟するんじゃなく、生き延びて明日を生きることを考えるのだ！！」

そして両軍は衝突した。

最初の方こそ、戦況は均衡していたのだが…それは次第に変化していった。

「敵将鮑信、趙子龍が討ちとったり！！」
「敵将、夏候元譲が斬り殺したり！！」
「関雲長が敵将、劉岱を討ち取った！！」
「…敵将、討ち取った」

本来なら咲夜達は自陣方面に反董卓連合を誘いこみ、次第に包囲するという形をとることにしていた。
だが、予想外にも敵は長蛇の陣でやってきたのだ。
道が狭いわけでもなく、平地が続いているというだけの土地で…
更に言うと、それは袁紹だけを見ればという場合である。
実を言うと、反董卓連合側の諸侯は全くと言っていいほどに統率がなっておらず、個々で自分勝手な布陣をしているため、以前戦った黄巾党とほとんど同じ無陣とも言える状態であったのだ。
その為、咲夜達は直ぐに作戦を変えて自身達が動いて相手を囲む形を作る動きをしながら敵将を討ち取って行くことにしたのだ。

結果、反董卓連合側の盟主の半分以上が討ち取られるか捕えられるかされ、咲夜達はもう少しで袁紹を討ちとれるという距離まで近づいていた。

↓Ｓｉｄｅ　北郷一刀↓

やられた…。

そう思うしかなかった。

劉封からの手紙を受け取った時もそうだった。

あれに書かれていたのは麗羽を明らかに挑発するようなことだった。

その上、劉封には今まで書状を送っていたけど…そのすべてを無視されたような返事ばかり返されたり、忍び込ませた密偵を取り込まれたり、こっちの重要な人物達を引き抜かれたりされてきたから…

戦前の舌戦で今まで溜まっていた劉封に対する鬱憤が爆発したんだろうな…

麗羽は咲夜の言葉を鵜呑みにし、こちらからも正面から攻めると言い出した。

流石にそれは拙いと考えて俺と斗詩は懸命に麗羽を諌めようとした。

だけど…

「…一刀さん、結局止められませんでしたね」

「…ああ、こうなったら仕方がない。負けそうになったら麗羽を気絶させてでも連れてこの場を逃げないと…」

「ですね…文ちゃんにも簡単にですが説明はしておいたので、とりあえず何とかなるかもしれませんけど…」

「「ハァ……」」

まあその後のことを簡単に話すと…

何とかなりませんでした。

「急報！！　敵将、趙雲により鮑信殿が討ち死にされました！」
「い、一大事です！！　敵将の夏候惇により孔？殿が討たれました！！」
「え、袁紹様！今度は敵将関羽により劉岱殿が討たれ、兵は混乱しています！！」

来る情報はすべて凶報。
しかもその大半がこちら側の将が討たれてしまったり捕えられたりしたというものだった。

「くっ、どうなってますの！！」
「麗羽様、ここは引くべきです！！　これ以上の戦は無駄に兵の命を散らすことになります！！」
「そんなわけにいきませんわ！！　あれだけ馬鹿にされたのですよ！！！　袁家に後退の二文字などあり得ませんわ！！！」

先程から斗詩と一緒に何とか説得を試みているのだけど…やっぱりさっきの劉封の挑発が麗羽のプライドを必要以上に刺激したのだろう…
どうすれば…

わあああああああぁーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！

「な、何事ですの！？」

麗羽は勿論、俺や斗詩も驚いた。
一体何が起こったのか…

「も、申し上げます！！　左手より突如大軍が現れました！！！
旗は公孫と馬です！！」
「で、伝令！！　董卓軍が？水関より出陣！！　旗は深紅の呂！！」

っ！？
こ、こんな時に敵の伏せ兵だって…
しかも？水関からも董卓軍が出てきたって…
ま、拙い。
しかも公孫賛と馬超って言えば馬術に長けたことで有名になった人物たちだ。
呂布なんて天下無双と謳われた武将じゃないか。
それがボロボロになったこちらに突っ込んでくるとしたら…Σ

「斗詩！！　今すぐ敵右翼方面からこの戦地を離脱しないと！！
敵の伏せ兵の目的はこちらの本陣に乗り込み、麗羽を討ちとることだ！！」
「！！　わ、分かりました！れ、麗羽様…失礼します！！」

ドカッ…

「かはっ…」

ドサッ…

斗詩は仕方なく、麗羽を気絶させると自身の馬に乗せ兵たちに麗羽のことを任せ、前線にいる猪々子に伝令を飛ばし、殿を頼むことにした。

俺と斗詩は残った兵を郭図、田豊、張?達と何とか纏め上げ、後退することにした。

「ぬ、お主らは麗羽姉さまの…」
「あれ？　どうしたんですか？」

確か…麗羽の妹の袁術だっけ？

「俺達はこれから敵右翼より戦線を離脱する！　敵左翼から敵伏せ兵が来ている上に、前線でも多くの味方が討たれている！　これでは勝ち目はない。だから俺達は逃げる！！　あんたらも早めに逃げた方がいいぞ！！」

それだけ言うと、俺達は敵軍を突破し、何とか安全地帯に入ること

が出来た。

……そう思っていた矢先。

ヒュンヒュンヒュン！

「ぐああっ！！」
「ぎゃあっ！！」

こ、こんなところにも伏せ兵が…

「くっ…血路を開いて逃げろ！！」

「逃がしません！」

そう言ってこちらに弓を向けているのは黄忠漢升だった。

その矢の先にいるのは……Σ　拙い！！

ヒュッ…グサッ！！！

「ウグッ…」

「か、一刀さん！？」

「だ、大丈夫だ…」

黄忠は未だに気を失っている麗羽の頭部を正確に狙っていたのだ。

だから俺はその先に手を出して、その矢を何とか防ぐことが出来た。

「退けーーーー！！　こんなところで俺達の主を死なせるわけにはいかないんだーーー！！」

「「「「「おおおおおおおっ！！！！！」」」」」

それから何とか傷を負いながらもその場から逃げることが出来た。

だけど…

戦死者…約２０万人。
負傷者…約１２万人。
行方不明者…約８万人。

あれだけ居た多くの兵士たちは今では面影すらなかった。
皆が疲れ果て、傷つき…多くの戦友を失ってしまった。
有能だった将も軍師も殺されてしまった。

…これからの立て直し、これだけでもかなりの時間を有するだろうな。

↓Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ↓

策は的中した。
反董卓連合は散り散りとなり、事実上反董卓連合は壊滅した。

咲夜達は各自、多くの兵や将を討ちとり、捕虜としてそれらの者達を所定の場所に集った。

「お疲れ、皆被害状況は？」
「殆どなかったわ。咲夜、貴方の策が思った以上に的中したわね」
「あはは♪　見た咲夜、あの袁術ちゃん達の逃げる姿。あはははは、笑えたわ」
「こっちも被害はありませんでした。それにしても…捕まえた方達はどうしますか？」
「…おおよそ１０万もの兵、凄いな…この捕虜の大半が袁紹のところのだ」
「これだけの数を養うなんてことは無理だしなぁ…」

咲夜、華琳、雪蓮、桃香、公孫賛、馬超が代表として一つの天幕に集まり、それぞれの被害状況や捕虜の数、勝ちとった軍備品などの情報を交換していた。

「とりあえず深手を負っている者たちだけはこれから入る？水関に連れて行ってちゃんとした治療を施そう。それ以外の者たちには残りたいという意思のあるのなら残らせて、他は自由にさせよう」
「…そうね、無理にこの場に留まらせてもいいことはないし」
「じゃあまずは兵を纏めて？水関に入りましょう。それから食事にしましょうよ咲夜」
「あ、そうですね。鈴々ちゃんもお腹がすいたそうなので」
「ああ、ならすぐにでも行動に移ろう」

こうして反董卓連合は壊滅した。
更に咲夜は各地に間者を飛ばし、反董卓連合が不純な動機で結成されたことやそれに関わっていた人物たちの悪事や立場を振りにさせる事柄などを噂させていた。

そのため、反董卓連合に参加していた生き残りの諸侯らはその混乱の鎮圧に手いっぱいとなってしまうこととなった。

本当に、咲夜が敵にまわると恐ろしいことこの上ない…

第一五話（後書き）

咲夜の口調の変化、それは荊州王としての自覚が出てきたこと。
そしてやはり袁紹や王允達に対する怒りが余りにも大きく、抑えきれなかったことが原因。
だがその袁紹率いる反董卓連合は脆くも咲夜達の手によって崩れ去った。

残るは洛陽にいる王允達。
そして咲夜達はついに協力者である詠達に会うために？水関へと入って行く。
だがそこで知ったのは咲夜の思惑とは少し外れた事実だった。

次回、第一六話…
難攻不落、虎牢関

第一六話（前書き）

正直、難産でした…
オリジナル書きにくいし、難しいですね。

オリジナルキャラを希望して下さった、雪風さん。
とりあえずですが、夏候蘭と諸葛誕を登場させてみました！

第一六話

咲夜、華琳、桃香、雪蓮、公孫賛、馬超らはその後急ぎ戦後処理を済ませ、次々と?水関へと入って行った。

それぞれ、仕事を部下に伝達し終えた後、全員が大きな天幕に案内された。

「待っていたわよ、久しぶりね咲夜」

女中に案内された部屋には既に詠、霞、華雄、恋、音々音が席に座っていた。

「ああ、元気そうでなによりだ」
「…ありがとう、僕達が今ここにいられるのは全部咲夜のお陰だよ」
「…そうか、ところで月や劉協様からの連絡は?」
「大丈夫よ。まだ誰にも気付かれていないわ」
「そうか…それなら虎牢関を攻め、洛陽に向かうことも出来るな」

咲夜は詠の正面の席に座るや否や直ぐに何か話を進めて始めた。
詠もそれに応える様に自身の持つ情報をすらすらと告げて行き、それを見て霞、華雄、恋、音々音以外の面々は思わずきょとんとしてしまった。

「敵の様子は？」
「さっき、密偵に探らせたら反董卓連合が敗れたことを知ったみたいで、慌ててたわ」
「それはそうだろう。７０万近かったにも拘らず、僅か一戦交えただけで壊滅させられた上に、その連合軍が今度は自分達を狙って進軍している上に、利用できると思っていた詠達が一戦もせずに連合に組していると知れば焦るだろう」
「ふふふ、そうね。でも私は決してあいつらを許さないわ。捕まえたら…絶対に生きていることを後悔させてやるわ」
「（こわぁ…相変わらず月のことになると黒くなるなぁ…）」

詠の様子に少し引きつつも、咲夜は話を続けようとした。

「ちょ、ちょっと待ちなさい咲夜！」
「ん、どうした華琳？」
「どうしたじゃないわよ。そっちで勝手に話を進めないで欲しいわ」
「あ、そうだったな。確かにそれは俺の不手際だ。すまない」

咲夜は華琳達に謝罪するとまずは互いに自己紹介を済ませる様に促し、その後ちょっとした手配を済ませた後、皆に聞こえるだけの音量で話し始めた。

「じゃあまず第一に次の目的地である虎牢関についての情報だ。現在、虎牢関には朱儁、胡軫、徐栄、李？、郭？、樊稠らが篭城の備

えをしつつ、こちらに間者を放っているそうだ。だけど、詠…賈駆の指示でその動きを妨害しつつ、こちらの情報を一切与えない様にしている」
「ふふん。虎牢関を守ってる輩は所詮、金や権力に釣られただけの無能な奴らばかりなのよ。そいつらの思考を予測することなんて簡単過ぎたわ」
「それにしても手際がいいわね。…欲しいわ、貴方のその才」
「…残念だけど、僕は月のためだけにいるの。だから私が主とするのは月以外にいないわ」
「あら、残念ね」

「次に現在の洛陽の様子だけど…幾度もこちらに伝令を飛ばして来ては月…董卓の身柄の安全の保証の代わりに咲夜達の連合を潰せと脅して来てたわ」
「…追い詰められた下衆のやることは分かり切ってはいたけど、こうも予想通りだと聊か拍子抜けするわね」
雪蓮が何やら呆れたと言わんばかりに表情をしながら溜息をつくと、その場にいた全員が頷いてしまった。

「あ、あの…」

ゆっくりと手を挙げながら、恐る恐る、桃香が詠に気になっていたことを尋ねてみた。

「そ、その董卓さんは大丈夫なんですか？　そんな人たちに捕まっているのなら…」
「ああ、それも問題ないわ。何せ、今洛陽にいる月は本物じゃないから」

「「「「「……えええええーーーーーーー！？！？」」」」」

華琳、雪蓮、桃香、馬超、公孫賛は思わず大声を挙げてしまった。

「ど、どういうことなの！？」
「一言でいうのなら影武者。これは咲夜が考案してくれたことなのよ」

慌てた様子で詠に詰め寄り、答えを聞くなり華琳はキッと咲夜を睨みつけた。

「…悪いな、今のこの状況の中、どこから情報が漏れるとも限らない。だからこそ、必要最低限の者にしか話していなかったんだ。敵を欺くにはまず味方からとも言うだろう？」
「それはそうなんだけどね…」
「頭では納得できてもしきれないわよ！」

「酷いです、咲夜さん！　それならそうと教えて欲しかったですよ！！」
「人が悪いな…」
「確かにな、必要な事だったとはいえ」
ぶーぶーと次々と文句を口にする5人。
そんな五人を見て、咲夜は苦笑をしながら謝罪した。

暫くそんなコント（？）が続いた後、全員が落ち着いた所で用意されていたお茶を一口飲み、話が再び始まった。

「ふぅ、じゃあ話を続けるぞ。今、董卓と劉協様は誰にも目のつかない所に隠れて貰っている。見張りも隠密に長けている者が付いているから問題はない」
「劉協様まで…本当に咲夜が敵でなくて良かったわ」
「…それに関しては同感だな」

今度は雪蓮、公孫賛が苦笑してしまった。

「…ところで劉弁様はどうしたの？」
「……」
「？　咲夜さん？」
「ああ、劉弁様は完全に王允と李儒の言うことを信じるだけになっている。劉弁様は外とは連絡をとる手段がなく、俺の方も手が出せなかった」
「……そうね、こちらでも幾度なく接触を試みたのだけれど…あの

頃は、何進の圧力なんかもあったから。何進が死んだ後は袁紹や袁術達。その後は、王允や李儒たちってわけ。僕達が何とか連絡を取り続けられたのは劉協様一人だったの。劉協様は月のことを信頼してくれたから、他の宦官や諸侯の話に耳を傾けようとしなかったし」

「正直な話、劉協様だけでなく、劉弁様もお助けしたかったのです」

咲夜、詠、音々音の三人が今までの裏事情を説明し始めた。

三人とも苦々しい思いをしたことを思い出したのか、半笑い気味になっていたが…

「ん？　でもどうして劉弁様も助けたかったんだ？」

馬超がふとそんなことを聞いてきた。

「そんなの決まっているでしょう？　劉弁様も劉協様と同じ太子なのよ。言うまでもなく、次の皇帝の継承権を持っているということ。咲夜が保護しているのは劉協様。でも李儒たちは劉弁様。これだけみればどう見えるかしら？」

「…王位継承のための…戦いということですか？」

「それだけじゃないな…後ろ盾になった人間は少なからず大きな権力を得ることが出来る。今の漢王朝は有能な人材が次々と殺されてしまったと聞いているしな」

「…つまりは袁紹や袁術ちゃんは王允達に董卓を殺させて、その後関わった人間に有らぬ罪を着せるか…買収するかで王朝の権力を握ろうと試みたってわけね」

「そういうこと。つまり、袁紹達の率いた反董卓連合は全くの無駄なものだったってわけ」

上から華琳、桃香、公孫賛、雪蓮、詠。

「とりあえず、まだ劉弁様と劉協様…どちらも王位には就いていない。そこらにも少し裏工作をしておいたからな。でもそれにも限界はある。だから、出来るだけ早く洛陽に行き、けりをつけておきたいと思っている」
「そうね…もし行動が遅れて劉弁様が帝の位に就いて…それを王允と李儒たちが利用したら」
「…私達、反逆者になるわね」←雪蓮
「えええ！？　ど、どうすれば」
「落ち着きなさい、桃香。咲夜はそれに対して対策を実行しているのでしょう？　なら余程のことがない限り、大丈夫なのでしょうね？」
「ああ、だが出来る限り急ぎたい」

それから咲夜達は念には念を入れて必要になるであろう事項を次々と決めて行った。

それらがすべて決まり終えるのではないかと思えた頃…

「で、伝令！！！」

一人の兵士が天幕に飛び込んできた。

「どうしたの？」
「一大事でございます！！　虎牢関…虎牢関にいた将兵の姿が消えました！！」
「「「

こうして？水関の守りを詠、華雄、公孫賛、馬超の軍が。
虎牢関への進軍には先鋒に華琳と咲夜の軍。
そして案内役として恋と音々音が共に居ることとなった。
その後ろには桃香、霞、雪蓮が続いた。

そして一同は虎牢関へとたどり着いた。

「…静かすぎる」
「咲夜、これはどう考えても無人の関よ」
「…念のため、誰かに調べてもらった方がいいんじゃないんですか？」
「そうだな桃香。よし、俺の所から派遣させてもらう」

暫くした後、咲夜の隠密部隊の一人から連絡が入り、虎牢関には現在二人の女性が関の上で華琳、咲夜、星を待っているとの報告が来た。

その為、咲夜はその旨を華琳と星に伝えると数名の護衛と共に虎牢関に入って行った。

「それにしても主よ。主と曹操殿はさておき、何故私も指名されたのであろうか」
「さあな、とりあえずその二人がこの状況を作り出したのだろうな」
「もしくは洛陽で何かあったか…」

三人は密偵の告げた場所に行くと、確かにそこには二人の女性がいた。

一人は何やら白いニット帽の様なものを被り、何やら雛里や麻理、朱里に似た服を着ていた。
だが、似ても似つかないのはその女性の腰のあたりにある鎖鎌だった。
目元はニット帽の縁で隠れているが、鋭い眼光でこちら…いや、曹操孟徳を見ていた。

もう一人の方はというと…この時代ではあり得ない服…ゴスロリを着ていた。
真っ黒なゴスロリが彼女の幼そうな容姿に良く似合っていた。
だが、こちらもやはり武器である槍を所持していた。
しかも何となく星の持つ槍に似ている造りである。

それが気になった咲夜はそれとなく隣にいた星に尋ねてみようとしたのだが…その星は何やら苦々しい顔をしていた。
そしてその子も星のことを暑い眼差しで見ていたのだ。

いつまでもそのような状況でい続けるわけにもいかない為、とりあえず咲夜は話をしてみることにした。

「…君達かな、俺と華琳、星を呼んだのは」
「はっ！　無礼であるとは思いますが…」
「気にしなくてもいいわ。それで？　貴方達二人がこの虎牢関を空にさせたのかしら？」
「そうでございます」
「…まずは自己紹介からしよう。俺は劉封。字はない」
「私は曹操、字は孟徳よ」
「……」
「…？　星、どうかしたの？」

普段の星としては似つかわしくない様子に咲夜は気になった。

「…久しぶりだな、彗星」
「はい♪　お姉さまもお久しぶりです。相変わらず美しいですね！！」
口元をヒクつかせながら星は何とか言葉を口にした。
どうにもこの二人は縁のあるようだ。

「星、この子は知り合いなのか？」

「…ええ、一応私と同じ常山の出身で……共に槍を磨いたことのあるものです」
「私は夏候蘭という者です！！　星姉さまと一緒に働きたくて、常山から来ました！！　劉封様、私を星姉さまの副将にしていただけませんか！！」
「（…元気だねぇ）　まあそれは後で考えておくとして…今はそれよりもどうやってこの状況を作り出したのかを聞きたいんだけど、いいかな？」
「あ、それは私の考えではなく…この子の考えです？」

夏候蘭と名乗った女性は隣にいたもう一人を指差した。
そして、ゆっくりと顔をあげると咲夜の目を真っ直ぐに見つめた。

因みに、この二人とも身長は咲夜よりも小さいので必然的に見上げる形になってしまうのだった。

「…どうも。私は諸葛誕」

静かに…しかし淡々と言葉を連ねていく諸葛誕と名乗った少女。
彼女が話をすると周りが空気を呼んでいるのではないかと思える位に静かになり…彼女自身からは立派な風格が見てとれた。

一言で言うのならば…

―――ハードボイルド、である。

「…（こいつ）」
「（欲しいわね）」
「（…何故なんだ、彗星から逃げられたと思ったのに…）」
「（お姉さま）」

…何か約二名がカオスである。

「私は前まで宛にいた。自分が使える価値のある領主を探して。そんな時、多く耳にしたのは曹操殿と劉封殿のことだった。その為、私はまず荊州に行ったのだが…そこはまるで見たことのない世界が広がっていた。素晴らしいと思ったのだが、どうやら人員は足りているように見えたので、もし私が劉封殿に仕えることが出来たとしても…私の力を見せることが出来るのは当分ないと思えたのだ。その後、私は陳留に向おうとした。だが、その途中で？水関にて反董卓連合と曹操殿が戦うという情報を耳にした。それを聞いた私はこれは好機と見て、今回このような形を持って曹操殿と会う機会を得ようとした」
「あら、それでどんな手を使ったのかしら？」

「…幸い、ここの守将をしていた大半の輩は金目当ての奴らばかりだった。ならその金はどこでもらえるのか？　それを考えれば直ぐに分かる。　それは洛陽でだ。なら、洛陽で何か異変があったらどうするか。例えば、王允や李儒が洛陽から長安に遷都する、とか」
「「成程…」」

「それを実行する際に、少しへまをして…そこの夏候蘭に独り言を聞かれたので。話をすると劉封殿に仕えて、趙雲殿と共に働きたいとのことだった…だから私のついでにと思ったから」
「それにしてもよくその策を実行出来たわね」
「それなりに伝手はある。これでも水鏡先生の私塾出身。訳あって、勉学よりも武術の方に自信があるのだが」
「そう……諸葛誕、貴方は私に仕えたいのよね？」
「はっ！　それが許されるのならば！！」
「そう、なら覚悟しなさい。私の目指す覇道、並大抵の覚悟ではついていけないわよ？」
「承知！！　私の真名は朱雪。私の真名、受け取り下さい」
「ええ、これからよろしく頼むわ、朱雪」

イイハナシダナー…

で終わるわけがなかった。

今まで何となく避けてきたのだが…そろそろ星が咲夜に助けを求める視線を出し始めたので…

「と、とりあえず…夏候蘭、君は俺の所で働くということでいいのか？」
「正確には星姉さまの下でならですけど♪」
「そ、そうか」

↓Ｓｉｄｅ　咲夜＆星　アイコンタクト↓

「あ、主！！　何とかして下され！！」
「無茶言うな。夏候蘭は星を慕ってここまで来たみたいだし…結構有能な将だ。丁度星の部隊には副官はいなかったし」
「か、勘弁して下され！！　彗星は…彗星だけはどうか！！！」
「…個人的にどうしてそこまで嫌がるのかが知りたいんだが」
「…常山にいた頃のことです。私は彗星とは歳の差があまりなかったので、最初は本当の妹の様に懐いてくれて嬉しかったのですよ。しかし、時が経つにつれて…その、少し変になってしまったので」
「変？　どんなふうに？」
「例えば…湯浴みをしている最中に、急に一緒に入ると言いだしたと思ったら……その、私の体を弄り始めたり…」
「……」
「着替えをしている瞬間を見計らったのか、服を脱いだその時に部屋に乱入して来たり…」
「……」
「それ以外は良き武人であり、妹分なのですが……」
「…でも本人は星の副将じゃないと嫌みたいだけど」
「せ、せめて誰か見張り役をお付け下さい！！　でないと…」
「…慧音ならどうだ？　あいつなら間違ったことは直ぐに修正（時

に終世）してくれるだろうし」
「…それなら何とか」
「なら星の副将として夏候蘭を。その補佐役兼お目付け役として慧音を付けるから」
「……はい」

↓Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ↓

「よし、なら今日から君を荊州軍の星の部隊に加えることにする。ただし、念のため補佐役として劉？を付ける。それでもいいか？」
「はい♪　星姉さまと一緒にいられるのなら」
「…ハァ」

こうして夏候蘭こと彗星が荊州軍に、諸葛誕こと朱雪が陳留軍に加わることとなった。

咲夜、華琳、星は新たに仲間となった彗星と朱雪と共に虎牢関外に待機させていた桃香達へ伝令を出した後、全軍を通過させた。
その後、兵たちに食事と休息をとるように指示を出した後、再び天

幕に集まり、最後の砦である洛陽における作戦を考えることとなった。

まずお決まりである自己紹介から済ませ、咲夜は間者を使い、再び洛陽内部の状況を探ることから始めた。

その結果、いくつか新しい情報が入ってきた。

まず、やはりというか…負け戦が濃厚のこの状況で逃げてしまった将兵が多数いるとのこと。
いくら金銭のためとはいえ、命を投げ出すなんて出来るわけがない。
それも忠誠を誓っていない相手に対してなど、有り得ないことだ。

次に、王允と李儒が残った部下たちに金銀財宝や重要書類などを持ち運ぶ準備をしていたとのこと。
どうやら洛陽では防ぎきれないと理解したため、長安へと逃げようとしていたそうだ。

だが時期が悪かったのだろう…
偶然にも王允達が虎牢関を守っていた将達を置いて、長安へと逃げるという偽情報を朱雪が流して、虎牢関を空にさせるという策を使ったために、将達が洛陽に入った頃には既に王允達は逃げる準備をしている途中だった。
故に、その将達と王允達との間に亀裂が生まれた。

結果、朱儁、胡軫、徐栄などの将校らが洛陽を抜け出してしまったらしい。

そして最も驚いた報告があった。

それは…

李?、郭?によって王允、李儒が殺され、その首が…張譲、趙忠の二人が生きたまま、こちらに送られたことである。

更にこの二人が寄こした使者の話によると、劉弁は既に李儒によって殺されており、月と劉協（二人とも偽物）は保護してあるとのことだった。

この知らせを受けて、咲夜は幾らなんでも予想外過ぎた現実に困惑していた。

元々、この咲夜が盟主となっている連合は王允ら４名を捕えることを名目に洛陽へと進軍していたのだ。

それが直前になっての事態の急な変化。

すぐさま、全員で天幕へと集うこととなった。

「…どうする、これは」
「…送られてきたのは本物の張譲、趙忠だったわ。首の方も確かに李儒と王允の二人だったわね」
「宮中に幾度も赴いたことのある華琳と咲夜がそう言っているのなら本物なのでしょうけど…」
「あはは…まいったね、これはどうも」

ここにきてもはや手はないと思われた。

だが、暫くした後…？水関を守っていた詠、華雄、公孫賛、馬超の部隊が合流した。
それは咲夜が前から連絡を絶やさずに送っていたために、今回の状況の変化を知った詠が部隊を動かしたそうだ。

詳しい情報を知った詠達も暫くの間、悩みに悩んだ。

「ふぅ…」

詠が何やら仕方がないという顔をした後…

「隠れてる月と…劉協様を表舞台にまた上げないと駄目かもね」
「！？」
「と、董卓って…それは拙いんじゃないの！？」
「でもこのままだと、李？、郭？の二人が洛陽の実権を握ってしまうわ。そうなったら恐らく…今以上の混乱が起こることは間違いない。ならもうこれしか手がないわ」
「「「「「……」」」」」
「なら、直接月と劉協様に聞いてみるしかない」
「そうね…咲夜、手配…頼める？」
「……ああ」

こうして咲夜はもう巻き込みたくもなかった月と劉協をこちらに呼ぶこととなってしまった。

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

それから暫くした後…月と劉協が咲夜が手配した隠密部隊によって連合の参加者全員が待機している天幕へと案内された。

「…劉協様、お久しゅうございます。この度はこのような場にお呼びしたこと…大変、申し訳なく思っております」

「…うむ、気にするでない。妾とて今の世情位知っておる。じゃが、何故今妾と董卓をこのような場に呼んだのか…それを教えてはくれぬか？」

「ハッ！！　先日、洛陽場内にて此度の騒動の首謀者であった王允と李儒が李？、郭？によって討たれ、董卓殿を亡き者とし、劉協様を自身の欲のために操ろうと謀った張譲、趙忠の二名がこちらに送られてきております！！　そのため、現在この連合は集った目的を奪われ、現在動きが取れぬ上に、長くこの場に滞在し過ぎた場合、国家反逆罪の罪に問われることとなりますため…どうにも出来ぬ状態なのです」

「…成程。のう、劉封」

「は」

「ならばその二名が優位に立っている土台を失くしてしまえばよいのではないか？」

「はい？」

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

その翌日、洛陽の城前まで咲夜達は進軍し、こう告げた。

「我が名は劉封！　この連合の盟主だ！　聞け、洛陽にいる者たちよ！！　昨日、洛陽より協皇子がこちらに逃げのび、洛陽の内部の腐敗具合を我らにお告げ下さった！！　これより我らは洛陽を攻める！！　李？、郭？に組する者たちよ！！　このまま戦えばお前達は反乱軍となるぞ！！！　それが嫌というのなら武器を捨て、我らに降伏せよ！！！　一刻だけ待つ…それまでに考えよ！！」

すると、みるみる洛陽の城から兵たちが出てきた。

それを苦しいと思ったのか…それともやけになったのか……

李？、郭？が総兵を率いて出陣してきた。

だが、それは予想範囲内な上に兵力も質も勝っている咲夜率いる連合には無問題もいい所であった。

その戦いはまさに蟻と象。
勝負にもならず、李?は雪蓮によって、郭?は凪によって、配下としていた張繍は鈴々によって、張済は馬超によって討たれた。
その後全軍が降伏し、それを受け入れ終えた後、洛陽の城へと凱旋した。

こうして反李儒・王允・張譲・趙忠連合の短い様で長い戦いが終わりを告げた。

咲夜達は暫くの間、戦後処理のために洛陽に留まり、炊き出しや戦などによって壊れていた物の修復などのために動き、その間に劉協皇子は献帝…つまり、新しい帝になることとなり、洛陽で式典が開かれることとなった。

第１４代漢王朝皇帝。
だが、少なくはあるが一部の者はこう思った。

もしかしたら…献帝様が最後の漢王朝の皇帝になるのではないかと…

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

すべてを終えた後、咲夜達はこの度の戦働きの恩賞をもらい受けるために宮中に呼び出された。

まず華琳は咲夜の推薦、そして元丞相であった董卓こと月の推薦もあって新しい丞相に選ばれることとなった。
因みに、月は今回の騒乱の原因を少なからず作ることとなってしまったことを償いたいということでまず丞相の位を返上し、月の両親のいる西涼に帰ることとなった。
それに詠、恋、音々音、華雄も付き添うことになった。
ただ一人、張遼こと霞は強い奴と戦いたいということで月の推薦により華琳の元に仕えることとなった。

西涼へと向かう時には馬超達が共に向かうこととなり、その馬超達も幾らかの恩賞をもらい受けることとなった。
馬超自身も征西将軍という位を授かることとなった。

次に桃香たちだが、最近徐州の陶謙が病死したために徐州の太守が居なくなったとのことにより、桃香が徐州牧に任じられることとなった。
また、桃香の持っている剣、靖王伝家が漢王朝に伝わるものであり、桃香自身も中山靖王の後胤であることが証明された。
そのため、献帝は桃香を信頼し、左将軍に任じた。

次は雪蓮達だが、新たな土地として交州を任されることとなった。
この地は異民族の侵攻を防ぐためにも重要な地である為、雪蓮は責任重大な任を与えられてはいたのだが、どことなく嬉しそうな顔をしていた。
雪蓮自身も征南将軍の位を与えられた。

次に公孫賛だが、烏桓・鮮卑からの侵攻を妨げるために幽州全土を任されることとなり、更に征北将軍の位を与えられた。

最後に咲夜だが、大都督の位を与えられることとなった。
荊州王に引き続き、大都督というのはかなりの高官職であるため、最初は断りたいと思っていた咲夜だったが…
少し考えて断るのは止めておくことにし、素直にその恩賞を受け取ることとなった。

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

すべてのことが終わり、皆それぞれの領地へと戻ることとなった。

だが…その皆が理解していた。
これは乱世の終わりではない…ただ始まっただけなのだと……

第一七話（前書き）

本当にお待たせいたしました。
日本に帰ってきて、試験が終わり……残念ながら今回は不合格でしたが、今の自分の実力が分かって返って良かったと思える結果になりました。

今はアルバイトと語学の勉強を続けながら…歯医者に行っています。

先日、親知らずを抜いたのですが…異常な位に痛いです．．．

痛みが未だに．．．

P．S．

お金がなくてネギまのコミックが買えないＯＴＺ

第一七話

反李儒・王允・張譲・趙忠連合終了から幾時かが過ぎ去り、季節が幾度なく巡り終えた頃…
いよいよ始まった、乱世の本格化。

最初に動いたのはやはりというか袁家の二人。
将兵はかなり減っているはずなのに進軍…
阿呆の極みとしか思えない行為だった。

袁紹は公孫賛のいる幽州を、袁術は桃香のいる徐州を攻め始めた。

勿論、その情報は華琳、雪蓮、馬超などの元には勿論、咲夜のいる荊州にも届いた。

その頃の咲夜はというと、揚州を制圧しつつある雪蓮、洛陽や陳留、長安を中心に着々と勢力を拡大しつつある華琳。
主にその二つの勢力との不可侵の決まりを再度、相互が納得できる形にした。
その間に咲夜は国内の政治を更に発展させた。
それと同時に益州に的を絞り、国境付近を劉障に怪しまれないレベルで強化させた。
加えて、南蛮とは以前よりも多くの貿易を行い、時折だが南蛮王である孟獲との国関係もかなり良くなり、共に宴会などを開いたこともあった。

咲夜が内政に集中することを決断したのはいくつかの理由があってのことだった。
まず第一に連合のこともあって本国を長く開けていたということ。
第二に荊州全土が襄陽や樊城の様な発展を遂げていないということ。
第三に確かに盗賊や山賊等は減少の一途を辿っているが、国内部の膿が出始める可能性もあるため、しっかりと中を固めねばと思い立った。

これらの理由から、咲夜は内政に集中することとなった。

――荊州本城　会議室――

「じゃあ皆、集まった報告を」

「じゃあまずは私からよろしいでしょうか？」
「ああ紫苑。頼むよ」
「はい、まず益州方面ですが、劉障は相変わらずのようでこちらが攻めて来ないと踏んでいるのか、国境には数十名の役人しか配置しておりませんでした」
「…それは明らかにこちらを舐めているとしか思えないのですが…」

紫苑の報告に少し怒りを感じている燐花。

まあそれはそうだろう。
それを隣にいる風が収めつつ、紫苑は報告を続けた。

「それ故に現在、蜀の有力な将や諸侯らの引き抜きにかかっていますが、既に厳顔、李厳、呉懿、呉蘭、費観、雷銅、呉班、李恢らがこちらの軍門に下ました」
「ああ、近々俺が直接会いに行かないとな。あ、それから紫苑。紫苑は厳顔とは旧知の仲と聞いたが」
「はい。私と琥珀、そして厳顔は古き友人ですわ」
「因みに…厳顔とはどういった人柄をしている？」
「そうですわね…性格等は琥珀と似ている所があり、自らの武に誇りを持っています。故に本来ならば、降伏や投降はしないはずなのですが…余程、今の益州が酷いのでしょうね。私と久しぶりに出会った時も酷く疲れていましたから」
「疲れている？？？　どういうことだ？」
「それに関しましては巴郡の人民の状況を調べていた麻理ちゃんのほうがよくご存じです、咲夜様」
「そうか…麻理、教えてくれるか？」
「は、はひぃ！　あうううぅ／／／」
「…落ち着いて話してくれたらいいから、な？」
「は、はい。益州の領民の方々はかなり貧しい生活を強いられているようです。何故なら、最近劉障さんの浪費が格段に酷くなり、税率も上昇しているようです」

それを聞いて皆が呆れた。

しかもその理由を聞くと、今までは劉表、張魯、五胡、南蛮と敵がいたのだが、その内の劉表が咲夜によって滅ぼされ、南蛮は咲夜による国交流によって以前はかなりの頻度で侵略を謀ってきた南蛮が貿易による利益のために戦争よりも商売の方に力を入れつつある。その結果、蜀にとっての敵が半分になったと劉障が認識しているために、南蛮と荊州方面の警備を今までの半分にした為に以前よりも資金が余る様になってしまい、それを劉障が己のためだけに使うようになってしまったそうだ。

「本当に救えないな…」
「ですね～」
「あわわ、これだと私達に攻め込んで欲しいと言っている様なものです」
「だな、いくら何でもこれはふざけ過ぎだろう」

琥珀、風、雛里、焔耶が順番に劉障に対しての感想を述べたのだが…やはりというかその顔は酷く呆れていたように見えた。

それから麻理と紫苑によって益州の国内の情報をすべて聞き終えた後、次に指名されたのは風、燐花、雛里の三人だった。

「では～、まずは私と秋葉ちゃんは西涼に行ってきたので、その際の情報なのです～」
「西涼…か。月達や馬超達は元気だったか？」
「はい～。西涼では私達だけでしたが真名は交換しましたよ～。馬超将軍や馬岱将軍、？徳将軍に馬騰将軍と仲良くなりましたよ～。今度、荊州に遊びに来たいとも言っていました～」
「そうか…それで肝心の物は？」
「しっかりと渡してきたぜ。にしてもいいのか？新しく作った鐙をあんなに渡しても」
「国交関係は築いておきたいしな。特に西涼の騎馬隊は少し脅威だし…もし敵対関係になったら勝てなくはないがまけないとも言いきれないしな。それに向こうに弓などの技術を渡すと言っても受け入れてはもらえないだろうから、馬具関係の物を送ろうと思ったんだよ」
「月たちに連絡を入れておいたが…今はまだ政や戦事には関わりたくないそうだ。やはり、反董卓連合の件や朝廷内の混乱の際の出来事が尾を引いているのだろうな」
「…それに関しては時が解決してくれるのを祈るしかないな」

「次に私ですが…杏と共に長沙に行ってきました。孫堅の様子も見てましたが…あれ本当に怪我人ですか？　大剣ブンブン振りまわして、片手で…」
「…紅蓮さん、片手でって……ま、まあいいか。とりあえず見舞いの品は喜んでた？」

「まあ孫呉の武将は酒に目がないという印象がありましたし…新州の酒を渡した瞬間、飛びつくように……」
「うん、そこまで聞けば分かるから」
「咲夜様、あちらの返事は不可侵続行だそうです」
「ん、ありがとう。燐花、杏」
「ん、どういたしまして」
「あ、ありがたき幸せです！！」

「次に雛里だけど…どうだった？幽州の公孫賛と徐州の桃香達は？
二つの袁家が今攻め入っているって情報が入ったけど」
「は、はい。私と焔耶さん、そして翡翠さんの三人でまず幽州に向かい、公孫賛さんとの会談を行いました。その際にこちらが持参した製品の一覧表を見せた所、鐙と槍、それからアレを一種類買ってくれました」
「…成程、今回の対袁紹戦では有効なものだな」
「はい、ですから可能な限り安くしましたけど」
「ん。で、その後に徐州に向かったんだよな？」
「はい。朱里ちゃんと桃香さん、それに孫乾さんという方とお話しして、やはりこちらも少数ながら幾つかの物を欲しいということで売りました」
「なら」
「はい、朱里ちゃんのことですから既に実戦で使用しているでしょう」
「成程…お疲れ様、雛里」
「あわわ。こ、光栄でしゅ／／／」

それから会議で話し合ったのは、今後どう動いていくのかということと、国内の情報を纏め直し、分かりやすくすること。
戸籍などの今後重要になるであろう事項を出来るだけ早く、そして正確に記録すること。

それらがすべて終わった後、咲夜は美鈴と紫苑、雛里を連れて巴郡の近くに作らせた土塁陣へと向かうこととなった。
そこに厳顔、李厳、呉懿、呉蘭、費観、雷銅、呉班、李恢などといった蜀からの降将らが集められているからである。
この日、ようやく咲夜は内政が安定したと判断出来たために、これらの将達と会うことが出来るようになったのだ。

「劉封様が来たぞーーーっ!!」
「開門ーーー!!!」

陣に到着すると、門を守っていた兵士数名が指示し、すぐさま他の者たちが行動に移った。
こう言った迅速な行動も咲夜の考案した訓練方法に組み込まれていたために、全く無駄がなかった。

「さて紫苑。厳顔将軍たちは今どこに？」
「あそこにある住居区で生活して貰っています」

紫苑に案内され、着いた先に会ったのは小さくはあるが雨水はしっかりと凌げる構造をしている仮の家々が並ぶ場所。

そこにある一角は何やら一人の女性の笑い声が扉越しに聞こえてきた。

何事かと咲夜、雛里、美鈴は思ったのだが…他の兵士達や紫苑は「ああ、またか」と言いたげな顔をしていた。

「…なあなんだこの声」
「じ、実は…厳顔はとてもお酒が好きで…仕事がない時はいつも酒瓶を持っているので」
「ならこの声はその厳顔さんがお酒を飲んでいて、酔っ払ってるってことか？」
「はい…」

どうやら厳顔やその他の蜀の将達が現在、荊州軍兵士から支給された酒とつまみを楽しみながら小さい宴会を開いているようだった。

咲夜達は意を決してその家の扉を開けた。
そこには一人、大きな酒瓶を丁度口に付けながら豪快に酒を飲んでいる女性がいて、その周りに男女半々くらいの比率で「一気一気！！」と、酔っ払いながらコールし続けてる人たちがいた。

「んぐ…んぐ…ぷはぁ！！　うむ、荊州の新酒は美味いと聞いてはいたが。まさかここまで美味いとはな。よしっ、もう一杯」
「桔梗、その位にしなさい」
「ん、おお紫苑か。お前が来たということは、荊州王劉封が来たということか？」
「ええ、紹介するわね。こちらが私の主、劉封様よ」
「初めまして、厳顔さん。俺は、劉封。荊州王として荊州の地を治めさせてもらっている」
「儂は厳顔。元巴郡の太守じゃ。じゃが、いい加減にあの坊主のいいなりになって領民を苦しめる様な行為を見て見ぬふりをするのは限界なのでな。主に下ることにした」
「他の方々は？」
「儂の意見に賛同してくれた者たちばかりじゃ。残った有能な将は…張任を筆頭に、王甫、高沛、楊懐、劉？、冷苞、？賢、劉循などの将達が残っておる。じゃが、今の蜀内には孟達、法正らが残っておる。この二人は前々から劉封殿に蜀への進出を勧めておったのじゃろ？」
「まあな。でも俺がいくつかの理由があったから断っていた。ところで張松は？」
「あ奴は謀反人として処刑されたわ。劉封殿だけではなく、曹操や馬騰等にも蜀に攻める様に手はずを整えておったそうじゃからな。

それがあ奴の兄によってことが世の明るみとなり、斬首という結末じゃ」
「……成程。でも厳顔さんはどうしてこっちに下った？　他にも選べたはずだ」
「ふむ、その理由は簡単じゃよ。主の噂はこちらにも聞き及んでおる。領民に優しく、未だ嘗て見たことのない斬新な政策で今までよりも生活が豊かになり、戦争による被害も他の領地と比べて殆どない。まるで理想郷の様な生活を送ることのできる土地。それが劉封が治める荊州である。ワシらも皆そう聞いておるよ」
「…そんなことを正面から言われると流石に照れるな…」
「ははは っ！！　それはそうと劉封殿。主は儂らを受け入れてくれるかの？」
「…なら一つだけ聞く。厳顔、貴方は俺に何を求める？」
「簡単なことを。儂が求めるのは儂自身が主として認められ、その主が儂を将として認めてくれるのならそれでいい。そして、その主が自分のためだけでなく、それと同じ位に民や部下を思いやってくれるのなら、それでいいと思っておる。故に、儂が主に求めるのは王としての器よりも人としての器が大きい人物じゃよ」
「それに俺が当てはまると？」
「ああ」
「…ふっ、分かった。これからよろしく頼む」
「儂の真名は桔梗じゃ。これからよろしく頼みますぞ、御館様」
「俺の真名は咲夜だ。こちらこそ、よろしく頼む」

こうして咲夜の元に新たな将、桔梗らを筆頭とした元蜀軍の有能な将が下り、配下となった。

咲夜は桔梗から蜀の現在の環境や状況を詳しく聞き入れると、やはり報告通りで現在の蜀は国としての機能を半分も満たしていないことが分かり、咲夜は一つの決断をした。

それは…蜀を攻めるということだ。

だが、ただ何もせずに宣戦布告をして蜀の地に攻め入ったのならば、咲夜の志を曲げることになってしまう上に、現在徐州と幽州を攻めている袁家と同じ穴のムジナとなってしまうと咲夜は考え、まず咲夜が行ったのは使者を送ることである。

その行先は二つ。
当然一つ目は劉障の元へ。
そしてもう一つは洛陽の現皇帝の元へ。

劉障に対してはまず警告と改善を求める書状を。
皇帝には蜀がこのまま民を苦しめ続けるのなら、蜀に攻める大義名分を咲夜に渡して欲しいという書状を送った。

劉障が今の自らが行った過ちを反省し、改善する努力をするのなら

ば、咲夜はそれを援助し、助けるつもりで書状を送った。
だが、返ってきた返事は全く反省の色を見せていない物であり、寧ろ自分が正しい行いをしているにも拘らず、将兵らを誘惑して蜀の弱体化を狙ったのだろうなどという言いがかりというには余りにもバカげたことが書かれていたものと…使者の首の塩漬けだった。

その返事に対して、咲夜は勿論、他の者たちも怒りに燃えた。
その使者を手厚く葬った後に、咲夜は着々と蜀への進軍の準備を始めた。
その後直ぐに朝廷から蜀進軍への許可を貰い、咲夜は堂々と蜀の国に対して宣戦布告をした。

だが…咲夜の策はそれだけでは終わらなかった。

「ふふふ…劉障、俺を本気にさせたな」

この後、劉障は心の底から後悔することとなるのだった。

▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲▽▲

↓Ｓｉｄｅ　桃香↓

今、私達徐州軍は宣戦布告も無しに攻めてきた袁術軍を迎え撃っています。

「朱里ちゃん、どうかな？」

「問題はないと思います。調べたところによると、袁術軍は数は多いですが、それを率いる将が前回の戦いでかなり減っているため、有能なのは５名ほどとなっています。確かにこちらも将の数はそう多くはないですが…こちらには愛紗さんや鈴々ちゃんを筆頭に靡竺・靡芳さん。それに雫ちゃんも居ます。袁術軍にはまず愛紗さんと鈴々ちゃんに勝てる将はいません。加えて、咲夜さんに教わった訓練によって兵士さんたちはかなり強くなりました。ここまで条件が揃っているのなら負ける理由がありません」

「そうだね。なら雫ちゃん、私は皆にどう指示すればいいかな？」

「そうですね…雫はこの戦い、まず負けることがないということを前提にするのなら後のことを考えるべきだと思うのですよ」

雫ちゃんって言うのは私の秘書官兼護衛官をしてくれてる孫乾、字は公祐。

内政に外交が得意なすっごい子なの♪

「先程感じたのですが…今から半刻後にこの辺りに大雨が降ります。本当に短い時間ですが…それを利用しない手はないと思います」

因みに雫ちゃんは地理の他にも気候を予測したりすることも出来るの。

前にどうやってるの？って聞いたら…

『雲の動き、空気に含まれる湿気、温度、空の色…他様々な環境から私が以前研究したことに照らし合わせているだけです』

って言ってたの。

私はよく分からなかったけど…朱里ちゃんは凄く驚いてたよ。

「なら今、勢いに乗っている袁術軍を引っ掛けることにしましょう」

「じゃあ朱里ちゃん。詳しい策、話して貰えるかな？」

「はい」

↓Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ↓

戦いが始まり、まず先鋒を愛紗ちゃんが務めることになった。

袁術軍はまず徐州の簫関に攻め入ってきた。
そこを守っていたのは靡芳、靡竺。

だが、少しだけ関から反撃して直ぐに放棄して引いた。

そして勢いに乗っている袁術軍は関を制圧せずにそのまま進軍。
それを迎え撃ったのは先鋒の愛紗の軍。

「行くぞ！！　全軍進めーーーっ！」

愛紗の号令と共に徐州軍は袁術軍と衝突した。

数で勝る袁術軍に対し、質で勝る劉備軍。
兵数は少なくとも互角に戦えるだけの条件を兼ね備えているのだが…

「（よし、朱里の指示通りに）退け――――――ッ！！！」

整然と愛紗の部隊は後退していった。

「うはははーっ！　七乃、見るのじゃ！　関羽の軍が妾の軍の力に押されて退きおったぞ！」
「そうですね～♪」
「よし、このまま進軍なのじゃーー！！」

袁術、何にも考えずに進軍を再開。

だが進めば進むほど…

「うりゃーーー！！！　鈴々、参上なのだ――――！！！」

鈴々が伏兵として現れて戦っては直ぐに退いた。
それが終わってもまた再び愛紗が現れて戦ったら退いて、その次に鈴々が出てきた。

袁術軍が小沛に辿り着くまでに約２０回。
愛紗と鈴々が交代で攻めては退いていくということを行ってきた。

「うう～…疲れたのじゃぁ」
「そうですねお嬢様。ですが、劉備さんの目的は何なのでしょう？」
「うははー、妾たちを恐れて戦うに戦えぬのじゃ！」
「さっすがお嬢様♪　そんな勘違い的な思考が素敵です～」
「うははー、もっと褒めてたも」

己の軍の力が徐州軍を圧倒していると考えた袁術は更なる進軍を開始した。

サアアアアァーーーーーー……

そんな時、急に強い雨が降り始めた。

その雨が進軍するには不向きと考えた袁術軍は一時、進軍を止め休息をとることにした。
袁術軍が現在留まっているのはとある山道であり、道が正面と後方の二つにしかない所。
左右は断崖絶壁である為、登ったりすることは不可能とも思える。

普段ならまだ登れなくもないのだが、現在雨が強く降っているためそんなことをするのは無理に近い。

そのため、袁術軍は陣を敷き、簡易屋根を作りあげると食事を作り始めた。

故に、袁術軍の兵士たちは気が緩み、笑いながら食事をとり始めた。

だが、その瞬間…

カラッ……

「ん？」

一人の兵士がとあるもの音に気が付いた。

「おい、どうした？」

「なあ、何か聞こえなかったか？」
「はぁ？　雨の音しか聞こえないぞ」
「……気のせいか？」

ガララッ…

「っ…やっぱり何か聞こえる」
「おいおい、疲れてるんじゃないのか？」

ズドンッ！！　グシャッ！！！

「「えっ…」」

二人の兵士がその音がした場所を見てみると…

そこには大人三人が抱えてようやく持ちあがる位の大きさの岩と…
その下には兵士であったと思われる人間の手が岩の僅かな隙間から
はみ出ており……

その手が血で真っ赤に染まり始めた。

「う…」
「うわあああああああーーーーーーーーっ！！！？」

それから次々と大きな岩が上方から大粒の霰のように袁術軍の将兵たちがいる陣地に落下してきた。

それにより、兵たちは混乱し、その場を右往左往し…

ある者は岩に押しつぶされ、ある者は何とかその場から脱出しようと試み、またある者は主である袁術を守ろうと袁術がいる陣に向かった。

「の、のぅ七乃…わ、妾はどうすればいいのじゃ？」
「さ、さぁ？」
「な、なんじゃ！！　七乃が徐州なら楽々手に入れられると言ったから進軍したのじゃぞ！！」
「だ、だってだって～。まさかあの劉備さんがこんな手を使ってくるとは思わなかったんですよ～！！」
「ピィ～～～！！　し、死にたくないのじゃーーー！！」

この後、直ぐに袁術を助けようと駆けつけた者たちが集い、すぐさ

まその場を脱出することとなった。

だが、袁術軍の先行隊が後方…つまり来た道を確認したところ、そこは既に岩と大きな木々で埋め尽くされており、後退は不可能ということが発覚した。

そのため、袁術軍に残された道は何かあると知りつつも前進することだけだった。

だが、その時既に2割の兵が岩によって死に絶え、他の者たちも怪我を負っている者や目の前で同僚が死んだために心に傷を負ったためにフラフラと歩いている者たちばかりだった。

元気な姿でいるのは全体の1割にも満たない…そんな状態だったのだ。

そんな中、再び愛紗と鈴々が攻めよせてきた。

そうなったらもう誰にもこの混乱は止めることが出来なくなった。

誰もが我先にとその場から逃げ出そうとしたものの、多くの者たちが愛紗と鈴々の二人が率いた兵たちに討たれていった。

袁術、張勲の二人はその場を楽蹴と紀霊の二人の奮闘によって何とか逃げだすことに成功したものの、残った兵は僅か数十名といった所になり、ボロボロになりながらも何とか寿春に戻ることが出来たのだった。

だが、この戦いで袁術軍が失ったものは大きく、もう二度と軍を立て直すことが出来なくなってしまったのだった。

余談だが、この後袁術軍は孫策軍によって攻め込まれて、壊滅したとか何とか。
だが、その際に誰も袁術と張勲の姿は見ていなかったそうな…

第一八話（前書き）

読者の皆さん、本当に長らくお待たせいたしました。
ここ最近、アルバイトが忙しい上にスペイン語、英語、中国語の三ヶ国語を勉強しているので中々小説を書く時間が作れなかったのです。

加えて……実は弟に勧められてちょっとＭＨをやり始めたのですが…ハマってしまいました。

現在ＨＲ４となりましたが…
やっぱり時間がないため、難しいですね。
まだアオアシラ上位の装備ですから。

今回はちょっとＲ１５（？）な所も有りますが…そこは優しい目で見ていただけると有難いです。
でもやっぱり短いですね、私の小説。
目標は毎話１００００文字越えなのですが…難しいです。

第一八話

↓Ｓｉｄｅ　華琳↓

今、この大陸は大きく動き始めていた。
いえ、元々不安定だった天秤がある条件を加えたことで一気に偏ってしまったというべきかしら。

黄巾党の大反乱、皇帝の死、反董卓連合、そして始まった乱世。

かつて有名な人物評論家である許劭という人物は私のことをこう評価した。

―――平和な世には能臣、乱世になれば奸雄となろう。

私はその言葉を心に刻み、自らの生きる道…覇道を貫くことを決意した。
時が経ち、私が力を付けていくにつれて多くの有能な者達が私の元に集まってくれた。

「ふふふ、最初は春蘭と秋蘭たちだけだったのに…今ではこれだけ多く集まったのね」

コンコン…

「入りなさい」
「…華琳殿、報告がある」
「あら、朱雪。貴方が来るということは幽州で何かあったの？」
「ああ、それと徐州でも動きがあった。そのことで桂花に頼まれてな」
「あら、いつの間に桂花と仲良くなったの？」
「……仲など良くない。あいつとは馬が合わん」

同族嫌悪かしら…
どちらも犬っぽいし。
まあ朱雪は狗で桂花は犬だけど。

「まあいいわ。それで？」
「ああ。まず徐州のほうだが劉備軍が勝ち、袁術軍は敗退。しかも殆どの兵が残らずに殺されたか捕縛されたそうだ」
「…あの甘ちゃんだった劉備がねぇ（やはり咲夜が関係しているのね。本当に敵にすると恐ろしいわね）。その後の袁術は？」
「恐らく予測はしているだろうが…孫策軍が出兵して寿春に攻め入った。半日もたたずに陥落。袁術とその側近の張勲の行方は不明。まあ、事実上これで袁術軍は壊滅したも同然だ」
「ふふふ、これで袁家の一つが潰れて残る袁家は麗羽のいる冀州のみね」

「その袁家が現在攻め込んでいる幽州のことだが……殆ど大勢は決していると言っても過言ではない」
「そう…なら公孫賛は」
「いや…

負けているのは袁家のほうだ」

それを聞いて私は正直驚きを隠せずにいた。
確かに麗羽の軍は反董卓連合敗走の際にかなりの兵と将を失ったのだ。
だがそれから時間が経ち、それなりに兵と将の補充を行ったが故に、今では兵数こそ公孫さんの軍と同じものの将の数では勝っていた。

だからと言って戦に勝てるというわけではないが、それでも麗羽に有利な戦いと言ってもいいものだったのだ。
しかも麗羽は卑怯にも攻め込んでから宣戦布告をするという恥知らずもいい行為をやってのけたために更に勝率が上がっていた。

それなのに…

「一体、公孫賛はどんな手を使ったのかしら？」
「公孫賛はまず前々から袁紹軍に対して備えていた要塞に籠って篭城の構えを見せていたようだ。だがそれは見せかけだけで実際には公孫賛は守りながら攻めることを選んだ」
「それで？」
「ある日、その要塞の外で袁紹軍と公孫賛軍が死闘を繰り広げた。だが、その時は公孫賛軍の旗色が悪くなり、城砦に逃げ込んだ。だが、公孫賛軍の兵士５００名が延将軍に囲まれて身動きが取れなくなって要塞に逃げ込めなかった。それを見た公孫賛はすぐさま自ら兵を率いてその囲みを突破して取り残されていた兵たちを救出して要塞に悠々と退きあげた。それから公孫賛軍の士気は上がり続け、逆に袁紹軍の士気は下がり続けた。それから袁紹軍は一か八かの総攻撃を始めた」
「…大方麗羽が負け続けの戦線を無理矢理盛り上げて勝ちに行こうとしたのでしょうね。顔良も大変ね」
「そこで公孫賛は劉封の元で得た何かを使って、士気の下がっていた袁紹軍の兵士達を更に憂鬱にさせ、撤退させたそうだ。袁紹軍の半数は捕えられ、将の多くも捕縛状態。更に無茶な侵略を行ったために領内で暴動騒ぎも起こっているそうだ。それ故に袁紹軍は泣き泣きながらも本国に戻って行ったそうだ」
「そう…その後の公孫賛軍は？」
「兵を纏めると要塞の防備を更に固めて、その守りを一族の公孫越に任せ、自身は城に戻って行ったそうだ」

朱雪の話から先のことを考えると…確実に袁紹は領土を纏め上げた後にもう一度幽州に…もしくはそれが無理と判断されたらこちらに

攻めてくるわね。

今、私の領土となっているのは陳留、洛陽、長安、？、苑の計5ヶ所。
主要都市である洛陽と長安が手中にあるのはいいのだけれど…何分、将と兵の数が領土の広さに比べると少し多くなりつつある。

だけど今の状況で攻め入ることのできる場所は限られている…

そうなると・・・・・・

「…朱雪」
「了解だ」
「あら、まだ何も言っていないのに？」
「冀州に向かうのだろう？」
「ええ、でもどうして分かったのかしら？」
「南下は劉封軍がいる。今はまだ敵対すべきじゃない。西はまだ攻めるには手が足りない。しっかりと対策を練ってからだ。東はいつでも取れる。それに比べ、冀州方面は攻める理由もある上に土地が肥えているため、手に入れれば十分こちらの軍を補えるようになる。異常の点だ」
「ふふふ、正解よ。なら準備は頼むわよ」
「御意」

朱雪が部屋から出ていった後、私は一人天井を見上げながら今後のこの大陸のことを考えていた。

本格的に始まった乱世。
その中で有力者は数限られてきた。

幽州で地味ながらも着々と力と知識を付けて来ている公孫賛。
徐州で太守をやってはいるが、兵力は弱小。
だが、集う者たちは必ずしも何かに秀で、民の信頼も厚く、君主としての資格を持ってきた劉備。
揚州でかなり領土を広げ、かなりの力を得た孫策。
そして…荊州にその人ありと謳われ、数々の逸話を持ち、多くの者から信頼をされている劉封。

さて…この中で最後に誰が残っているのかしら。

ふふふ…。

↓Ｓｉｄｅ　Ｏｕｔ↓

その頃…荊州では。

「さて、これでまずは蜀の民を助けることから始めないとな」
「はい、ではまず蜀の領民の方々に裏から話をしてみます」
「頼む、俺は隠密部隊に指示を出して劉障の部下たちが国外脱出しようとする者たちに危害を加えられない様にしておく」

咲夜は雛里と共に益州壊滅のための策を練っていた。
その為にまずは土台から潰していこうと考えたのだった。

一つ目は民の吸収。
二つ目は兵糧攻め。
三つ目は兵士・将の懐柔。

更に更に咲夜はこれでもかという位に劉障を追い詰める気でいた。
先日、燐花に護衛として焔耶と杏を付けて漢中に向かわせていた。
それは漢中にいる張魯を動かす為である。

最初は動く気はないと思われた張魯だったが、咲夜が事前に用意していた物を見せた瞬間、漢中軍は進軍を開始した。

その物とは、朝廷より承った位、漢寧王の印綬だった。
これは咲夜が帝に申請し、張魯がこの印綬を持つに相応しい人物であるといったため、直ぐにこれが渡されることとなった。
燐花には少しだけ話を誇張して貰い、あたかも咲夜が進言したために張魯がこの印綬を手にすることが出来る様に思わせたのだった。

そのため、張魯は自ら進軍しだしたのだ。
しかも進軍する前に咲夜は兵糧や武具などを漢中軍に支給した。
張魯はそれに心から喜び、善戦を続けているそうだ。
それに向かい討つは蜀の唯一の勇将、張任。

「ふふふふふ…劉障、まだまだこれからだ。人一人の命を奪うという意味…身を持ってしれ。そして知れ。お前は怒らせたら駄目な人間をキレさせたって…フフフフフフ」
「ひゃっ…さ、咲夜しゃま…怖いですぅ」
「あ…ああゴメン！！」
「い、いえ…」

黒咲夜再びｗｗｗ

脅えてしまった雛里の頭を撫でながら咲夜は謝罪した。

「咲夜様…／／／」
「うっ…／／／」

ここ最近、咲夜は女性たちに対して少しだけ意識が変わり始めていた。

その理由は以前、星と風に教えられて咲夜に恋心を抱く女性がいると聞き、本当に少しずつだがそれに気付き始めたのだった。

いくら咲夜が鈍いと言っても同じ女性である風と星に言われて、意識して女性と接したのでは理解せざるを得ない。

その為…

「（…これは自意識過剰でないのなら、確かに俺に好意を持ってくれてる女性はかなりいる。けど……こ、これは意識すると…な、なんというか。は、恥ずかしいな／／／）」

前世でも咲夜はこうして好意を持たれたことがない（実際はかなりもてていただのが、全くそれに気付かなかった上に、周りにいた人間に風や星の様に咲夜に気付かせようとしたものがいなかったのが原因）ため、女性に対して全く免疫がない。

確かに咲夜の将来の夢は素敵な女性と家庭を持って子供に囲まれて老死したいという物だ。
だが咲夜はそれが叶えるのは難しいのではないかと思えてしまうのだった。
その理由は…

全く女性と深い関係を持ったことがないことなのだ。

「（でも俺も男だ。しかもこれだけ多くの女性たちに好意を持ってもらえてる。それが分かってるのに…俺ってＯＴＺ）」

「あわわ！？　さ、咲夜様、い、いかがなされたのですか？！」

思わず雛里の前だというのに跪いて凹んでしまった咲夜なのだった。

「い、いや…自身のあまりの情けなさにちょっとね」

「？？？」

何を言っているのか分からないという顔をする雛里。

だが、咲夜は凹んだままだった。

☆★☆★☆★☆★☆★

それから何とか精神的に持ち直した咲夜は仕事をこなし…

「ふぅ〜、今日も何とか仕事を終えることが出来たな」

自室でお茶を飲みつつ、就寝前の一休みのための時間を満喫していた。

「…それにしても、今日までで俺に男性としての好意を持っているのは…雛里、麻理、杏、焔耶、美鈴か。桔梗と紫苑と琥珀は…一寸分かり辛いな。燐花と秋葉、それに風は…どうなんだろ？？？　彗星はまず俺のことは君主としてしか見てないし…星に至っては普段が普段だからなぁ。分かり辛いというより分からん」

相も変わらずこんなことで悩んでいる咲夜だった。
ヘタレとしか言いようのない奴だろう。
例えるのなら鍵のアダルトゲームに登場する奴の様だ。

「俺って本当に情けないな。ハァ…あぁぁ～～～～！！！　前世でもいいからちゃんと体験しておくべきだったぁ～～～～～！！！」

ゴロゴロと床を転がる咲夜。
明らかに○原の様だ…

コンコン…

「Σ　は、はい！！」

ガチャッ

「咲夜様、夜分遅くに失礼しますわ」
「おお、御館様。そんな所で何をなさっているのだ？」
「ふむ…中々に部屋は片付いているな、咲夜殿。仕事の出来る物は部屋もきれいというのは本当なのかね」

部屋に入ってきたのは紫苑、桔梗、琥珀のアダルト三人組であった。

「ん、こんな時間に何か用？」

「ええ、実はここ最近の咲夜様の様子がおかしいと皆が言うので…」

「ウグッ…（気付かれてたか…俺ってそんなに分かりやすいのか？）」

「その反応だとやはり何かあるのだな？　御館様」

「……（紫苑達は人生の先輩だし、相談してみるのもいいかな？本当なら叔父さんに相談したいけど…何だろう、そうしたらすぐに結婚させられそうなのだが…）」

咲夜は自分の考えを率直に話した。

すると……

「ふふふふふふ♪」

「はっはっはっは♪」

「あはははははは♪」

大笑いされましたＯＴＺ

「咲夜様はそういったことに鈍いと度々思っておりましたが、そうですか。風ちゃんと星ちゃんが…」
「それにしても、自身に恋心を持つ女性に気後れしてしまうなんてね」
「うううう～、わ、悪いか？　こう見えても俺は今まで特定の女性と付き合ったことなんてなかったんだよ。それに俺になんて恋心を持ってくれる女性なんて居るわけないって思ってたから…」
「おやおや、何故だ？」
「だって…俺って女心さっぱりだし、色々と鈍感みたいだし、普通人間だし…」
「いやいや、咲夜様は男性としてかなり魅力があると思うのだが…」
「そうですわ。現に城の大半の女性の方々は咲夜様に好意を持っていらっしゃいますよ」
「そうじゃの。御館様はそれに気付いていないだけじゃ」
「う、う～ん…そうなのかなぁ」

咲夜はやっぱり自信がないようだった。
それを見た紫苑、桔梗、琥珀は三人でヒソヒソと内緒話をした後、咲夜のほうを見て目を光らせた。

その瞬間、咲夜は嫌な予感がしたので、すぐにその場を脱出しようとしたのだが…

ガッ！！

咲夜は右腕を桔梗に、左腕を琥珀に拘束されてしまった。
そして正面からは紫苑がいい笑顔でじりじりと咲夜に迫ってきた。

「あ、あの～。紫苑、桔梗、琥珀？」
「要するに御館様は女性と深い関係になることに自信がないのであろう？」
「なら私達が教えてあげようと思ってね」
「ふふふ、咲夜様。初めてでしょうが…これも咲夜様にとっていい経験になるでしょう♪」
「いやちょっと待て！！　いきなりそれは…んむっ！！？」

チュッ…

「む…ハムッ……クチュッ…」
「～～～～～～～っ！！！？／／／」

いきなりの接吻に咲夜は目を白黒させ、体を硬直させてしまった。
だが紫苑との口付けが余りにも情熱的であったため、思わず流され

てそのまま続けてしまっていたのだ。

「…ハァ」

「〜〜〜！！！　ぷはっ！！！　ハァ…ハァ…／／／」

口づけを始めてから約１０分…ようやく咲夜は紫苑の唇から解放された。

かと思いきや…

「次は儂ですぞ、御館様♪」

「ちょっ、まっ！！　んむぅ！！？」

「ふふふ、夜はまだまだこれからですよ♪」

「初夜だというのに私達三人を相手にするのは大変でしょうが、まあ楽しみましょうか♪」

その日、咲夜の部屋からは三人の女性の色っぽい声と寝台の軋む音が絶えなかったそうだ。

☆★☆★☆★☆★☆★

翌日…

「「「スゥ…スゥ…」」」

咲夜の部屋の寝台の上には白い液体に全身を濡らし、深い寝息を立てている女性が三人。
その傍らには何やらすっきりとした顔をした咲夜が座っていた。

「……／／／／　は、激しかった。女生徒の営みとはあんなにも激しく…そして……よ、良かったなぁ。　それにしても…俺は少し深く考え過ぎてたのかもしれないな。よしっ！！　紫苑達のお陰で何かすっきりしたし、今日も一日仕事を頑張ろう！！」

咲夜は紫苑達の体や部屋を綺麗にした後、仕事部屋に向かった。

その後、紫苑達は通常よりも遅れて仕事場にやってきたのだが…何

やら顔を真っ赤にして足元をふらつかせていた。

紫苑曰く
「す、凄かったわ／／／」

桔梗曰く
「ね、眠れる獅子を起してしまったのかもしれんな／／／」

琥珀曰く
「最初は私達が攻めていたのに…後半は／／／」

どうやら咲夜は床上手でもあったようです。

余談だが、この日を境に咲夜は少しだけ変わったらしい。
女性に対して機敏かつ紳士的に対応するようになったのだった。

そして女性陣は咲夜が紫苑、桔梗、琥珀の三人を抱いたことを知り、
次は自分の番だと考える者が増えたとか…

第一八話（後書き）

次回は新キャラである彗星こと夏候蘭と星、そして彗星の目付け役となった慧音こと劉？の話がメインになると思います。

シリアスなどありませんＷＷＷ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0463o/

真・恋姫?無双～とある男のそれなりに不幸な人生～

2011年10月21日02時59分発行